

# 能美丘陵東遺跡群 I

いしかわサイエンスパーク整備事業に係る  
埋蔵文化財発掘調査報告書

1993

石川県立埋蔵文化財センター



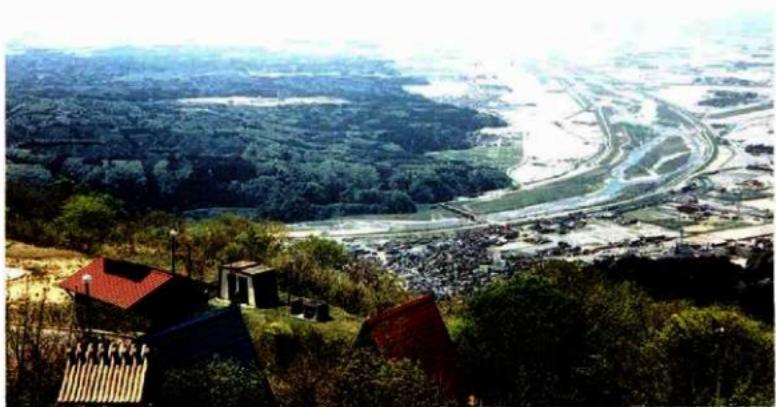
# 能美丘陵東遺跡群 I

いしかわサイエンスパーク整備事業に係る  
埋蔵文化財発掘調査報告書

1993

石川県立埋蔵文化財センター





能美丘陵遠景（東の獅子吼高原から）



庄ヶ屋敷遺跡群の全景（北西から）



宮竹オオハゲA遺跡全景



宮竹オオハゲA 1号墳



庄ヶ屋敷D遺跡遠景：北より（92年8月撮影）



庄ヶ屋敷D遺跡南部：北より

## 石器時代の辰口丘陵（序文に代えて）

県サイエンス・パーク造成に関わる発掘調査が広大な範囲で繰り広げられている辰口丘陵とその周辺は、県内でも有数の旧石器・縄文時代の遺跡集在地である。県下最初の旧石器発掘の地としての著名な灯台塹遺跡はもとより、勘生・長瀧・岩内遺跡など規模の大きい縄文遺跡も数多く分布している。このことは、この地域の自然環境が石器時代の狩猟・採集民の生活に適合していたことを示している。石器時代とくに縄文時代の食料獲得は、山野での狩猟と採集活動、水域での漁撈と採集活動への依存度が高い。手取川左岸に沿うように延びる辰口丘陵は、石器時代人にとって木の実や鳥獣類、手取を遡上するサケ・マスを含め豊富な魚類を提供したに違いない。とりわけ丘陵森林部におけるクリ・ドングリ類・トチ・クルミなどの堅果類は、冬期間の保存食料として重要であった。

サイエンス・パーク造成を原因として行った約60haに及ぶ試掘調査では、旧石器時代から近世にかけての各種の遺跡24か所を確認したが、その中でも縄文時代中期前葉（新崎式期）を中心とした庄が星敷遺跡群（宮竹地内）は、なだらかな尾根を中心に展開する該期の集落群であった。縄文中期前半の集落遺跡発掘は、小松市念佛林遺跡など幾つかの事例を挙げることができるが、いずれの場合も集落の一部についての発掘であり、その全体像を把握したものではなかった。庄が星敷遺跡群は、幾つかに分岐した丘陵地根上に立地し、集落の範囲を限定しやすい状況にあり、かつ全面調査を必要としている。このことは、辰口丘陵地域において縄文中期前葉の集落全体像を初めて明らかにし得る、という学術上極めて重要な成果をもたらすものと考えている。検出されるのは、堅穴住居跡・貯蔵穴・落とし穴などの遺構と、土器・石器を中心とした遺物であるが、これらの考古資料を細かく分析することにより、かつてこの集落に住んだ縄文人たちの生活と技術をさらに鮮明にし得るものと期待される。

掘り出された大小の堅穴式の住居跡には、屋内の中心線上に炉跡と貯蔵穴が設けられるという特徴が指摘されており、堅果類を主体とした食料貯蔵が家屋単位で行われたことを推定させた。また磨製石斧の一部で、柄に装着するための特殊な溝を有するものがあり、特殊なタイプの木工具も推定される。石皿・磨石・凹石などの堅果食料に関わる調査用具が比較的多かったことは、これへの比重が高かったことを思わせる。ただ、廃棄されていた土器量は意外に少なく、短期滞在型の集落だった可能性も高いと推定され、今後、この集落群の性格をめぐっての検討課題も多々残されている。

所長 橋本 澄夫



## 例　　言

1. 本書は、石川県能美郡辰口町宮竹・大口・灯台岱・長瀬地内に所在する遺跡群の発掘調査報告書である。本書名は広範囲に点在する遺跡群を包括するために、便宜的に能美丘陵東遺跡群とした。さらに、調査年が長期に亘ることから本報告書にⅠを付した。
2. 本書で報告する遺跡は、平成4年度に発掘調査をした下記の遺跡である。
  - 1 宮竹オオハゲA遺跡（約3,000m<sup>2</sup>、担当 小嶋芳孝・橋場和彦）
  - 2 庄が屋敷A遺跡 （約5,000m<sup>2</sup>、担当 滝上秀明・西野秀和）
  - 3 庄が屋敷B遺跡 （約4,100m<sup>2</sup>、担当 滝上秀明・西野秀和）
  - 4 庄が屋敷D遺跡 （約5,400m<sup>2</sup>、担当 松山和彦・滝川重徳）
  - 5 炭窯跡 （6地点、担当 小嶋・橋場・滝上・松山・滝川・西野）
3. 能美丘陵東遺跡群の発掘調査は、石川県土地開発公社の「いしかわサイエンスパーク」整備事業に係るもので、石川県立埋蔵文化財センターが調査委託を受けて実施した。
4. 調査の実施にあたっては、石川県企画開発部北陸先端科学技術大学院大学立地対策室、石川県土地開発公社、辰口町役場、辰口町教育委員会、辰口町町内会の助言・協力を受けた。
5. 「いしかわサイエンスパーク」整備事業に係る埋蔵文化財の調査は、平成元年度に辰口町の協力依頼を受けて辰口町教育委員会、石川県立埋蔵文化財センターが175箇所の現地踏査を実施した。
- 平成2年度には、石川県土地開発公社の調査委託を受けて、石川県立埋蔵文化財センター企画調整課が一部地域（16箇所）の試掘調査を実施した（担当 栃木英道）。
- 平成3年度は、引き続いて造成区域内全域（約61箇所）に渡る試掘調査を実施し、埋蔵文化財の所在する地区を確定した（担当 栃木英道、松山和彦）。試掘調査成果を受けて、造成計画と発掘調査との年次計画についての協議を先端大学対策室、土地開発公社、石川県教育委員会文化課、本センター企画調整課との間で行った。なお、同年度には幹線道路に係る遺跡の発掘調査を石川県小松土木事務所の依頼を受けて、辰口町教育委員会が実施している（担当 滝上秀明）。
- 平成4年度は、本センター内の改組により、大学院大学周辺整備工事に係る埋蔵文化財発掘調査を担当する調査第3課が発足し、辰口町役場から2名の職員の出向を含めて6名の調査員によって発掘調査を実施することとなった。
6. 各遺跡の遺物整理作業は、平成4年度に職員、調査補助員が実施した。庄が屋敷D遺跡出土資料の一部は、石川県埋蔵文化財保存協会に委託した。
7. 各遺跡の執筆・編集は各遺跡担当者が分担した。執筆分担は以下の通りで、文末に執筆者名を記入した。  
第1章－滝上秀明、第2章 栃木英道、第3章－小嶋芳孝・橋場和彦、第4章 西野秀和、第5章－松山和彦・滝川重徳、第6章－橋場和彦、第7章－小嶋芳孝・滝川重徳
8. 報告した各遺跡の遺構・遺物実測図、航空写真、現地写真、遺物などの資料は、本センターにて一括して保存管理に当たっている。
9. 本報告書の遺構・遺物の挿図・写真図版の指示は次の通りであるが、適宜変更したものは明示した。
  - 1 遺構挿図の方針はすべて真北を表示している。
  - 2 遺構挿図の水平基準は、海拔高で示している。（単位 m）
  - 3 挿図の縮尺（堅式式住居址・掘立柱建物跡 1/60、土坑 1/40、土器・石器 1/2～1/4）
  - 4 写真図版の遺物の縮尺は任意である。
  - 5 写真図版中の遺物番号は、挿図内番号と統一している。

# 能美丘陵東遺跡群 I

## 目 次

第1章 位置と環境（滝上秀明）	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	2
第2章 調査に至る経緯（柄木英道）	11
第1節 分布調査に至る経緯	11
第2節 平成2年度の分布調査	12
第3節 平成3年度の分布調査	14
第3章 宮竹オオハゲA遺跡（小嶋芳孝、橋場和彦）	21
第1節 宮竹オオハゲA遺跡の位置	21
第2節 調査の経緯	21
第3節 遺構と遺物 (1)土坑 (2)溝 (3)宮竹オオハゲ1号炭窯 (4)石組遺構	21
第4節 まとめ	32
第4章 庄が屋敷B遺跡（西野秀和）	35
第1節 地形	35
第2節 調査経過 1 調査経過 2 調査日誌（抄）	36
第3節 層序と遺構の配置 1 層序と遺物の出土状況 2 遺構の配置	44
第4節 検出した遺構 (1)集石炉跡 (2)配石遺構 (3)土坑 (4)風倒木痕 (5)古代の土坑 (6)その他の土坑 (7)掘立柱建物跡	47
第5節 出土遺物 1 繩文土器 2 石器 3 古代の遺物	64
第6節 まとめ 1 繩文時代 2 古代	131
第5章 庄が屋敷D遺跡（松山和彦・滝川重徳）	139
第1節 地形と層序 1 地形 2 層序	139
第2節 遺構の配置	139
第3節 旧石器時代の遺物 1 調査区の設定 2 出土状況 3 遺物 4 まとめ	143
第4節 繩文時代の遺構と遺物 1 住居跡 2 土坑、落ち込み 3 陥穴 4 包含層出土遺物	148
第5節 古代以後の遺構と遺物 1 古代の遺構と遺物 2 製炭土坑	171
第6節 おわりに	178
第6章 庄が屋敷A遺跡（橋場和彦）	179
第1節 遺跡の位置と環境	179
第2節 調査の経過	179
第3節 遺構	179
第4節 出土遺物	182
第5節 まとめ	185
第7章 炭窯跡（小嶋芳孝・滝川重徳）	207

## 挿 図 目 次

第1図 石川県辰口町の位置図	1
第2図 周辺の遺跡 (1/25,000)	5
第3図 浅谷寺跡位置図 (1/12,000)	15
第4図 「いしかわサイエンスパーク」整備事業関連埋蔵文化財分布調査位置図 (1/10,000)	19
第5図 宮竹オオハゲA遺跡全体図 (土坑は号数を表記)	23
第6図 1・2号土坑の平面図と土層図	24
第7図 3・4号土坑の平面図と上層図	25
第8図 5~9号土坑の平面図	26
第9図 5~9号土坑の土層図	27
第10図 1・2号溝の平面図と土層図	28
第11図 宮竹オオハゲ1号炭窯の平面図と東西土層図	29
第12図 宮竹オオハゲ1号炭窯の南北土層図	30
第13図 宮竹オオハゲA遺跡石組遺構の平面図	31
第14図 宮竹オオハゲA遺跡出土遺物 (1/3)	33
第15図 庄が屋数B遺跡地形図 (1/2,000)	35
第16図 区画配置図と上層断面図 (1/600) (1/200)	37
第17図 西地区南北方向土層断面図 (1/80)	38
第18図 西地区東西方向上層断面図 (1/80)	39
第19図 東端南北方向土層断面図 (1/80)	40
第20図 遺構配置図 (1/300)	45
第21図 集石炉跡 (SK19・32)、第2号配石遺構実測図 (1/30)	48
第22図 SK30・45、第1・3・4号配石遺構実測図 (1/60) (1/30)	49
第23図 SK44・17・31・39・9実測図 (1/40)	51
第24図 SK21・49・53実測図 (1/40)	53
第25図 集石生周辺の遺構配置図と断面図 (1/80) (1/40)	54
第26図 SK24~26・34実測図 (1/40)	56
第27図 SK27・35~37実測図 (1/40)	57
第28図 SK28・38・14・22・13・62実測図 (1/40)	59
第29図 挖立柱建物跡配置図 (1/80)	61
第30図 烧土面断面図 (1/40)	61
第31図 挖立柱建物跡 (SB1・2) 実測図 (1/60)	62
第32図 挖立柱建物跡 (SB3) 実測図 (1/60)	63
第33図 遺物出土状況図 (1/160)	65
第34図 織文土器拓影実測図(1) (1/3)	67
第35図 織文土器拓影実測図(2) (1/3)	70
第36図 織文土器拓影実測図(3) (1/3)	73
第37図 織文土器拓影実測図(4) (1/3)	75
第38図 織文土器グリッド別分布図 新保式期以前	76
第39図 織文土器グリッド別分布図 新保式期以降	77

第40図 削器他実測図(1/2) .....	82
第41図 石斧他実測図(1/2) .....	83
第42図 削器、矢柄研磨器他グリッド別分布図 .....	84
第43図 磨製石斧実測図(1)(1/3) .....	86
第44図 磨製石斧実測図(2)(1/3) .....	87
第45図 磨製石斧グリッド別分布図 .....	88
第46図 打製石斧実測図(1/3) .....	90
第47図 打製石斧グリッド別分布図 .....	91
第48図 打欠石錐実測図(1/3) .....	92
第49図 打欠石錐グリッド別分布図 .....	93
第50図 磨石類実測図(1)(1/3) .....	97
第51図 磨石類実測図(2)(1/3) .....	98
第52図 磨石類実測図(3)(1/3) .....	99
第53図 磨石類実測図(4)(1/3) .....	100
第54図 磨石類実測図(5)(1/3) .....	101
第55図 磨石類実測図(6)(1/3) .....	102
第56図 磨石類実測図(7)(1/3) .....	103
第57図 磨石類実測図(8)(1/3) .....	104
第58図 磨石類、矢柄研磨器実測図(9)(1/3) .....	105
第59図 磨石類グリッド別分布図 .....	106
第60図 石皿実測図(1)(1/4) .....	107
第61図 石皿実測図(2)(1/4) .....	108
第62図 石皿実測図(3)(1/4) .....	109
第63図 石皿実測図(4)(1/4) .....	110
第64図 石皿実測図(5)(1/4) .....	111
第65図 石皿実測図(6)(1/4) .....	112
第66図 石皿実測図(7)(1/4) .....	113
第67図 石皿実測図(8)(1/4) .....	114
第68図 石皿グリッド別分布図 .....	115
第69図 刻片グリッド別分布図 .....	119
第70図 南西地区の古代の遺物実測図(1)(1/3) .....	124
第71図 南西地区の古代の遺物実測図(2)(1/3) .....	125
第72図 南西地区の古代の遺物実測図(3)(1/3) .....	126
第73図 南西地区の古代の遺物実測図(4)(1/3) .....	127
第74図 鰐津グリッド別分布図 .....	128
第75図 東地区の古代の遺物実測図(1)(1/3) .....	129
第76図 東地区の古代の遺物実測図(2)(1/3) .....	130
第77図 調査区全体図及びグリッド配置図(1/1,000) .....	140
第78図 遺構配置図 北半(1/500) .....	141
第79図 遺構配置図 南半(1/500) .....	142
第80図 基本層序(1/40) .....	144
第81図 旧石器時代石器の分布(器種別)(1/200) .....	144

第82図	旧石器時代石器の分布（石質別1）（1／200）	145
第83図	旧石器時代石器の分布（石質別2）（1／200）	145
第84図	旧石器時代の遺物（2／3）	146
第85図	1号堅穴住居跡（1／60）	149
第86図	3号堅穴住居跡（1／60）	149
第87図	1号堅穴住居跡出土遺物（1／3）	150
第88図	3号堅穴住居跡出土遺物（1／3）	150
第89図	2号堅穴住居跡（1／60）	152
第90図	2号堅穴住居跡出土遺物（1／3）	153
第91図	4号堅穴住居跡（1／60）	156
第92図	4号堅穴住居跡出土遺物(1)（1／3）	157
第93図	4号堅穴住居跡出土遺物(2)（1／3）	158
第94図	縄文時代の土坑(1)（1／40）	161
第95図	縄文時代の土坑(2)：陥穴（1／40）	163
第96図	縄文時代土坑・包含層出土遺物(1)（1／3）	165
第97図	縄文時代土坑・包含層出土遺物(2)（1／3）	166
第98図	縄文時代土坑・包含層出土遺物(3)（1／3）	167
第99図	縄文時代土坑・包含層出土遺物(4)（1／3）	168
第100図	縄文時代土坑・包含層出土遺物(5)（1／3）	169
第101図	古代遺構集中地点（1／100）	172
第102図	古代以後の遺構(1)（1／40）	173
第103図	古代以後の遺構(2)（1／40）	176
第104図	古代遺構・包含層出土遺物（1／3、96のみ2／3）	177
第105図	庄が屋敷A遺跡グリッド設定図（1／500）	189
第106図	東地区遺構配置図（1／400）	190
第107図	西地区遺構配置図（1／400）	191
第108図	1号住居跡実測図（1／60）	192
第109図	2号住居跡実測図（1／60）	193
第110図	土坑実測図（1／40）	194
第111図	土坑実測図（1／40）	195
第112図	土坑実測図（1／40）	196
第113図	焼土坑実測図（1／40）	197
第114図	焼土坑実測図（1／40）	198
第115図	溝上層断面図（1／40）	199
第116図	縄文時代の出土遺物（土器）（1／3）	200
第117図	縄文時代の出土遺物（石器）（2／3・1／3）	201
第118図	縄文時代の出土遺物（石器）（1／4）	202
第119図	縄文時代の川土遺物（石器）（1／4）	203
第120図	縄文時代の出土遺物（石器）（1／4）	204
第121図	古代の出土遺物（土器）（1／3）	205
第122図	炭窯の位置（1／5,000）	208
第123図	屋敷谷1号炭窯実測図（S=1／100）	209

第124図 屋敷谷2号炭窯実測図 (S = 1/100) .....	210
第125図 人口コマツワラ炭窯実測図 (S = 1/100) .....	211
第126図 庄が屋敷A-1号炭窯実測図(1) (S = 1/60) .....	212
第127図 庄が屋敷A-1号炭窯実測図(2) (S = 1/60) .....	213
第128図 西湯谷1号炭窯実測図 (S = 1/60) .....	215
第129図 東湯谷1号炭窯実測図 (S = 1/60) .....	216

## 表 目 次

第1表 周辺の遺跡地名表 .....	6
第2表 出土土器地点一覧表 .....	78
第3表 石器計測一覧表(1) .....	94
第4表 石器計測一覧表(2) .....	116
第5表 磨石類使用状態一覧表 .....	120
第6表 旧石器時代石器属性表 .....	147
第7表 縄文時代石器属性表 .....	170
第8表 石器細目表 .....	187
第9表 烧土坑細目表 .....	188

## 図 版 目 次

巻頭図版 1 能美丘陵遠景 (東の獅子吼高原から)、庄が屋敷遺跡群の全景 (北西から)	
巻頭図版 2 宮竹オオハゲA遺跡全景、宮竹オオハゲA 1号炭窯	
巻頭図版 3 庄が屋敷D遺跡 遠景: 北より (92年8月撮影)、庄が屋敷D遺跡 南部: 北より	
図版 1 宮竹オオハゲA遺跡 調査前の風景、表土剥ぎ終了後 (南から)	
図版 2 宮竹オオハゲA遺跡 表土剥ぎ作業風景: 北斜面、遺構検出作業風景: 南斜面	
図版 3 宮竹オオハゲA遺跡 遺構検出状況: 全景 (北から)、完掘状況: 全景 (南から)	
図版 4 宮竹オオハゲA遺跡 遺構検出状況: 南斜面 (西から)、完掘状況: 南斜面 (西から)	
図版 5 宮竹オオハゲA遺跡 1号土坑・2号土坑 遺構検出状況: 1号土坑〈上〉・2号土坑〈下〉 (南から)、 遺構検出状況: 1号土坑 (東から)	
図版 6 宮竹オオハゲA遺跡 1号土坑・2号土坑 完掘状況: 1号土坑 (北から)、完掘状況: 2号土坑 (北から)	
図版 7 宮竹オオハゲA遺跡 3号土坑 土層断面観察状況 (南北ライン西壁)、完掘状況 (南から)	
図版 8 宮竹オオハゲA遺跡 4号土坑 遺構検出状況 (南から)、完掘状況 (北から)	
図版 9 宮竹オオハゲA遺跡 5号土坑 遺構検出状況 (南から)、完掘状況 (北から)	
図版10 宮竹オオハゲA遺跡 6号土坑 遺構検出状況 (南から)、完掘状況 (南から)	
図版11 宮竹オオハゲA遺跡 7号土坑 遺構検出状況 (南から)、完掘状況 (南から)	
図版12 宮竹オオハゲA遺跡 8号土坑 遺構検出状況: 8号土坑〈中央〉と地境溝 (南から)、完掘状況 (南から)	
図版13 宮竹オオハゲA 1号炭窯跡 遺構検出状況: 〈手前・前庭部〉 (北から)、遺構検出状況: 近景 (北から)	

ら)

- 図版14 宮竹オオハゲA 1号炭窯跡 土層断面調査状況（北から）、土層断面観察状況：燃焼室（A-Bライン北壁）
- 図版15 宮竹オオハゲA 1号炭窯跡 土層断面調査状況：燃焼室（南北ライン・東壁）、土層断面観察状況：前庭部周辺（東から）
- 図版16 宮竹オオハゲA 1号炭窯跡 土層断面観察状況：前庭部炭ピット（南北ライン・西壁）、完掘状況：燃焼室〈左〉焚口〈中央〉前庭部〈右〉
- 図版17 宮竹オオハゲA 1号炭窯跡 完掘状況：煙道（北から）、完掘状況：煙道基部（北から）
- 図版18 宮竹オオハゲA 1号炭窯跡 完掘状況：煙道（上から）、完掘状況：全景（北から）
- 図版19 宮竹オオハゲA 遺跡石組遺構 調査前：全景（東から）、遺構検出作業風景
- 図版20 宮竹オオハゲA 遺跡石組遺構 完掘状況：全景（東から）、完掘状況：全景（北から）
- 図版21 宮竹オオハゲA 遺跡石組遺構 完掘状況：中央部近景（東から）、完掘状況：中央部近景（東から）
- 図版22 宮竹オオハゲA 遺跡 出土遺物
- 図版23 庄が屋敷B 遺跡 斜め全景（航空写真、西から）、垂直全景（航空写真、下が北方方向）
- 図版24 庄が屋敷B 遺跡 調査区全景（北西から）、調査区全景（西から）、調査区全景（東から）
- 図版25 庄が屋敷B 遺跡 調査前の状況（東から）、表土除去除去作業（東南から）、発掘開始状況（東南から）
- 図版26 庄が屋敷B 遺跡 西端部の発掘状況、西端部の発掘状況、西端部の発掘状況
- 図版27 庄が屋敷B 遺跡 西端部の発掘状況（北から）、西端部の発掘状況（北東から）、西端部の発掘状況（西から）
- 図版28 庄が屋敷B 遺跡 磨製石斧出土状況、磨製石斧2点の出土状況、西南斜面の遺物出土状況（古代）
- 図版29 庄が屋敷B 遺跡 第2・3号配石遺構、第2号配石遺構、第3号配石遺構
- 図版30 庄が屋敷B 遺跡 第1号配石遺構、第2号配石遺構、焼土廐と礫の出土状況
- 図版31 庄が屋敷B 遺跡 第1号集石炉跡（SK32）、第1号集石炉跡、第1号集石炉跡の下層状況
- 図版32 庄が屋敷B 遺跡 第2号集石炉跡（SK19）、第2号集石炉跡、第1・2号集石炉跡、第1・2号集石炉跡の完掘状況
- 図版33 庄が屋敷B 遺跡 SK51、SK17、SK45（落し穴跡）
- 図版34 庄が屋敷B 遺跡 SK39、SK39と風倒木廐、SK39の土器出土状況
- 図版35 庄が屋敷B 遺跡 SK30の検出状況、SK31（風倒木廐）の検出状況、SK31の完掘
- 図版36 庄が屋敷B 遺跡 SK44の炭化物の出土状況、中央地区でのトレンチ発掘（東から）、トレンチ発掘（西から）
- 図版37 庄が屋敷B 遺跡 南西斜面の遺構検出状況（西から）、南西斜面の遺構検出状況（南東から）、SK25・26・34
- 図版38 庄が屋敷B 遺跡 SK36土層断面、SK24土層断面、SK35土層断面
- 図版39 庄が屋敷B 遺跡 SK27・35～37、SK35（東から）、SK36（東から）
- 図版40 庄が屋敷B 遺跡 SK25土層断面、SK35土層断面、包含層での遺物出土状況
- 図版41 庄が屋敷B 遺跡 SK13土層断面、SK13完掘、SK14
- 図版42 庄が屋敷B 遺跡 SK22土層断面、SK22完掘、SK34土層断面
- 図版43 庄が屋敷B 遺跡 SK38土層断面、SK62、SK49、29
- 図版44 庄が屋敷B 遺跡 南西斜面焼磧出土状況（東から）、南西斜面焼磧近景
- 図版45 庄が屋敷B 遺跡 南西谷部の遠景（南から）、南西谷部の発掘風景、南西谷部の礫川土状況（西から）
- 図版46 庄が屋敷B 遺跡 南西谷部の礫出土状況（東から）、石皿などの出土状況、南西谷部の礫除去後の状況（東から）

- 図版47 庄が屋敷B遺跡 挖立柱建物跡群遠景（北から）、掘立柱建物跡近景（西から）、掘立柱建物跡近景（東から）
- 図版48 庄が屋敷B遺跡 挖立柱建物跡（南西から）、挖立柱建物跡（北東から）、柱穴からの土器出土状況、土師器集積状況
- 図版49 庄が屋敷B遺跡 縄文土器（1～49）
- 図版50 庄が屋敷B遺跡 縄文土器（43～112）
- 図版51 庄が屋敷B遺跡 縄文土器（107～148）
- 図版52 庄が屋敷B遺跡 縄文土器（149～183）
- 図版53 庄が屋敷B遺跡 縄文土器（187～224）
- 図版54 庄が屋敷B遺跡 縄文・弥生土器（667～701）
- 図版55 庄が屋敷B遺跡 石鏃・石匙他（231～267）
- 図版56 庄が屋敷B遺跡 磨製石斧（268～288）
- 図版57 庄が屋敷B遺跡 打製石斧、矢柄研磨器（292～306、452～457）
- 図版58 庄が屋敷B遺跡 打欠石錐（307～399）
- 図版59 庄が屋敷B遺跡 磨石類（364～451）
- 図版60 庄が屋敷B遺跡 古代の遺物（515～549）
- 図版61 庄が屋敷B遺跡 古代の遺物（555～611）
- 図版62 庄が屋敷B遺跡 古代・中世の遺物（615～667）
- 図版63 庄が屋敷D遺跡 調査前の状況、表土除去作業、調査風景
- 図版64 庄が屋敷D遺跡 旧石器時代遺物川土状況（全景：西から）、旧石器時代遺物出土状況（西部）、旧石器時代遺物出土状況（東部）
- 図版65 庄が屋敷D遺跡 基本土層、16号土坑、15号土坑
- 図版66 庄が屋敷D遺跡 1号住居跡（西から）、1号住居内土坑、1号住居跡出土土器
- 図版67 庄が屋敷D遺跡 2号住居跡（南東から）、2号住居跡（東から）、2号住居内上坑
- 図版68 庄が屋敷D遺跡 4号住居跡（北東から）、4号住居跡（南から）、4号住居内上坑
- 図版69 庄が屋敷D遺跡 3号住居跡（南から）、3号住居跡出土土器・施土、22号土坑
- 図版70 庄が屋敷D遺跡 3号土坑（陥穴）、4号土坑（陥穴）、20号土坑（陥穴）
- 図版71 庄が屋敷D遺跡 古代遺構群（北から）、11号土坑・12号土坑・2号土坑
- 図版72 庄が屋敷D遺跡 10号土坑・8号土坑（製炭土坑）、17号土坑（製炭土坑）
- 図版73 庄が屋敷D遺跡 旧石器時代の遺物(1)
- 図版74 庄が屋敷D遺跡 旧石器時代の遺物(2)
- 図版75 庄が屋敷A遺跡 調査前の状況（西から）、調査前の状況（北から）、全景（南から、手前はB遺跡）
- 図版76 庄が屋敷A遺跡 表土除去作業、表土除去作業、表土除去作業（南から）
- 図版77 庄が屋敷A遺跡 全景（南西から）、遺構換出状況、住居跡換出状況
- 図版78 庄が屋敷A遺跡 第1号住居跡検出状況、同上遺物出土状況、同上全景
- 図版79 庄が屋敷A遺跡 第1号住居跡内2号土坑、同上1号土坑、同上1号土坑遺物出土状況
- 図版80 庄が屋敷A遺跡 第2号住居跡調査状況、同上遺物出土状況、同上全景
- 図版81 庄が屋敷A遺跡 第2号住居跡遺物出土状況、同上かまど跡、同上全景
- 図版82 庄が屋敷A遺跡 1号土坑、4号土坑、4号土坑
- 図版83 庄が屋敷A遺跡 5・6号土坑、5号土坑、11号土坑
- 図版84 庄が屋敷A遺跡 51号土坑、51号土坑、53号土坑
- 図版85 庄が屋敷A遺跡 87号土坑、87号土坑、87号土坑

- 図版86 庄が屋敷A遺跡 101号土坑、101・102号土坑、2号溝
- 図版87 庄が屋敷A遺跡 第1号住居址検出状況、調査区全景（東地区）、同上（西地区）
- 図版88 庄が屋敷A遺跡 調査区全景（北西地区）、同上（北地区）、同上（北西地区）
- 図版89 庄が屋敷A遺跡 繩文土器
- 図版90 庄が屋敷A遺跡 一縄文時代の遺物ー、古代の遺物
- 図版91 宮竹屋敷谷1号炭窯 調査前：全景（東から）、完掘状況：全景（東から）
- 図版92 宮竹屋敷谷1号炭窯 完掘状況：全景（西側上方から）、完掘状況：炭ビット（前庭部南側・焚口近辺）（東から）
- 図版93 宮竹屋敷谷1号炭窯 完掘状況：燃焼室（東から）、完掘状況：煙道部（東から）
- 図版94 宮竹屋敷谷2号炭窯 調査前：全景（東から）、完掘状況：全景（東から）
- 図版95 宮竹屋敷谷2号炭窯 完掘状況：煙道（東から）、完掘状況：焚口付近（右下方黒色円形は炭ビット）（東から）
- 図版96 大口コマツワラ1号炭窯 調査前：全景（北から）、完掘状況：全景（北から）
- 図版97 大口コマツワラ1号炭窯 完掘状況：全景（南側上方から）、完掘状況：燃焼室と煙道（北から）
- 図版98 庄が屋敷A・1号炭窯 全景（南西より）、全景（北東より）、窯体（南西より）
- 図版99 庄が屋敷A・1号炭窯 窯体（北東より）、煙道部、焚口部敷石
- 図版100 西湯谷1号炭窯 全景（東より）、煙道部、排水施設
- 図版101 西湯谷1号炭窯・東湯谷1号炭窯 西湯谷1号炭窯排水施設起点付近、東湯谷1号炭窯全景（南上り）、煙道部

# 第1章 位置と環境

## 第1節 地理的環境

石川県は、日本海に突出する能登半島とその南西に広がる加賀地域とに二分される。辰口町は、加賀地域のはば中央、県都金沢市から南西約15kmに位置し、57.13km<sup>2</sup>の面積を占める。町域は、手取川に沿って東西約10km、南北約7.5kmにおよび、魚のフグのような形をしている。

辰口町域を含む加賀平野は、東西から南西方向に延びる長さ約60km、最大幅約10kmの細長い平野で、大別して北部の河北平野、中部の手取扇状地、南部の小松・江沼平野に分けられる。手取扇状地は、標高80mの轟来町付近を扇頂として、角度120°で北西に広がり、扇端部は、波浪による侵食のために直線状に切られているが、疊層は海底へと続いている。扇状地の南部を流れている手取川沿いには完新世の扇状地疊層が厚く分布している。

手取川下流に大扇状地が形成されるようになるのは、最終氷期の時期の海水準低下によって、後背地の侵食作用が活発になったことが原因である。それは、約2万年前頃になると新白山火山の活動が始まり、手取川源流域では、特に古白山火山の急速な侵食により膨大な量の岩屑物がつくられ、これらが手取川によって運ばれる碎屑物の供給源となり、手取川扇状地の形成を大きく進めることになったのである。

沖積層が堆積する直前の最終氷河期（約2万年前）頃、後期旧石器時代中頃には、海水準が-120mから-100mにあって、当時の手取川扇状地が河北平野や小松・江沼平野にもまたがっており、大きく広がっていたことが分かっている。しかも、手取川以南では、更新世の地層が非常に薄く、新第三系からなる基盤（火山岩類）は比較的浅いところにある。

約1万年前頃、縄文時代草創期には、海水準が急速に上昇し、-40m付近まで上がってき、手取川扇状地の範囲も前の時期に比べればはるかに縮小し、海岸低地が大きく広がっていた。さらに、約7,000年前頃、縄文時代早期後葉になると海水準は、ほぼ現在と同じ水準にまで上昇する。その後、約6,000年前頃、縄文時代前期前葉になると海水準は最も上昇し、海面は今よりも5mほど高くなり、縄文海進のピークをむかえ、海は内陸の最も奥深くまで進入し、河北平野と小松・江沼平野は海面下になる。

海進のピークが過ぎると海面は次第に下がり始め、約5,000年前頃、縄文時代中期前葉になると海水準は、現在と同様あたりになり、その後も緩やかに海面の低下傾向が続き、約3,000年前頃、縄文時代後期後葉から弥生時代前期になると海水準は、現在よりも2~3mほど低下し、約1,500年前頃、弥生時代中期になると海水準は、上升し始め、やがて現在の海面レベルにまで上がってくる。

歴史時代になり、鎌倉時代から室町時代にかけては、現在よりもわずか沖合に当時の海岸線にあったことがわかつており、海沿いの砂丘の幅は、現在よりもやや広く、河北潟・加賀三湖・邑知潟は、いずれもかなり大きかったと推定されている。

能美丘陵東遺跡群の立地する辰口町は、加賀地域中央を東西に横断するように流れる手取川の左岸中流域に位置し、町域の北縁、東縁は手取川によって限られ、南部は標高約510mを最高所とする能美山地で、その前面に広がる標高50~200mを測る比較的緩やかな傾斜の広大な能美丘陵と、北部は東西約8km、南北約1~2kmの細



第1図 石川県辰口町の位置図

長い手取川扇状地の扇側部にあたる平野からなっている。

辰口町に豊富な恵みを与えてくれる手取川は、その源を白山の大汝峰（標高2,684m）、御前峰（2,702m）などに発し、大日川などの支川を合流するとともに北流して鶴来町に至り、方向を西に転じて、扇状地の南縁を流下して、美川町において日本海に注いでいる県下最大の河川である。手取川の河道はかつてはより北方に位置していたが、幾度かの南進により近世には現在の位置、旧南川の河道に落ち着いたようで、手取川左岸がこのように狭いのは、手取川が扇状地の南縁に偏って流れているためである。

また、能美丘陵は、その大半が海成段丘から成立した台地で占められており、高位海成段丘と低位海成段丘の「地形面とも堆積面を残しているのは一部の所であり、他の大部分は中新統と更新統を侵食してきた侵食段丘面である」という（藤1985）。そして、丘陵の裾部は、耕地化が進み、丘陵と平野は明瞭に分かれているよう見えるが、実際は尾根続きの微高地が舌状に平野に張り出しており、小谷と複雑に入り組んだ地形を形成しており、南方の銀谷川流域まで展開している。また、丸山から湯屋、徳山を経て、和気にかけては谷筋が通り、能美丘陵を東西に分割しており、古今とも丘陵を貫く一種の回廊的な存在であると言え、現在は宮竹用水の支流である山川用水が流れ、加賀産業開発道路が貫いている。

本遺跡群は、手取川扇状地に面した能美丘陵の東北部に位置し、この付近の平野部で海拔60～75mであり、本遺跡群の広がる丘陵上は約100～120mとなっており、その比高差は40m以上を測る。本遺跡群の立地する最高所に登ると手取川扇状地はもとより、加賀平野北部の金沢市のビル群まで見え、日本海の水平線まで一望のもとに見渡すことができる。

自然環境として、本遺跡群周辺の丘陵地では、植林されて杉林や竹林となっている箇所もかなり見られるが、この地域の現存植生では、杉林や竹林以外にアカマツ林やコナラ類の雜木林となっている。辰口町における原植生は、ほとんどが常緑広葉樹林域（照葉樹林帯）に属し、標高350mを超える一部が落葉広葉樹林域（落葉広葉樹林帯）であったとされている（里見1983）。当地の気候は、年平均気温13.5℃、最暖月は8月で24.6℃、最寒月は2月で1.6℃であり、年平均降水量は2200mm以上で、4・5・10月が少なく、11～3月（雪）が多い。年間の降水日数は約170日におよび、2日に1日は雨か雪が降るという勘定になる。冬季の最大積雪は、平野部で50～70cm程度である。動物では、町内の南東部に數頭のクマが生息しているものとみられ、しばしばその出現が報じられている。また、白山山系に近いこともあり、はなれザルやカモシカなどが目撲されることもある。

近年の能美丘陵は、辰口町における開発事業の主対象地域となり、これまでに大規模な住宅団地の造成や辰口丘陵公園、ゴルフ場、放牧場などに利用され、豊かな水資源を利用した先端企業の誘致、地域振興の大きな期待を担う北陸先端科学技術大学院大学（J A I S T 北陸）の開学などにより、金沢市の近郊都市としての機能を持つつある。また、丘陵の谷間にを利用して走る加賀産業開発道路が順次4車線化され、各種事業に対応するようになど整備も進んでいる。

そして、本遺跡群の発掘調査の原因となった北陸先端科学技術大学院大学を核とする石川サイエンスパーク事業もまた約175haの大規模な敷地を能美丘陵の東部に求め、平成4年度から工事も進められている。このように一定地域に開発行為が集中することは、全国的にみても、埋蔵文化財や自然環境の破壊を招く危険性が大きいので、当地においても十分協議されてきた問題もあるし、今後も留意すべき問題である。しかし、石川サイエンスパーク事業に関連する事業などは、地域振興の大きな期待を抱き、地域の活性化の材料として期待されているだけに、できうるかぎり開発と環境保護の両立を目指していかなければならない状況にあると言える。

## 第2節 歴史的環境

本書に所収される能美丘陵東遺跡群は、石川サイエンスパーク整備事業関連の発掘調査対象地域の総称で、能美丘陵の北東部の丘陵尾根上や平坦部に位置しており、この広大な丘陵と深い関係を持っている遺跡と推定される。本遺跡群の歴史的環境について、本節では中世までを対象として、能美丘陵の北東部を中心に周辺の考古資

料、文献資料から概観する。

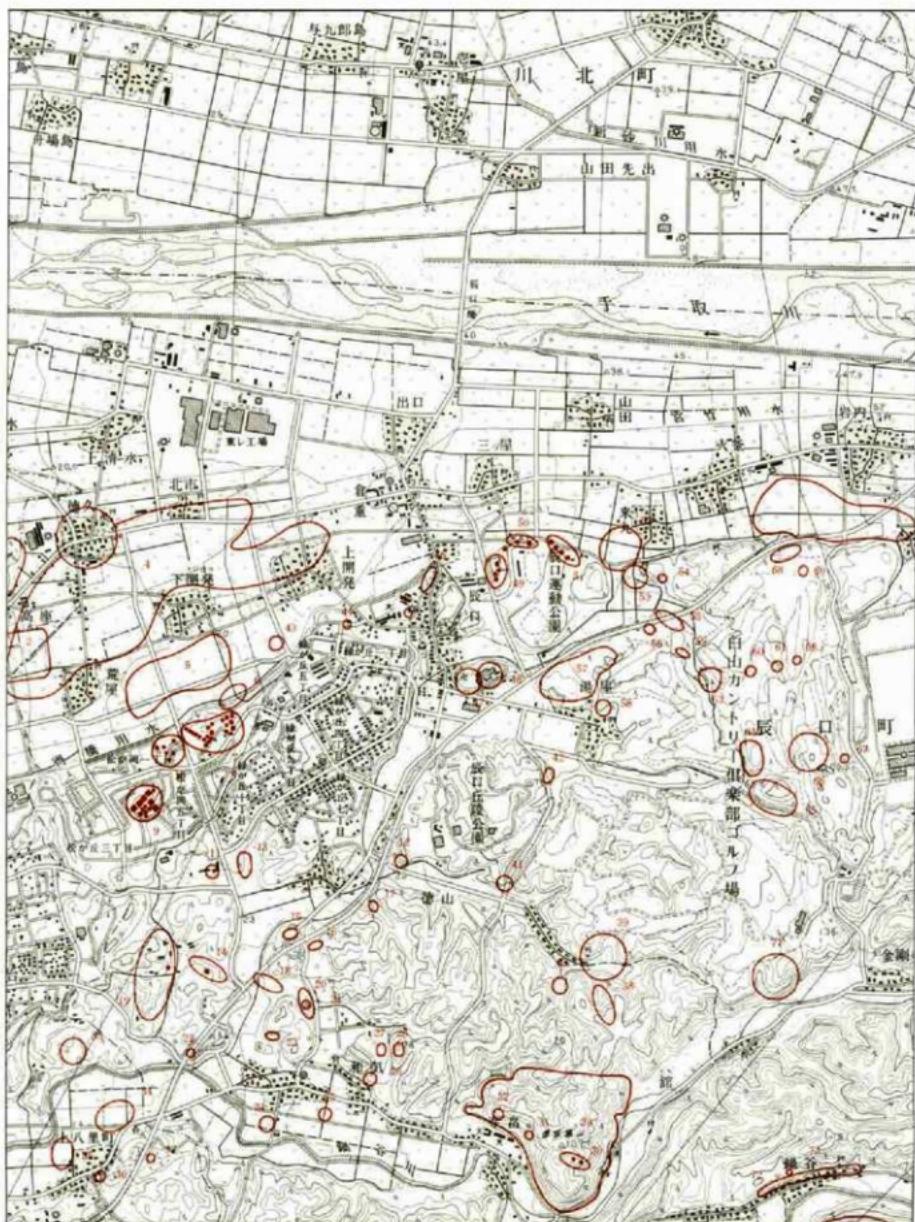
扇状地を前面にして、背後に丘陵をひかえたという地理的環境は、その歴史的環境にも大きな影響を与えている。能美丘陵においては、旧石器時代から連続と続く遺跡が確認され、辰口町の黎明は後期旧石器時代から始まっていると言える。丘陵地の段丘面は、旧石器時代から縄文時代においては、格好の生活の舞台であったようである。旧石器時代の遺跡として著名なものには灯台塗遺跡があり、県下で最初の調査例として知られる。他には、灯台塗遺跡に近接している本遺跡群の試掘、発掘調査（石川サイエンスパーク関連）において、宮竹庄が屋敷B遺跡、宮竹庄が屋敷D遺跡でも確認されており、今後の調査の進展によっては、さらに増加するものと予想される。また、断片的にではあるが、湯屋窯跡からもポイント形石器などが出土しており、手取川左岸の丘陵地一帯に一つの遺跡群を形成することが予測されている。

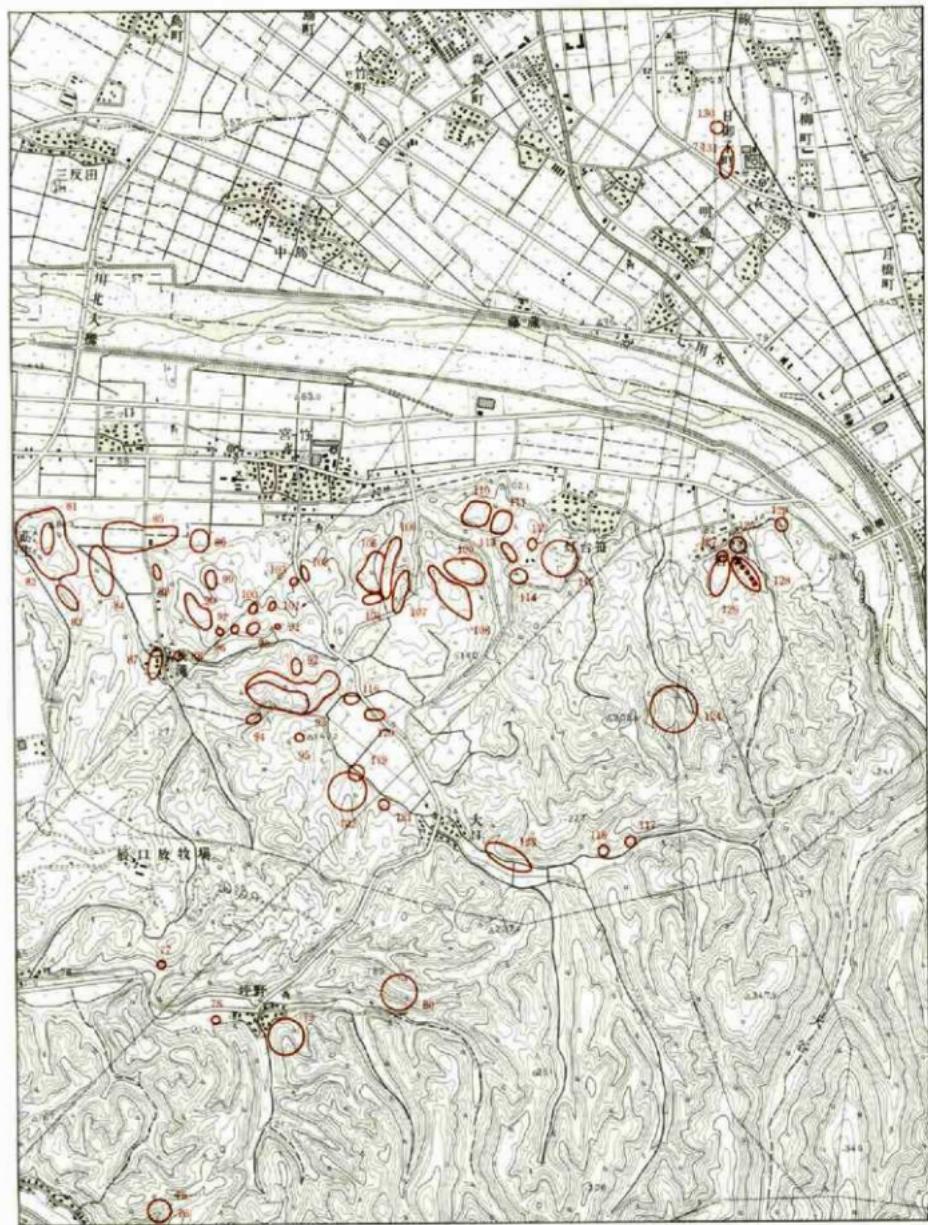
続く縄文時代においては、遺跡数が極めて多くなり、この項ではさらに時期的に細かく追ってみたい。縄文草創期・早期については、本遺跡群の試掘、発掘調査で、若干の遺物の出土を見ている程度に過ぎない。縄文前期では、旭台A遺跡が知られ、その表採土器資料は縄文時代前期前葉に位置づけられるものであるが、量的に少なく、住居などの遺構はさらに恵まれない状況にあるが、近年県下各地で発見例が相次いでおり、今後本遺跡群の発掘調査で確認されることが期待されている。

縄文時代中期は、県下でも最も遺跡数・資料数の多い時期であり、能美丘陵とその周辺ではそれが極めて顕著になる。の中でも、茹生遺跡は、丘陵の端に突き出す台地上に立地する集落遺跡であり、時期的には中期前葉から中葉を主体とする。既往の調査からは、堅穴式住居・炉跡・配石・土器棺などの遺構が、環状に配置される集落であることが確認されている。茹生遺跡と同時期の遺跡は、能美丘陵には極めて多く、茹生遺跡の東400m先には長瀧遺跡、西には近接して岩内遺跡が存在し、本遺跡群の宮竹庄が屋敷遺跡群の発掘調査でも中心的な時期である。長瀧遺跡は、中期後葉から後期前葉を中心とする集落遺跡で、岩内遺跡は、中期前葉から中葉、後期～晩期の集落遺跡であり、両遺跡とも台地の敵高地に立地している。茹生遺跡、長瀧遺跡、岩内遺跡の3遺跡は、能美丘陵北部の代表的な縄文集落遺跡と言えるが、それぞれの立地や時期を微妙に違える点が注目され、茹生遺跡と長瀧遺跡は立地・時期とも異なり、時期的には茹生遺跡から長瀧遺跡へすぐ後続するものであり、したがって、遺跡の立地は台地から敵高地へ移ることになる。折しも中期後葉頃から気候の寒冷化が始まり、前期から中期中葉までの温か和な気候が失われていく、とされる。寒冷化が丘陵に与えた影響は、縄文人の食糧源である動植物にも大きかったものと思われ、より低地への進出がこの時点から始まるものと一般に理解されている。縄文中期には、ほとんど遺跡が皆無であった平野部、特に手取川下流域の平野や扇状地にも縄文中期後葉からの遺跡が出現している。茹生遺跡から長瀧遺跡への推移がこの背景によるものと考えることもできるが、ここで岩内遺跡が敵高地に立地し、茹生遺跡とほぼ同時期に存在している点が大きな問題となり、一様に中期中葉までが高所、中期後葉から低所と立地が変化すると言えない。

縄文時代後期・晩期の遺跡は、能美丘陵周辺では、中期に比して著しく減少し、長瀧遺跡、岩内遺跡の他に下開発遺跡、下開発茶臼山遺跡などがあるが、量的にはあまり見られなくなることから、中期と後期の間にやはり遺跡立地の変遷を認める必要がある。この間の遺跡の動態は立地環境から読み取れる縄文社会の変化をよく反映している。すなわち前期は、旧石器時代以来の丘陵段丘面に、中期から後期にかけては丘陵緩辺部、後期から晩期には山麓部から扇状地へとその主体を移している。

弥生時代前期・中期の遺跡は、これまで不明であるが、後期後半になると遺跡数が増加する。弥生後期後半の遺跡は、辰口町から寺井町にかけて点在する独立丘陵「能美五丘」や能美丘陵上の緩辺部といった平野に面した丘陵上に立地するものが特徴である。前者には、寺井町の和田山遺跡、後者には荒屋遺跡などがある。これらは、後期後半という時代的特質と防衛機能という集落構造上の特徴を持ち、ある種の社会的・政治的緊張関係の產物とされる、いわゆる「高地性集落」（弥生山城）と呼ばれるものには該当しない。しかし、広域に普遍性を持って出現するこれらの台地（丘陵）上の集落がそれらと無関係に存在しうるはずもなく、「高地性集落」と同様、当時の社会情勢を反映したものと理解できよう。一般的に高地性集落が廃絶するとされる後期末の「月影式」





第2図 周辺の道路 (1/25,000)

第1表 周辺の遺跡地名表

No.	遺跡地図No.	名 称	所 在	種 別	時 代
1	12010	西山古墳群	辰口町施久	古墳	古墳
1	12011	西山横穴群	辰口町高座	横穴墓	古墳後期
2	12012	高座遺跡	辰口町高座	集落跡	縄文・古墳・中世
3	12013	施久山上郷跡	辰口町施久	館跡	不詳
4	12014	施久・荒屋遺跡	辰口町施久・荒屋・上開発・下開発	集落跡	縄文・中世
5	12015	下開発遺跡	辰口町下開発	集落跡	古墳後期～平安
6	12016	下開発クモノミヤ遺跡	辰口町下開発	集落跡	平安～中世
7	12017	下開発茶臼山古墳群	辰口町下開発	古墳	古墳中・後期
7	12017	下開発茶臼山遺跡	辰口町下開発	集落跡	縄文・中世
8	12018	茶臼山駿鉄跡群	辰口町施久	製鉄跡	不詳
9	12019	荒屋古墳群(A支群)	辰口町荒屋	古墳	古墳
10	12020	荒屋古墳群(B支群)	辰口町荒屋	古墳	古墳
11	12021	下總山A遺跡	辰口町下總山	散布地	余良末～平安
12	12022	下總山B遺跡	辰口町下總山	散布地	平安
13	12023	下總山C遺跡	辰口町下總山	散布地	不詳
14	12024	下總山金谷地遺跡	辰口町下總山	窯跡	余良
15	12025	下總山D遺跡	辰口町下總山	窯跡	奈良末
16	12026	下總山御陵山遺跡	辰口町下總山	窯跡	平安
17	12027	下總山杉谷空跡	辰口町下總山	窯跡	奈良
18	12028	下總山トモサダ遺跡	辰口町下總山	散布地	不詳
19	12029	和気窯跡	辰口町和気	窯跡	平安
20	12030	和気田見遺跡	辰口町和気	散布地	不詳
21	12031	和気田見窯跡	辰口町和気	窯跡	平安
22	12032	和気下和田窯跡	辰口町和気	窯跡	平安
23	12033	和氣近世窯跡	辰口町和気	窯跡	近世
24	12034	和気矢口A遺跡	辰口町和気	散布地	縄文中期
25	12035	和気公文屋敷跡	辰口町和気	館跡	不詳
26	12036	和気中和気窯跡	辰口町和気	窯跡	平安
27	12037	後山谷2号窯跡	辰口町和気	窯跡	平安
28	12038	後山谷1号窯跡	辰口町和気	窯跡	平安
29	12039	虚空藏城跡	辰口町下館、寺島	城跡	中世
30	12040	虚空藏山横穴群	辰口町下館	横穴墓	古墳後期
31	12041	寺昌窯跡	辰口町寺昌	窯跡	不詳
32	12042	寺昌葉御坂古墳	辰口町寺昌	古墳	古墳
33	03311	向山遺跡	小松市上八里町下部	散布地	不詳
34	03312	上八里中世墓	小松市上八里町	墳墓	室町
35	03313	ヒ八里A遺跡	小松市上八里町	散布地	縄文・平安
36	03314	ヒ八里2号窯跡	小松市上八里町	窯跡	不詳
37	03315	ヒ八里3号窯跡	小松市上八里町	散布地	奈良
38	12043	金剛寺坂中世墓遺跡	辰口町上總山	墳墓群	中世
39	12044	德山寺跡	辰口町上總山	寺院跡	中世
40	12045	上總山A遺跡	辰口町上總山	散布地	奈良・平安
41	12046	上總山近世窯跡	辰口町上總山	窯跡	近世
42	12047	湯屋チヨウカ遺跡	辰口町湯屋	噴泉	中世
43	12048	上開発カワリダ遺跡	辰口町上開発	散布地	中世
44	12049	上開発古墳	辰口町上開発	古墳	古墳
45	12050	辰口ましじやま古墳	辰口町辰口	古墳	古墳後期
46	12051	辰口町本村遺跡	辰口町辰口	散布地	不詳
		辰口八幡神社1号墳	辰口町辰口	古墳	古墳
47	12052	辰口施寺跡	辰口町辰口	寺院跡	不詳
48	12053	辰口縄文遺跡	辰口町辰口	散布地	縄文
49	12054	米丸古寺古墳群	辰口町米丸	古墳	古墳
50	12055	米丸物見山古墳群	辰口町米丸	古墳	古墳
51	12056	米丸古墳群	辰口町米丸	古墳	古墳
52	12057	米丸遺跡	辰口町米丸	散布地	縄文中期・平安
53	12058	来丸天明寺跡	辰口町米丸	寺院跡	不詳
54	12059	来丸気多神社1号墳	辰口町米丸	古墳	古墳

No	遺跡地図No	名 称	所 在	種 別	時 代
55	12060	来丸山遺跡	辰口町来丸	散布地	不詳
56	12061	来丸さくらまち窯跡	辰口町来丸	窯跡	奈良
57	12062	湯屋窯跡	辰口町湯屋	窯跡	古墳
58	12063	湯屋遺跡	辰口町湯屋	散布地	古墳～平安
59	12064	来丸五升谷窯跡	辰口町来丸	窯跡	不詳
60	12065	火釜A遺跡	辰口町火釜	散布地	縄文前期
61	12066	火釜B遺跡	辰口町火釜	散布地	平安
62	12067	火釜C遺跡	辰口町火釜	散布地	平安
63	12068	来丸旭台遺跡	辰口町来丸	散布地	縄文
64	12069	旭台北砦跡	辰口町旭台	砦跡	中世
65	12070	旭台南砦跡	辰口町旭台	砦跡	中世
66	12071	旭台A遺跡	辰口町旭台	散布地	縄文前期・後期
67	12072	旭台B遺跡	辰口町旭台	散布地	平安
68	12073	岩内茶仙堂遺跡	辰口町岩内	散布地	中世
69	12074	岩内經塙遺跡	辰口町岩内	經塙	中世
70	12075	岩内遺跡	辰口町岩内	集落跡	縄文・平安・中世
71	12076	金剛寺跡	辰口町金剛寺	寺院跡	不詳
72	12077	鍋谷中世墓遺跡	辰口町中央鍋谷	墳墓	中世
73	12078	鍋谷横穴	辰口町中央鍋谷	横穴墓	古墳後期
74	12004	鍋谷堡跡	辰口町鍋谷	城跡	不詳
75	12079	鍋谷延願寺跡	辰口町鍋谷	寺院跡	中世
76	12080	鍋谷延願寺遺跡	辰口町鍋谷	散布地	不詳
77	12081	金剛寺乱の穴横穴	辰口町金剛寺	横穴墓	古墳後期
78	12082	坪野遺跡	辰口町坪野	散布地	縄文
79	12083	坪野妙報寺跡	辰口町坪野	寺院跡	不詳
80	12084	坪野智永寺跡	辰口町坪野	寺院跡	不詳
81	12085	勘生城跡	辰口町勘生	城跡	中世
82	12086	勘生遺跡	辰口町勘生	集落跡	縄文～平安
83	12087	勘牛城山奥窓跡	辰口町勘生	窓跡	奈良
84	12088	勘牛D遺跡	辰口町長瀬・勘生	散布地	古墳～平安
85	12089	長瀬遺跡	辰口町長瀬	散布地	縄文・平安
86	12090	宮竹遺跡	辰口町宮竹	散布地	縄文・古墳・平安～中世
87	12091	長池宗智寺跡	辰口町長瀬	寺院跡	不詳
88	12092	長瀬跡	辰口町長瀬	經塙	中世
89	12093	長瀬八幡遺跡	辰口町長瀬	散布地	平安
90	12094	長瀬墓山A遺跡	辰口町長瀬	散布地	縄文・平安
91	12095	長瀬墓山B遺跡	辰口町長瀬	散布地	平安
92	12096	長瀬宮谷遺跡	辰口町長瀬	窓跡	不詳
93	12097	長瀬長尾遺跡	辰口町長瀬	散布地	縄文
94	12098	長瀬A遺跡	辰口町長瀬	散布地	不詳
95	12099	大口經塙	辰口町長瀬	經塙	中世
96	12100	宮竹觀音開きA遺跡	辰口町宮竹	散布地	旧石器・平安
97	12101	宮竹觀音開きB遺跡	辰口町宮竹	散布地	平安
98	12102	宮竹觀音開きC遺跡	辰口町宮竹	窓跡	不詳
99	12103	宮竹沙弥山遺跡	辰口町宮竹	散布地	縄文
100	12104	宮竹中山A遺跡	辰口町宮竹	窓跡	不詳
101	12105	宮竹中山B遺跡	辰口町宮竹	窓跡	不詳
102	12106	宮竹オオハグA遺跡	辰口町宮竹	散布地	不詳
103	12107	宮竹オオハグB遺跡	辰口町宮竹	散布地	縄文
104	12108	庄が屋敷A遺跡	辰口町宮竹	散布地	縄文
105	12109	庄が屋敷B遺跡	辰口町宮竹	集落跡散布地	縄文・平安
106	12110	庄が屋敷C遺跡	辰口町宮竹	集落跡	縄文
107	12111	庄が屋敷D遺跡	辰口町宮竹	集落跡散布地	旧石器・縄文・平安
108	12112	宮竹うっしょやまA遺跡	辰口町宮竹	集落跡散布地	旧石器・縄文・平安
109	12113	宮竹うっしょやまB遺跡	辰口町宮竹	集落跡散布地	縄文・平安
110	12114	宮竹あつ波遺跡	辰口町宮竹	集落跡散布地	縄文・平安
111	12115	灯台塙幽野A遺跡	辰口町灯台塙	集落跡散布地	縄文・平安

No.	遺跡地図No.	名 称	所 在	種 別	時 代
I12	12116	灯台塹溝B遺跡	辰口町灯台塹	散布地	繩文・平安
I13	12117	灯台塹下遺跡	辰口町灯台塹	集落跡	旧石器・繩文
I14	12118	灯台塹ながず遺跡	辰口町灯台塹	集落跡	繩文・平安
I15	12119	灯台塹遺跡	辰口町灯台塹	散布地	旧石器・繩文
I16	12120	大口塙跡群	辰口町大口	塙跡	平安
I17	12121	大口A遺跡	辰口町大口	散布地	奈良～平安
I18	12122	大口B遺跡	辰口町大口	散布地	平安後期
I19	12123	大口C遺跡	辰口町大口	散布地	繩文
I20	12124	大口D遺跡	辰口町大口	散布地	平安
I21	12125	大口E遺跡	辰口町大口	散布地	繩文中期
I22	12126	大口長生寺跡	辰口町大口	寺院跡	不詳
I23	12127	大口中世墓	辰口町大口	墓地	中世
I24	12128	岩本白鳥尼神社跡	辰口町岩本	社跡	不詳
I25	12129	岩本岩祝宮遺跡	辰口町岩本	散布地	繩文中期・後期
I26	12130	岩本中世墓遺跡	辰口町岩本	墳墓	中世
I27	12131	岩本家清船跡	辰口町岩本	船跡	不詳
I28	12132	岩本経塚	辰口町岩本	経塚	中世
I29	12133	岩本B遺跡	辰口町岩本	散布地	平安
I30	15028	日御子A遺跡	鶴来町日御子	散布地	平安
I31	15029	日御子B遺跡	鶴来町日御子	散布地	平安

期にあたる高座遺跡は平野部に立地している。丘陵上の西山遺跡、寺井町の和田山遺跡、寺井山遺跡では、同期を中心とする円形周溝墓・埴輪墓が調査されている。

古墳時代の集落遺跡は、能美丘陵周辺ではほとんど見ることができず、僅かに高座遺跡、寺井町の和田山下遺跡で断片的な資料があるに過ぎない。一転して古墳に目を向けると、「能美五丘」の上には、古墳時代前期以来、県内最大の前方後円墳である寺井町の秋常茶臼山1号墳をはじめとした大型古墳が継続的に营造され、当地が加賀中央部における一大政治勢力の奥津城であったことを示す「能美古墳群」が存在する。一方、能美丘陵の縁辺部には小規模円墳を主体とする来丸古墳群、下開発茶臼山古墳群、荒屋古墳群など(「辰口古墳群」)が存在する。これまでに「能美古墳群」は、江沼古墳群に対比されるような広域の支配圈を有した王者集団の墓域、「辰口古墳群」は、在地にあってその支配下にあった従者集団の墳墓群と性格づけられている。各々の子孫は7世紀以降に、「財造」、「山某」を名乗るような集団であったとされている。

「能美古墳群」の中で西山古墳群は、6世紀後葉から7世紀前半の豪灰岩切石横積横穴式石室墳5基を含むもので、同様の石室は6世紀中葉のものが隣接する寺井町の和田山古墳群にも見られる。豪灰岩切石ブロック積みの石材加工組合せ技術の伝統は、その後7世紀後半には同じ能美地域ではあるが場所をかえ、加賀国府の背後の丘陵上の小松市の河田山古墳群で、横穴にみられるような天井部をアーチ形に構築する技術、力学的により高度な組合せ技術として発展し、外護列石を備えた方墳という極めて政治的色彩を帯びた形態で引き継がれていく。一方、江沼地域では、5世紀代に加賀市の大塚古墳で豪灰岩切石の組合せ式箱形石棺として出現し、6世紀以降は加賀市の中村丸山古墳、三湖台古墳群の横穴式石室・家型石棺へと展開する。ただ当地では、一部の横穴式石室、家型石棺、横穴掘削にみられるように大形石材の加工技術の伝統が存在しており、能美地域とはやや違った石工の系譜があったものとみられている。7世紀末期の小松市の那谷金比羅山古墳が横穴式石棺を採用したのは、首長層の地位、中央との政治的関係以外にも石材加工技術の問題もあると考えられている。

古代に入ると、扇状地の平野部にも点々と遺跡が出現し、開発が始まるようであるが、調査例が少なく詳細は不明である。岩内遺跡では、7世紀後半と9世紀後半を中心とする集落が確認されているが、辰口西部遺跡群の状況も考え合わせると、8世紀後半から9世紀中葉までが開発のピークであったと推定される。辰口町域、特に能美丘陵北麓一帯は、8～9世紀において山上郷として当初越前國江沼郡に編入され、弘仁十四年(823年)の加賀立国以降は、能美郡山上郷(郷名の初見は延暦八年(787年)記の長岡京跡出土木簡)となっている。

この時期は、ふたたび遺跡数が増加するが、古代の当地を特色づけるのが、漬業生産地、つまり7世紀から9

世紀にかけて丘陵一帯に展開して主に須恵器を生産した「能美窯跡群」の存在である。能美丘陵には、半地下式窯窓を兼ねて必要な傾斜地や、湯屋、徳山、和氣を中心とする一帯で生産される良質の粘土などの好条件が地形・地質とも窯業生産に適していたとも言える。

「能美古墳群」や「辰口古墳群」から出土した遺物を中心に、5世紀末頃の須恵器窓の存在が胎土観察から、当地域周辺に窯跡が存在するのではないかと推定されているが、今のところ未確認である。継続的な生産を開始するのは、北陸の他の生産地同様、7世紀前半とみられる。丘陵北部では、主に7世紀から8世紀前半にかけて操業が行われ、古いほうから辰口マルヤマ窯跡、瓦胸兼業の湯屋窯跡、筋生城山奥窯跡、来丸サクラマチ窯跡が「北群」のはば主要窯跡といえよう。中でも湯屋窯産の瓦が石川郡（現野々市町）の木松寺に供給されていったことはこれまでの研究によって広く知られているが、北加賀の仏教流布の過程における寺院建立とその維持に当地が深く関連していたことを示すものである。しかし、8世紀半ばをさかに生産地は南に移動し、その後9世紀半ば頃まで継続し、古いほうから和氣蛇山1号窯、和氣和田見窯、和氣金谷地窯、和氣後山谷窯群、中和気窯などが、「南群」のはば主要窯跡といえよう。須恵器生産のピークは、8世紀後半で、製品の一定量を群域を超えて石川平野にも供給しているが、同じ江沼郡内にあって北陸最大の窯業生産地である加賀市から小松市にかけての「南加賀古窯跡群」の補完的役割を担っていたものと推定されている。また、湯屋窯跡と木松寺との関係の例のように窯跡群の造営と土器生産は、当時の社会・政治状況に応じた行為といえ、当然鉄・塩など他の手工業や、農業などの諸産業にも同様の変化が現れているものと考えられる。それを示すように集落遺跡も再び丘陵周辺に出現し、岩内遺跡にも痕跡が認められる。ところが、8世紀後半には、窯跡群が丘陵南部に中心を移動するため、北部では衰退して、逆に下開発遺跡や絶久・荒原遺跡などの集落遺跡が増加に転ずる。

9世紀代、平安時代へと移行してもこの傾向は持続し、また、滝谷寺跡などの山岳寺院などの特殊な遺跡が出現することにも注意しておきたい。その背景としては、律令制が弛緩し、天平勝宝七年（755年）の蟹田永年私財法の施行などにより土地の私有化が全国的に公認されるとともに、各地で新田開発が盛んになり、私有や寺有の庄園が形成されたことが考えられる。当地でも「越前國江沼郡幡生庄」が天平勝宝七年（755年）には「橋夫人」から東大寺領の庄園として施入され成立している。天平宝字三年（759年）の絵図の四至から窺うことができるのである。

#### 東比奈河 南岡 西床滑山道并神刀良家

江沼郡幡生村、四至

#### 北十五條与十六條境畔

地五十町五段六十四歩 天平宝字三年十二月三日

（大治五年『東大寺諸莊文書并絵図等目録』）

この記事により、当地に条理制が施行されていたことが確認でき、開発途上の野地が一定の広がりをもっており、「幡生庄」の立地がその開発を本格化させる直接的な契機となったことが想像できる。「幡生庄」は延暦元年（782年）に庄域を拡大し、占有野地の広がりを250町としている。その後も寺領の権利防衛の努力は続けられるが、永久三年（1115年）の「寺解」による訴えを最後にその名は消える。なお「幡生庄」の名称自体は、東大寺の文書諸文や注進状の中で弘安八年（1285年）まで確認できる。「幡生庄」の所在地については、「庄」「荘」の墨書き上器が出土したことにより辰口西部遺跡群が所在する絶久、荒原、下開発地区を含んだ地域であることはほぼ間違いないが、現手取川の河床や川北町も含めて北に延びて、丘陵の北辺にまでも開墾が及び、庄域化していたものと推定できよう。

古代末から中世にかけて、12世紀前後の辰口町周辺には、国府の膝元といふ地理的環境から「郡」制の崩壊とともにになって設定されてきた小規模な公領（国衙領）が多く分布し、私領・寺領が入り乱れる状況が当地にも存在する。岩内の地名が初めて文献に登場する「石内保」はそうした中の公領の一つであったが、徐々に私領化・寺領化が進んで行ったようである。中世の遺跡は、能美丘陵周辺では、耕塹や墳墓を除いては数少ない。しかし、当時すでに耕地化はかなり進んでいたと予想され、岩内遺跡では、遺物の公汎な散布が認められている。付近に

中世集落が存在していたものと思われ、近代化のは場整備などで遺構面が削平を受けている可能性も想定すべきであろう。

能美丘陵北東部とその周辺では、これまでの発掘調査などの成果を基に通史的に遺跡を並べてみると、縄文・古代の両時代に人間の活動・開発のピークが認められ、弥生・古墳時代に関しては極めて小規模で、中世については不明確と言える。また、それぞれの盛期のうちでも、縄文時代は中期、特に前葉から中葉の集落遺跡、古代では8世紀前半までの窯跡群、8世紀後半からの集落遺跡と、性格を異にする遺跡が主体となっているようである。それぞれがどのような背景で成立して盛期を形成し、また終息していくのかは、今までのところ十分明確にはされていない。数々の発掘調査で得られた多くの考古資料が、文献史や自然史などを含めた総合的な検討を重ねることによって、文字通り地域史発掘の端緒とならんことを切に願う。本書がその一助になるならば幸いである。

## 第2章 調査に至る経緯

### 第1節 分布調査に至る経緯

石川県立埋蔵文化財センターが実施している能美丘陵東遺跡群の埋蔵文化財発掘調査は、県企画開発部・土地開発公社及び辰口町により同町宮竹、大口、灯台根、長滝及び旭台地内で進められている「いしかわサイエンスパーク」整備事業にかかるものである。同事業は平成2(1990)年度に創設された北陸先端科学技術大学院大学を核として、その周辺180ha(緑地約50%を含む)を民間研究所、住宅、公園等用地として一体的に整備し将来的に新しい地域コミュニティの形成を目指すとされている。

先端科学技術大学院大学は「大学院の飛躍的拡大」を求めた国の臨時教育審議会「第二次答申(昭和61(1986)年春)」を受け、総合研究大学院とともに文部省が設置を打ち出した新構想大学院のひとつである。石川、奈良両県がその誘致に名乗りをあげ、昭和62(1987)年には「先端科学技術大学院構想調査に関する調査研究協力者会議」(国)、「石川県先端科学技術大学院立地推進協議会」(県)及び「先端科学技術大学院設置特別委員会」(町)が相次いで設置あるいは設立され、並行して昭和63(1988)年度の概算要求に創設準備費が盛り込まれるなど比較的短期間にうちに具体的な段階へと入っていった。

大学院大学の目的は「第4回調査研究協力者会議(昭和63(1988)年3月19日)」において承認された「先端科学技術大学院構想調査のまとめ」によれば「①先端的な科学技術分野における基礎研究の推進」、「②企業や研究所等において先端科学技術分野の研究開発に従事する研究者、技術者等の養成及び再教育」である。「同まとめ」には「③柔軟な教育研究組織の編制と産学共同研究の推進」として「④大学のキャンパスの周辺に企業等の研究所を配置することなどを含めて産学共同研究を推進する」ことが謳われており、上記整備事業はここに根拠を置き進められてきた。

昭和63年度には「先端科学技術大学院準備調査室及び準備調査委員会(平成元(1989)年度に創設準備室及び創設準備委員会)」(国)、「石川先端科学技術大学院立地対策室(平成2年度に北陸先端科学技術大学院大学立地対策室)」(県)、「石川先端科学技術大学院周辺整備構想策定研究会」(町)、「先端科学技術大学院支援財団設立準備委員会(平成2年度に北陸先端科学技術大学院大学支援財団)」が設置あるいは設立され、周辺整備事業の用地取得も開始された。同年度末には事業にかかる埋蔵文化財の取り扱いについて、県企画開発部・町総務課と県埋文センター・町教育委員会との間で具体的な打ち合わせ等がおこなわれている。

町教育委員会による事業予定地の現地踏査(1月)、埋文センターにたいする事業概要の説明(2月)、試掘調査の実施等にかかる企画開発部と埋文センターとの打ち合わせ(3月)等を経て、主として町が担当する大学院大学本体の用地整備事業については町教育委員会が、土地開発公社が担当する周辺整備事業については埋文センターがそれぞれ調査主体となり、周知の埋蔵文化財包蔵地はもちろんその他の箇所についても、工事中の不時発見を避けるという観点から埋蔵文化財の有無を確認するため事前に試掘調査等必要な措置を講じ、その結果をもとに取り扱いについて関係機関が充分協議をおこなうこととなつた。

翌平成元年度は周辺整備事業については町教育委員会による大口地内の研究所用地の分布調査、町教育委員会・埋文センターによる全域の再踏査(ともに3月)以外進展はほとんどなく、試掘を伴う全域の分布調査が可能となったのは平成2年度も下半期であった。同年度は埋文センターによる分布調査と一部並行して研究所・教員住宅用地整備・県道塙田・寺島・宮竹線改良にかかる大口D遺跡(4月20日～7月26日、約2,500m<sup>2</sup>)・大口窯跡(11月27日～平成3(1991)年6月4日、約1,300m<sup>2</sup>)・大口D遺跡(9月5日～11月29日、約300m<sup>2</sup>)の発掘調査がおこなわれている。前二者は周辺整備事業予定地の一部で土地開発公社が、後者は大学院大学への進入路で県

小松土木事務所がそれぞれ事業者であることからいざれも埋文センターが担当すべきものであるが、大学院大学の用地整備と関連することもあり町教育委員会がおこなうこととなったものである。

この間特筆されるべきものとして、二度にわたる踏査により発見・確認された滝谷寺跡があげられる。同寺は真言宗に属し中世に隆盛を極めたと地元に伝承されてきたものの所在地は不詳であった。踏査により初めて町指定名勝「七ツ滝」に面する事業予定地南西部の丘陵及び谷部一帯（長瀬地内）が同寺跡所在地と推定されたのである。同地区には大小多数の人工的に造成された平坦面が存在し、しかもその一つ「寺屋敷」の通称が残る谷部の平坦面には据立柱建物の礎石が遺存していた。滝谷寺跡発見のかかる経緯は、分布調査にあたっては充分な体制と細密な計画をもって積む必要があることを強く感じさせるものであった。

## 第2節 平成2年度の分布調査

昭和63年度に開始された用地取得が一段落し整備計画の大枠も定まりつつあった平成2年10月、石川県土地開発公社理事長と石川県立埋蔵文化財センター所長との間で分布調査の依頼（8日付け）と計画書の回答（17日付け）あり、22日付けで「北陸先端科学技術大学院大学周辺用地整備事業関連埋蔵文化財分布調査」委託契約が締結された。内容は土地開発公社から示された整備計画に基づき、切土及び盛土によって埋蔵文化財が所在した場合に影響を受ける箇所を調査範囲として、踏査・人力及び重機による試掘等によって埋蔵文化財の有無を判断し、埋蔵文化財が所在した場合その範囲をあわせて確定しようというものである。

整備計画に基づく調査範囲すなわち切土・盛土範囲は全10地区約595,000m<sup>2</sup>にのぼったが、土地開発公社からはこのうち平成2年度分として長瀬・大口及び宮竹・灯台笠地内の2地区約160,000m<sup>2</sup>が依頼された。前者は事前踏査によって滝谷寺跡の存在が推定されており、後者は周知の埋蔵文化財包蔵地である灯台笠遺跡（旧石器時代）に隣接していることからともに埋蔵文化財が所在する可能性が高い地盤とされ、その結果が整備事業の進捗に大きく影響すると考えられたためである。

埋文センター（企画調整課）では、他に継続中の事業もあり最大で職員1名二箇月（10月中旬から12月中旬）の調査機関を設定したが、準備期間や天候を考慮すれば実働一箇月程度しか確保できないこと、年度半ばで作業員の充分な確保が困難であること、立木伐採未了で重機の進入路が確保できない箇所があること、環境影響調査がおこなわれているため立木伐採・下草刈り等諸作業に制約があることなどから、宮竹・灯台笠地内約70,000m<sup>2</sup>については未了となる可能性がある旨を計画書に盛り込み長瀬地内約90,000m<sup>2</sup>から着手することとなった。調査方法は以下のとおりである。

- ① 調査範囲（外周線）を現地で明示（土地開発公社がおこなう）し、踏査（下草刈りを伴う場合もある）によって試掘の必要性を判断する。
- ② 試掘にあたっては地形的に進入可能な箇所については重機（0.1m<sup>3</sup>バックホー）を使用し、その他の箇所については人力でおこなう。
- ③ 重機の進入路（幅約3m）を確保するため人力により立木を伐採するが、環境影響調査に支障がある樹木の伐採は極力避け迂回する。
- ④ 重機による試掘では掘削中に遺構・遺物の確認に努めるほか、掘削後人力により掘削面・壁、掘削土の精査をおこなう。
- ⑤ 試掘トレンチ（幅約1m）は丘陵及び谷部平坦面を中心に設定するが、遺構が希薄あるいは所在したとしても流出している可能性がある丘陵頂部への設定は積極的にはおこなわない。
- ⑥ 試掘箇所は略図をおこない、土地開発公社が作成した二千五百分の一測量図（平成3年度については千分の一測量図を縮小して使用）に位置を記入し、記録写真撮影後必要に応じて埋め戻す。
- （なお立木のうち杉、松、柏、檜についてもその本数と胸高直径が土地開発公社の台帳に登載されているため、伐採にあたっては樹種と胸高直径ごとの本数を記録することになった。）

以上の方は周辺の遺跡の立地環境を考慮して主として旧石器時代、縄文時代及び古代（奈良・平安時代）の集落、寺院及び製鉄、製炭遺跡等の存在を想定したものであり、基本的には平成3年度の分布調査にも引き継がれた。作業員の確保については町教育委員会の協力を得て10月30日から現地作業を開始、11月30日まで長瀬・大口地内約90,000m<sup>2</sup>について分布調査をおこなった。実働は22日間、延べ作業員数は114人である。現地調査終了後12月21日付けで調査箇所と費用の変更にかかる「変更委託契約」を締結、同日付けで分布調査結果を含む「委託業務執行結果報告書」を土地開発公社理事長あて提出し事業を終了している。

#### 〔平成2年度分布調査日誌〕

10月30日（火）曇	現地打ち合わせ	11月27日（火）晴	炭窯跡群伐採・清掃
31日（水）晴	調査範囲踏査	28日（水）曇	人力による試掘
11月1日（木）晴	現地事務所の設置	29日（木）曇	人力による試掘
2日（金）晴	器材搬入	30日（金）雨	器材整理・撤収
5日（月）曇	作業道の確保（伐採）		
6日（火）晴	人力による試掘		
7日（水）晴一時雨	礎石建物周辺の伐採・清掃		
8日（木）晴	人力による試掘		
9日（金）豊後雨	人力による試掘		
13日（火）晴	人力による試掘箇所伐採		
14日（水）晴	人力による試掘箇所伐採		
15日（木）晴	人力による試掘箇所伐採		
16日（金）晴	重機進入路の確保（伐採）		
19日（月）雨時々曇	重機による試掘		
20日（火）曇	重機による試掘		
21日（水）雨時々曇	重機による試掘		
22日（木）曇	重機による試掘		
26日（月）雨時々曇	重機による試掘		



試掘箇所伐採作業(平成2年度)

分布調査の結果確認された埋蔵文化財は大口小松原遺跡、長瀬長尾遺跡、長瀬宮谷遺跡、滝谷寺跡（ほぼ全域に長瀬長尾遺跡が重複する）の4遺跡である。前二者は縄文時代の集落跡、後二者はそれぞれ時代不詳の製炭遺跡、古代を中心とする寺跡と推定されいずれも発掘調査等事前の保護措置が必要となったが、前三者については全域の分布調査の終了を待って協議することとし、滝谷寺跡については特に貴重な遺跡であるので現状で保存されるよう企画開発部、土地開発公社にたいし申し入れた。協議の結果年度末頃には一部計画を変更し現状保存を図ることで合意ができ、翌平成3年度全城の分布調査が終了した段階でその旨文書（平成3年12月6日付け石土公発第118号）で回答を得ている。現状保存を図ったうえで回答では滝谷寺跡を遺跡や動植物とふれあいのできる区域とするために、遺跡に支障のないような形で散策路を整備するとされた。以下そうした整備のために滝谷寺跡の概要について述べておく。

滝谷寺跡は能美郡辰口町長瀬地内に所在する古代を中心とした寺跡である。「いしかわサイエンスパーク」整備事業予定地南西部の南側に面した丘陵及び谷部一帯に展開し、昭和63年1月（町教委）、平成元年3月（町教委・埋文センター）の踏査、平成2年11月の分布（試掘）調査（埋文センター）によって発見・確認された。東西350m南北100m以上の規模を有し、人工的に造成された平坦面が多数存在する。その一つ「寺屋敷」の通称が残る谷部では一辺20mの平坦面を上下二段に造りだし複数の礎石建物を配しているほか、上段平坦面北東隅には井戸跡かと推定される遺構も認められた。

地元に残る伝承では滝谷寺は真言宗に属し中世に隆盛を極めたとされるが、その実体は必ずしも明瞭とはいえない。今回の調査では礎石が遺存する平坦面での試掘はおこなわなかったため同遺構の所属時期は不明だが、尾根を挟んだ東側谷部の試掘トレンチでは9世紀前半（以前）の土師器甕口縁部小片・10世紀の内面黒色有輪底部片が、反対の西側谷部の試掘トレンチでは9世紀前半の須恵器甕胴部片が出土しており同寺の存続期間の一端

を示している。もちろん周辺の遺跡の分布（大口縄塚・長瀧縄塚等）をみれば、伝承のとおり中世まで存続した可能性も充分考えられる。

滝谷寺跡のようないわゆる「山中寺院」は、県内では8世紀後半以降（金沢市三小牛ハバ遺跡、鶴来町倉ヶ岳遺跡）を最古として、9世紀前半以降（金沢市高尾山寺遺跡？）、9世紀末～10世紀初頭以降（小松市淨水寺跡、同里川E遺跡）と段階的に成立し、その背景に郡司、国守、（斎興）在地勢力等の存在が指摘されるなど近年考古・歴史学界で全国的にも関心を集めているものである。そのなかにあって滝谷寺跡は現在知られるかぎりでは能美郡内で最古、さらに県内最古段階まで遡る可能性がある一方礎石建物をはじめとして推定される寺跡全域にわたって良好な遺存状態を保っているのが特色である。

周辺の景観に目を転ずるとこれまで筆舌に尽くしがたいものがある。南側には寺跡に並行して町指定の名勝「七ツ瀧」が流れ、「七ツ瀧」を挟んだ対岸には「賽の河原塚（大口縄塚）」「行塚」等が展開している。寺跡から西へ尾根を下るとヒットガラン（七堂伽藍）とよばれる丘陵があり、長瀧縄塚が所在する谷を挟んださらには西側の丘陵には延喜式に名を残す「瀧浪社」（多伎奈美神社、現在は北西振部にある）が明治年間末期まで鎮座していた。近年「七ツ瀧」周辺は長岡町によって整備され以前にも増して町民の憩いの場となつたが、滝谷寺跡もそうした周辺環境とともに一体的に整備され、地域コミュニティ「いしかわサイエンスパーク」のみならず地元住民そして広く県民の憩いの場となることが強く望まれるのである。

#### 〔平成2年度分布調査参加作業員〕

(灯台庵) 石川 春男	(宮竹) 岩野 コマ	岩野 力	大島外美子	南 保子	(長瀧) 西田 正則
(三ツ瀧) 岡田須美子	松田美登里	(坪野) 任田 利子	篠 叶子	(下開発) 中 芳 南 敏枝	
(篠 久) 住田 繁	(順不同、敬秀略)				(現地調査担当: 埋文センター企画調整課主事 横木英道)

### 第3節 平成3年度の分布調査

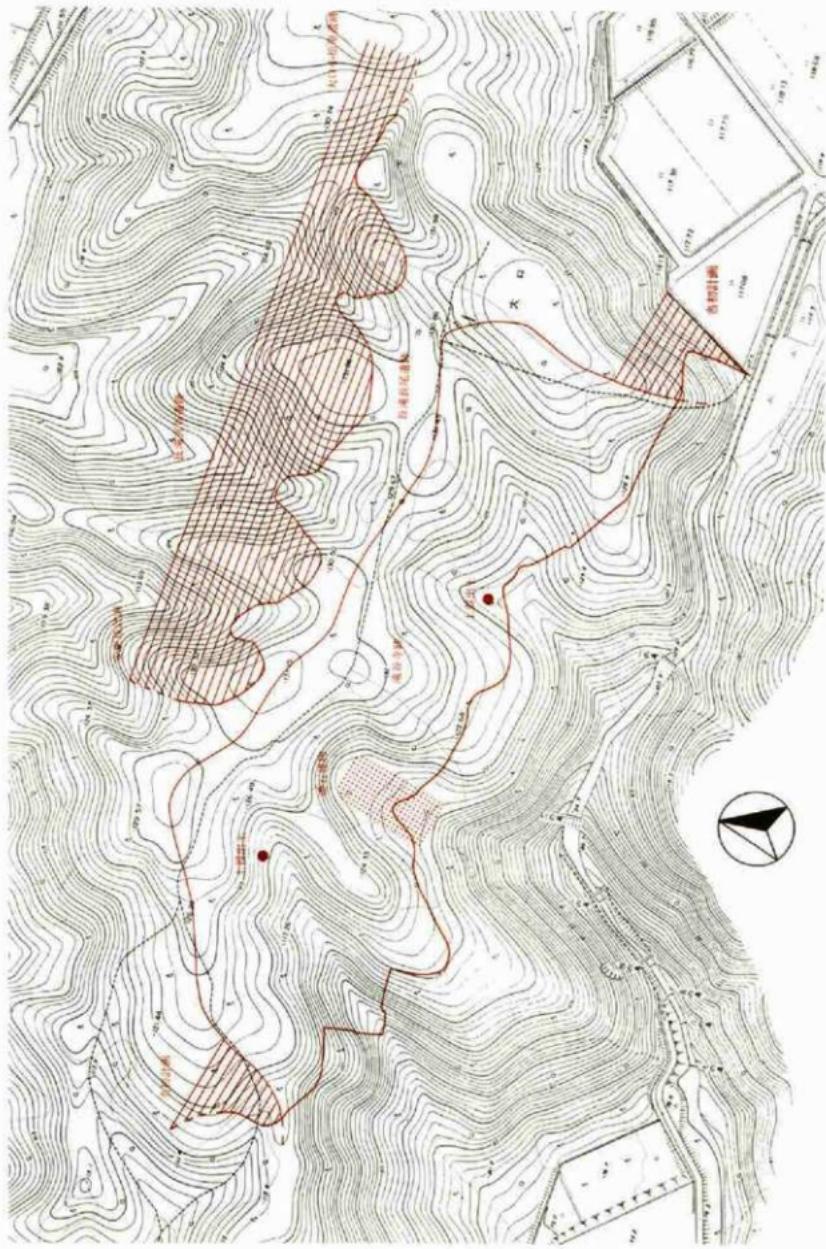
平成2年度の分布調査終了後、確認された埋蔵文化財の取り扱いと並行して平成3年度の分布調査の実施と事前準備についての協議が続けられ、環境影響調査に配慮しつつ事業計画に合わせた調査工程を組むこと、重機進入路及び試掘トレーン箇所にかかる立木伐採のうち大木が多く埋文センター作業員によることが困難な箇所については土地開発公社が担当することなどに合意し、埋文センターでは事業の本格化（平成4年度）が目前に迫っていることからできるだけ早期に結果を得るために職員2名体制で臨むこととなった。

分布調査の依頼（4月1日付け）と計画書の回答（同8日付け）を受け、4月10日付けで平成3年度の分布調査にかかる「委託契約」が締結された。調査面積は前年度末までの未了分（約505,000m<sup>2</sup>）に「いしかわサイエンスパーク」のシンボル道路でもある県道埴田・寺畠・宮竹線改良事業予定地（県小松土木事務所担当）他を加えた約605,000m<sup>2</sup>、全体を6区13箇所に分割し必要に応じて随時中間報告をおこなうこととなった。前年度同様町教育委員会の協力を得て作業員を確保し、現地調査は4月10日から9月19日までの約五箇月間、実働85日、延べ作業員2,236.5人を要した。現地調査終了後10月21日付けで費用の変更にかかる「変更委託契約」を締結、同31日付けで「委託業務執行結果報告書」を提出し事業を終了している。以下は各区ごとの調査の概要である。

#### I区（調査期間：4月10日～5月10日、9月17日～9月18日）

調査箇所はNo.1～3、No.4の一帯及びNo.5約115,000m<sup>2</sup>、確認された埋蔵文化財は庄が屋敷A・B・C・D、宮竹オオハゲAの5遺跡である。前四者は縄文時代の集落跡に一部（庄が屋敷B・D遺跡）平安時代の遺跡が重複し、後者は時代不詳の製糞遺跡と推定された。庄が屋敷B遺跡の試掘トレーンから縄文時代草創期に属するとみられる矢柄研磨器が出土し、北陸三県では初例充形品では全国二例目ということもあって、分布調査としては異例であるが8月27日に報道機関に対する資料提供をおこなっている。なお9月の（再）分布調査は、整備計画の変更（後述）に伴い庄が屋敷A・C・D各遺跡の北側の延びを確認したものである。

第3圖 疾行寺跡位置圖 ( $S = 1/12,000$ )



## 〔I区分布調査日誌〕

4月10日（水）晴	調査範囲踏査	4月30日（火）晴	No.1 人力による試掘
15日（月）晴	現地事務所の設置	5月1日（水）曇時々雨	No.4 人力による試掘
16日（火）晴	器材搬入、No.1 試掘箇所伐採	2日（木）雨一時雷	No.4・5 重機による試掘
17日（水）晴	No.2・4 試掘箇所伐採	7日（火）晴	No.2・4 人力による試掘
18日（木）曇後雨	No.5 試掘箇所伐採	8日（水）曇後雨	No.3 人力による試掘
22日（月）晴	No.3 試掘箇所伐採	9日（木）曇	No.3 重機による試掘
23日（火）晴	No.1 重機による試掘	10日（金）晴	No.2・3 重機による試掘
24日（水）曇	No.1 重機による試掘	9月17日（火）晴	No.1 試掘箇所伐採
25日（木）曇	No.1・2 重機による試掘	18日（水）曇	No.1 人力による試掘

## 〔II区（調査期間：5月13日～6月7日）

調査箇所はNo.4の大部分、No.7の一部、No.8及び（No.6は欠番）県道改良予定地約160,000m<sup>2</sup>、確認された埋蔵文化財は宮竹うっしょやまA・Bの2遺跡である。前者は縄文時代の集落跡に旧石器時代及び平安時代の散布地が、後者は縄文時代の集落跡に平安時代の寺跡が一部に重複しているものと推定された。宮竹うっしょやまA遺跡の試掘トレンチから縄文時代前期に属するとみられる玦状耳飾りが出土している。

## 〔II区分布調査日誌〕

5月13日（月）晴	事務所、器材の移動	5月30日（木）曇	No.4 重機による試掘
14日（火）晴	No.4 試掘箇所伐採	31日（金）曇	No.4 重機による試掘
16日（木）曇時々雨	No.8 調査区下草刈り	6月3日（月）曇後雨	No.4 人力による試掘
17日（金）曇時々雨	No.4 試掘箇所伐採	4日（火）曇	No.4 重機による試掘
20日（月）曇	県道部分重機による試掘	5日（水）晴	No.4 重機による試掘
21日（火）晴	県道部分人力・重機による試掘	6日（木）晴	No.4 人力による試掘
22日（水）曇	No.4 人力による試掘	7日（金）曇	No.4 重機による試掘
29日（水）曇	No.4 重機による試掘		

## 〔III区（調査期間：6月10日～6月28日）

調査箇所はNo.7約70,000m<sup>2</sup>、平成2年度の分布調査で当初計画に含まれていたものである。確認された埋蔵文化財は縄文時代の集落跡を中心とする推定される宮竹あつ坂、灯台笹裏野A・B、灯台笹ながげ、灯台笹下の5遺跡、前4者には平安時代の生産遺跡が重複しているほか灯台笹下遺跡の複数の試掘トレンチからは旧石器時代に属する多量の石器が出土しており注目される。谷を挟んだ東側の丘陵に灯台笹遺跡が所在することから予想外というわけではなかったが、分布調査という性格からすれば量的には驚くべきものがあった。

## 〔III区分布調査日誌〕

6月10日（月）曇後雨	No.7 試掘箇所伐採	27日（木）曇	No.7 重機による試掘
11日（火）晴	No.7 試掘箇所伐採	28日（金）晴	No.7 重機による試掘
12日（水）晴後曇	No.7 試掘箇所伐採		
13日（木）曇後雨	No.7 試掘箇所伐採		
14日（金）晴	No.7 人力による試掘		
17日（月）晴	No.7 人力による試掘		
18日（火）晴	No.7 人力による試掘		
19日（水）曇	No.7 人力による試掘		
20日（木）雨	No.7 試掘箇所伐採		
24日（月）曇	No.7 重機による試掘		
25日（火）雨	No.7 重機による試掘		
26日（水）晴	No.7 重機による試掘		



試掘トレンチ精査作業(平成3年度)

## IV区（調査期間：7月1日～7月24日）

調査箇所はNo.9、10の大部分約90,000m<sup>2</sup>、確認された埋蔵文化財は長滝宮谷、長滝長尾、長滝墓山Bの3遺跡であり、それぞれ時期不詳の製炭遺跡、縄文時代の集落跡、平安時代の散布地と推定される。前二者は平成2年度の分布調査で確認されたものであるが、範囲確定に保留部分を残していたため再分布調査をおこない範囲を確定したものである。

## 〔IV区分布調査日誌〕

7月1日（月）	曇後雨	事務所、器材の移動	7月22日（月）	曇時々雨	No.9重機による試掘
2日（火）	曇	No.9・10試掘箇所伐採	23日（火）	曇	No.10重機による試掘
3日（水）	曇	No.9人力による試掘	24日（木）	晴	No.10重機による試掘
4日（木）	曇後雨	No.9人力による試掘			

## V区（調査期間：7月8日～8月8日）

調査箇所はNo.10の一部、11約75,000m<sup>2</sup>、確認された埋蔵文化財は長滝墓山A、長滝八萬、宮竹城山の3遺跡である。長滝墓山A遺跡は縄文時代の集落跡に平安時代の寺跡と時期不詳の製炭遺跡が範囲を異にしながら重複し、長滝八萬遺跡は平安時代の、宮竹城山遺跡は縄文時代のそれぞれ散布地と推定される。

## 〔V区分布調査日誌〕

7月8日（月）	曇後雨	No.11試掘箇所伐採	7月30日（火）	晴	No.11人力による試掘
11日（木）	曇	No.11試掘箇所伐採	8月1日（木）	曇	No.11人力による試掘
12日（金）	曇後雨	No.11試掘箇所伐採	2日（金）	曇時々雨	No.11人力による試掘
15日（月）	晴	No.11試掘箇所伐採	5日（月）	曇	No.11重機による試掘
16日（火）	雨	No.11試掘箇所伐採	6日（火）	曇	No.11重機による試掘
25日（木）	晴	No.11人力による試掘	7日（水）	曇後雨	No.11重機による試掘
26日（金）	曇	No.11人力による試掘	8日（木）	曇	No.11人力による試掘
29日（月）	晴	No.11人力による試掘			

## VI区（調査期間：8月9日～9月19日）

調査箇所はNo.12～14約95,000m<sup>2</sup>、確認された埋蔵文化財は宮竹オオハゲB、宮竹中山A・B、宮竹観音開きA・B・Cの6遺跡である。宮竹オオハゲB遺跡は縄文時代の、宮竹観音開きA遺跡は旧石器時代及び平安時代の、宮竹観音開きB遺跡は平安時代のそれぞれ散布地であり、宮竹中山A・B、宮竹観音開きC遺跡は時期不詳の製炭遺跡と推定される。

## 〔VI区分布調査日誌〕

8月9日（金）	曇	No.13試掘箇所伐採	3日（火）	晴	No.12・13人力・重機による試掘
20日（火）	曇時々雨	No.12試掘箇所伐採	4日（水）	晴	No.12・13人力・重機による試掘
22日（木）	晴	No.12試掘箇所伐採	5日（木）	晴	No.12・13人力・重機による試掘
23日（金）	晴	No.12試掘箇所伐採			No.14踏査・下草刈り
26日（月）	晴	No.12試掘箇所伐採	6日（火）	晴	No.13人力・重機による試掘
28日（水）	晴	No.12人力による試掘	9日（月）	曇	No.13試掘トレレンチ精査
29日（木）	曇	No.12人力による試掘	10日（火）	晴	No.13試掘トレレンチ埋め戻し
30日（金）	曇後雨	No.12・13人力による試掘	19日（水）	曇	No.13試掘トレレンチ埋め戻し
9月2日（月）	晴	No.12・13人力・重機による試掘			現地整理準備・撤収

## 〔平成3年度分布調査参加作業員〕

（岩本）	岩山 和彦	新宅 幸子	高田加賀子	（火 築）	北出 政雄	中西 吉次	山次 幸治
（灯台桟）	石川 春男	裏野 朝子	榎木不二人	寺田 英子	堂谷千永子	南 次子	山下 秀子
	山田 和子	山田 雅之	（三ッ口）	補出 鈴江	岡田須美子	塙田 清子	松田美登里
（大口）	中島百合子	広瀬 繁子	前田 なか	本佐 譲子	山西 りよ	（来 九）	赤木 電志
（宮竹）	嵐 千代子	岩野 ヨコ	大島外美子	奥山 俊男	北 みよ子	本多 啓一	高村 次一
	竹内 貴大	中山 明美	南 光枝	南 保子	（長 浦）	中出 幸一	西田 正則

(坪 界) 任田 利子 任田 久代 麻 叶子 本村千恵子 (辰 口) 高松 雅基 松岡 雄二  
 (下開発) 北 潤子 北 秀雄 中 朝枝 中 芳 南 政枝 (徳 久) 住田 繁  
 (上開発) 地中 哲 (緑が丘) 森 章 (徳 山) 山本登喜男 (以上辰口町)  
 (荒水田) 小野 洋子 面 一男 面 淑子 (経 海) 伊崎 人輔 (千 代) 木一佐千子  
 (小 野) 北村 智美 (以上小松市) (順不同、敬称略) (現地調査担当: 埋文センター企画調査課主査 栃木英道 松山和彦)

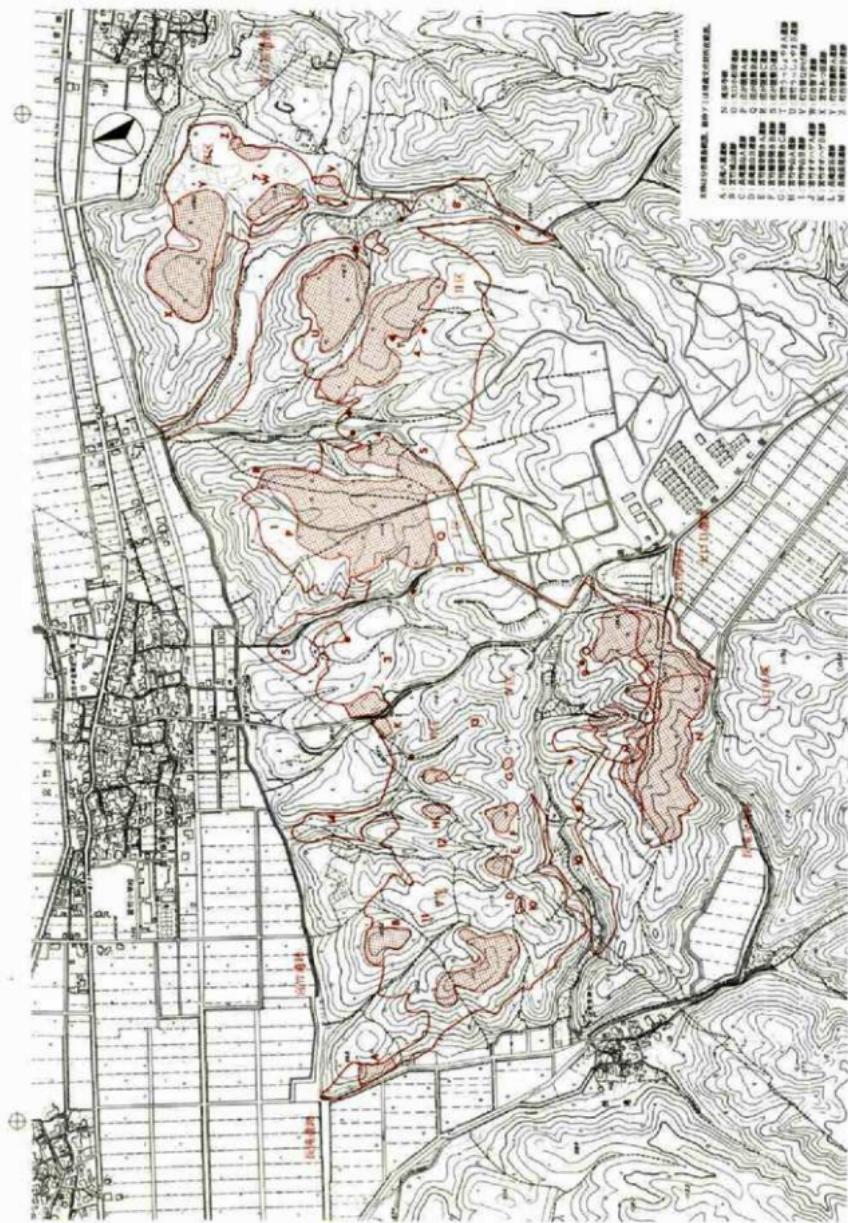
調査に着手して間もなく1区で大規模な埋蔵文化財が確認され、その後もほぼ全区域で埋蔵文化財が確認されていったことから、その取り扱いをめぐって企画開発部・土地開発公社と県教育委員会文化課・埋文センターとの間で5回の中間報告をはじめ他に多くの協議がおこなわれていった。その結果平成2年度の分布調査で確認された龍谷寺跡は別として、その他の事業箇所については細部の設計変更で影響を最小限に止めることは可能だが、事業計画を大幅に変更し現状保存を図ることは困難であるとされ、埋文センターが事前の発掘調査を実施していくこととなった。なお調査中「整備基本計画」最終案が示され若干の追加調査が必要となつたが、既に調査終了日前であったため初年度に発掘調査が予定される1区についてのみ追加分布調査を実施し、他の箇所については別途協議を継続していくこととした。

平成3年10月末段階での埋蔵文化財発掘調査必要面積は龍谷寺跡を除く25遺跡約170,000m<sup>2</sup>にのぼったが、企画開発部からは7年程度での現地調査終了を目標に体制確立の中し入れがあり、文化課・埋文センターでも膨大な調査量をこなしていくにはかなりの人員増と専従の体制が必要との認識から平成4年度へむけ準備をおこなつていった。土地開発公社でも事業工程の見直しに取り掛かり、切十・盛土が一区域で完結しないため発掘調査期間を取り込んだ工程見直しには困難な面も多々あったと聞くが、当初とはやや異なる1区→Ⅶ区→Ⅵ区→Ⅴ区→Ⅱ区→Ⅲ区という調査順位がようやく案成をみている。

この間企画開発部からは「いしかわサイエンスパーク」のシンボル道路県道埴田・宮竹・寺島線改良予定地に唯一かかった宮竹うしょやまA遺跡の一部(約1,500m<sup>2</sup>)の年度内発掘調査も要望された。同箇所は平成4年度に県小松事務所が工事を予定していたもので、遺跡本体(Ⅱ区)の調査は数年先となることから別途求められたものである。埋文センターでは対応できず協議の結果町教育委員会がおこなうことで合意にいたり、10月8日付け埋文収第206-1号にて県教育長から町教育長あて調査の依頼をおこない、平成3年11月22日から12月25日まで発掘調査が実施されている。

上記調整作業と並行して平成3年度下半期は辰口町・同教育委員会の協力を得て、次年度に予定される発掘調査(1区、宮竹オオハゲA遺跡及び庄が屋敷遺跡群南側)の事前準備として立木伐採、電気・水道設備設置(準備)、現地調査事務所敷地造成のほか調査補助員、発掘作業員の募集・確保等を進めていった。翌平成4年度、埋文センターに「いしかわサイエンスパーク整備事業に係る埋蔵文化財の発掘調査」を担当する調査第三課が置かれ、辰口町教育委員会から迎えた2名の職員(併任)を含む課長以下6名が配置され、発掘調査が開始されることとなつたのである。

以上平成2・3年度の二箇年にわたって実施した「いしかわサイエンスパーク」整備事業にかかる埋蔵文化財分布調査は、現地調査期間約六箇月、実働107日、延べ作業員2,350.5人を要する大規模なものであったが、新たに確認された埋蔵文化財は26遺跡を数えその目的とするところは概ね達成されたものと考えている。この成果は県企画開発部、土地開発公社、辰口町、同教育委員会他関係諸機関の埋蔵文化財保護にたいする理解と協力に負うところが大であり、あらためて感謝の意を表するとともにとりわけ伐採前の山林をともに行軍していただいた作業員の方々にたいして感謝の意を表するものである。



第4図 「しいかわサイエンスパーク」整備事業開拓地理学文化財分布調査位置図 ( $S = 1/10,000$ )



人力による試掘作業(平成3年度、I区No.4)



人力による試掘作業(平成3年度、VI区No.12)

## 第3章 宮竹オオハゲA遺跡

### 第1節 宮竹オオハゲA遺跡の位置

オオハゲA遺跡は、辰口町宮竹地内の丘陵にある。遺跡は標高90m前後の南北に延びる尾根筋の稜線上にあり、尾根筋を登って南にいくと庄が屋敷遺跡に行くことができる。遺跡からは、手取川や扇状地の向こうの日本海を遙かに望むことができる。遺跡のある尾根筋の東には谷を挟んでもう一本の尾根があり、そのうえには墓地があった。現在はサイエンスパーク造成のため、これらの墓地も移転されている。

調査区は南北に長い長方形で、中央部が東西に走る深い谷となる鞍状の地形となっている。調査した面積は約5,000m<sup>2</sup>である。

### 第2節 調査の経緯

調査は4月20日に開始した。枝木処理が完全には完了していない中で、杉葉や枝を燃やす煙の中で表土除去作業となった。エンボを4台使用した表土除去作業は大きな根の多さに悩まされながら一週間かかり、5月上旬にはようやく完了した。遺構の検出作業は、順調に進み、6月上旬にはほぼ全面の検出作業を終えることができた。その結果、遺構の密度がきわめて低く、わずかに焼土混じりの土坑9基・炭窯1基・溝状遺構2条を検出したにとどまった。引き続いて遺構の掘削作業を行い、写真測量を8月4日に行った。調査は8月上旬に完了した。その間に、周辺の炭焼窯を三基調査している。

### 第3節 遺構と遺物

#### 1 土坑（1～9号）（第6図～第9図）

9基の土坑を検出した。この内、側壁や底面に焼土が認められる土坑は6基確認されている。

1号土坑 東西100cm・南北90cm・深さ15cmの方形土坑。斜に浅く掘り込まれた土坑で、側壁が焼けているが底面には焼土面は認められなかった。覆土は底面上に炭粒を含む茶褐色土が5cmの厚さで堆積し、その上に炭粒と焼土粒を含む灰褐色土が厚さ7cmで堆積している。底面には、径約50cm・深さ4cmの略円形の穴があった。

2号土坑 東西130cm・南北162cm・深さ22cmの、略長方形の土坑。北に下る斜面にあるため、北側の側壁は流れで不明瞭になっている。南の側壁は22cmの高さで底面からまっすぐに立ち上がっている。側壁と底面の北半分が焼けている。土坑の南半分には炭粒を含んだ茶褐色系の土が10cmの厚さで堆積し、北半分には炭粒を若干含んだ茶褐色土が堆積している。土層観察では一度堆積した土坑覆土を、北半分で再び掘削して底面を焼き、茶灰色土が堆積したように見えるが、土坑の形状には一度埋った土坑を掘り返したことをうかがわせるような痕跡は認められない。

3号土坑 東西88cm・南北78cm・深さ32cmの方形土坑。真っ直ぐに掘り込まれた側壁の上半分が焼けている。土坑の下半には、炭粒を含んだ暗灰茶色土と灰黃褐色土が堆積し、上半部には灰茶色土が堆積している。側壁の焼け面は上層の灰茶色土の堆積しているレベルで検出している。

4号土坑 東西103cm・南北108cm・深さ20cmの方形土坑。下層に炭粒と焼土粒を若干含んだ茶灰色が約10cm堆積し、上層には炭粒を含んだ暗褐色が約8cmの厚さで堆積している。側壁・底面がともに焼けている。土坑覆土に、径40cm・深さ20cmの小穴が掘り込まれ、褐色系の土が堆積している。この土坑から摩滅した縄文土器片が一点出

土している。

5号土坑 東西70cm・南北80cm・深さ約20cmの略方形土坑。側壁が焼けている。底面附近には黄灰色粘土層が堆積し、その上に炭粒・焼土粒を含む黒灰褐色土・炭粒を多く含む黒色土が堆積している。

6号土坑 東西60cm・南北40cm・深さ6cmの浅い掘り鉢状の窪み。覆土は暗褐色土が堆積していた。遺構かどうか識別できず、半分だけ掘って掘削を中止した。

7号土坑 東西60cm・南北70cm・深さ14cmの土坑。覆土は、底面から黄褐色土・炭粒・焼土粒を含む黒灰色系粘質土・炭粒を少量含む褐色粘土層が堆積していた。

8号土坑 東西74cm・南北70cm・深さ18cmの長方形土坑。1号溝の北東の枝溝が、土坑を切込んでいる。底面の一部に焼上面が認められた。覆土は、底面に炭粒と焼土を含む黒灰色粘土層が約6cmの厚さで堆積し、その上に炭粒を少量含む黄灰色粘土層が約15cmの厚さで堆積している。

9号土坑 東西116cm・南北86cm・深さ20cmの、断面が掘り鉢状の方形土坑。覆土は、側壁には地山崩土と思われる黄褐色粘土層が5cm前後堆積し、底面や覆土には褐色系の土が堆積していた。

## 2 溝（1・2号）（第10図）

1号溝 調査区の北をL字形に区画する溝。上幅約40cm・深さ約50cm・下幅約20cmの断面方形での溝で、覆土は地山崩土の黄灰褐色土が25cm前後堆積した上を腐植土が10~20cmの厚さで堆積している。1号溝が南北方向にのびる部分に約5m東西にのびる枝溝がある。この溝は、先述のように8号土坑を切ってつくられている。また、1号溝の東部では、南北方向に約5mのびる枝溝を検出している。

8号土坑との切りあいからみると、1号溝は土坑群よりも後から掘り込まれた遺構の可能性が強い。

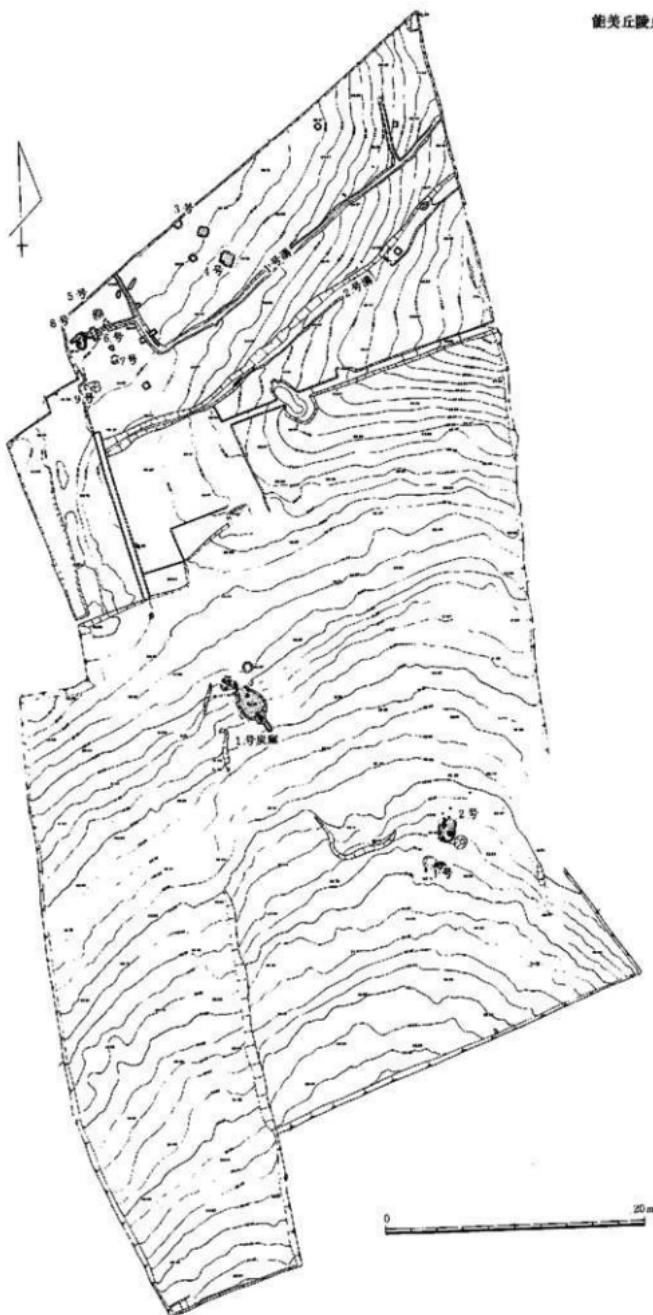
2号溝 1号溝の南、約4mはなれたところに東西方向に掘り込まれた溝。上幅90cm・深さ25cm・下幅20cmで、側壁の傾斜が緩い溝である。覆土は新しい感じの灰黄褐色土が堆積している。

## 3 宮竹オオハゲA 1号窯窯（第11・12図）

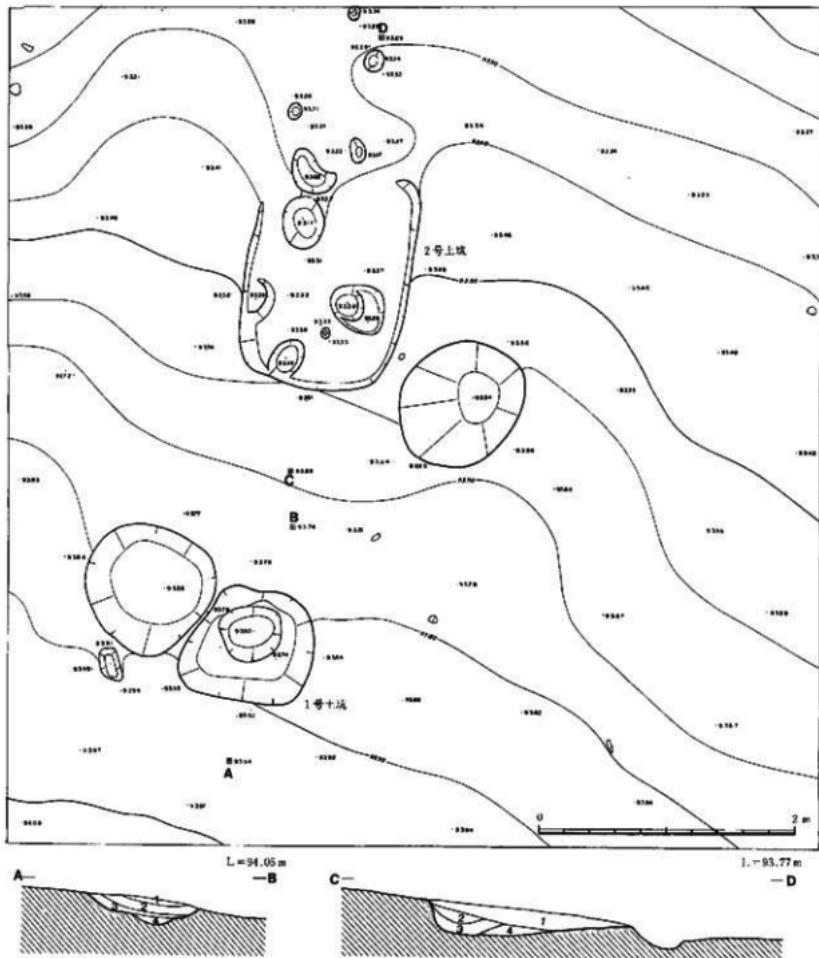
調査区の中央で東西にのびる鞍部を検出しているが、その北斜面で炭窯を検出している。検出時には、窯体内には覆土が完全に埋っており、地表には窯体の窪みなどはまったく見られなかった。窯体は、焚口を北に向けて南北方向に主軸を持っている。窯底のプランは奥壁が直線的にのびて、側壁が焚口ふきんすばまるキンチャク袋形を呈している。煙り出しは、奥壁中央に作られている。その構造は、U字形の溝を縦に掘り、窯体に面した側に河原石を積み上げて煙突を作っている。窯体から煙突への排煙口は、一側である。焚口から排煙口までの距離は約2.4m、奥壁の幅は1.7m、窯体中央の幅は約170cm、焚口の幅は60cmである。窯壁は、やや外反しながら真っ直ぐに立ち上がっている。地山表面からの窯体の深さは、奥壁が1m・窯体中央が80cm・焚口が約20cmで、窯体の底面は標高90.7前後ではほぼ水平となっている。

窯体内部の覆土は、底面から約30cmまでは還元されて黒色を呈する燒土塊を大量に含んだ茶灰褐色土が堆積し、この層の上部には河原石が十数個包含されていた。この層の上面の焚口付近で、黒色の棲瓦片を一点検出した。この層の上には厚さ約10cmの茶灰色土・20cmの厚さの暗褐色土・約15cmの厚さで黄褐色土が堆積している。燒土や河原石を大量に含んだ茶褐色系土が窯窓棄時に窯壁とともに堆積した覆土で、その上の黄褐色系土は窯体の窓地に上から流れ込んだ地山流土と考えられる。焚口附近には、大量に赤褐色の焼土が堆積して窯底を識別するのが困難であった。

焚口外部の北側に径80cm・深さ20cmの円形土坑があり、炭粒が大量に堆積していた。また、北西側には焼土塊が大量に堆積していた。この炭粒を覆土とする円形土坑を含んだ土坑は、他の炭窯の調査でも焚口の左右に検出しており、窯体構築時の約束ごとに入っていたものと思われる。



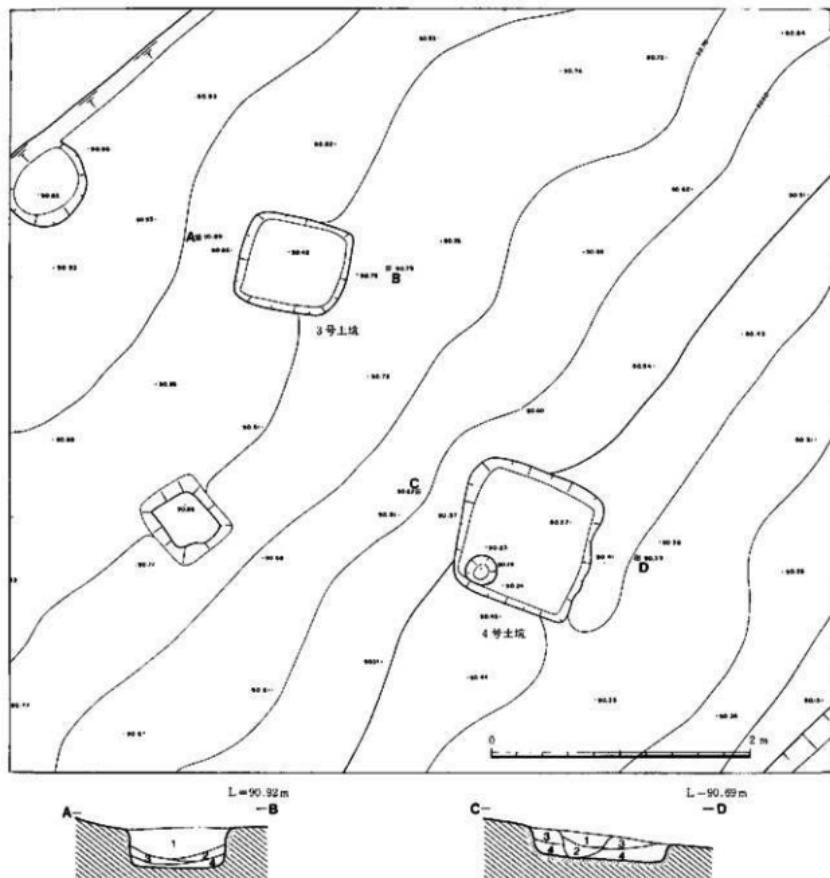
第5図 オオハゲA遺跡全体図（七坑は号数を表記）



- 1号土坑土層図  
 1: 基底色上層 (炭粒を含む)  
 2: 灰褐色土層 (灰・鐵土鉱を含む)  
 3: 基底褐色土層 (無鉄を含む)  
 4: 黃褐色色土層

- 2号土坑土層図  
 1: 基底色上層 (炭粒を少量含む)  
 2: 基底褐色土層 (炭粒を含む)  
 3: 灰褐色土層 (灰を含む)  
 4: 基底褐色土層 (炭粒を少量含む)

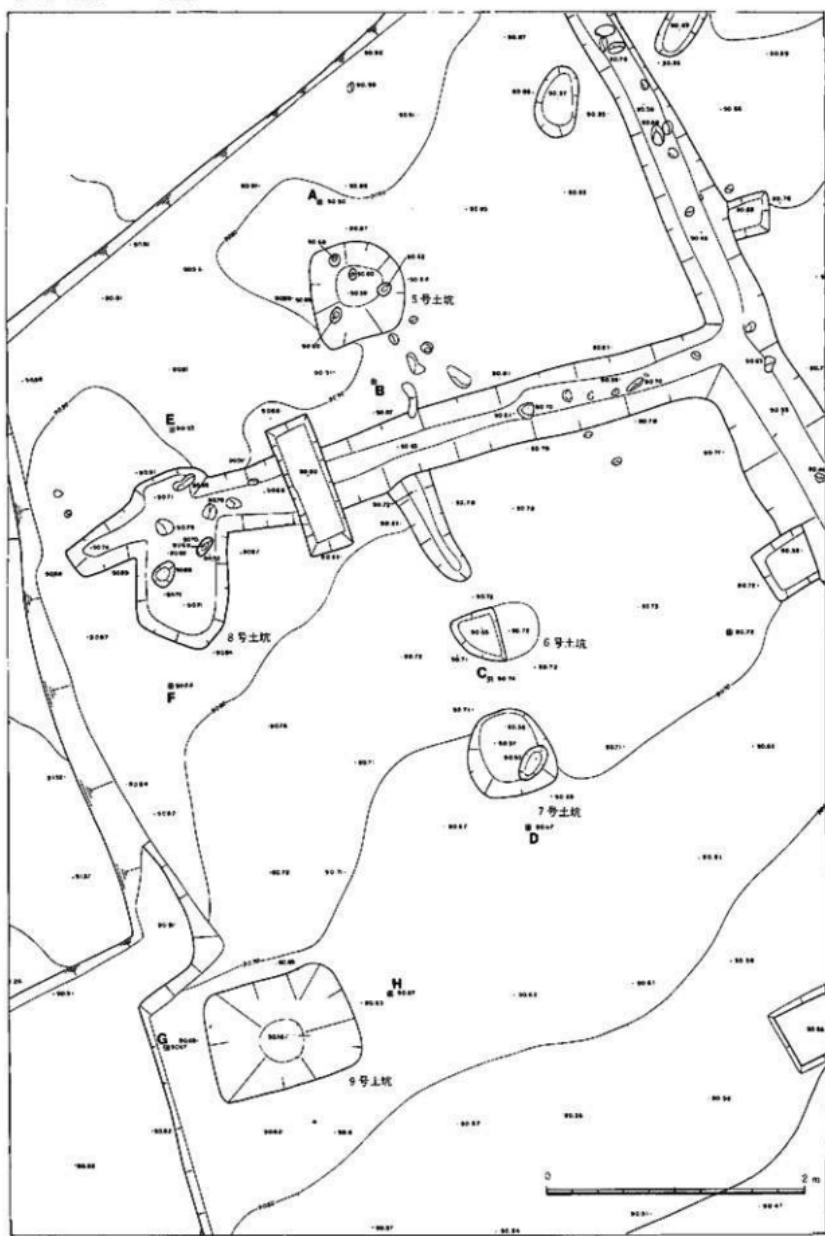
第6図 1・2号土坑の平面図と土層図



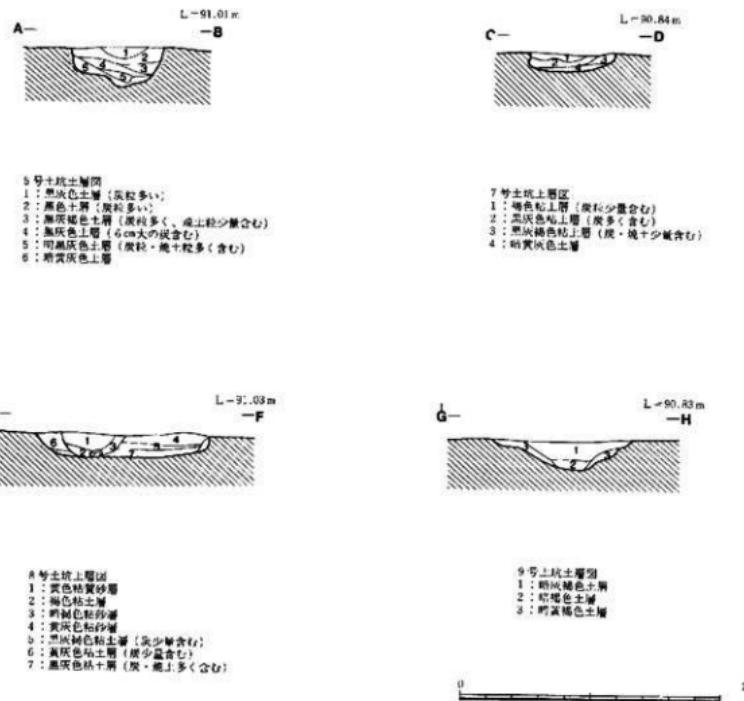
3号土坑土層図  
 1:灰茶色土層  
 2:褐色土層  
 3:褐色土層を含む灰茶色土層  
 4:灰茶色土層 (炭粒・泥土粒を少含む)

4号土坑土層図  
 1:灰茶褐色土層  
 2:本褐色土層  
 3:褐色土層 (炭を含む)  
 4:本灰色土層 (炭粒・泥土粒を少含む)

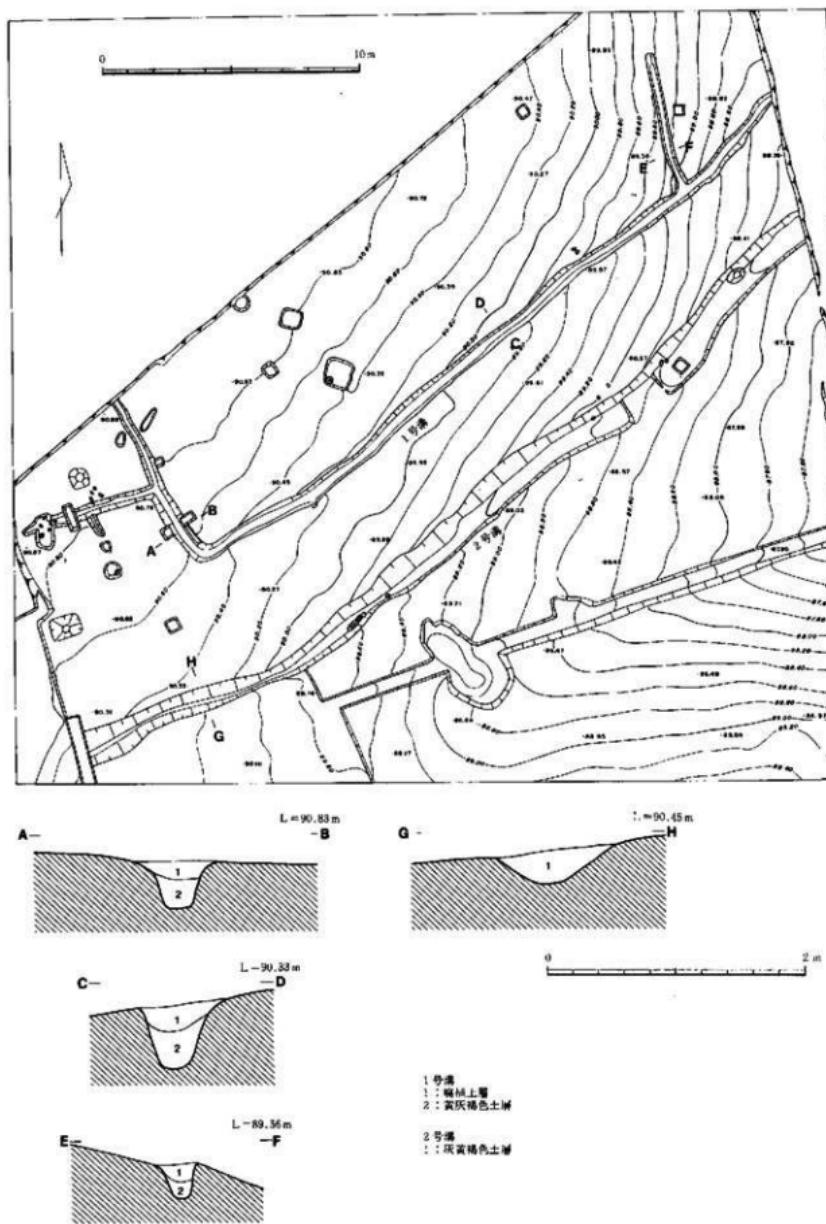
第7図 3・4号土坑の平面図と土層図



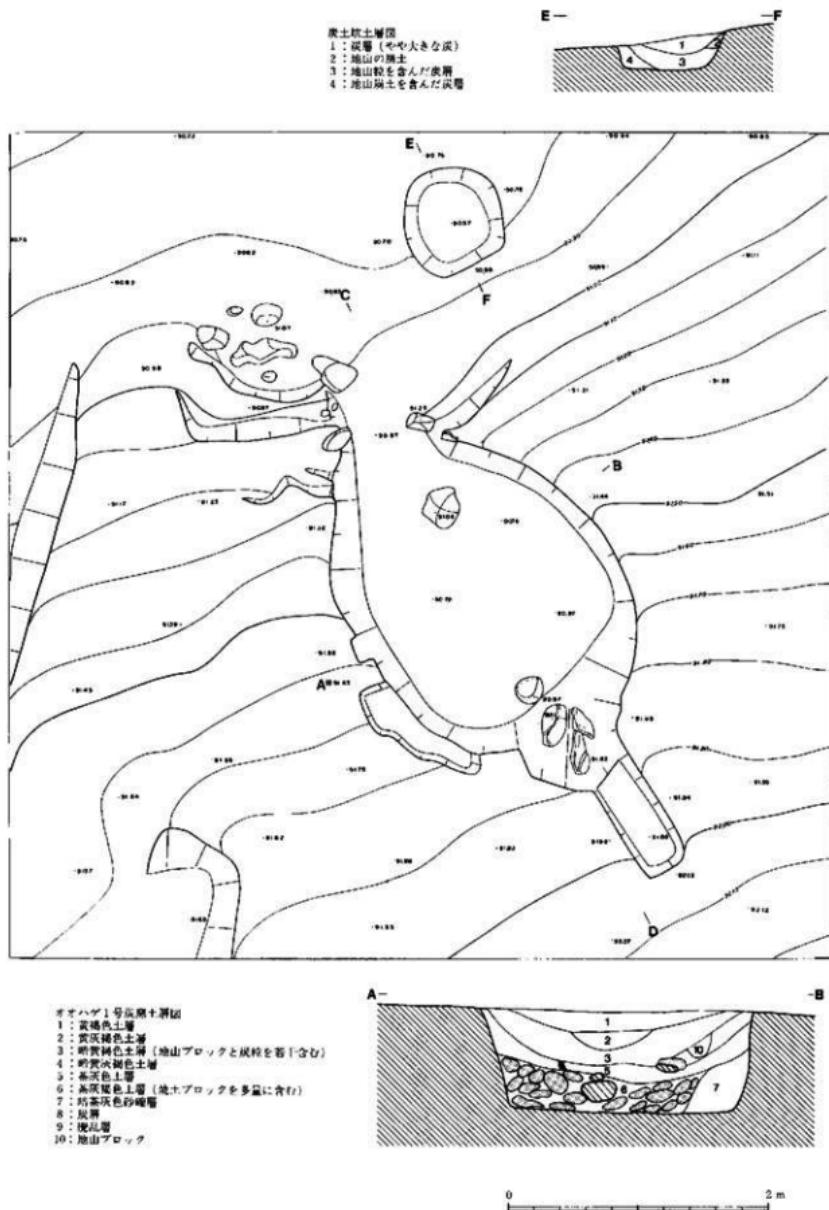
第8図 5～9号土坑の平面図



第9図 5～9号土坑上層の土層図

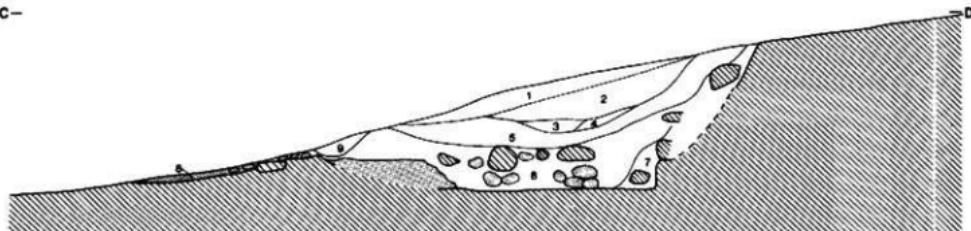


第10図 1・2号溝の平面図と上層図



第11図 宮竹オオハゲA 1号炭窯の平面図と東西十層図

C-



第12図 宮竹オオハゲ1号炭窯の南北土層図

0 1m

## 4 石組遺構（第13図）

オオハゲA遺跡の尾根筋を南に登り、稜線から東に派生する尾根を辿ると、標高108.8mのところで、墨二枚程度の範囲に角礫を敷いた遺構が分布調査で確認され、今回記録をとった。この石組遺構は尾根筋がやや下がったところに南北方向に長軸をもって作られている。石組は、380cm×160cmの範囲に作られており、石が腐植土層の上にのっていることから、比較的新しい時代に作られた構築物と思われる。炭の原料材を乾燥させるような、台の機能を持った施設の可能性が考えられる。

## 5 遺物（第14図、図版22）

発掘調査の結果、石器、陶器、磁器、瓦質土器が出土した。これらの遺物は表土直下の整地土や耕作土から出土しており、遺構に伴うものではなく散在も少ない。陶磁器類は製炭土坑が集中的に構築された北尾根上からやや東に場所を移した急峻な南斜面の下方から散発的に出土している。この南斜面は、当調査区を大きく南北に分断する鞍部へと続く。

## 石器

磨石類が2点出土している。1は完形で長さ7.3cm、幅6.2cm、厚さ4cm、重さ292gである。両面に磨痕がみられ、側面の一部に敲打痕が残っている。2は1/2が欠損しているが、両面に弱い磨痕と側面に敲打痕がめぐる。幅9.3cm、厚さ4cm、重さ294gである。いずれも花コウ岩質粗粒砂岩である。

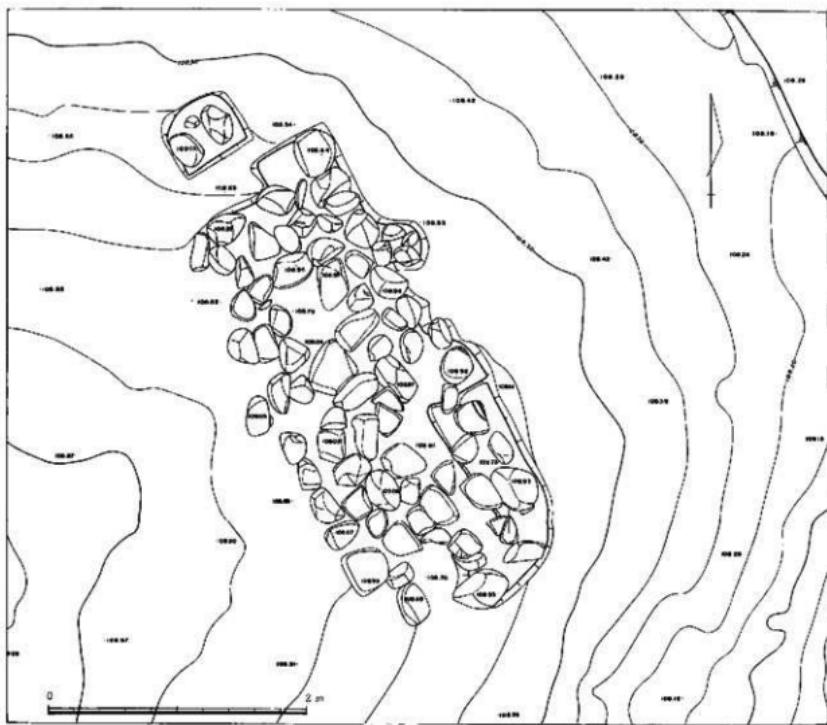
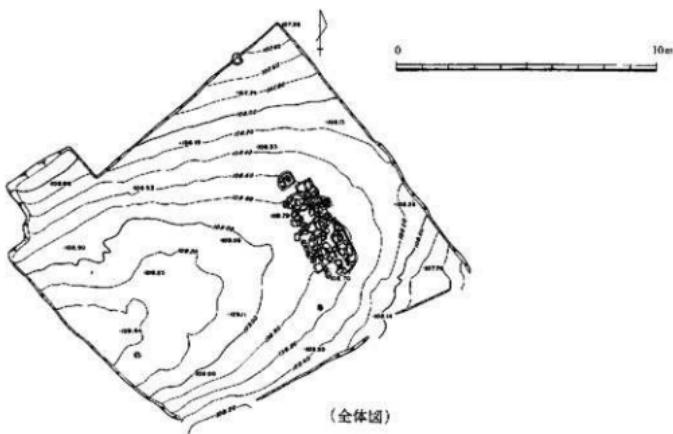
## 近世の陶磁器

（磁器） 磁付の碗と皿が出土している。

3は体部下方から底部にかけてかなり厚手に作られた肥前系の深身の碗である。残欠がわずかで全体の文様は定かでないが、体部外面にはコンニャク印判による松あるいは菊花紋が施されていたと思われる。釉は灰色がかっており、具須は青灰色を呈し淡い。素地には黒色微砂粒が混入し、部分的に灰色を呈する。18世紀前半に類似例が見られる。4は漬け、美濃系の碗で本来は高台が付くと思われる。器壁は薄く、口縁端部はやや外反するいわゆる端反りの形態を示す。具須は蓝色で文様には簡略化の傾向が見られる。5は肥前系の小碗で具須は蓝色で文様は直線と曲線を組み合わせた単純な模様である。外面には唐子が描かれている。口縁上端面には黄色の口紅が施されている。6は皿で底部が厚く器盤全体に灰釉がかかる。具須はオリーブがかった灰色で内面に唐草文様と二重の圓線が描かれている。素地には多量の褐色微砂粒が混入している。

（陶器） 皿が出土している。

7は内面に青銅線釉が施された皿である。この器種では通常外面に透明釉がかかるようだが、7の腰部分には漫縁釉の施された痕跡が認められ、体部外面を覆っていたと思われる。統いて、腰部から高台、外底部は露体



第13図 宮竹オオハゲA遺跡石組遺構平面図

となる。肥前磨野窯の製品に類似例が見られる。9は内外面鉄釉のかかる燒底部である。越前系もしくは肥前系と思われる。この他に用途不明の8がある。小型の軟質施釉陶器の一種で、厚手の丸みを帯びた底部からほぼ垂直に立ち上がる体部は内面全体と外面上半まで透明釉を施す。胎土は淡褐色で砂粒が少量混入している。

#### 近代以降の陶磁器

10は外面体部に「前赤壁壬戌之秋」をあしらった瓶器碗である。施文方法は型紙刷りと思われるが、藍色の具須が数箇所見られる。11は青磁で内外面ともに淡い緑釉がかかり外底部は透明釉に近い。内面見込には型紙刷りによる緑釉上絵付けの手法で、唐人風の芸人が太鼓を胸に抱えリズミカルに踊る姿が描かれている。竹垣と桃の木が背後に配される。12は口縁に雷文が施文される瓦質土器で、内外面に漆が塗布されていたと思われる暗橙色の被膜が全体に認められる。胎土はきめが細かいがやや柔らかく表面近くが灰色を呈する。底面には本米は高台が付いていた痕跡が残っている。

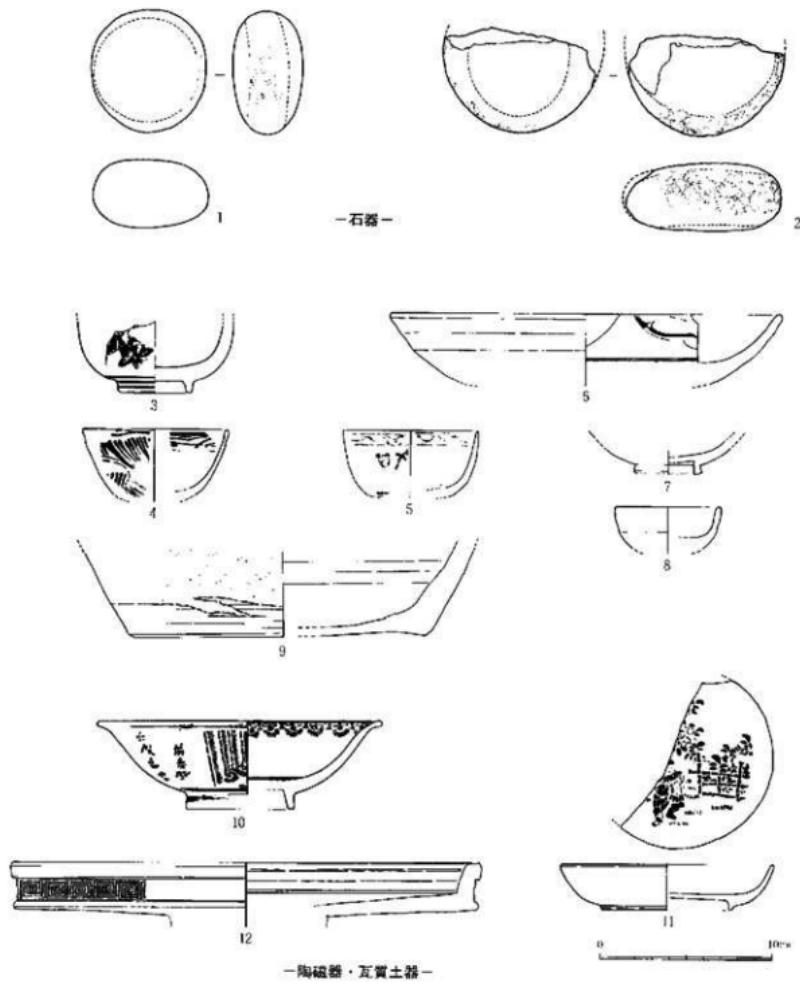
以上、わずかな遺物の中で実測可能なものについて述べたが、前述したように遺構に伴うものはない。繩文時代の遺物については当遺跡のすぐ西方にある宮竹オオハゲB遺跡との関連が考えられる。近世、近代の陶磁器については最も古相を示すのは7の青銅線釉陶器で、その作りから17世紀末から18世紀頃の年代が想定される。磁器には肥前系と美濃系が認められるが、3と6の染付の碗および皿は釉調が灰色がかり、18世紀前半に流行したコンニャク印判による文様で具須は弱い青灰色を呈する。近世末期以降と思われる4と5の碗では文様の簡略化が顕著である。用途不明の8は18世紀後半以降であろうか。近代以降の遺物には10・11がある。このように型紙刷り技法が頻繁に出現するようになると類似品が多く出現し、産地の特定は困難である。12は唯一屋敷谷2号炭窯内覆土から出土したものであるが、隣接する墓地跡から流れ込んだものか用途も含めて詳細は不明である。

なお、本稿の執筆にあたり藤田邦雄氏、滝川重徳氏より多大な御教示をいただいた。記して感謝の意を表したい。

#### 第4節まとめ

発掘調査から検出された遺構は、焼土混じりの土坑9基、炭窯1基、溝状遺構が2条と少なく供伴遺物も確認されなかつたために、今のところ各遺構の時期の特定はできない。1号炭窯は大口窯跡の発掘調査で検出された炭窯と共通し、緩い傾斜面上を主軸が等高線に直交するように構築されている。宮竹オオハゲA遺跡と並行して調査された屋敷谷1号炭窯、屋敷谷2号炭窯、大口コマツラ炭窯とは立地条件や形態を異にする。これが使用目的や時期差に起因するのか、また、焼土を伴う時期不詳の土坑が近接していることから、これらが共存関係にあるのかどうかの検討も今後の課題である。

1号炭窯の西5mでは蛇行しながら南北に延びる幅が約2mの砂利敷道路の跡が見つかった。これは旧宮竹大口線の生活道路跡で、沿線には植林された杉がうっそうと茂り、昼なお薄暗い山道を行き交う往時の姿がしのばれる。今では幅広い新設道路が丘陵内に次々と整備され、あたりは急速な変貌をとげようとしている。



第14図 宮竹オオハゲA遺跡出土遺物（1/3）



## 第4章 庄が屋敷B遺跡

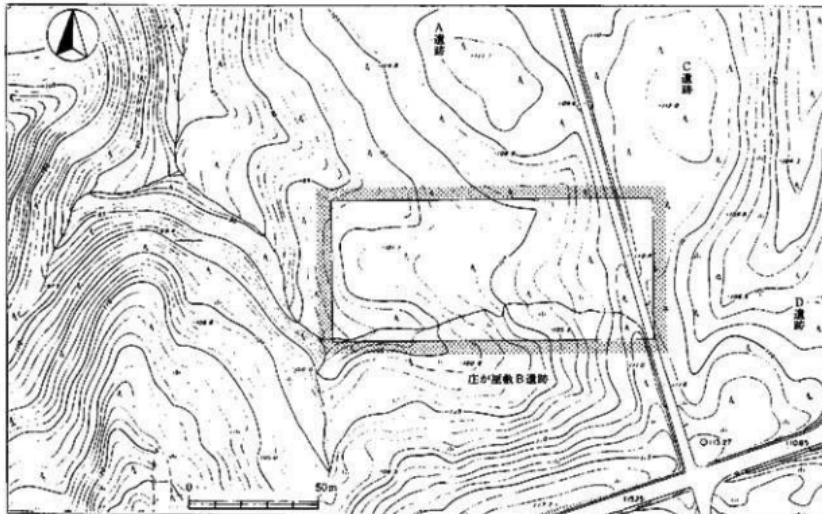
### 第1節 地形

白山山系から西方向に高度を下げてきた丘陵が、県下最大の河川である手取川が形成した扇状地の南辺を服るような形で伸びているのが能美丘陵で、南端は鍋谷川によって曲がっている。東西約10km、南北約4kmの範囲に標高約100~500mのなだらかな丘陵が重なるように連続し、西端部には独立丘陵を点在させている。

庄が屋敷遺跡群（A~D遺跡）は辰口町宮竹地内の能美丘陵内に位置し、平野部に最も近いA遺跡で、北方向、直線距離にして約200m、<sup>1</sup>比高差約40mである。遺跡群は北方向に高度を下げ伸びていて、東西方向に平行するなだらかな尾根上に立地している。それぞれの丘陵は標高約100~112mを測り、短く狭い鞍部でつながっていて、全体では南北方向約300m、東西方向約270mの範囲に遺跡が広がっている。

庄が屋敷B遺跡は群の中では最も南に位置する丘陵で、平野部からの直線距離は約370mである。おおむね南北方向の尾根筋を持つ遺跡群の中で、本遺跡は東西方向の尾根に立地していて、東から西に向かって標高約110~100mとゆるやかに高度を下げていき、南北方向に伸びる谷頭に落ち込む。東西に長い尾根は周辺からは最も低い位置に当たり、地形的には窪地状ないしは谷状地形の中にあるとも言える。平野部からは最も距離を置いているが、西端の谷筋を見るならば、平野部側が急斜面となっている他の遺跡群と比較して、容易に丘陵内へ入り込む位置に当たっていると言える。

従地形的にみると本遺跡は東地区と西地区に分けて考えられ、東地区は南北方向に伸びていく大きな尾根の西斜面に瘤状の平坦面が形成され、平安時代の掘立柱建物跡が遺存していた。西地区は舌状を呈し北西方向に伸びていて狭く短い尾根と見ることができ、尾根上には縄文時代の集石炉跡や落し穴跡が、その南斜面には奈良・平安時代の精錬工房と推定できる遺構が見られた。



第15図 庄が屋敷B遺跡地形図(1/2,000)

調査以前の状況で見ると、西地区の尾根上には雜木が繁茂し、南斜面には植林された杉の大木が林立していた。尾根筋の中央部分は比較的疎らに雜木が生え、谷斜面には杉が植わっていた。東地区的緩斜面には、植林された若い杉が密植に近い状態で生えていた。丘陵の北と南のそれぞれの谷部には、谷水を利用した狭小な水田が、近年まで営まれていたようで、畦畔の痕跡と水田特有の灰褐色粘質土が認められた。なお、湧水は多くはないが、真夏の渴水期においても南側の谷水は涸れることはなかった。縄文時代のみならず鉄の精錬を行っていた奈良・平安時代においても貴重な水源であったことは想像に難くない。

## 第2節 調査経過

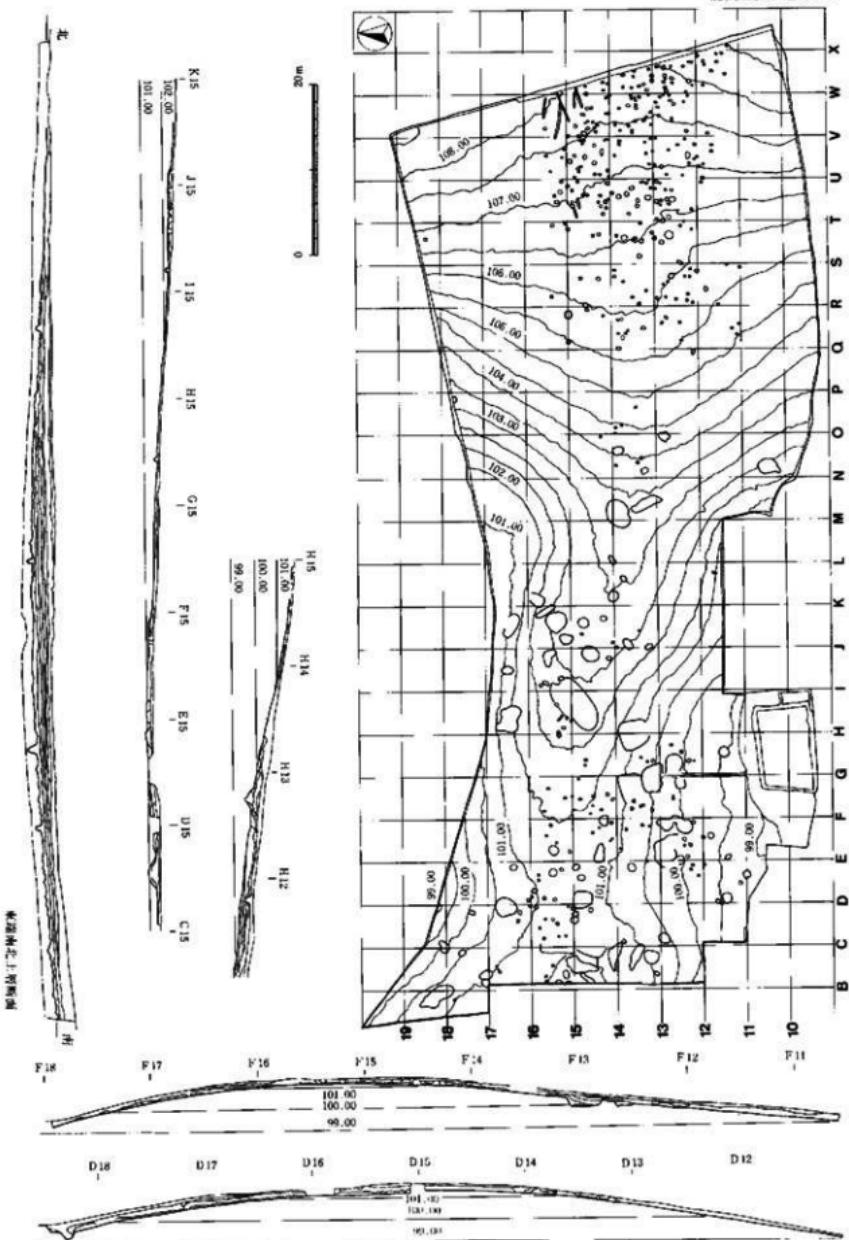
### 1 調査経過

丘陵や谷に繁茂していた雜木や植林された杉林の伐採は、平成4年の早春に行われていたが、葉の付いた枝や製材に適さない小径木が南北両斜面にうずたかく盛り上がり、また、搬出できなかつた長尺の木材が東端の林道脇に集められて置かれている状態で、西地区的尾根上だけが開いていたという状況であった。伐採は早春の足場の良くない時期であったことから、枝には表土がこびりつき、からみあううな状態となっており、火入れに際して多くの人手が必要と考えられた。

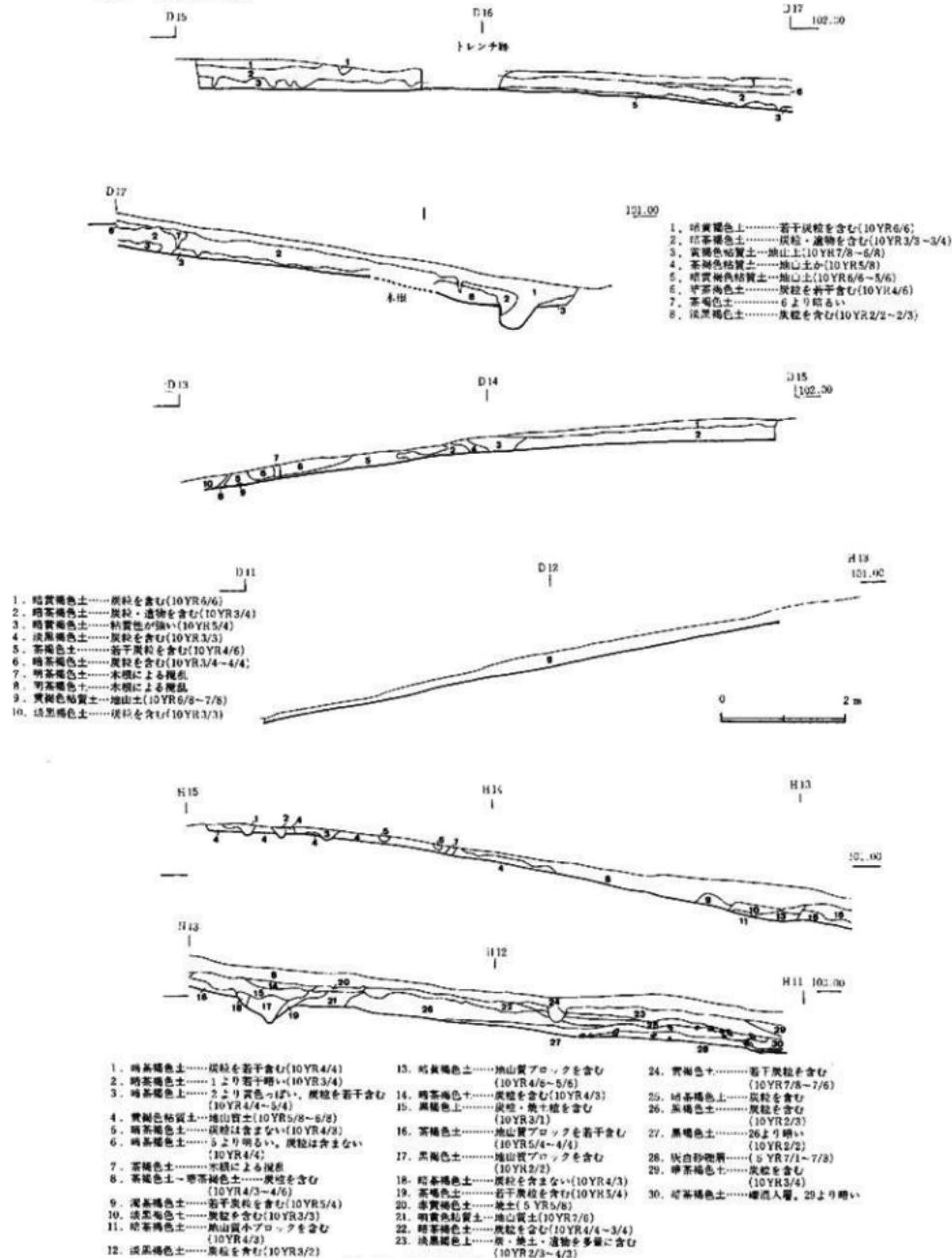
現地作業は調査員、補助員による西地区の火入れから開始し、既に空いている同地区的尾根筋に重機による表土層のすき取りを行い、残土は東地区に送る形をとった。表土層は比較的薄く、尾根上においては遺物を包含した渋茶褐色土が現れてきたり、火熱を受けて変色した礫が集積している遺構が現れたりしたが、切株は残ざるを得ず、その周辺では表土層が残る状態となつた。作業員が参加して火入れ作業は順調に進み、5月中旬には調査予定地区での処理が終了し、切株の排除にかかるようになった。切株の周辺に取り残した土を掘り下げる段階で、珪質頁岩質の削器や小片となった土師器などが出土している。火入れが終了したので表土を取り残した斜面上の表土除去を西地区から行い、東端の林道脇の木材の搬出を実施し、先に掘削していた残土を搬出した。北側斜面は崖地状の地形を呈している為に再堆土にあたって広げることはなかったが、南側斜面は緩斜面となつており土師器、須恵器の破片を含んだ土層が覆っていることから大幅に広げる形となつた。さらに南側の湧水が當時流れている谷では遺構は所在しないと判断して、発掘による残土を置く為に盛土、表土層の排除を実施した。谷の平坦面は約15m程度の幅をもつていて、灰褐色粘質土が面をもつて広がつていて、土器の小片がその中に混入しているのが確認され、調査区域を拡張しなければならない状況となつた。斜面で出土していた鉱滓の断片などから古代の製鉄跡が残されていると推定された。東地区での表土除去は杉の切株が密集していた緩傾斜面で、土師器の断片や焼土面が確認され、古代の遺構が配置されていると推定された。表土層は全て発掘区域から離れた地点に搬出した。

国土基本図に乗せた10m間隔の枕から5mグリッドを設定し、5月中旬頃から西地区的包含層の発掘を開始した。尾根上での包含層の層厚は最も深い位置で約15cm程度であったが、遺物の出土は稀薄で小片となっているものが多く、当初予想していた縄文時代草創期に属する土器は判然とはせず、前期の福浦上層式土器などが目に付いた。石器の剣片では旧石器時代の遺物は特定できず、縄文時代に属すると推定される輝石安山岩質の剣片の出土は西地区全域に渡って見られるという状況であった。その他の石器では、磨石類・打欠石錘や磨製石斧の出土がほぼ輝石安山岩質剣片の出土状況と重なるような形での出土が見られた。頭部に括れが入った磨製石斧は類例の乏しい資料であったが、他の石器と異なる出土状況は認められなかった。縄文時代の土器では、中期の新崎式、古府式、後期の気屋式などが、尾根が狹くなる東地区までの間に散発的に見られるだけで、多量の石器とは量において落差が大きく、本遺跡が定住的な集落ではないことを示しているものと推定された。縄文時代の遺構としては集石炉跡2基、配石遺構3基、落し穴1基、土坑2基が確定な遺構で、尾根筋に見られた長椭円形の落ち込みは住居址とは確定できなかった。なお、風倒木痕と推定される不整円形の落ち込みは、発掘区の各地点で見られ、遺物を包含しているものだけを掘り下げたが、包含が明確ではないものについては掘り下げなかった。

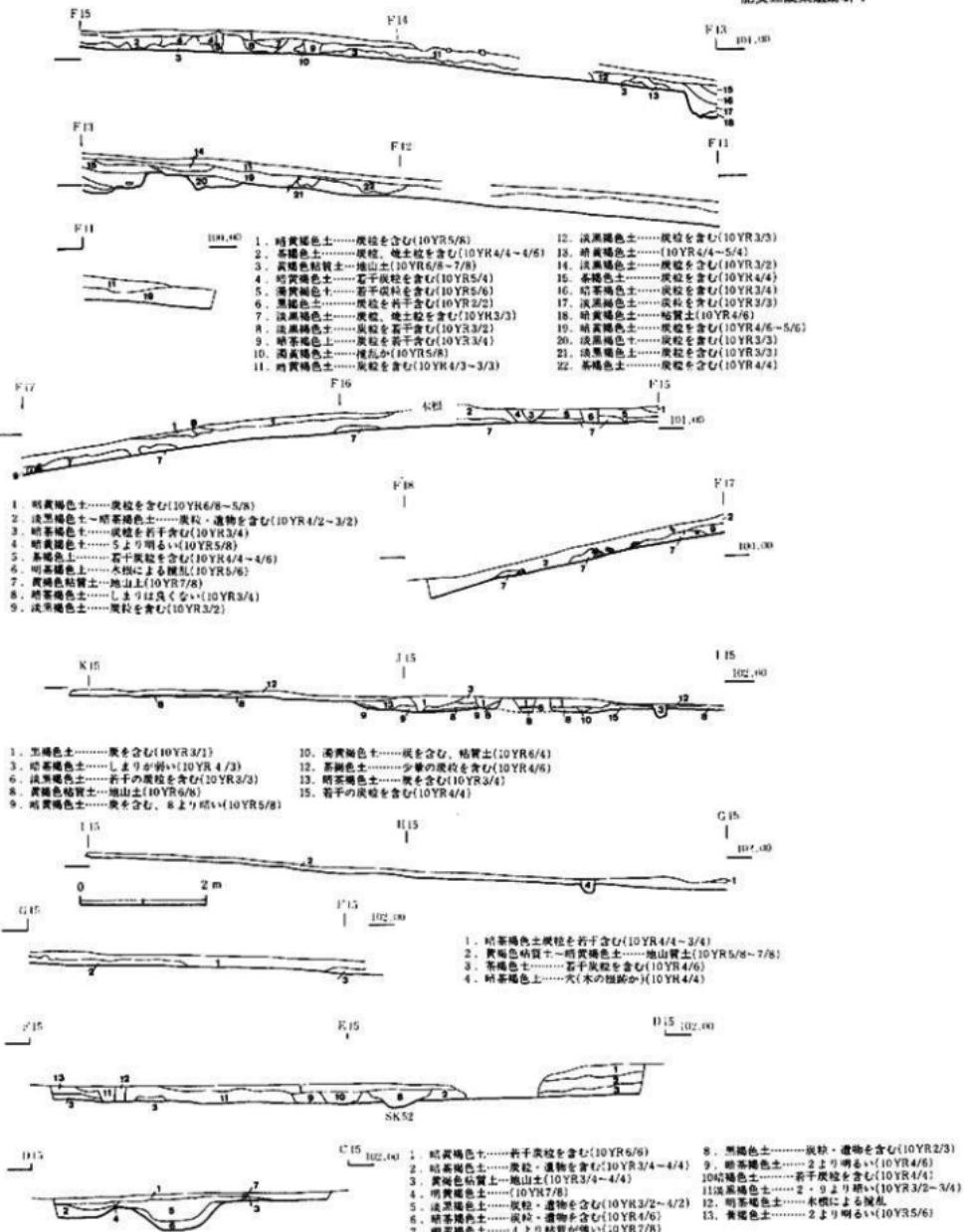
能美丘陵東遺跡群！



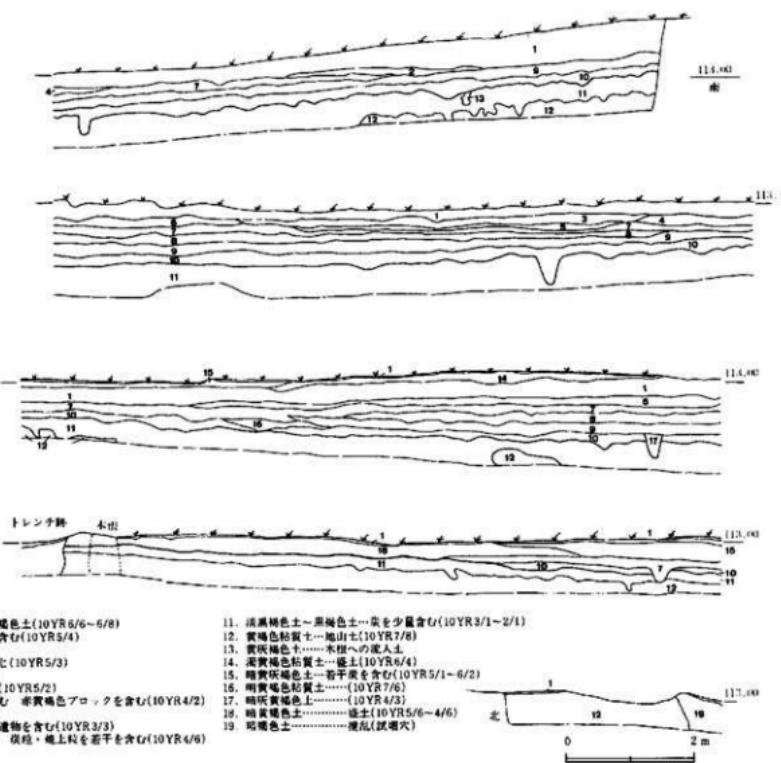
第16図 区画配置図と土層断面図(1/600)(1/200)



第17図 西地区南北土層断面図 (1/80)



第18図 西地区東西方向土層断面図 (1/80)



第19図 東端南北方向土層断面図 (1/80)

南斜面では土師器、須恵器の出土が増加し、縄文土器はほとんど含まれないという状況となり、河原石が火熱を受けて細かく破碎し角礫となつたものが、一定の範囲で堆積しているのが見られ、一部の礫は南の谷にまで入り込んでいるのが見られた。南斜面の裾部には縄文時代以前に堆積した黒色土が見られ、古代の遺構の検出を困難なものにしていった。斜面の上位置では方形プランの住居址状の落ち込み2カ所が見られたが、住居址とは確定できなかった。火熱を受けた礫の周辺では、焼土面や不整形な土坑が多数検出できたが、性格を確定するには至らなかった。

南の谷部で拡張した地区では、河原石が全面に敷かれたような状態で検出され、古代の遺物が斜面裾部周辺に集中するように出土した。河原石の中には、縄文時代の石皿や磨石が少數ながら出土している。河原石は面を持つてはいるが敷き詰めたものではなく、発掘区の中央部に鞋状の石列が見られることなどから、谷水田耕作に際して整地ないしは沈み込んだものと推定された。河原石を取り除いたところ空隙には須恵・土師器の断片が見られ、ベースは青灰色砂礫層で硬くしまった状態で不透水の無遺物層であった。

西地区の尾根・斜面上には5基の方形ないしは梢円形を呈した土坑が確認され、落ち込みの壁上部が火熱を受けて変色しており、覆土には炭化物を多く含んだ黒褐色土が覆土であった。古代の遺物が伴うものは1基だけでは無遺物であるが、1基についても、その出土状況から伴うとは判断できず、時代を比定することは困難である。

東地区では掘立柱建物跡が検出された。表土層を取り除く段階で焼土面が現われていた周辺では、切株の処理によって土師器の断片が多数出土する状態であった。焼土面が古代の生活面と推定でき、掘立柱建物跡周辺は殆ど包含層がないような層序であったと考えられた。柱穴を確認できたのは焼土面から約10~15cm下の地山面で、掘立柱建物を立てるに際して整地などは顯著ではないことをうかがわせる。掘立柱建物跡は重なる状態で柱穴が見られることから少なくとも複数の建替えが行われている。柱穴には例外なく遺物が含まれていた。林道側の東端部では小ピットが多数検出され、掘立柱建物の柱穴を想定したものもあったが、覆土に遺物を含まず径が小さいことなどから木の根の攪乱と推定した。

調査は春先から初秋という長い期間を要したが、調査中に降雨が少なく現場維持においては困難なものがあり、遺構の検出に当たっては木の根の処理と共におきな障害であった。本遺跡終了段階と一部重なるのであるが、引き続いて庄が丘敷A遺跡の発掘調査にとりかかった。

遺物の洗浄は発掘作業ができない雨天の日に、調査補助員によって実施した。

平成4年12月に現地作業が終了したので、遺物整理作業はセンターで行った。遺物の記名・検査・実測・トレス、遺構図の整理などを含めて、調査員、調査補助員が手分けして実施し、平成5年3月30日までにはほぼ終了したが、補足作業を継続した。

本遺跡出土石器の石質鑑定は小島和夫氏にお願いした。

## 2 調査日誌（抄）

- 4月16日 曇時々小雨 重機3台を使用し調査予定地の西端部から表土除去を開始する。輝石安山岩の剥片、縄文時代前期の土器などが出土する。
- 4月17日 晴 重機4台を投入して、表土除去を継続する。
- 4月20日 晴 重機1台で表土除去を行う。丘陵斜面には伐採木の残りが厚く尾根状に連なって置かれているため、表示除去が出来る範囲が限定されている。縄文土器、内黒土器、上師器の破片が散発的に出土している。
- 4月21日 晴 現場仮設事務所の建設。
- 4月22日 雨 現場仮設事務所の建設。
- 4月23日 晴 現場用の電気工事が始まる。現場仮設事務所の建設。
- 4月24日 曇 現場仮設事務所の建設。
- 4月27日 晴 現場仮設事務所の建設。調査員、補助員で伐採木の火入れ作業を開始する。
- 4月28日 晴 現場仮設事務所の建設。電気の屋内配線工事が始まる。火入れ。
- 4月30日 雨 火入れ。電話、電気配線、水道工事を行う。
- 5月1日 曇後晴 表土除去による耕土の搬出。火入れ。発掘器材の搬入。電気配線工事、水道工事。
- 5月2日 曙後晴 火入れ。水道工事。
- 5月6日 晴 今日から作業員が加わる。火入れ作業がはかかる。
- 5月7日 雲 火入れ。
- 5月8日 曙後雨 伐採木の切株周辺の排上作業。ベルトコンベアなどの発掘用機械の搬入。
- 5月11日 晴 調査区西端部での表土直下の発掘作業。
- 5月12日 晴 調査区西端部での表土直下の発掘作業。
- 5月13日 曙後小雨 重機による調査区の南斜面での表土除去。西端部での表土直下の発掘作業。

- 5月15日 曇後小雨 切株周辺の排土作業。重機による調査区の南斜面での表土除去。
- 5月18日 小雨 切株周辺の排土作業。重機による調査区の南斜面での表土除去。
- 5月19日 晴 切株周辺の排土作業。重機による調査区の南斜面での表土除去。
- 5月20日 晴 切株の除去作業。重機による南東斜面での表土除去。
- 5月21日 晴 切株の除去作業。重機による南東斜面での表土除去。
- 5月22日 晴 切株の除去作業。重機による東端部での表土除去。国家座標に乗せた区画杭の設置。
- 5月25日 曇後晴 切株の除去作業。重機による東端部での表土除去。
- 5月26日 曇後晴 5mグリッドを設定して、西端部から包含層の発掘にかかる。重機による北側斜面での表土除去。
- 5月27日 曇 西端部での包含層の掘り下げ。
- 5月28日 曇時々晴 西端部での包含層の掘り下げ。平板測量による遺物の取り上げ。
- 5月29日 晴後曇 西端部での包含層の掘り下げ。遺物の取り上げ。
- 6月1日 晴時々曇 西端部での包含層の掘り下げ。遺物の取り上げ。
- 6月2日 晴 西端部での包含層の掘り下げ。遺物の取り上げ。
- 6月3日 晴 西北斜面包含層の発掘。須恵器、土師器が出土し、少量ではあるが鉛錠が見られる。施けて細かく割れた砾があるまとまりをもって現れる。遺物の取り上げ。
- 6月4日 曙時々晴 西北斜面包含層の発掘。遺物の取り上げ。
- 6月5日 曙 西南斜面での包含層の発掘。遺物の取り上げ。
- 6月8日 曙 尾根筋中央部分での発掘。遺物の取り上げ。
- 6月9日 曙 中央区での発掘。遺物の取り上げ。
- 6月10日 晴 西南斜面、中央部での掘り下げ。遺物の取り上げ。
- 6月11日 曙 西南斜面、中央部での掘り下げ。遺物の取り上げ。根株の処理。
- 6月12日 曙 西南斜面、中央部での掘り下げ。遺物の取り上げ。
- 6月15日 曙後晴 西南部での掘り下げ。遺物の取り上げ。
- 6月16日 晴 西南部斜面、南部谷部の掘り下げ。遺物の取り上げ。
- 6月17日 晴後曇 南部谷部の掘り下げ。古代の遺物を多量に包含しているが、湧水が激しく遺構の状況がつかみがたい。河原石の中には縄文時代の石皿などが混じっている。
- 6月18日 曙 西南部斜面、南部谷部の掘り下げ。
- 6月19日 晴後曇 西南部斜面の遺構検出。南部谷部の清掃と写真撮影。
- 6月22日 曙 西地区全体の遺構検出。
- 6月23日 曙後雨 西地区全体の遺構検出。集石遺構の清掃。木根処理。
- 6月25日 晴時々曇 西地区全体の遺構検出。集石遺構の清掃。
- 6月26日 晴 東地区での包含層掘り下げと遺構検出。
- 6月29日 晴後曇 東地区での包含層の掘り下げと遺構検出。
- 6月30日 曙時々雨 東地区での包含層の掘り下げと遺構検出。
- 7月1日 晴時々曇 東地区での包含層の掘り下げと遺構検出。西地区での集石遺構の実測。
- 7月2日 晴時々曇 東地区での包含層の掘り下げと遺構検出。西地区での集石遺構の実測。
- 7月3日 曙時々晴 東地区的遺構検出。西地区での集石遺構の実測。
- 7月6日 曙時々晴 東地区的壁面の清掃とトレンチを設定した掘り下げをする。木根の処理。西地区での集石遺構の実測。
- 7月7日 曙 東地区的壁面の清掃。北側地区的拡張。斜面に沿う形で縄文時代中期の土器片が出土していた為に周辺部分の確認を行う。集石遺構の断面図作成。

- 7月8日 晴時々曇 東地区の壁面の清掃および土層断面図の作図。北側地区的拡張。
- 7月9日 曙後晴 北側地区的壁面の清掃と拡張。谷部に自然堆積した黒色土が見られるだけで、遺構などは検出されなかった。中央部分での遺構検出。削器が出土した地点であるために注意深く掘り下げていったが、木の根や風倒木痕、地山に含まれている礫の為に明瞭には遺構はとらえがたい。東地区的壁面の土層断面図の作図。
- 7月10日 晴後曇 西端地区での遺構検出。中央地区の竪穴式住居址状プランの掘り下げ。尾根上の梢円形プランのものは縄文時代と推定されたが明確に住居址とすることは出来なかった。斜面上の方形プランのものについても住居址との確認は得られなかった。平板測量による遺物の取り上げ。
- 7月13日 曙一時雨 西端地区での遺構検出。住居址状プランの掘り下げと土層断面図の作図。遺物の取り上げ。
- 7月14日 雨後曇 遺物の取り上げ。
- 7月15日 曙 西端地区での遺構検出と掘り下げ。遺物の取り上げ。
- 7月16日 曙時々晴 西端地区での遺構検出と掘り下げ。土層観察用畦畔の取り外し。遺物の取り上げ。庄が屋敷A遺跡で重機を入れて表土除去を開始する。
- 7月17日 曙後雨 西端地区での遺構検出と掘り下げ。住居址状プランの清掃。
- 7月20日 晴 西地区、中央地区までの遺構検出と遺構の掘り下げ。
- 7月21日 晴時々曇 西地区、中央地区までの遺構検出と遺構の掘り下げ。
- 7月22日 曙後晴 西地区、中央地区までの遺構検出と遺構の掘り下げ。土層断面図の作成。
- 7月23日 曙 西地区、中央地区までの遺構検出と遺構の掘り下げ。土層断面図の作成。土層観察用畦畔の取り外し。
- 7月24日 曙後晴 西、中央地区の遺構検出と遺構の掘り下げ。畦畔の取り外し。土坑、配石遺構の実測。
- 7月27日 晴時々曇 西、中央地区の遺構検出と遺構の掘り下げ。畦畔の取り外し。土坑、配石遺構の実測。
- 7月28日 曙時々晴 中央地区での遺構検出と遺構の掘り下げ。畦畔の取り外し。土坑、配石遺構の実測。遺物の取り上げ。
- 7月29日 曙後晴 中央地区での遺構検出と遺構の掘り下げ。畦畔の取り外し。土坑、配石遺構の実測。
- 7月30日 晴 中央地区の遺構の掘り下げ。土坑、配石遺構の実測。
- 7月31日 曙後曇 東地区的遺構検出。中央地区での遺構の発掘、土坑の実測。
- 8月3日 曙 東地区的遺構検出。中央地区での土坑の実測。
- 8月4日 晴時々曇 東地区での遺構検出。西地区の大型土坑の発掘、上坑の実測。
- 8月5日 晴 東地区での遺構検出。
- 8月6日 晴 東地区での遺構検出。
- 8月7日 曙 東地区での遺構検出。西地区的土坑の実測。
- 8月10日 晴時々曇 東地区での遺構検出。西地区での土坑の実測。
- 8月11日 曙 東地区での遺構の掘り下げ。
- 8月12日 曙 東地区での遺構の掘り下げ。
- 8月18日 曙時々晴後雨 東地区での遺構の掘り下げ。掘立柱建物跡が明確となってきた。
- 8月19日 曙時々雨 東南地区での遺構検出。西地区的集石遺構、配石遺構の掘り下げ。
- 8月20日 曙一時雨 東南地区での遺構検出。西地区的集石遺構、配石遺構の掘り下げ。掘立柱建物跡に伴う焼土面の掘り下げと除去。
- 8月21日 曙 掘立柱建物跡群から西地区での遺構検出。尾根幅も狭くなっている為か遺構は確認できない。
- 8月24日 曙後雨 西地区での遺構の掘り下げ。
- 8月25日 曙後曇 西地区的落し穴の掘り下げ。
- 8月27日 晴 西地区的南谷部の発掘。河原石を取り除いて地山面まで掘り下げる。

- 8月28日 晴 西地区の南谷部の発掘。発掘作業員の主力は庄が屋敷A遺跡へと移る。
- 9月8日 晴時々曇 埋立柱建物跡の断面図作成。
- 9月9日 曙 埋立柱建物跡の断面図作成。
- 9月17日 晴 航空測量の準備として全域の清掃。写真撮影。
- 9月18日 曙時々晴 全域の清掃。写真撮影。航空測量。
- 9月28日 晴時々曇 取り残した土坑の補足調査。
- 9月29日 曙後雨 土坑の補足調査。
- 9月30日 曙後晴 上坑の補足調査。

## 調査参加者名簿（順不同）

調査員 西野秀和、滝上秀明

調査補助員 小村佑子、戌亥久美子、林 茂久

## 作業員

山本登喜大、住田 繁、大石由夫、谷口とし子、宮下勇猛、北 秀雄、北 渉子、南 政枝、中 俊満、中朝江、北 弘幸、北 古治、南 敏夫、南 弘朗、新田 章、新田初枝、折坂笑夫、源 叶子、任田利子、本村 千恵子、任田久代、谷口恵美子、西川和恵、長谷川律子、辻本展子、近江みゆき、新本恵子、酒井由美子、島 千恵子、越村富士子、飯田金作、藤田康子、金光永敬、宮形幸子、南 裕美、麦田 拓、中川吉三、吉田 久、平松一男、才村賢一、松井正利、西尾 稔、木下 光、林 伊津子、桥野敏子、関 富士子、西川千明、塩尻千恵子、中川美幸、嶋山喜代子、中田ツヤ子、伴場一治、山田雅之、新保徹夫、山本順治郎、山下 博、石川春男、筒木不二人、寺田富子、南 次子、本田きく、山下秀子、寺田英子、裏野朝子、村田二三代、清水夏代子、川口 節子、長太弘美、木村典子、島 佐知子、張本祐子、深元久雄、佐々木 勇、菅野恵理、田崎昭子、網川美智代、中山純正、平崎幸子（辰口町、川北町、寺井町、金沢市、小松市）

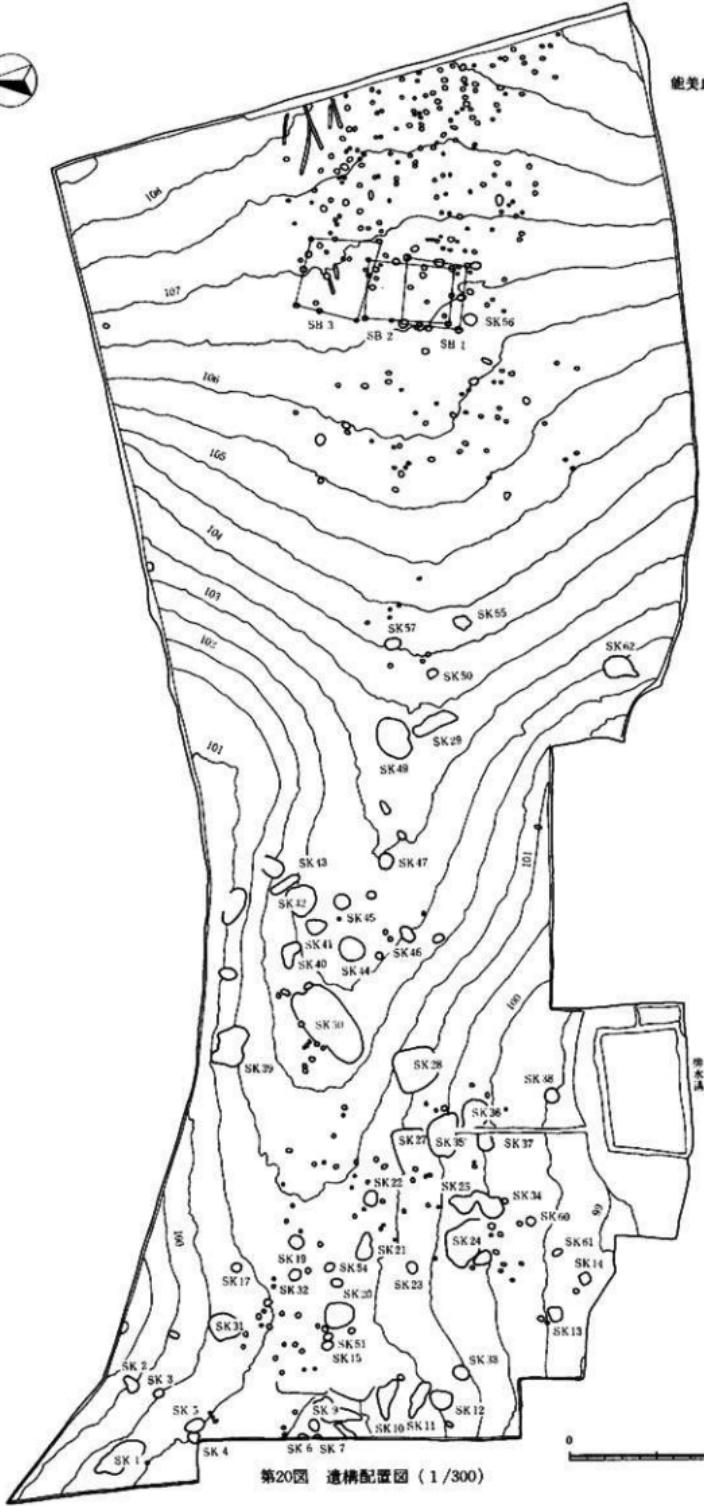
## 第3節 層序と遺構の配置

## 1 層序と遺物の出土状況

本遺跡は北方向に伸びていく尾根の西側斜面と、それから派生して西方向に張り出す舌状丘陵のふたつに分けられ、それぞれの微地形によって層序に違いが認められる。舌状丘陵端部は北西方向に屈曲して伸びているが、表土に腐蝕土層を形成せず、安山岩、凝灰岩などの円礫が表土直下に見られた。洪積続の基底礫岩が露呈している状況で、遺物・包含層とも検出できなかったことから調査範囲からは除外した。西地区的尾根上は馬の背状を呈し、稜線が北側に寄って走っているところから北斜面では包含層の形成は比較的薄く、南斜面では傾斜が緩くなり、尚かつ古代の精錬跡とも複合していることもあって包含層は厚く形成されていた。包含層は暗褐色系を呈していて、縄文時代と古代との層による違いを判別することはできなかった。これは、縄文時代の本遺跡での性格による面がおおいに関係しているものと考えられる。

グリッドは5m間隔とし、磁北に乗せた南北方向にはアラビア数字、東西方向はアルファベットを西端から付け、グリッド表示は、北方向に向き、北西隅の坑を当て南側区画の表記とした。北側の谷を挟んだ庄が屋敷A遺跡についても、同様の区画を延長して呼称している。

試掘調査で矢柄研磨器が出土した尾根上での層序は（D16周辺）、暗黄褐色を呈し、若干の炭化物を含む表土層が約10cmで、その下に遺物・炭化物を含む暗茶褐色土が約15cm程度堆積している。北側斜面では遺物・炭化物の包含は目に見えて減少するが、暗茶褐色土の層厚は20~30cmと増していく。地山は黄褐色粘質土であるが、包含層と明確に分離するのではなく微妙に凹凸があり込む状況となっていて、木の根の擾乱や風倒木による擾乱が随所に入っていたものと推定され、遺構検出において戸惑う面があった。包含層は東に移るに従い層厚が減少



し、発掘区の中央部分（L15周辺）では表土層のみが地山を覆っている状態であった。

南斜面の尾根に近い位置では、包含層が斑状に点在するという状態で、傾斜にかかるところから暗茶褐色土層が表層の下に約10cmの厚さを持って始まり（H15）、土坑群にかかる位置では約30~40cmと層厚が著しく厚くなる（H14）。さらに南へ移ると約15~20cm程度と薄くなっていく。この包含層の下には縄文時代の遺物を含めて古代の土器は包含せず、谷地に堆積した黒褐色土、黒色土が礫を多量に含んで約10cm程度の厚さで堆積している（H12周辺）。南斜面でも東に移動した地点では包含層の形成は薄く、また、遺物量も格段に減少していく（J1周辺）。

南側の谷地を拡張して発掘したF10~12・G10~12・H10~12・I10~12グリッドは、残土を取り除いた段階で青灰色粘質土が面をもって広がるという状態で、所々に円錐形顔を覗かせるものの平野部の水田に類似した在り方が認められた。グリッド軸線のGラインに沿って大きな円錐形顔が列状に置かれているのも確認され、畦畔の一部かと推定した。青灰色粘質土は表土を取り除いた状態から約5~10cm程度の薄層で、その中から拳大から人頭大の多量の礫が検出された。礫の出土は谷の上流側では少なく、下流側では全面に顔を出すという状態で、地山の状況を反映した在り方を示しているといえる。礫と礫の間に含まれている古代の須恵器・土師器の断面を見ると、摩耗しているものは少なく、比較的良好な保存状態を保っていると判断された。遺物では縄文時代の磨石なども見られるが、多少ながら中世に下るものもあるところから、中世から近代にかけての谷水田跡と推定した。

西尾根のつけ根に当たる地区（N14）では、表土層は極めて薄く、南北の谷斜面に暗茶褐色土が堆積していくような状況で、南側斜面では遺物の出土は微量であったが、北側の斜面は急斜面であるものの縄文中期後半の土器片が散発的な形で出土した。周辺のグリッドには土器を包含した風倒木痕や落し穴などが見られ、落し穴に伴う遺物と推定された。

東地区ではU14グリッドを中心とした掘立柱建物跡群は、南北に走る等高線が瘤状にせり出す形となっている地区を選地していることが分かり、表土層は薄いものであったことが理解される。西に位置しているS14~Q14グリッドでは地山面が浅い位置で確認された。一方の東地区では尾根筋の鞍部に当たるところから流土、包含層、盛土が認められた。Y11グリッドでは、表土および盛土が約60cm、炭化物を含んだ淡黒褐色土が約20cm、遺物・炭化物を含む茶褐色の包含層が約10~20cmと堆積し、地山は自然腐蝕土の淡黒褐色～黒褐色土が約30~60cmの厚さで堆積している。その下には黄褐色粘質土があり、北側部分では急激にレベルを上げていき（W18）、黒色土や包含層の堆積も徐々に失われていく。

これらの層序や地形の状況から、縄文時代では丘陵の尾根上が使われ、古代においては斜面が利用されていたと判断され、いずれにおいても自然腐蝕土が形成されていて、一定の面を持つ地形を占地していると判断される。

## 2 遺構の配置

縄文時代の遺構は、各時期によって位置が異なっているのが特徴で、全体的に遺構の基数も少ない。

西地区の矢柄研磨器が出土したD16グリッド周辺では、焼土面や小土坑、集石炉跡、配石遺構などが配置されていて、前期・中期の土器片が小片となって出土したが、復元完形となる土器は皆無であったのが、本遺跡の性格を如実に物語っているといえる。遺構を切り込んだり、切られたりしている風倒木痕が随所に見られ、時期的な差を示すのか覆土において黒色が濃いものから地山質土に類似しているものまでの幅がある。焼土面が顕著に認められたD17グリッドでは、周辺に石皿や磨石が集中しているが、石の基底面にばらつきがあり、周囲に位置することから関連付けて考えるという見方は取りにくい。幾つかの配石遺構が検出できたが、相手の関連や性格までつかみ切れなかった。C14・15グリッドで検出した風倒木痕には、覆土に遺物を包含しているのが見られたが、各風倒木痕からの出土は數片の土器や削片である場合が多く、一括性や集中性は稀薄である。E・F14グリッドに跨がって検出された配石遺構は平面略円形で整っているが件出遺物ではなく、配石下層に土坑などの施設は確認されなかった。

尾根上にあたるI14・15、J14・15グリッドで、長さ7mを越える長椭円形プランの落ち込みを検出したが壁

の立上がりや焼土面、柱穴などを確認できず、竪穴式住居址とは確定できないものがあった。それから約7m東の位置には落し穴が検出されている。壁は直に近い形で立ち上がり、底面の中央には小ビットが穿たれていた。落し穴の検出された北側斜面のL16グリッドを中心として、散発的な状態で縄文時代中期後半の土器が出上している。

後期前葉の気屋式土器の断片は、長椭円形落ち込みの北側斜面、I17グリッドの土坑から出土しているが、風倒木痕跡と複合した状態であったために土坑の性格は判然とはしない。

古代の遺構は西南斜面と、東地区の掘立柱建物跡群の2地点に分けられ、前者が奈良時代、後者が平安時代を中心とする上器が出土している。西南斜面では火熱を受けた礫群(G12)の山側斜面に、焼土面を持つ土坑群が半円状に配置されており、さらに傾斜が強くなる位置に、竪穴式住居址落ち込み2カ所(G14、II14)が検出された。包含層からは鉄の鋤等が整理箱で1箱分の出土があり、製鉄ではなく精錬が行われていた遺跡と判断される。東地区の掘立柱建物跡群(U14)は2回程度の建て替えが想定されるような、複合した状態で柱穴群が発見された。包含層からの遺物の出土状況は建物跡群から距離を持つと格段に稀薄となることから連続したような状態での遺構展開は弱いものと判断された。

#### 第4節 検出した遺構

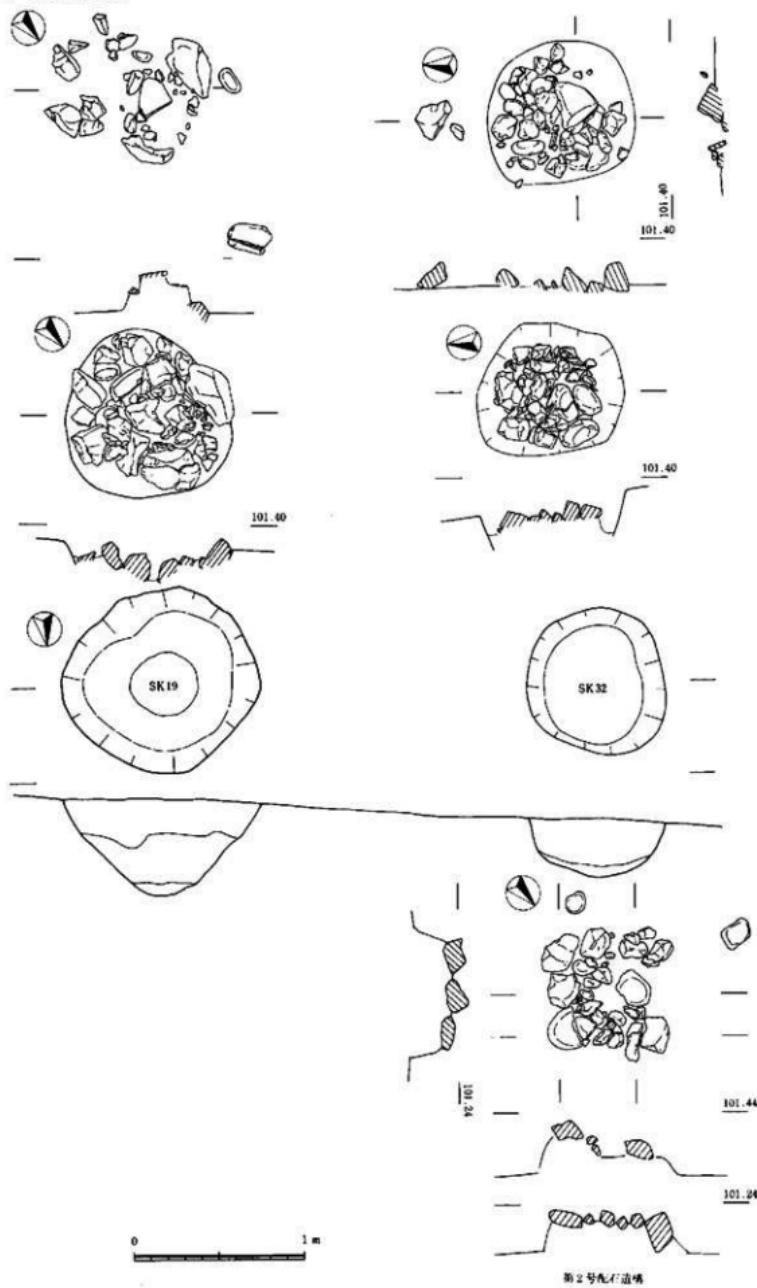
##### (1) 集石炉跡

S K32(第21図、図版31) 発掘区の西端部、尾根上のE18グリッドで検出した集石土坑で、火熱を受けて変色した礫や砾を持っているところから集石炉跡と判断した。西方向約310cmの距離を置いて同様の集石炉跡S K19が位置している。掘り方は椭円形プランを呈し、長軸86cm、短軸82cm、深さ34cmを測り、断面はすり鉢状をなしている。壁面の状態で見ると深さ29cmまでの間は、熱による変色を受けたのか黒くなっていてやや固く締まったようになっている。検出面での石は、長さ26cmの石を中心において北側に寄せたような状態で検出され、円礫、角礫が混在するような状況をなし、火熱による割れを持つものや赤変している石が多く見られた。石の検出レベルと同じ高さで、小片であるが縄文時代前期の土器が出土している。石は土坑の底面までぎっしり詰まったような状態で検出され、覆土は黒褐色土であった。礫の中で石器の形状を持つものではなく、下層位置での土器の出土は認められなかった。なお、本炉跡の西側には不整形なプランを持つ落ち込みが見られ、風倒木痕跡を切り込んで掘り込まれていると判断された。

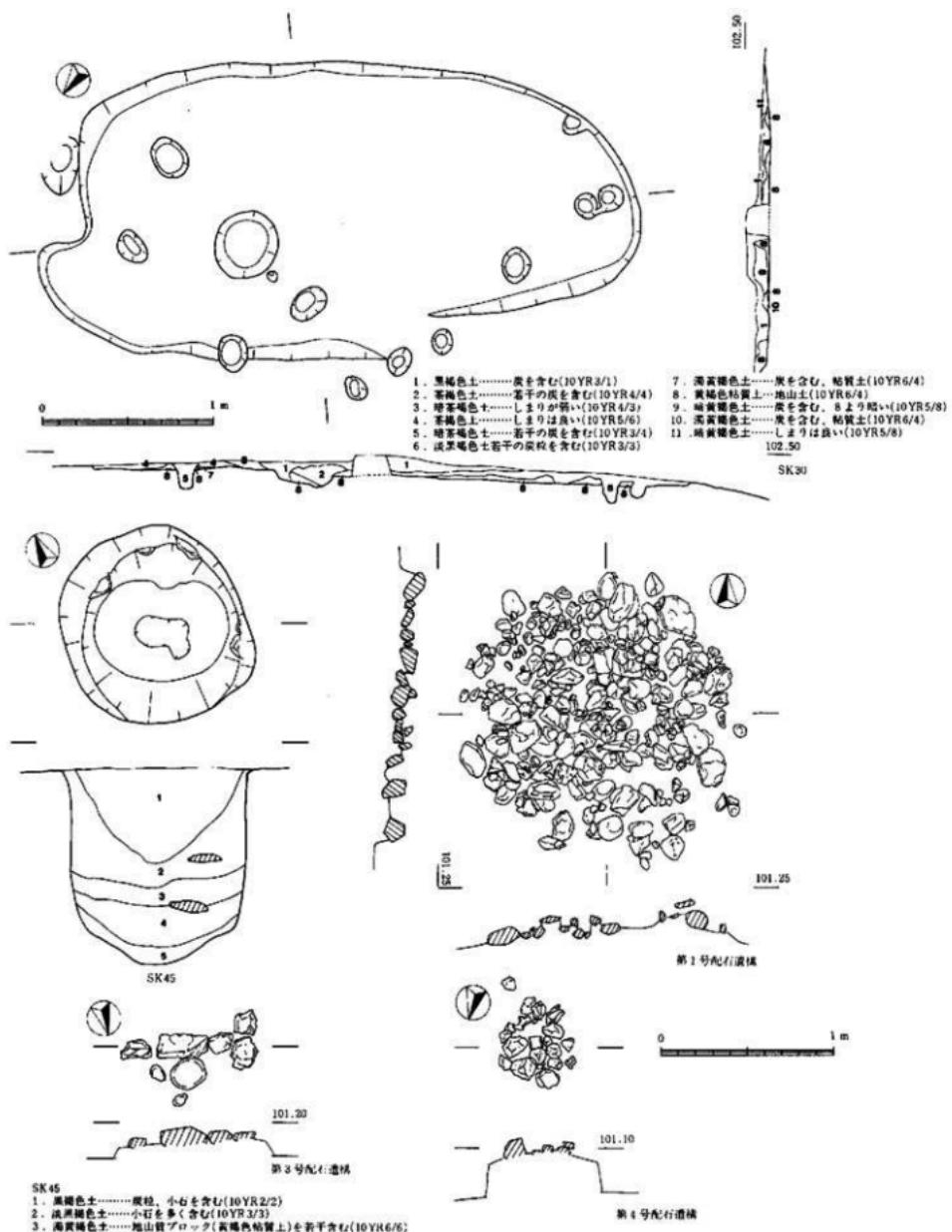
S K19(第21図、図版32) S K32と同様に、尾根上のF16グリッドで検出した集石炉跡で、表土下の暗茶褐色土を掘り下げていく段階から、石の集中と土器片の集中が認められたもので、発掘当初は石圓炉跡の可能性も考えていた。上器は前期前半に比定できる。上層の石は火熱によるヒビ割れや変色が顕著に見られ、平板な石には使用による擦り面を持っているものが見られた。平面プランは東西方向に長軸を置く椭円形を呈し、長軸111cm、短軸107cm、深さ57cmを測る。断面形はすり鉢状に中央部が最も深く掘り込まれている。壁面では検出面からの深さで約20cm程度までは赤く変色し、それより下位の約30cmは黒く変色している。底面からの高さ約7cm程度が通常の地山土の黄褐色粘質土となっている。石は中には長さ35cmや40cmに及ぶものがあり、それらを端に寄せているように見られ、底面まで充満したように石が折り重なっている。覆土は黒褐色土で、少量の炭化物を含めし、土器などの遺物は上面に限定されるような形での出土であった。

##### (2) 配石遺構

第1号配石遺構(第22図、図版30) 西地区的南斜面肩部で発見したもので、E14・F14グリッドの境界に位置している。バックホーによる表土除去の段階で、上位置にある石が現れ配石遺構と推定できた。包含していた土層は、茶褐色、暗茶褐色土である。平面形は円形プランを呈し、径約170cmの範囲に、長さ25cm程度の石を最大にして集石していた。レベルでは北東が高く、南北方向に向けてゆるく傾斜しているのは、地山の傾斜に沿った



第21図 集石炉跡（SK19・32）、第2号配石遺構実測図（1/30）



第22図 SK 30, 45、第1・3・4号配石遺構実測図 (1/60)、(1/30)

ものである。大きな石の殆どは山側に現れている山石で、凝灰岩質の軟質のものが多く、南東部分の半分以上がそれで占められ、間に砂岩質の割れた石が混じるという状態で、北西部には砂岩質の円礫が多く、火熱によって割れているものが多い。凝灰岩質の石では火熱により変色し、赤褐色を呈しているものが多い。配石は折り重なるという形態はとらず、表面に見える状態で下層の暗茶褐色土、地山へと移行していく、地山面での土坑の検出は無かった。配石遺構内、周辺ともに石器・土器の検出は見られず、所属時期は不明である。

**第2号配石遺構（SK16）（第21図、図版30）** 西地区の尾根上のD16・E16グリッドの境にある配石遺構で、東方向約3mには集石炉跡のSK32が配置されている。立地している地区は尾根上での鞍部に当たる位置で、縄文時代の包含層が形成されており、遺物の出土が多い。配石遺構としての在り方となったが、土坑が付属していた可能性が高いと推定している。平面形は方形プランとして組み立てられた石の配置状況を示し、一边が約80cmを測る正方形を取る。辺には長さ20~30cmの人振りの石を並べ、中央部に小振りの石が充填される。石は地山から約20cmほど上位にあり、下位に土坑などの振り込みは見られなかった。内部の石には割れやヒビ割れしているものが目立ち、石の変色こそ少ないが火熱によるものと推定される。石の中には石皿としての使用痕跡を残すものがあるが、土器の出土は見られず、所属時期の確定はできないものの、集石炉跡と重複する可能性を考えられる。

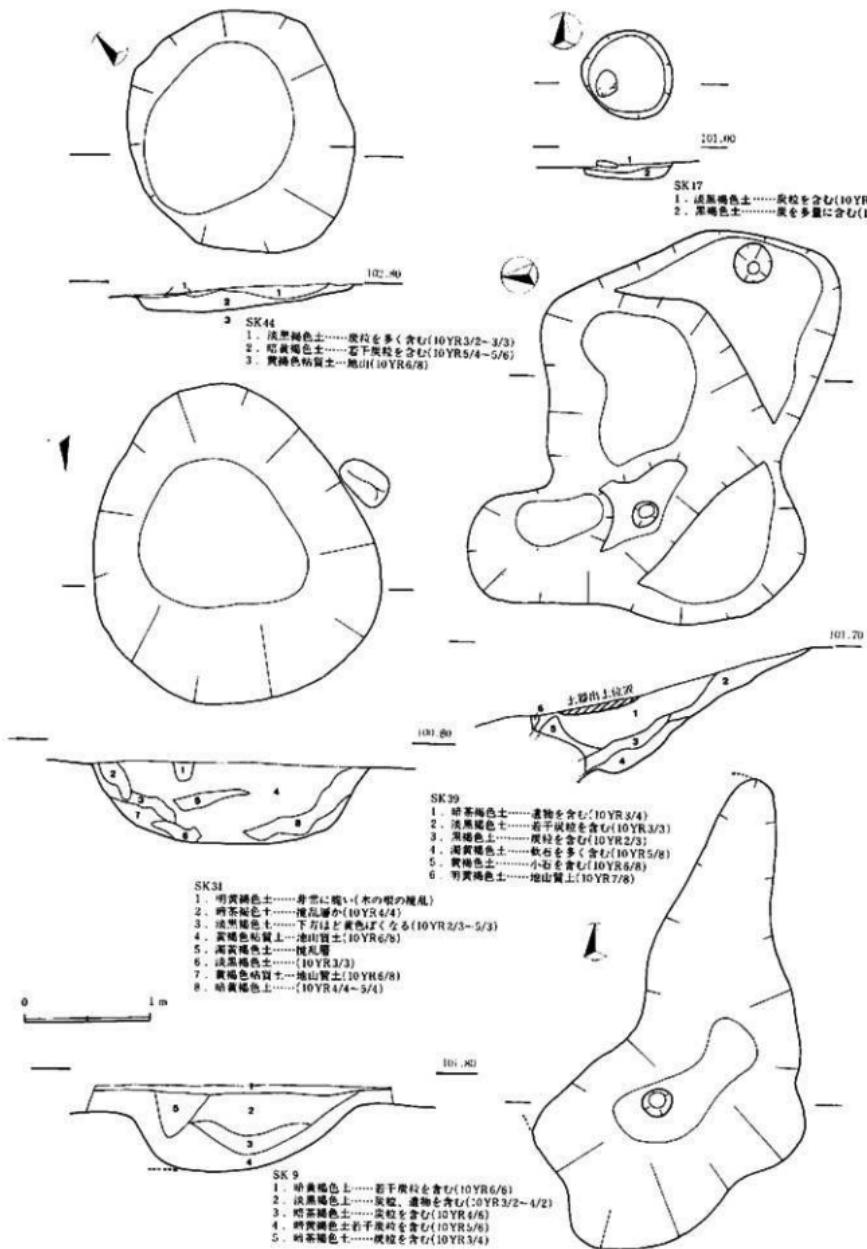
**第3号配石遺構（第22図、図版29）** 西地区のD15・E15グリッドの境に位置する配石遺構で、南斜面にかかる局部に立地している。第1号配石遺構は南東約4mに、第2号は北方向約5mの距離にある。長さ30cmを越えるものを含み東西方向の一列だけに石が並んでいて、周辺に火熱で変色した石、石皿などが置かれている。列状の石は一個の石が割れた可能性があり、山裾、尾根の北西隅に露出している凝灰岩質の石と同じである。第4号配石遺構に使われているものも同じ石質と推定できる。配石の範囲は長さ82cm、幅65cmを測る。石は地山面からは約10cm程度浮いた位置にあるが、下層での遺構および伴出土器は見られなかった。

**第4号配石遺構（第22図、図版29）** 西地区的D15グリッドで検出した配石遺構で、第3号配石遺構のすぐ西方に位置している。尾根の南側斜面にかかる傾斜変換点に立地しているためか、全体的に尾根側が若干高く、谷側にゆるく傾斜している。平面プランは円形を呈し、53×47cmの規模を測る。凝灰岩質の石と全て割れている砂岩質の石が、径10~15cmの大きさで、隙間なく置かれている。凝灰岩質の石では赤変が見られるが、砂岩質の石では赤変は認められないものの、不規則に割れていることから火熱が加わっているものと推定できる。配石は地山面から約20cm程度浮いたレベルにあり、地山面までの間、遺構・遺物は検出されなかった。

### (3) 土坑

**SK45（第22図、図版33）** 落し穴と考えられる落ち込みで、調査区の中央部分、尾根幅が最も狭くなる地点でもあるK15グリッドで検出した。土坑は杉の根に抱えられるような状態にあり全体を掘り下げるには困難が伴った。平面プランは円形を呈し、径110~120cm、深さ116cmの規模を測る。断面で見ると壁は直に近い形で立ち上がり、底面にはピットを掘り込んだような窪みが径約15cmの規模で見られたが、明確な状態ではなかった。覆土は上層部分で黒褐色土がレンズ状に堆積し、地山質土を挟み込んだように黒褐色土が入り込んでいる。使用された後にある程度埋め戻された可能性も考えられる。覆土からは石皿が1点出土しただけで、土器の検出は認められなかった。周辺の北側斜面には中期中葉以降の土器片が出土していることから、該期の所属を推定しておきたい。

**SK30（第22図、図版35）** 西地区的尾根幅が狭くなる位置に立地していた住居址状の落ち込みで、I15・16、J15・16グリッドにまたがって検出した。SK45の落し穴は東方向約6mに位置している。表土を取り除いた段階から包含層の形成は稀薄で、すぐに地山漸移層が現れ、黒褐色土の落ち込みが平面プラン椭円形を呈しているのが確認できた。長軸は北東方向に置き、長軸710cm、短軸350cmを測る。覆土は炭化物を含んだ黒褐色土、淡黒褐色土が全体に堆積していたが、木の根によると思われる擾乱が入り込み、全体の理解を難しくしている。壁の立上がりは尾根にかかった部分で傾斜が強まるが、傾斜面にかかっていく南北部分では明瞭ではない。床面は平



第23図 SK 44・17・31・39・9実測図(1/40)

垣ではなく、東部分で高く西部分が低くなり、不規則な位置で小ビットが掘り込まれているが、柱穴と考えられるものは検出できなかった。また、炉跡と推定できる焼土面もなく、覆土からの遺物は皆無であった。覆土、ビットには炭化物が含まれていることから住居址とは判断はできないが、小ビットを掘り込むようななんらかの遺構は存在したものと考えたい。

S K44（第23図、図版36） 西地区の尾根上で検出した土坑で、S K45の落し穴、S K30の住居址状落ち込みの中間にあたるJ 15グリッドに位置している。淡黒褐色土の覆土に多量の炭化物が現れた。平面プランは梢円形を呈し、長軸192cm、短軸174cm、深さ15cmを測る。断面では尾根側がゆるく、谷側がややきつい立ち上がりを示し、底面は傾斜に沿う形でなだらかに傾いている。炭化物を含んだ層は薄く、下層は若干の炭化物を含んだ暗黃褐色土で、縄文土器の小片を含んでいた。表土除去後の切株の排除の段階で、土坑の南側に隣接した位置で削器が出土していたことから、該期に属する可能性を考えていたが、剥片を含めて、石器の出土は認められなかった。縄文土器は小片であり、時期の確定はできない。

S K46 図示しなかったが、S K44土坑の南方向約3mに位置するもので、南斜面のJ 14・K 14グリッドにまたがって検出された。平面方形プランを呈し、主軸を等高線に直行する形で掘り込まれていて、長軸120cm、短軸70cm、深さ15cmを測る。杉の切株に巻かれていたために土層観察は充分ではないが、縄文土器、炭化物を含んだ暗茶褐色土が堆積し、谷側は明確ではないが、尾根側の立上がりは明確で、土坑墓の可能性が推定されたものである。

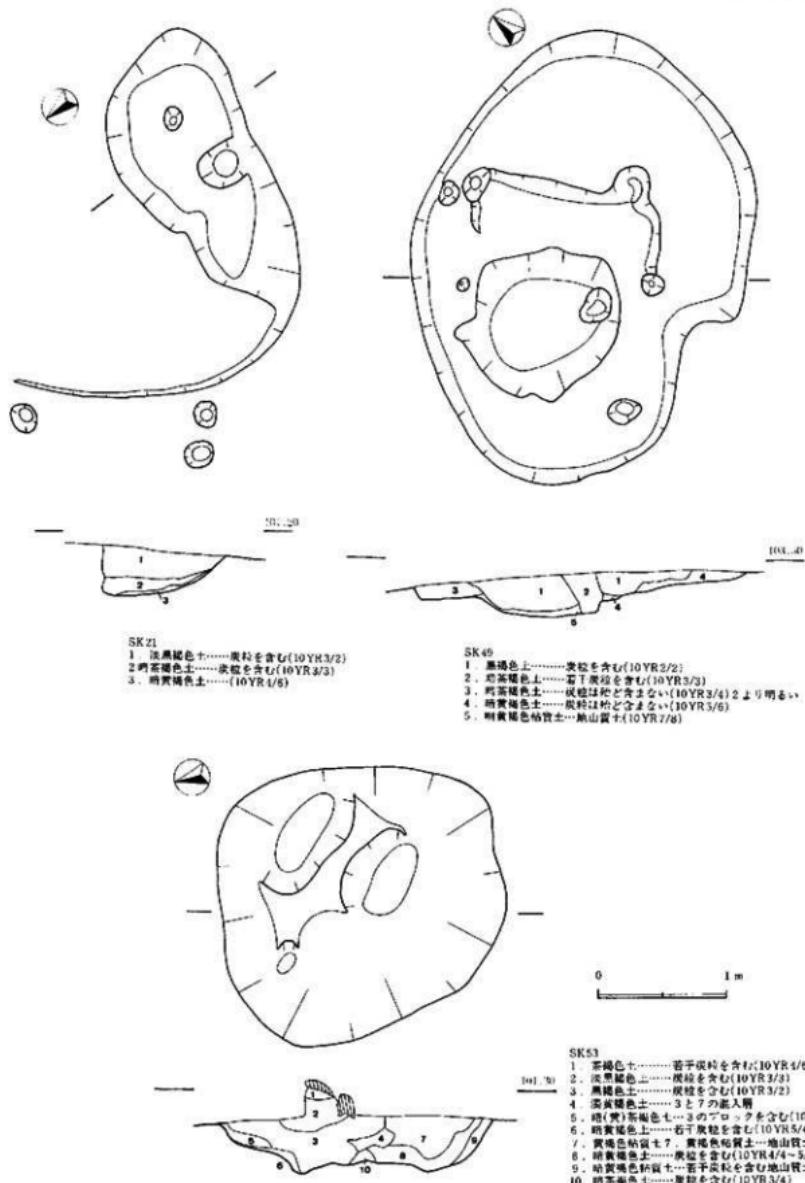
S K51（図版33） 西地区の端部、D 15・16グリッドで検出した土坑で、試掘調査段階で矢柄研磨器が出土している。隣接してS K16の配石遺構、第2・3号配石遺構が配置されている。尾根筋には当たるもののが数個でもあり、包含層及び地山漸移層が比較的厚くなっていたことから検出面からの掘り込みは浅いものであった。平面プランは円形を呈し、径70cm、検出面からの深さは12cmを測る。土坑の西側に寄って丸く平たい石がやや斜め位置になって検出された。土坑内からの出土遺物はなかった。

#### （4）風倒木痕

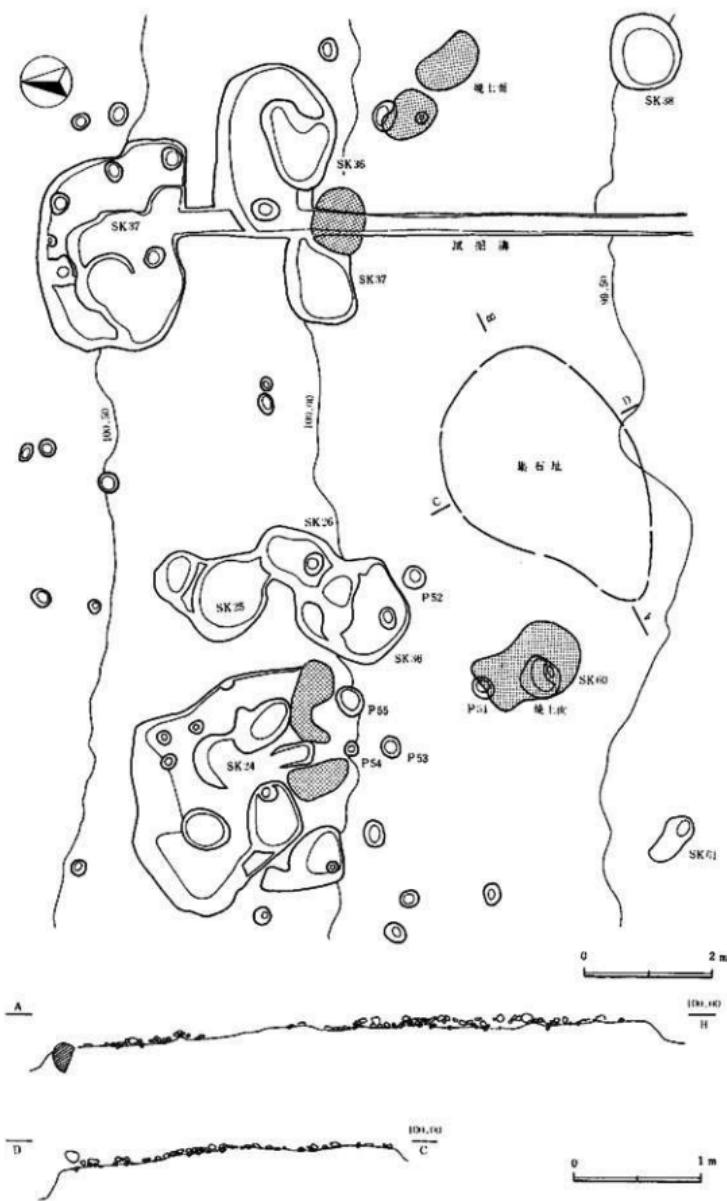
S K39（第23図、図版34） 西地区の北側斜面で検出した土坑で、I 17グリッドに位置している。南方向約4mには住居址状落ち込みが置かれている。平面形は梢円形と推定され、おのおのが切り合う形で風倒木痕跡が見られる点に不整形な形状となっている。土坑の中央には暗茶褐色土が堆積し、一定の面を持って縄文時代後期の気屋式土器片がまとまった形で検出されている。土坑の立上がり部分の覆土は黒褐色土であることから、全体が風倒木痕あとである可能性が推定され、土器片を含んだ土層の下には渋黄褐色土が谷に向かってさらに落ち込んでいくことから、土坑群全体が古い段階の風倒木痕に包括されてしまうものと推定された。土器は傾斜に沿うように出土していて、同一土層内の下位に含まれることがなかった。

S K31（第23図、図版35） 西地区の端部、北側に向いた傾斜変換線に位置している風倒木痕跡である。D 17・E 17グリッドに跨がっていて、風倒木痕で全壊したのは本例だけである。平面梢円形を呈していて、傾斜が強くなっていく北側部分で幅を拡大している。長径250cm、短径220cm、深さ64cmを測る。黒褐色土は南側の落ち込み部分で色が濃く、北端では地山質土が混じりこんで色が薄くなる傾向にあり、木は北側に向かって倒れ込んだものと推定できる。覆土の大部分は黄褐色土質の地山質土である。黒褐色土内から縄文時代の遺物が出土していることから、縄文時代以降に形成されたものと推定される。

S K9・SK10・SK11（第23図） 尾根筋の西端部、C 15・16グリッドにかけて検出した風倒木痕跡で、淡黒褐色土が濃厚に認められた部分の発掘に止めた。風倒木痕としては東側に伸びていくものと推定できる。覆土は炭化物を混じえた状態で、地山質土の分量が下層に行くに従い増加していくという傾向で、淡黒褐色土の下層部分に傾斜に沿った形で遺物が出土している。南に隣接しているS K10・11は、同一の風倒木痕の端部を掘り下げたもので、径350cmを越える範囲で攪乱されていると思われる。覆土の暗茶褐色土から磨製石斧の完形品が出土している。



第24図 SK21・49・53実測図 (1/40)



第25図 集石址周辺の遺構配置図と断面図（1/80）、（1/40）

S K21（第24図） 西地区的尾根筋、集石炉跡の南側、E・F 15グリッドの境界部分で検出した風倒木痕で、縄文時代の遺物が入り込んでいる可能性を考えて、黒褐色土が見えている部分を掘り下げた。風倒木痕の全形は北側に展開しているものと考えられる。覆土からは縄文土器片が出土している。

S K49（第24図、図版43） 調査区の中央部分、尾根筋で検出した風倒木痕で、平面橢円形を呈している。長軸は350cm、短軸は265cmを測り、深さは約35cmであった。床面は平坦ではなく、凹凸がはなはだしい。覆土からは中期後葉の土器が出土している。

S K53（第24図） 西地区的尾根筋、D 15・16、E 15・16グリッドにわたって検出した風倒木痕跡で、周辺に矢柄研磨器を出土したS K51や集石炉跡などが立地していることから完掘を実施した。平面形は不整橢円形を呈し、長さ222cm、幅215cm、深さ45cmを測る。中央部分には土坑検出以前の石を掘り残していたものを取り込んだために、不自然な土層断面となっている。中央部分では黒褐色土が縦位置に近い形で底面まで入り込んでいて、土坑周囲には炭化物をまじえた地山質が堆積している。底面は段差がつき、凹凸が激しい。覆土からは土器、剣片が出土している。

#### ⑤ 古代の土坑

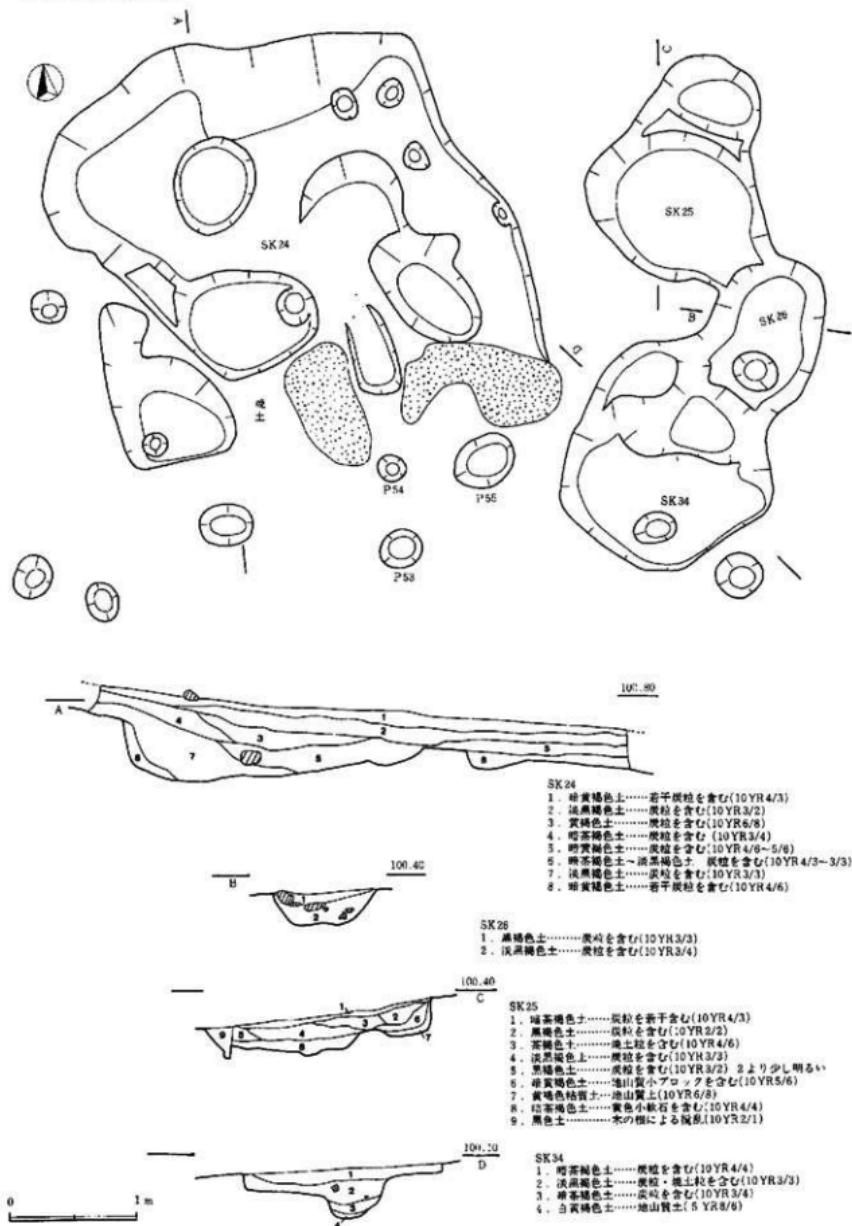
西地区的南斜面は、火熱によって割れた石が集石していた地点を中心とし（G 12グリッド）、南の谷を背後にし半円状に土坑群が配置されている。E～H 12～14にわたる12個のグリッドに展開していた遺構群は、斜面の自然流土の上に構築されていたことから明快な形での遺構の把握は困難であり、有機的な在り方を把握できなかつた。遺物の出土は谷部分にまで伸びていた為に豊富で、鉄斧、フイゴの羽口や鉄錠などが見られることから、鉄の精錬工房が置かれていた地区と推定できる。

集石遺構（第25図、図版44） 西地区的南斜面裾部、F 12・13、G 12・13グリッドの境界で検出した集石遺構で、大部分はG 12グリッドに含まれる。平面形は長椭円形を呈し、長さ440cm、幅290cmの範囲に、火熱で割れた約10cm程度の礫が地山の傾斜に沿うように広がっていたものである。礫はこの範囲に止まらず、南側の谷部にまで包含層に含まれる形で広がっていた。集石遺構内には小片となった土器器壺の断片が混ざり込み、また、鉄錠が含まれていた。礫は安山岩質の円錐で、全てが割れた状態となっている。これらの礫群が遺構そのものを示すものではなく、廃棄した状況を表しているものと推定される。礫群の下では焼土面や土坑などは検出されなかつた。

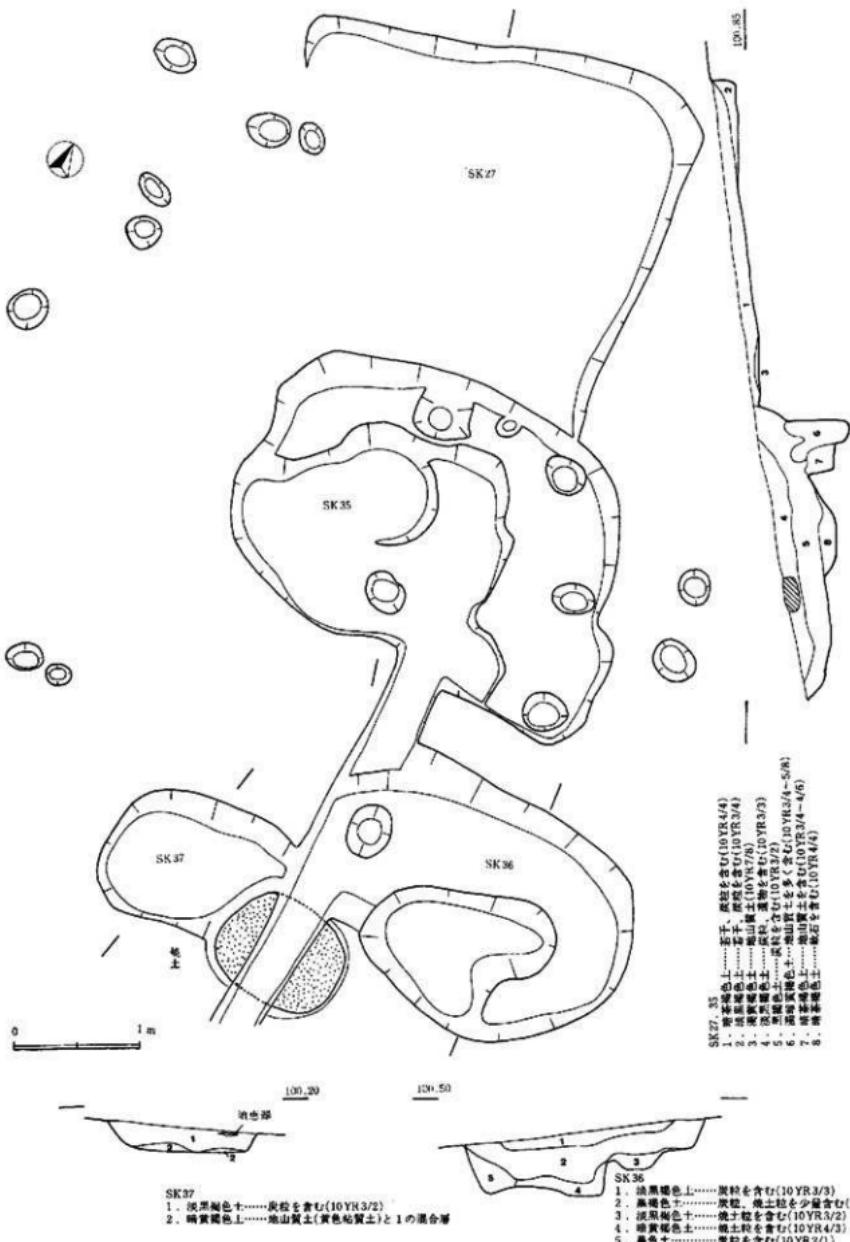
S K28（第28図） 西地区的南斜面、H 14・I 14グリッドで検出した土坑で、風倒木痕、堅穴式住居址の可能性が考えられる。西方約3.5mには、同様の在り方を示すS K27が位置している。尾根側の掘り込み面は明確にとらえられたが、斜面下位では流失したためか判然とはしなかった。平面プランは略楕円形を呈し、西側の一辺が内側に食い込む状態となっている。南北方向で350cm、東西方向で340cmを測り、最も深くなる北端で30cmの覆土がある。北側の掘り込みはひとつ段を付けるような形となっていて、やや緩い傾斜となっている。覆土は炭化物の含有程度によって4層に分けられ、山石の包含が目立った。覆土は茶褐色の砂質系のもので、他の風倒木痕から見れば覆土の黒色の傾向が弱くなっているのは透水性のある地山であった事と比較的新しい段階での痕跡である事が、その理由として推定される。遺物の出土は稀薄で、須恵器の蓋が出土しただけである。床面は平坦ではなく、地山に含まれている小礫が凸凹を作り出して、焼土面、柱穴などは検出されなかつた。

S K27（第27図、図版39） 西地区的南斜面、G 14グリッドで検出したもので、平面方形プランを持っている。尾根側と東側部分に掘り込みラインが認められた。南北方向で290cm、東西方向で320cm、尾根側での深さは約20cmの規模を測る。覆土は黒褐色土が壁に接して下層に堆積し、全体を炭化物を含んだ暗茶褐色土が覆っている。底面は傾斜していて、焼土面などは検出されなかつた。

S K24（第26図、図版38） 西地区的南斜面、E 13・F 13グリッドにかけて検出した土坑であるが、全体形は不整形となっている。南側には向い合う状態で焼土面が形成されていて、それに向かって掘り方が緩やかに上がっていく。尾根側の壁の立上がりは直に近い状況を示すが、床面全体は凹凸がはなはだしく、面を形成しない。



第26図 SK 24~26・34実測図 (1/40)



第27図 SK 27、35~37実測図 (1/40)

覆土からは土器の出土が認められる。焼土面の南側に位置しているピットに番号が入っているものは遺物を包含したものである。

S K25・26・34（第26図、図版40） 西地区の南斜面、F13グリッドで検出した土坑で、南北方向に接続したような形で検出された。S K25は平面プラン橢円形を呈し、接している土坑によって南東部が壺になっている。長軸約150cm、短軸115cm、深さ30cmを測る。覆土には炭化物、焼土粒が入り込んでいて、淡黒褐色土からは遺物が出土している。北東に隣接している土坑の覆土が、本土坑を覆っていることから先行しているものと判断される。S K26は平面長楕円形を呈し、長軸115cm、短軸87cm、深さ25cmを測り、南端のピットによって切られてい。炭化物を含んだ覆土の壺に、地山に含まれている凝灰岩質の礫が多く含まれていた。S K34は連結した土坑の南端に位置している土坑で、平面橢円形を呈していたものと推定され、長軸約140cm、短軸120cmを想定した。深さは約20cmで、壁の立上がりは直になっているが、自然流土の黒色土との境を判断するのは困難なものがあった。炭化物を含んだ淡黒褐色土からは土器片が出土している。

S K35・36・37（第27図、図版39） 西地区的南斜面裾部、G13・14、H13・14グリッドで検出した土坑群で掘り方を接するようにして配置されている。S K35は平面プラン略長方形を呈し、長さ330cm、幅225cm、深さ48cmを測る。覆土は炭化物を含んで、上層が黒褐色系、下層が茶褐色系に分けられ、上層に遺物が包含されていた。尾根側の掘り方は黄褐色の地山である事から明瞭で、緩やかな傾斜であるが、斜面裾になる南側では黒色土の腐食土層である事から明確にはたらききれていない。床面は平坦ではなく、段や窪みが付いていて、北側の端部に径50cm、深さ70cmの二段掘りのピットが検出された。土坑とは切り合い関係にあり、先行して掘り込まれている柱穴と推定されるが、対となる柱穴を特定することはできなかった。S K36は平面略楕円形を呈し、東西方向の長軸で270cm、短軸190cm、深さ50cmを測る。覆土の全てに炭化物が包含され、下層には焼土粒も混じっている。床面では東に土坑が、西にピットが掘り込まれている。土坑肩部に須恵器蓋が出土している。S K37は平面プラン橢円形を呈し、長軸約150cm、短軸105cm、深さ20cmの規模を測る。覆土は須恵器を包含した黒褐色土であり、西端に焼土面が検出された。焼上面は土坑より後出したものである。

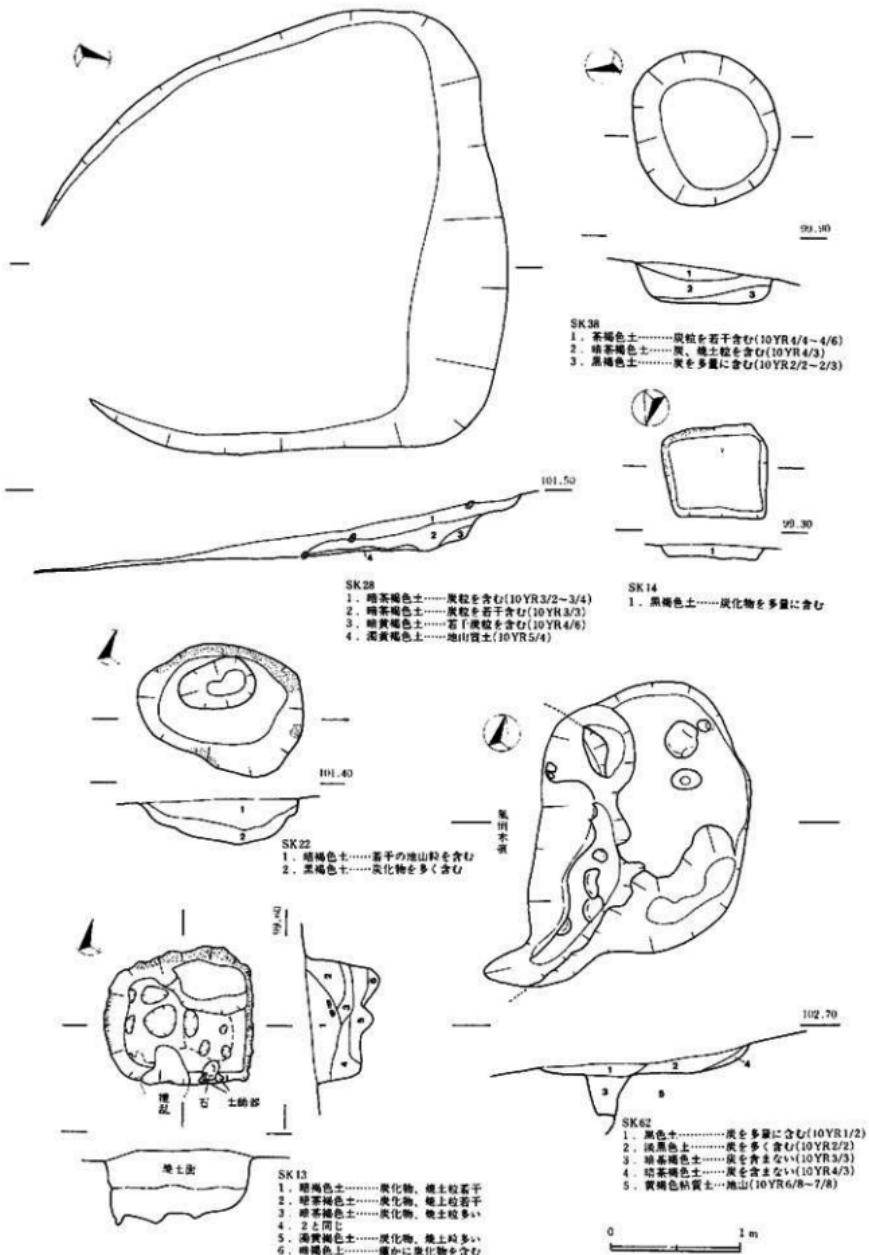
S K38（第28図、図版43） 西地区的南斜面裾部、H12・13グリッドで検出した土坑で、古代の土坑群の中で東端に位置している。平面プラン橢円形を呈し、長径123cm、短径110cm、深さ30cmを測る。覆土は3層に分けられ、いずれにも炭化物が含まれ、下層では多量に含んでいた。上層の茶褐色土層、暗茶褐色土層には遺物の包含が見られた。

#### (6) その他の土坑

西地区では風倒木痕や集石炉跡、古代の土坑とは異なる状態を示す土坑が3基検出され、東地区でも1基が見られた。掘り方の壁面が火熱を受けて赤く変色しているが、底面や掘り方の下位置では観察できないという在り方を示す。立地の傾向は斜面裾部での選地が強いようだが、尾根筋にあるものもある。また、覆土からは炭化物の検出は顕著だが、遺物が全く出土しないという傾向にある。庄が屋敷A遺跡などでも検出例が多く見られるが、通例遺物は含まないようだ。性格については簡略な形での炭焼窯との意見もあるが、土坑上半の壁が赤変していることは開口した状態の内部で火がたかれた事を示していると考えられ、底面の成形が粗雑であり顕著な焼け跡や還元状態を示さないという事などや遺物が見当たらない事などから、その多くは近世以降の単独の火葬場跡と推定している。

S K14（第28図、図版41） 西地区的南斜面裾部、E11・12グリッドで検出した土坑で、平面プランは略方形を呈している。長軸80cm、短軸74cm、深さ10cmの規模を測り、地山面からの掘り込みは浅いものであった。覆土は炭化物を多量に含んだ淡褐色土で、遺物の出土は見られなかった。底面、壁面はさほど焼けてはおらず、若干の焼土粒が壁面で見られる程度で、床面は比較的平坦に整えられている。

S K13（第28図、図版41） 西地区的南斜面裾部、D12・E12グリッドで検出した土坑で、南東方向約1.5mにS K14土坑が位置している。平面プランは略方形を呈し、長さ116cm、幅103cm、深さ56cmの規模を測る。覆土は



第28図 S K28・38・14・22・13・62実測図 (1/40)

褐色系の土に炭化物、焼土粒の含まれ具合によって分層され、下層位では地山質土の褐黃褐色土に、炭化物、焼土がブロック状に含まれるという状態となっている。遺物は南辺の上端部に土師器甕の破片が礫を挟んだ状態で出土しているが、本土坑の所産時期を押さえるものであるかは今後の検討を要する。壁は直に近い形で立ち上がり、北辺、西辺は検出面から約30cmの範囲で赤変が顕著に認められるが、南辺、東辺は約15cm程度かほとんど観察できない状況となっている。焼けた壁の下位では通常の地山質の土となり、還元状態を見ることは出来ない。焼土壁の厚さは約3cmで、内側が褐黃褐色、その外が橙色、その外が暗茶褐色を呈している。壁面では幅が最大で12cmの幅を持って面が見られ、面が重なり合うために上から下まで通しての面ではない。南辺では切り込む形で木の根の攪乱があり込んでいる。底面は凹凸が激しく、小ビットが全体を覆うように、規模、深さともに乱雑に検出された。

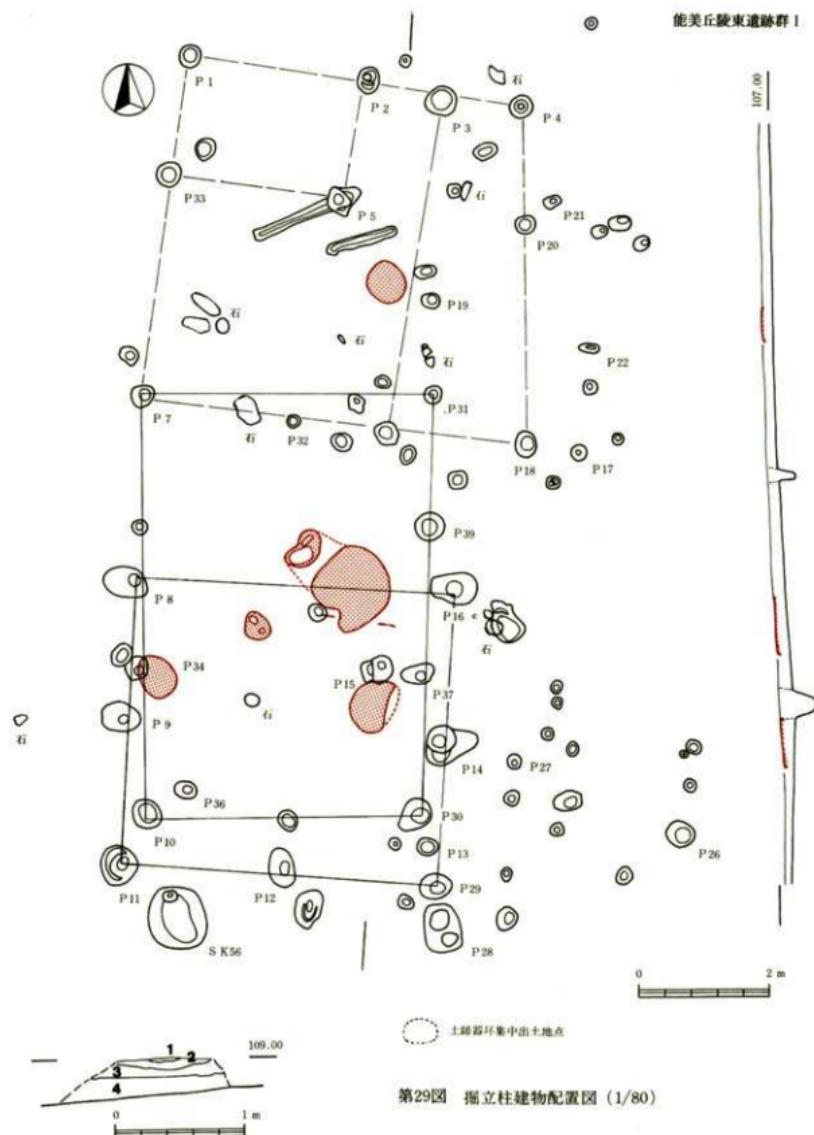
S K22(第28図、図版42) 西地区の尾根筋からやや南斜面にかかるF15グリッドで検出した。先のSK13土坑は南々西方向約15mの距離を置いている。平面プランは梢円形を呈し、長径132cm、短径95cm、深さ35cmの規模を測る。覆土は2層に分けられ、上層は地山粒子を含んだ暗褐色土の柔らかい土で、下層は炭化物を多く含んだ黒褐色土、地山は黄褐色粘質土であった。北側の壁は強い傾斜を持って立ち上がるが、南側の壁は比較的傾斜がゆるくなり、焼土を残す状態と関わっているようだ。北側では焼けた状態が顕著であるが、南側では焼土面の割合が極端に低くなる。底面の北側に寄ってさらに一段掘り込まれた状況を示し、全体に平坦面を形成せず、傾斜面のままとなっている。出土遺物は見られなかった。

S K62(第28図、図版43) 東地区の南西斜面、O11グリッドで検出した土坑で、東地区では単独のものである。平面プランは梢円形を呈し、長径200cm、短径163cm、深さ10cmを測る。覆土は2層に分けられ、いずれにも炭化物が多量に含まれている。床面は平坦にととのえられ、西側には風倒木痕が入り込んでいたために、掘り過ぎて不自然な形状となった。出土品は見られなかった。

#### (7) 据立柱建物跡

東の調査区は、緩斜面に瘤状にせりだした平坦面に土器の小片が集中的に出土し、固く焼け付いた焼上面が表土層直下から検出されていたことから、古代の遺構の存在を推定していた。しかし、空梅雨傾向から盛夏に移り、地表は乾燥しきった為に鞍部に堆積した腐蝕土と包含層との判別が極めて困難な状態となった。焼土が検出できた面での遺構の検出に努めたが、木の根や地表が乾燥した状態では、遺構の把握は難しかった。発掘区東端の土層観察を行ってから、平坦面への包含層の除去を実施した。地点によって暗茶褐色土の包含層は厚さを変えていくが、おおむね10~15cmの層厚をもって堆積していて、その下層には炭化物を含んだ淡黒褐色土が見られる。鞍部に堆積した腐蝕土に切り込む状態で柱穴群が検出され、林道側には木の根の攪乱による小ビット群が展開していた。柱穴には土器や炭化物が包含されているのが通例で、攪乱のビットにはなにも含まれていないという状況であった。据立柱建物跡と複合して5箇所の焼土面が検出され、やや距離を置いた位置で、土師器碗形土器の集積した状態を示した箇所が見られた。ビットに埋納されたものと推定しているが、土層観察が充分ではないので確定はできなかった。

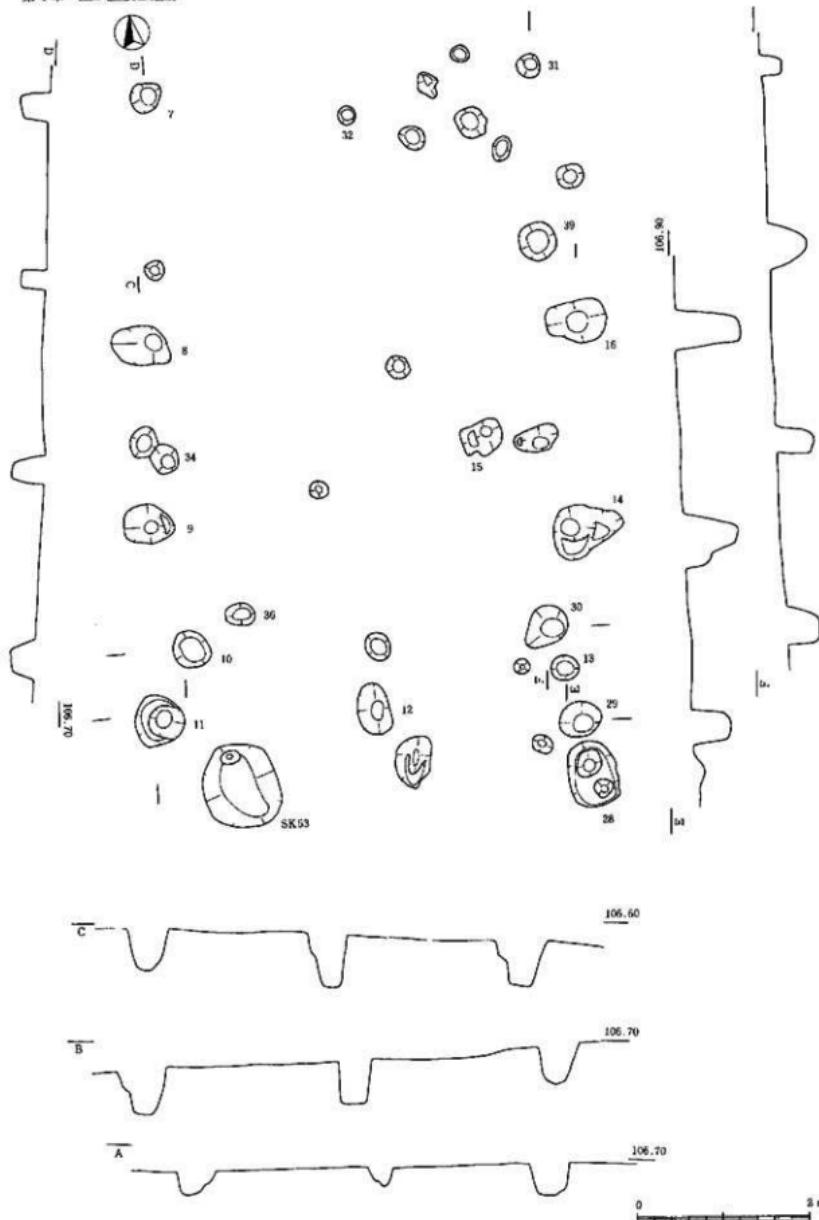
S B1(第31図、図版47) 東地区の平坦面、T13・14、U13・14グリッドで検出した据立柱建物跡で、SB2据立柱建物と複合している。2間×2間の規模であるが、北側の桁行の中柱跡は検出できなかった。検出面が20cm近く下がっていることから、浅いものであった可能性がある。桁行の芯々間は250cm×250cmで合計500cm、梁行の芯々間は230cmの等間隔で合計460cmで、建物面積は23坪(約7坪)の規模を測る。桁行方向は真北から81度西に置いていて、ほぼ尾根筋方向を指していると言える。柱穴の掘り方は梢円形を呈し、長径50~70cm、短径40~50cm、深さ45~75cmを測る。二段掘りとなっている柱穴が3箇所で見られる他は素掘りのものであった。各柱穴からは例外なく、遺物の出土が見られた。本建物の南に隣接しているSK53やビット28の位置は、複合する建物柱穴になる可能性を持つものであるが確定することはできなかった。本建物から南約2.5mの位置では、土師器碗形土器が重なり合うように出土している。



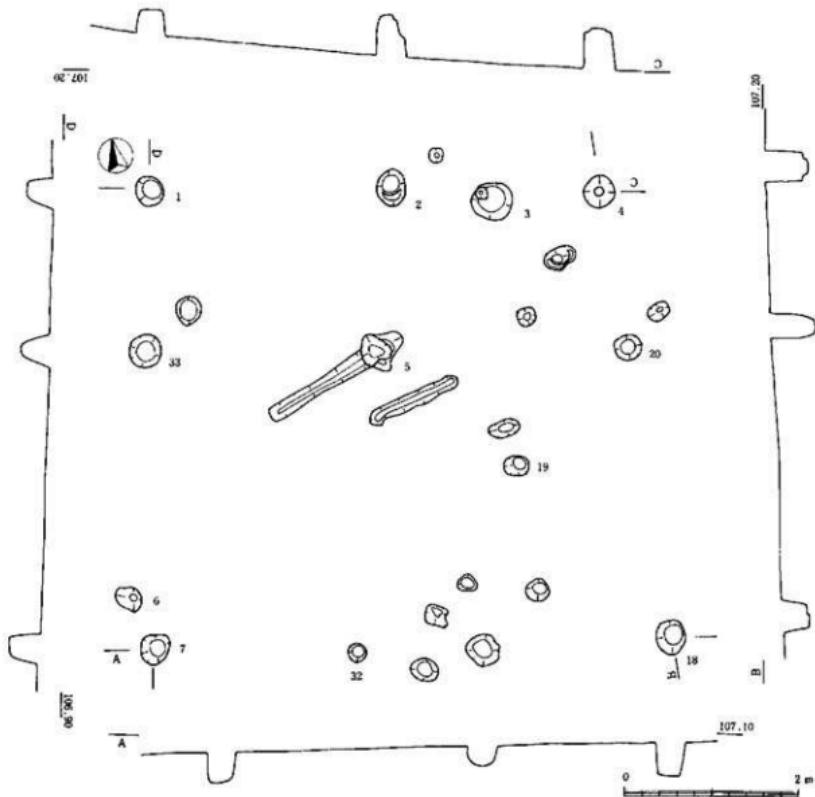
第29図 掘立柱建物配置図 (1/80)

1: 明赤褐色土 塗土層 (5YR 7/8より赤味が強い)  
 2: 暗赤褐色土 肥料を含む。3が火熱により変色 (5YR 8/4-5/8)  
 3: 暗茶褐色土 肥料を含む (5YR 3/4-4/4)  
 4: 波黒褐色土 若干炭化を含む (5YR 3/1-3/3)

第30図 焼土面断面図 (1/40)



第31図 挖立柱建物跡 (S B 1・2)実測図 (1/60)



第32図 堀立柱建物跡 (S B 3) 実測図 (1/60)

S B 2 (第31図、図版47) S B 1 堀立柱建物跡と重複する形を取り、T 13～15・U 13～15グリッドにまたがって検出された。9個の柱穴で構成される2間×3間の建物跡で、梁行の中柱跡を欠いている。検出した9個の柱穴のうち2個だけ出土遺物が見られなかっただけである。梁行の芯々間は210cm+220cmで合計430cm、桁行の芯々間は北から210cm+230cm+220cmを測り、合計で660cmとなる。建物面積は28.4m<sup>2</sup> (8.6坪) の規模となり、S B 1 堀立柱建物跡よりひとまわり大きくなっている。桁行方向は真北から4度東に置いていて、等高線に平行する立地を占めているのは、S B 1 と位置を変えていると言える。柱穴はひとまわり小振りとなり、平面円形と椭円形が混在する状況で、径25～55cm、深さ25～45cmの幅があり、北側に移るに従って浅くなる傾向が見える。

S B 3 (第32図、図版48) S B 2 建物の北側に展開している柱穴によっているが、建物の規模を確定できるまでの柱穴が検出できなかった。平坦面の北端にあたり、T 15・16、U 15・16グリッドにまたがって検出された。第29図で想定範囲を破線で示したがP 1・2・5・33を結ぶ1間×1間 (180cm×270cm)、P 1・3・4・7の柱間が等間隔ではない2間×2間 (440cm×540cm)が考えられる。しかし、P 7の柱穴をS B 2と共有する形となる。さらに範囲を広げたP 4・18までを考えると範囲は歪な形になってしまう。以上の想定から最も規模のちいさな建物跡が推定されるが、地山面までとどかなかった柱穴が予想されるとの留保が付く。建物内部で検出された埴土は、中央に位置するのではなくずれているのは、小鉢治作の建物内部での配置を想定させる。

## 第5節 出土遺物

### 1 繩文土器

遺物の出土は造構が配置されている地区以外では稀薄で、全体の遺物総量は平野部に立地している集落遺跡に比較して少ないと見える。縄文時代の遺物は、東西に伸びている丘陵の中央鞍部から西の丘陵上に散布しているような状況で、土坑や配石造構、集石堆跡と併出しているものは極めて少量に限定される。また、出土遺物の時期で見ると草創期から後期前葉までの幅が認められ、各時期での漸次はあるものの土器では全形を復元できる資料は皆無であり破片が少量づつ出土する状態で、さらに各時期のものが混在するような在り方を示していることから、縄文素文のものでは時期判断がつかないものが多くなった。時期区分を行った上で類別は困難と思われ、大区分を行った上で破片ごとに説明を加えていく事とした。

#### (1) 第1群土器（前期）（第34図、図版49）

1～40は発掘区の西端部のE13～16グリッドを中心とし、その周辺グリッドから出土した破片である。

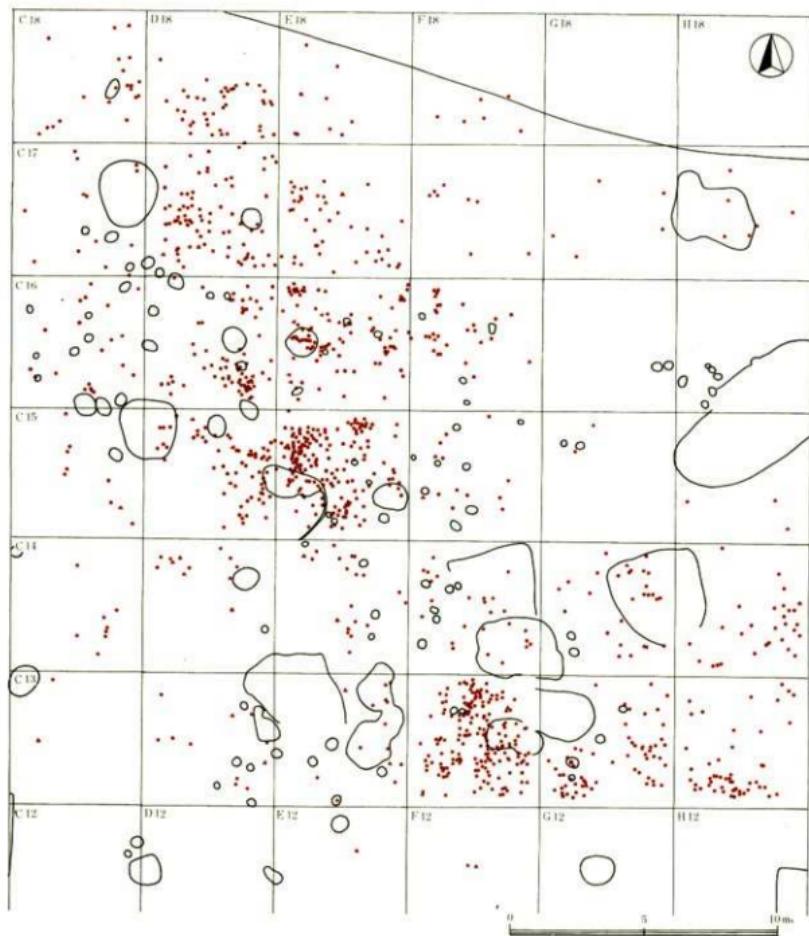
1類A 1～3は同一個体破片であるが、口縁部は得られず全形は不明である。全体に縦方向の刺突を横に並べていく文様で、上に位置しているものは下の施文の長さと同じ約5mmであるが、幅が広く刺突が深く入っていてわずかに湾曲した施文となっている。また、刺突の施文方向が上下で逆方向になっている。刺突が施された部分は凹線状に窪み上下がわずかに盛り上がるような成形となっている。上端位置だけであるが確かに縄文施文が施されているように観察される。器表面は滑らかに調整されていて、淡黄褐色を呈し、内面は微かな凹凸をなすが擦で調整が入れられ、淡黄褐色、一部は褐色を呈している。胎土に目につく砂粒は全く含まれず、均質な砂質系の胎土であるが、器表面のものはさらに細かく粘性が強いように見られる。色調や胎土では19～25の個体と類似した在り方を示していると言え、焼成は良好である。

1類B 4・5はE14グリッドから出土したもので、色調は異なっている。4は淡茶褐色、5は薄黄褐色を呈している。4では長さ7～10mmの刺突が、基本的には縦方向であるが横位置や斜め方向などが不揃いな形で施されていて、5の刺突はわずかに湾曲した状態となっている。器壁は1に比較して共に厚くなっている、約8mmを測る。内面の調整は擦痕が入っており、擦で調整で比較的平滑に仕上がっている。胎土は1と同様に砂粒を含まない精選されたものである。

2類 6・7は同一個体と推定できるもので、横方向に凹線状、突帯状の凹凸が器面に残されている。刺突は径5mmの円形のもの、3×5mmの楕円形のものなどが混じる形で巡らされている。内面は横方向の擦でが入れられていて、器表面に比較して平滑である。色調は淡黄褐色を呈し、胎土は精選されていて砂粒を含まず、1と比較して微砂粒を含まない胎土となっている。8は3×4mmの角張った刺突が列点文として、器面に対しや斜め方向に施されているもので、器表面には數条単位にまとまった擦痕が不規則な方向をもった形で入っている。器面調整の擦痕であろう。色調は淡褐色を呈し、胎土には微砂粒が混和されている。1や6とは異なる時期での所産であろう。

3類 9・10はE16グリッドから出土したもので、同一個体と推定される。方向を変えた長さ7mmの刺突が千鳥足状に横位置に施文されていて、施文された部分が凹線状に窪むような状態となっている。器表面は滑らかであるが、内面では胎土の微砂粒で滑らかさを欠いている。明茶褐色を呈し、焼成は良好である。10の内面では炭化物の付着が全面に見られる。

4類A 11～16はF16グリッドから出土したもので同一個体と推定される。16では高さ3mm、幅6mmの断面三角形の突帯が巡り、上下に逆方向に向いた爪形の刺突が施されている。上位置の刺突が長さ9mmで深く施されていて、下に位置するものは長さ6mmで浅くつけられている。縄文は幅約2.5cmの結節回転文が巡らされている。色調は褐色から淡黒褐色を呈し、胎土にわずかに微砂粒が混和されている。内面は粘土組接合部分での器壁のばら



第33図 遺物出土状況図（●土器、▲石器）

つきが凹凸となって残っているが、全体は撫でによって滑らかになっている。17は同じグリッドから出土しているのであるが、器體が厚くなっていることや縄文の擦りが丸くなっていることなどから別個体としたが、同一個体の可能性もある。胎土には長さ6mmの大砂粒があり、微砂粒が多く混和されている。内面は淡黒褐色を呈し、平滑に調整が施されている。

4類B 94は半截竹管文のようにも見えるが、横位置に爪形文を置いていくものである。縄文は結節回転文のようにも見えるが確定はできない。暗褐色を呈し、内面は帯状の凹凸が見られる。胎土には若干の微砂粒が混和されている。

5類 18はC18グリッドから出土したもので、屈曲部分が突帯状になっていて、上位置に突帯に沿うような形で爪形が横方向に施されている。地文の縄文はR Lの幅約1.2cmのもので、圧が強くなったり弱くなったりと不揃いな形で入れられている。内面は横撫で調整で、屈曲部には押圧痕が見られる。淡茶褐色を呈し、胎土には若干の砂粒が混和されている。

6類 19~25は同一個体に推定できる深鉢で、24・25を除いてD15グリッドのSK53(風倒木痕)から出土している。同土坑からは27と図示しなかったが1に類似する破片が出土している。24・25は隣接するE15グリッドから出土しているが、土坑の上層に有ったものである。23・24は口縁部片で、口唇外側の縁に刻みが入れられている。縄文は上端が丸くなるループ文で、長さ約3cmのものが約2~2.5cmの間隔で巡らされている。色調は淡褐色を呈し、口縁部、脣部の破片の一部に炭化物の付着が認められる。胎土には目につく妙控は見られず、1の胎土と類似しているように観察される。内面の調整は粘土紐の状態を残した凹凸がある部分と平滑に整えられた部分とが見られる。図示しなかった破片の中に、補修穴が穿たれているものがある。

7類 26~28は同一個体に推定できる小型土器で、26はSK53(風倒木痕)から出土している。口縁部が外傾し、折り返した粘土で段をつけ、脣部と同じ縄文を施している。内面には炭化物の付着が顕著である。淡褐色を呈し、胎土には若干の微砂粒が混和されている。

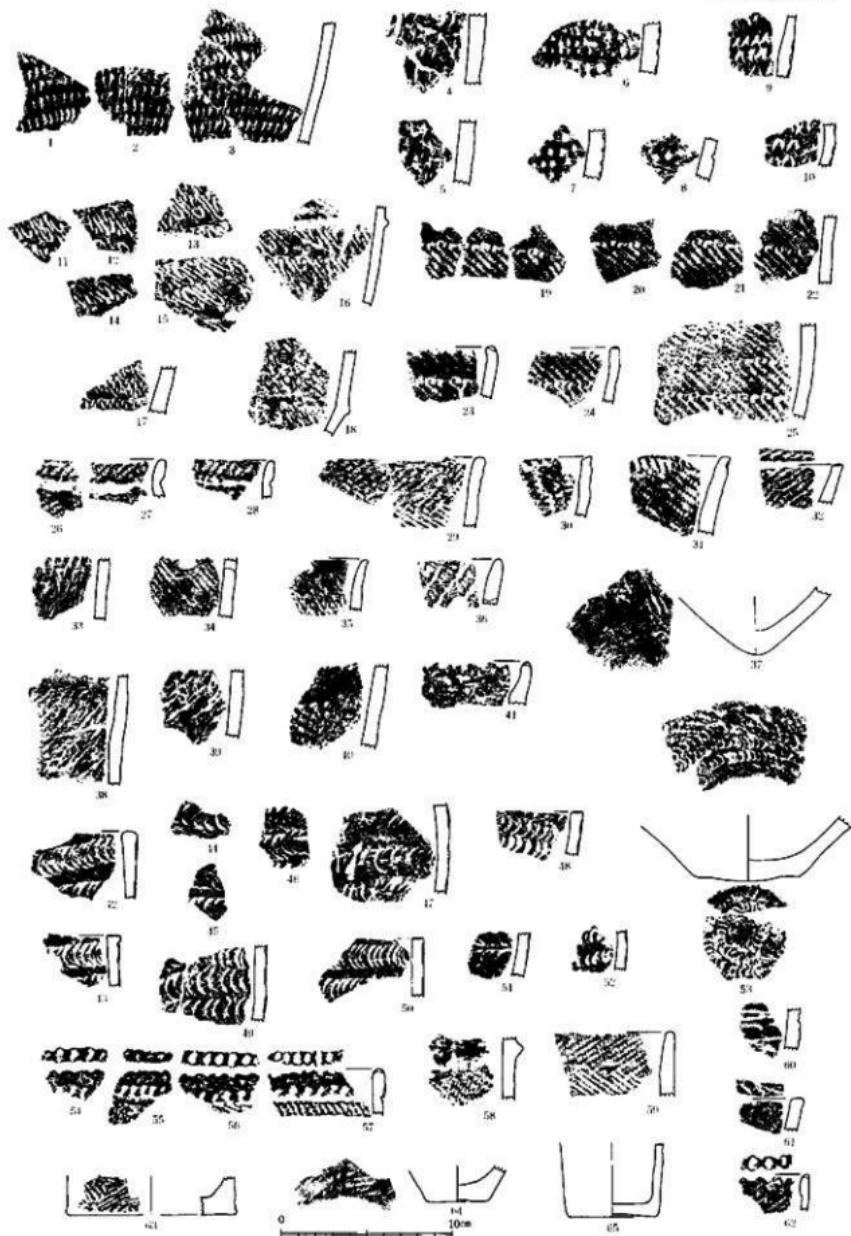
8類 29はE14グリッドから出土した縄文施文の口縁部で、不安は残るが縄文の長さが2cm強と短く羽状となっていることから細分したものである。淡茶褐色を呈し、胎土には若干の微砂粒が混和されている。内面には横方向の調整が入れられ、多数の条線が観察できる。

9類 30はD15グリッドから出土した口縁部片で、口唇はわずかに外に角張った状態に形成され、端部から長さ1.8cmの貝殻腹縁状の原体を斜め角度に入れていくもので、縦方向に稜が出るようになる。口縁端部近くでは施文が薄くなっているのは横撫で調整が施されているためである。内面の調整は凹凸が不規則な状態で残っている。灰褐色を呈し、胎土には多量の微砂粒が混和されている。

10類 31はD17グリッドから出土した口縁部で、貝殻腹縁状の工具によって口縁端部から縦方向に施文が入れられ、体部へは粒の大きな斜行縄文が巡らされている。内面の調整や色調、胎土は9類に近似した在り方を示している。

11類 32はE14グリッドから出土した口縁部で、口唇と器表面に同じ原体を使用したと推定できる条線が入れられている。先の貝殻腹縁状工具を逆向きに利用したものではないかと思われる。器表面には炭化物がわずかに付着し、淡褐色を呈し、胎土には微砂粒が若干混和されている。

12類 33・38・39はF15グリッドの同一地点から出土したものであるが、色調はそれぞれ大きく異にしている。斜行する線は擦糸文のようにも思えるが、縄文の粒が全く見られないことから、繊維を巻き付けたものを回転させている可能性が考えられる。38の内面は幅2cm強の板状工具による撫でが入れられ、細かな条線が巡っている。なお、内外面ともに炭化物の付着が見られる。色調は淡褐色から暗褐色までの幅があるが、胎土はほぼ同様に微砂粒が多く混ざっているために、器表面はザラついた感じである。34は補修孔のある脣部片である。37は丸底に推定したものであるが、小片であるために器形については不安が残る。D18グリッドから出土しているもので、端部に疎らな状態で擦糸文、あるいは条痕状の施文が入れられている。底部の底の丸味には使用による磨耗などは観察できない。淡茶褐色を呈し、胎土には石英の顯著な混和が認められる。



第34図 繩文土器拓影実測図(1)(1/3)

13類 35はE13から出土した小波状を呈すると推定される口縁部で、口縁端部が外展するように成形され撫によって無文化されている。小片のため明瞭でないが、幅約1cmの結節回転文が巡らされている。内面の調整は若干の凹凸を残し、擦痕の見られる横撫でが入れられている。暗褐色から淡黒褐色を呈し、胎土は精選されている。

14類 36はC13グリッドから出土した口縁部で、径1.2cmの補修孔が穿たれている。口唇は丸味をもって整えられ、内面の調整は判然とはとらえられない。繩文原体は付加条と見られる。淡茶褐色を呈し、胎土にわずかな微砂粒が見られる。

15類 40はE15グリッドから出土したもので、斜行繩文と条痕が見られるが、一部で羽状繩文のようにも観察できる部分がある。内面の調整は横方向と斜方向の擦痕を残す撫でが施されている。茶褐色を呈し、胎土には多量の砂粒が混和されている。41はK15グリッドから出土したもので前期の所産とするには不安を残す。口唇部に斜めないしは横方向の不揃いな刻みが入れられ、口縁部には横方向の条痕調整が施されている。口縁部の内面はわずかに内湾するように形成され、肩部で器壁が比較的厚くなっている。

16類 53はC17グリッドから出土した底径6cmの底部で、底部中央が膨らみを持ち体部への立ち上がりは緩やかである。底面には同心円状に幅7mmの爪形刺突列が、体部にも同様の施文が施されていて、その上には斜行繩文が巡っていく。内面は撫で調整でわずかに凹凸が出ている。色調は茶褐色を呈し、胎土には微砂粒が多く混和されている。

17類A 42~47・49~51はD16グリッドから出土しているもので、C字形爪形文の在り方や口縁部の整形から同一個体とも推定されるが、45~47の内面には炭化物の付着が顯著ではあるものの、他の資料では残っていないことから別個体の可能性がある。42の口縁部は波状口縁部分であるが、台形状あるいは鐘状の波頂部となることは判然とはしない。口唇部は角張ってわずかに肥厚し、連続刻みが巡る。C字形爪形文の幅は1.5cmで、端部だけが明確に刻まれている44~46や、爪形文の間が破綻状になる51などの違いを指摘できる。一個体の中での違い個体での違いかは判然としない。淡茶褐色を呈し、42・43には煤の付着が認められる。内面は撫でによって整えられている。胎土は精選されていて、微砂粒が混和されている程度である。

17類B 48・52は幅が短く、C字形の原体幅が広がる傾向にあるもので、前者はE17、後者はT13グリッドからの出土である。48は角張った口唇部に連続刻みが入れられている口縁部で、逆C字形の爪形文が巡っている。外周には炭化物が付着している。内面には粗い撫でが入り、灰黒色を呈し、胎土は精良である。52は内面が剥落したような小片で、上下がはっきりしないことから逆C字形爪形になる可能性もある。淡茶褐色を呈し、胎土は良好である。17類は北白川下層I b式期が想定される。

18類 54~57はD17グリッドで検出したもので、同一個体に推定される。口縁部は折り返しで、体部と段が形成されるのであるが、段が不明瞭となっている部分もある。口唇と段の端部に同一工具による列点文と深い刻みが巡らされていく。体部へはLRの繩文が転がされ、口縁部は素文となっている。淡褐色を呈し、胎土に若干の砂粒が混和されている。

19類 58~62はその他の時期不明の破片で、58はN16グリッドから出土した断面三角形の穴帯を付けている。59はE16グリッドから出土した非結束の羽状繩文を付ける口縁部で、異なる原体を回転させている。口縁端部が薄く成形されていて、内面には擦痕が顯著に残る横撫でが施されている。茶褐色を呈し、胎土には若干の微砂粒が混和されていて、焼成は良好である。60は半截竹管文が引かれている断片で、E15グリッドから出土している。61・62はE14・17グリッドから出土した口縁部で、61には口縁部に斜めの刻みが、62には深い列点文が置かれている。後者の口縁部内面が折り返して段が形成される。

20類 165・166はF16グリッドで検出した集石炉跡S19の検出面で発見された土器片で、165では横位置に爪形文が施されて文様帶を区画しているものと考えられる。166は口縁部で、口縁端部から間隔をおいて結束繩文が転がされている。

21類 63~65は底部片で、63は縦位置の羽状繩文が見られ、平底から急激な立ち上がりを示している。64は底

径3.6cmの小型品で、器面にわずかな縄文施文がみられる。平底である底面の調整は粗雑で、内面には工具を撫で回した圧痕を見ることがある。なお、内面に赤い付着物が認められるが、内容は不明である。65は底径5.2cmを測る筒状の体部を持つ底部で、器面にわざかな凹凸を残すものの丁寧な仕上がりで、器壁は薄目となっている。底面は中央が窪むような成型となっている。

22類 66～70・75は縄文地に粘土紐を貼付するもので、E16グリッドを中心にして出土した。66・67・69は同一個体と推定でき、縄文原本が異なるもので羽状縄文を巡らし、幅3～4mmの粘土紐を貼付している。66では曲線の貼付の後に平行線の貼付を行っている。いずれも上下がはっきり確定できるものではなく、66などは屈曲部にあたるもので、肩部片と考えられ、垂下する三角形区画文の可能性が考えられる。淡褐色を呈し、器表には煤の付着がみられる。68・75はE15・13グリッドから出土している同一個体と考えられるもので、内外面ともに淡黒褐色を呈している。75は肩部の屈曲部位にあたり、内面に撫でによる擦痕が見られる。70は口縁部片で内側に端部が肥厚していて段を形成している。蜆ヶ森式ないし福浦上層式に比定できる。

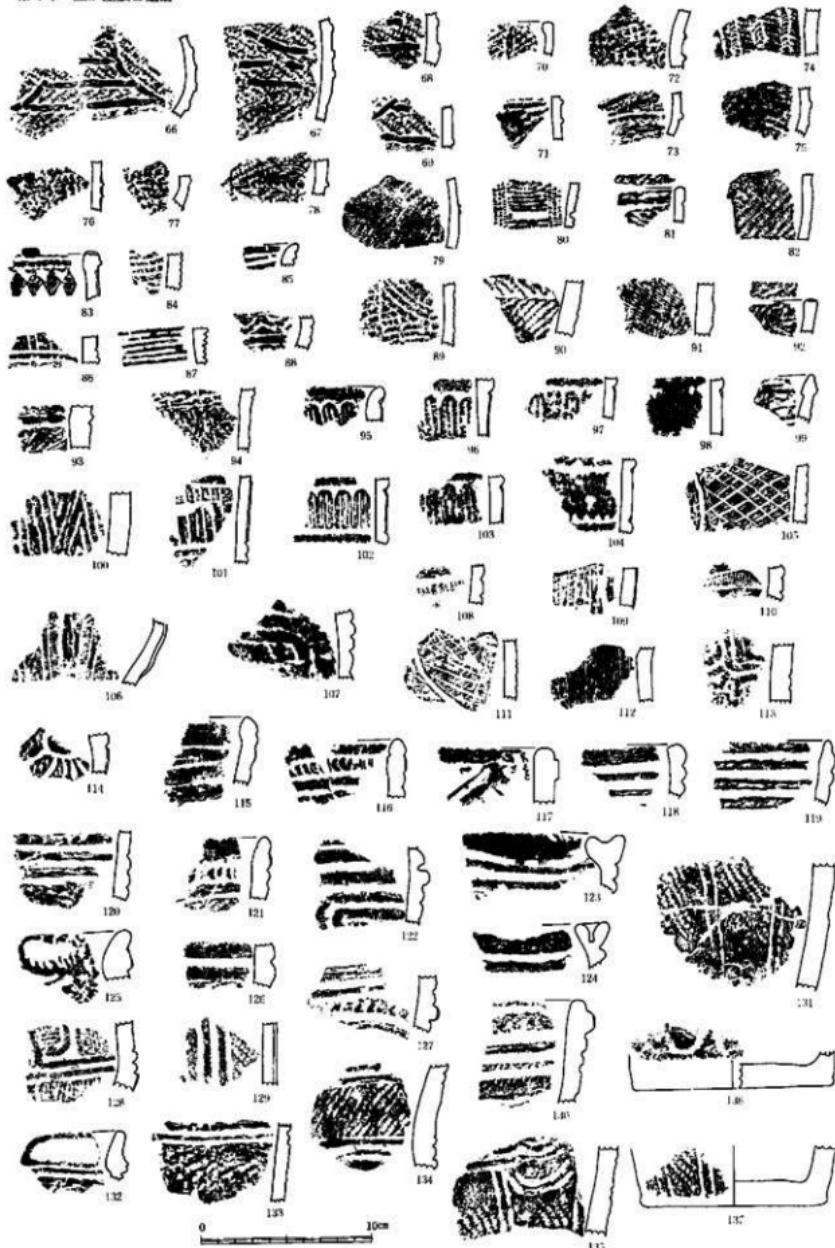
23類 71～74・76～79までは結節浮線文（沈線文）が施文されているもので、E16グリッドを中心にして比較的広い範囲から出土している。77はSK32からのもの。78は結節沈線文をついているもの。71は幅2mmの細い浮線に間隔を置いた結節が施されるもので、地文は素文のようである。72は比較的厚手のもので、頸部の屈曲部位にあたると推定され、縄文地文に結節よりやや太めの粘土紐が貼付されている。73は浮線文の間が撫でによって素文化され、浮線文の上端が沈線となっている。また、結節は日立たず浮線文の断面形が三角形となっている。74は縄文地文に幅のある結節をつけない浮線と撫く細かな結節をつける浮線文とが平行して置かれている。結節は鉤状に角張ったものである。77は湾曲していることから口頸部片と見られるもので、縄文地文に結節浮線文が置かれている。78も縄文地文にやや幅のある結節浮線文がつけられている。内面は平滑に整えられている。79は付加条縄文地に大部分は剥落しているが結節浮線文が、曲線的に貼付されている。内面は平滑に整えられている。76だけが結節沈線文で、幅5mmの工具がやや間隔を開いた結節文を施文している。器表は摩耗が進んでいるが、内面は堅緻な状態を保っている。福浦上層式土器である。

24類 80・83～87～89・132は細い半截竹管状工具で施文を施している。E15グリッドを中心としその周辺から出土している。80は結節付線文で区画を形成し、平行線間を彫去する施文をとり、上端部では曲線的になるとこから渦巻文が展開しているものと推定できる。淡褐色を呈し、胎土には散砂粒が混和されていて、焼成は堅緻である。83は特色のある口縁形態を取る前期末葉の深鉢で、粘土紐を前後に貼付して口唇部を肥厚させ、その上に板状のものをさらに貼付して突起としている。口縁端部にはやや粗雑な結節浮線文が付けられ、鋸歯状彫去が上下向かい合わせに入れられている。褐色を呈し、胎土には砂粒の混和が目立つ。84・89の渦巻き文を構成している断片で、85は内側がそがれたようになった口縁部片である。88は湾曲しているところから口縁部片と推定され、ジグザグの施文が入れられている。87は竹管文の彫り込みが深くなっているもので、内面が湾曲しているところから口縁近くの断片と思われる。132は翼状突起に捻りが加わっている口縁部で、口縁端部に接合して痕跡を見ることができる。胎土には砂粒が多く混和されている。福浦上層式土器である。

25類 81・82・90～92は不明の土器片で、81は端部が僅かに肥厚し、口唇に縄文が施文されている。淡褐色を呈し、胎土、焼成とも良好である。82は頸部片で、90は羽状縄文を付けた厚手のもの、91は偏平になった縄文施文のもの、92はやや肥厚し面をとった口唇部に、斜めの沈線が施されているもの。

## (2) 第2群土器(中期)(第35図、図版50)

1類 86・92・100・101は中期前葉に位置づけられる断片で、86はE15グリッドから出土している。内面にわずかな屈曲が見られるところから口頸部と推定され、間隔を置いた縦の半隆起線の在り方から新保式と言える。92はE16からの出土で、器壁が1.2cmと厚手で、幅7mmの半截竹管文が引かれている。縄文はやや粗雑な斜行縄文である。100はD15グリッドのSK53(風倒木底、前期の上器も出土している)からの出土で、木目状撚糸文が施文された厚手の体部片である。101は口頸部片で、縦の半隆起線が間を置かずに入れられているところから新保



第35図 繩文土器拓影実測図(2)(1/3)

Ⅰ式期の所産と思われる。淡黄褐色を呈し、胎土は精選されて砂粒を含まず、焼成も良好である。

3類 98・104はともにF14からの出土で、横位無文帯に連続刻みが入れられているもので、新崎Ⅱ式土器に位置付けられる。98では窓先でこじるような形で刻みを施しているが、104では角張った工具で対となる形に入れられているようだ。

4類 105～114は体部の断片で、時期を確定するのは困難なものがある。105・111は窓先による斜格子目文が引かれているが、区画文となる施文は太めの窓先と見られ、中期後葉段階の所産と推定される。淡黄褐色を呈し、胎土は良好である。106は口縁部片で、縄文地文に間隔が狭まつた縦の半隆起線が降帯に平行して入れられており、新保Ⅱ式期の所産が考えられる。淡褐色を呈し、胎土には砂粒が若干混和されている。器表面にはわずかな煤の付着も見られる。107は幅9mmの扁平な半隆起線文が引かれている。中葉段階のものであろうか。108は半隆起線に細かな爪形文が施されるもの。109は半隆起線文に挟まれて残部処理的な平行線文が窓先によって入れられているもの。110も同じ様に処理的な施文で細かな平行線が入っているもの。112も浅めの平行線が見られる。113は厚手の器壁を持つもので、影りの浅い半隆起線文が引かれていて、渦巻文の一部と考えられる。淡茶褐色を呈し、胎土には砂粒の混和が目立つ。114は窓先による深い沈線文で、後葉段階のものであろう。

5類 115～131・133～137は中期中葉段階に推定した土器片で、出土位置は調査区の中央部から東側にかけての地区で検出されたものが多く、前期段階とは地点を変えているのが注意される。115～121は半隆起線が入る口縁部片で、115はK15グリッドからの出土で、内面が肥厚し尖り気味となる。口縁部に影りの浅い幅広の半隆起線が巡らされている。116はO18グリッドから得られたもので、幅広の半隆起線に爪形文が置かれ、内面に沈線が一条巡っていることから、121と共に古府式段階のものと推定される。117は三角形の区画文に平行線文を充填していくものと推定される。暗茶褐色を呈し、胎土には多量の微砂粒の混和がみられる。118はL15グリッドからのもので肉厚の半隆起線と口唇内側が角張っていることから中葉でも古い段階に当たる。119はK15グリッドからの出土で、粗雑な半隆起線が巡っている。胎土には砂粒が多く混和されている。120はJ12グリッドからの出土で、中央部が丸くならない軽い半隆起線が施されている。口縁部に近い破片であろう。122はU13グリッドから出土したもので、陸帯と半隆起線文が施されている。暗褐色を呈し、器表面には煤の付着が見られる。123・124はともにK15グリッドから出土した突起を持つ口縁部片で、同一個体の可能性も考えられる。板状に延ばしたものを持ち曲げて口縁端部を挟み込んで接合させ、上部をさらに粘土で埋めるという手法を123で見ることができる。淡黄褐色を呈し、胎土は良好である。古府式段階のものであろう。125はI13グリッドから出土したもので、突起部分の下に爪形文が施されているもの。126はN16、127はF17グリッドからのもので、傾斜面からの出土である。126は幅広の半隆起線文、127は爪形を持つ基隆帶が付けられている。128はII13グリッドから出土した体部の屈曲部位にあたるもので、細目の半隆起線文に囲まれた残部に窓先による刻みが入れられている。横方向の幅広の隆帶上には窓による押圧が加えられたために扁平になったものかと思われる。暗褐色を呈し、胎土には微砂粒が多く混入している。器表面には煤の付着が見られる。129は半隆起線と縄文地が見られるもので、古府式期の所産かと思われる。130はF15グリッドから出土した口縁部で、刻みを入れた扁平な隆帶と半截竹管の表を使用したような幅広の沈線が巡っていて、一部に縄文が見られる。131・137はE12グリッドSK61から出土した同一個体で、縄文地に半隆起線が間隔を置いて乱雜に引き下ろされている。133はT15からの出土で、体部下半部の位置に当たる。幅の狭い半隆起線で区切られた下半には、短いI.Rの縄文が粗く転がされている。褐色を呈し、胎土には微砂粒が多く混ざれている。134はH17グリッドから出土した口縁部片で、135はW12グリッドから出土したもので、粗雑な半隆起線で弧線文を置いた体部下半部である。古府式期のものに比定される。

6類 136・138～148は中期後葉に位置付けられるもので、調査区の東地区に当たるN15～17グリッドからの出土である。138・139・141・145は同一個体に推定できる深鉢で、狭い口縁帶に沈線による向かい合う区画文が施文され、口縁部の上下に連続刻みを置いた隆帶が置かれている、隆帶の下位には無文帶と縄文帶、沈線が巡っている。無文帶には145で見られるように、横位置の短い沈線が引かれている。明茶褐色を呈していて、他の土器とはかけ離れた色調で、胎土も砂気が強いもので器表はザラついた状態となっている。140は口縁端部が強く外傾

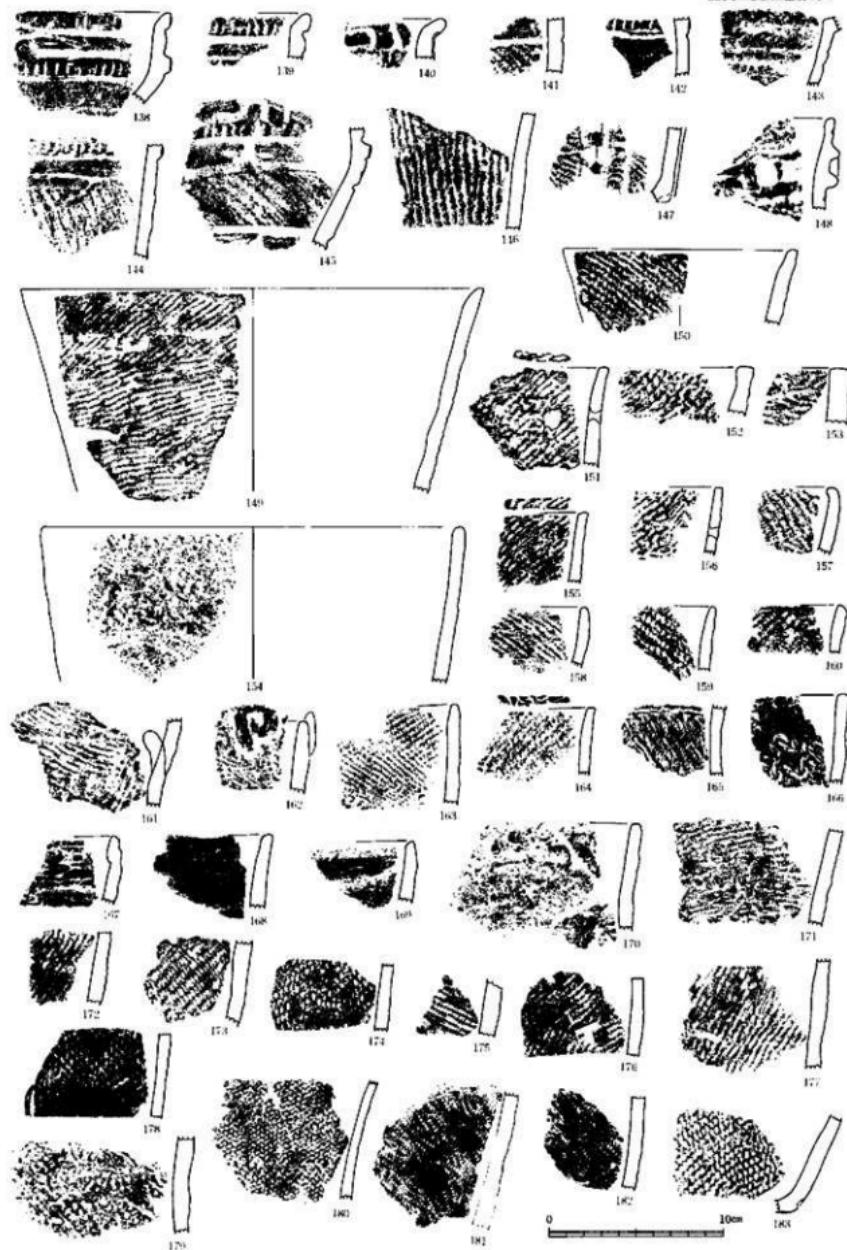
しているもので、先に比較して沈線の引き方が丸味を持っているのが特色である。色調、胎土は先の例と同じである。142・144・146は色調が暗褐色と類似していることから同一個体と推定される。隆帯上の刺みは笠先によるもので、櫛齒でも貝殻でもないのは先の2例と同様である。隆帯下位に無文帯が置かれた下に繩糸文が施文されているが、無文帯との境界が明瞭であることから繩文施紋の後に無文帯を作っているものと考えられる。147はM16グリッドから出土した底部近くの破片で、刺みを入れた縦の隆帯が底部にまで引き下ろされている。斜繩文を施文して隆帯を付けているのが観察される。淡茶褐色を呈し、胎土には多量の散砂粒が混和されている。136は147と同一グリッドから出ていて、色調、胎土が類似しているのであるが、文様構成から同一個体とはできない。底面の調整は丁寧で、平滑に整えられている。143は頸部片であるが、磨耗が進んでいて、文様構成が判然とはしないもの。148はG13グリッドから出土したもので、粗い隆帯で区画文を形成し、周辺に小さな列点文が置かれている。中期後葉の所産と考えられる。

7類 206・208はN・M15グリッドから出土しているもので、同一個体と推定される。幅の狭い沈線間に縱位置に置いた列点文が置かれている。列点文は下から突き上げるように施文するもので、端部に残が僅かに残されている。

8類 149～164・167～186は繩文施文、無文の土器で、時期的に確定することが困難なものである。149はE15グリッドから出土した口徑27cmに復元できる深鉢で、口縁部は斜繩文で、それから下は横位置で施文されている。内面は凹凸の著しい状態で、中期後半の調整かと思われる。灰褐色を呈し、胎土には砂粒が若干含まれている。体部下半には煤が付着している。150は口徑13.7cmに復元できるもので、口唇に軽く面が取られ、内外面ともに炭化物が付着している。151・155は同一個体と思われるもので、151には補修孔がついている。口唇にも同じ繩文が施文されている。内面は縱方向の凹線がかすかに残るようで、撫で上げて調整した痕跡かと考えられる。褐色を呈し、胎土は良好である。152は口唇を内部に肥厚させ、面取が施されている。153も厚手の土器で、口唇にかすかに繩文が施文されている。154は口徑24.6cmに復元できるもので、器面に面取を施したような撫での範囲が推定され、幅1.5cm、長さ3cm程度のものが斜位置に並んでいる。口縁近くは厚く煤が付着している。157はG17グリッドから出土したもので、口縁部が内屈している。158も内屈気味に立ち上がる口縁となるもので、内面は斜方向の撫で調整痕が見られる。159は外傾傾向に立ち上がる口縁部となる。161は内屈して立ち上がる波状口縁部で、波頭部を欠いている。口唇内面は端部を巻き込んだ状態と推定される。162はI15から出土しているもので、口縁端部に粘土紐で逆「」の字状の貼付文が見られる。163はE16グリッドから出土した羽状繩文を施文したもので、内面に擦痕を明瞭に残す調整が施されていて、前期の所産であろう。164はF17グリッドから出土したもので、口唇に爪形と推定される刺みが入れられている。内面の調整は丁寧で、凹凸はあるが平滑に整えられている。黄褐色を呈し、胎土は精選されている。前期の可能性が考えられる。

9類 167～170は素文のもので、167の口縁内面は折り返したもので肥厚している。168は口唇が丸く整えられ、器表面は比較的丁寧に調整されているもので、波状口縁深鉢の可能性が考えられる。明黄褐色を呈し、胎土内の砂粒の混和は少ない。169は内屈気味におさまる口縁で、胎土には多量の散砂粒が混和されている。170は内外面とも粗雑な撫で調整が施され、器表面の凹凸が甚だしく、中期後葉での位置付けが推定できる。淡茶褐色を呈し、胎土への砂粒の混和は少ない。

10類 174・178・183はF14グリッドからの出土で、底部片が残る183から大型浅鉢が推定でき、同一個体と見られる。繩文施文は丁寧で、重複部分の判別ができないほどである。183での器表面は淡赤褐色を呈していて、他の2片とは異なっているところから二次的火熱による可能性が高いと思われる。胎土には散砂粒が多量に含まれて砂っぽいものであるが、砂粒そのものの混和は認められない。181・182も同一個体と推定されるもので、繩文原体がやや間隔を置いているものと接しているものの2様が認められる。器表面は凹凸があって施文が届いていない部分もみられるが、内面の調整は良好である。172・176も同一個体でE15グリッドから出土している。内外面とも凹凸があり、器表面には煤の付着が見られる。171はE13グリッドから出土したもので、接合面を境にした凹凸が見られ、縱方向に転がされた繩文が施文されており、底部近くの破片と推定される。内面には炭化物の付



第36図 繩文土器拓影実測図(3)(1/3)

着が見られる。177はO段の縄文が施文されているもので、底部付近と想定される。179は発掘区の中央部、北斜面に位置するM14グリッドから出土したもので、中期後半段階の位置が与えられる。内外面とも器表面の凹凸が大きく、縄文原体が比較的大きくなっている。淡茶褐色を呈し、胎土には砂粒の混和が目立つ。180はF16グリッドから出土したもので、細かく施文されている原体が明確に把握できない。器面は縦方向の撫の後に施文している。色調は暗褐色を呈し、胎土は砂粒の混和が顕著であり、内面の調整はやや粗雑である。器壁が比較的薄く、調整や胎土の様相から前期段階のものと想定される。184は内面に接合の境が明確に遺存しているもので、内面の調整は粗雑である。186は縦位置に施文された縄文が巡るもので、全体に煤の付着が顕著である。内面の撫では1.3cm幅のT工具で、横方向に撫でられているが器面の凹凸は解消していない。内面の色調は灰黄褐色を呈し、胎土に微砂粒が多く混和されている。

### (3) 第3群土器(後期)(第37図、図版53)

187～217・224は後期に位置づけられるもので、調査区の北側斜面に当たるI17グリッドで検出されたS K39から出土したものが、後期前葉の気屋式土器の一括と考えられる。S K39から出土したのは、189～191・193・200・205・207・215・216・224である。

1類 187・188は急激に内屈する口縁部をつける無文のもので、187は丁寧に面取を行い、器面全体が平滑に整えられているが、188は口縁内屈の度合が弱く、やや粗雑な調整で砂粒が剥落したり突出したりした状態である。色調は共に灰黄褐色を呈している。

2類 189は口縁に粘土帯を張り付けて段を形成し、半円形の押圧部を囲んで2条の沈線が加飾される。主文様の間には角張った列点文が巡り、頸部以下には3条単位の縦縄文が右方向に施文されている。頸部の屈曲が明確に残っているところから、肩部の張った深鉢器形が想定できる。193は角張った列点文から同一個体と推定される。190・191は同一個体で、口縁端部が僅かに段を形成し、三角形列点文が巡らされている。先端の鋭い工具で、右下から上に突き上げるような形で施文され、右端は器面にすりつくようになっている。頸部以下には縦縄文が、口縁部施文の後に転がされている。口縁部の傾きは異なる形で図示したが、192と同一個体の可能性が高い。

3類 194～195はE15グリッド周辺から出土しているもので、同一個体と推定できる。口縁部に棒状工具による横位置の列点文が乱雜に施文されている。195も口縁部と見られ、端部に突起が付けられていて、波状口縁になる可能性が高いと思われる。196では縦位置の縄文が施文されている。淡茶褐色を呈し、胎土には砂粒の混和が顕著である。

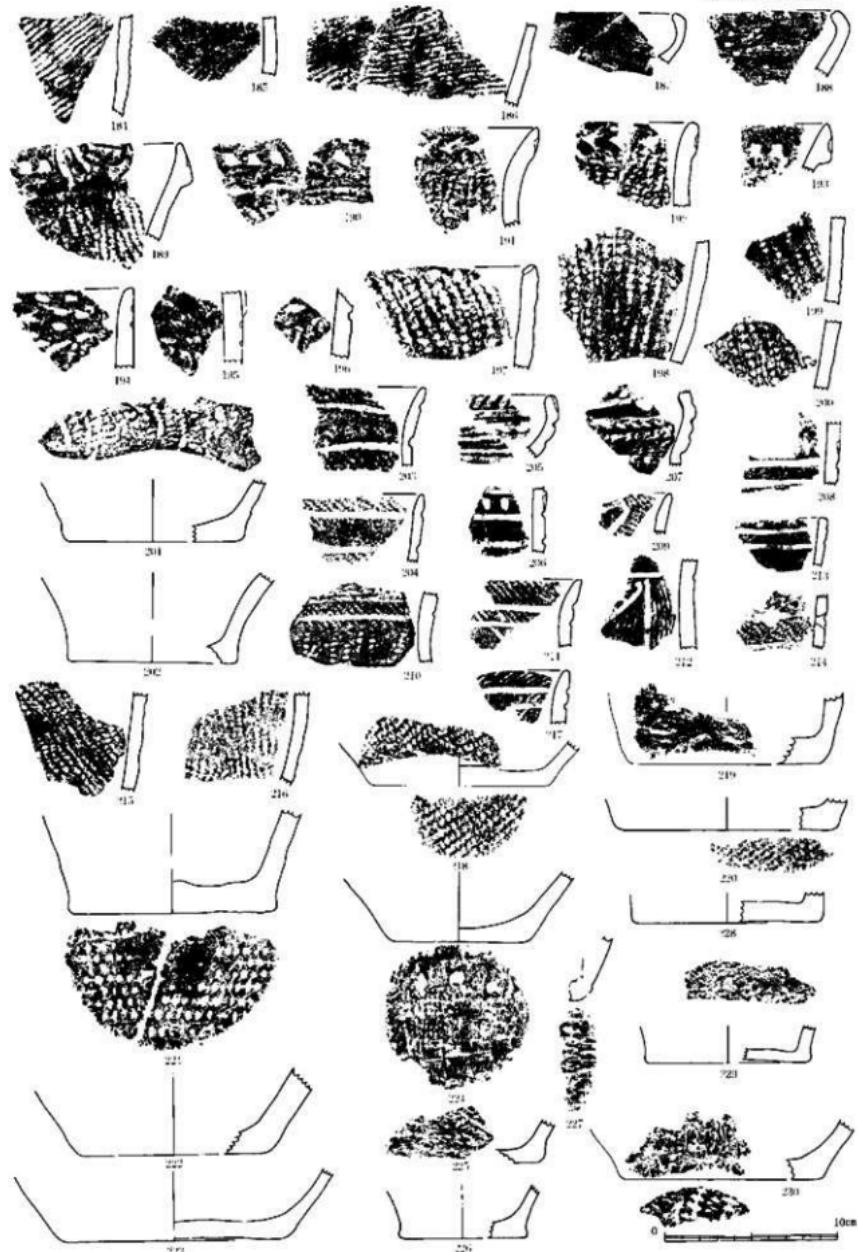
4類 197～201・215・216は縦縄文が施文されているもので、197は口唇部に深い斜めの列点文が付けられ、内面は平滑に整えられている。198では器表面に煤が付着している。

5類 205・207は同一個体で内弯する口縁部をつける深鉢で、口唇近くに左下がりの列点文が、口縁帯を幅広の平行沈線の溝底に棒状工具による列点文が施文されている。平行沈線の間には円形刺突が加わっている。色調は淡茶褐色を呈し、胎土は1～4類の気屋式土器とは異なって砂粒を含まない精選されたものとなっている。

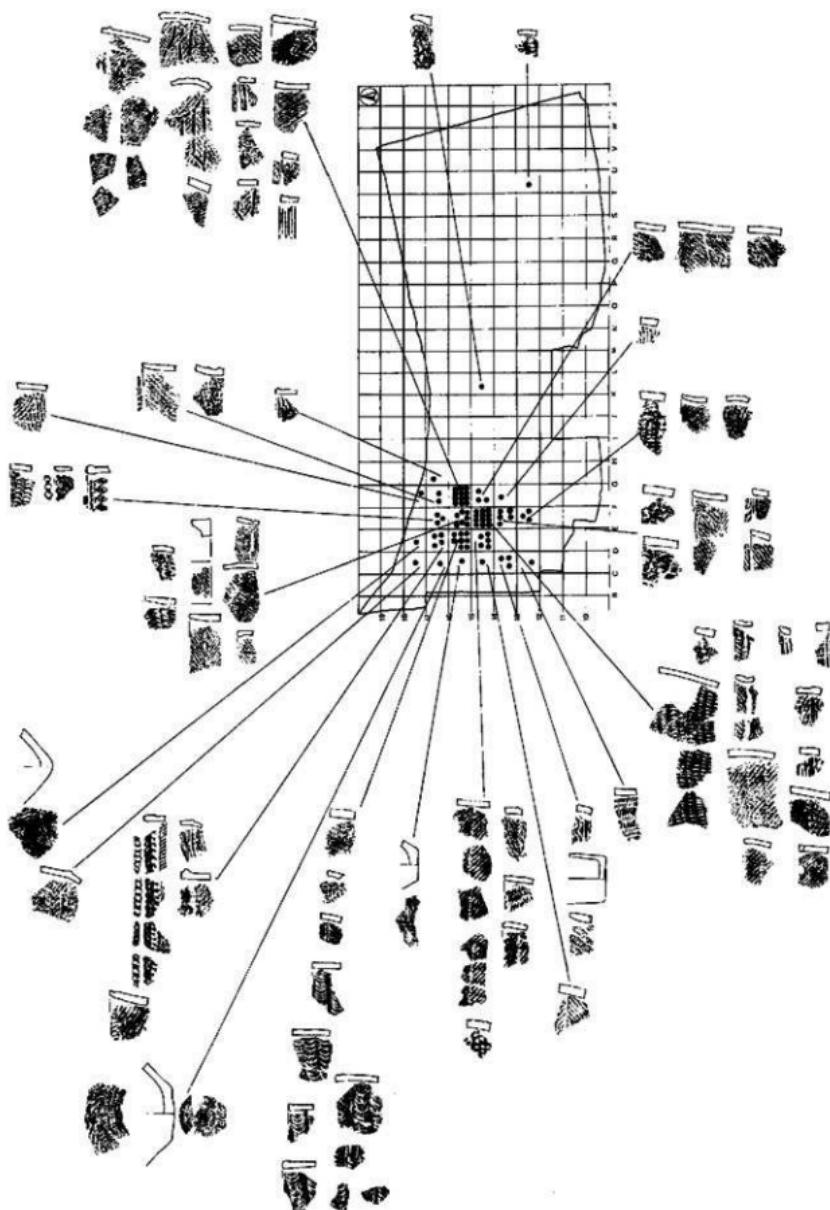
6類 203・204は尖り氣味で外反する口縁部に、幅広の沈線で区画を付けるもので、203は波状口縁を取るものと推定される。器壁は比較的薄手に成型され、胎土には微砂粒が多く混和されている。

7類 210は全体と頸部の縄文原体を変えている頸部で、体部が膨らむ器形を取るものである。該期の特色を良く示している上器である。色調は褐色から淡茶褐色を呈し、胎土には砂粒が多く混和されている。211は210と同一個体の可能性が高く、頸部に区画文が展開している。209・217は小波状口縁となるもので、217の口唇部には縦文が転がされている。212・217は同一個体に想定できるもので、沈線は彫りの深いU字状を呈している。内面は平滑に磨きが施されていて、器表面の縄文には煤が顕著に付着している。214も本類に含めて考えられ、器表面側からあけられた補修孔が見られる。

8類 213は丸朱を持つ口唇で、浅い平行線間により細かな縄文が施文されている。無文部も沈線で両されて

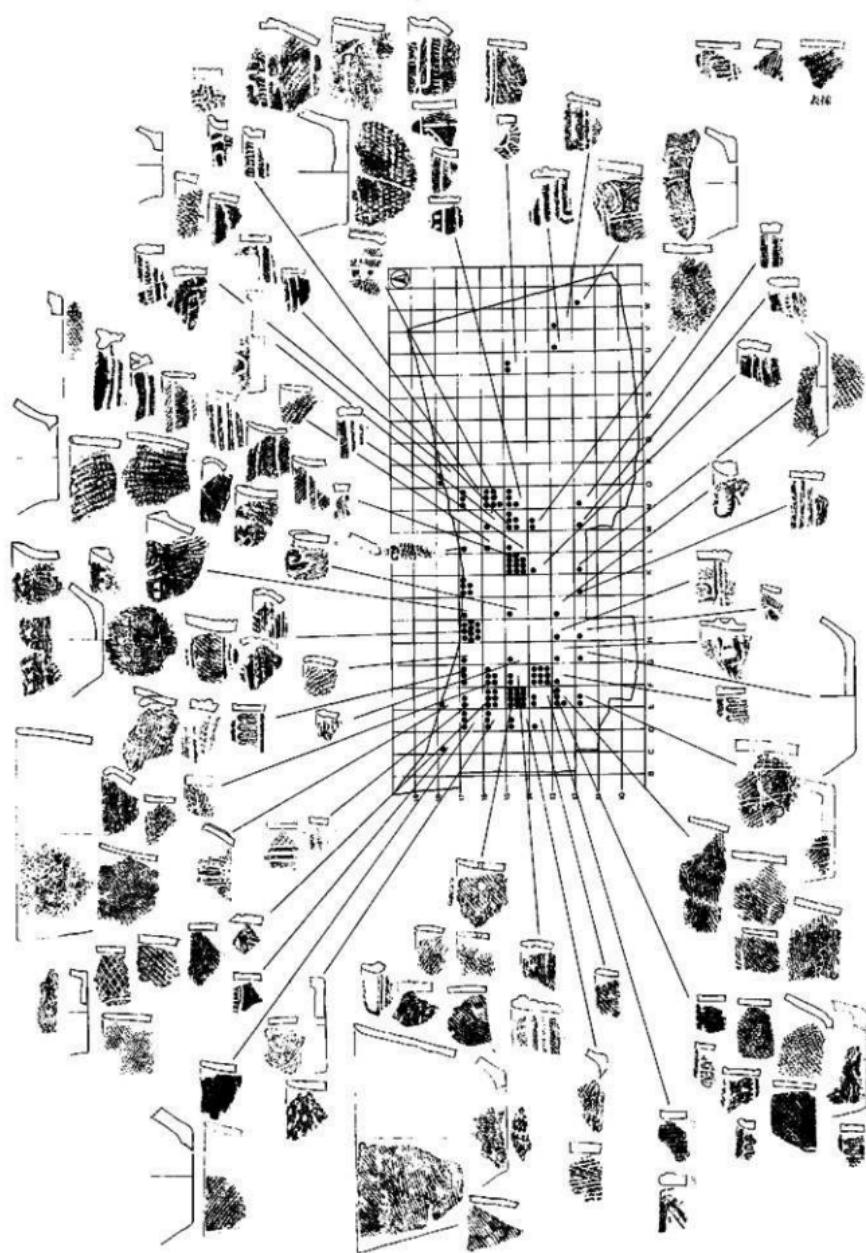


第37図 繩文土器拓影実測図(4)(1/3)



第38図 縄文土器クリット別分布図 新保式以前

第39図 繩文土器グリッド判分布図 新保式期以降



第2表 出土土器地点一覧表

番号	地点	遺物番号	実測番号	番号	地点	遺物番号	実測番号	番号	地点	遺物番号	実測番号
1	E15	4520	190	41	K15	26	186	81	F16	16	58
2	"	"	"	42	D16	4170	45	82	"	"	187
3	"	"	"	43	"	"	43	83	E17	2929	39
4	E14	4162	203	44	"	"	42	84	F14	4165	65
5	"	1611	204	45	"	"	"	85	E15	4543	60
6	E13	1308	206	46	"	"	"	86	"	5169	120
7	D15	3179	207	47	"	"	"	87	F16	428	40
8	E15	12	205	48	E17	4189	183	88	C14	974	151
9	E16	4753	209	49	D16	4170	36	89	F18	3056	124
10	"	4574	210	50	"	"	37	90	S K51	5302	185
11	F16	16	191	51	"	664	184	91	D16	664	147
12	"	"	"	52	T13	42	211	92	F16	16	61
13	"	"	"	53	C17	2661	212	93	H17	20	81
14	"	"	"	54	D17	2537	44	94	F16	474	126
15	"	"	"	55	"	"	"	95	F14	14	104
16	"	"	"	56	"	"	"	96	F13	5102	22
17	"	"	192	57	"	"	"	97	F14	1716	23
18	C18	5075	193	58	"	4293	112	98	"	14	84
19	D15	5303	216	59	E16	314	108	99	G15	2040	62
20	"	"	"	60	E15	113	64	100	S K53	5303	140
21	"	"	"	61	E14	4163	181	101	表抜		208
22	"	"	"	62	E17	2892	50	102	F17	17	21
23	"	"	215	63	E16	334	160	103	F14	14	80
24	E15	258	121	64	C16	858	161	104	"	"	26
25	"	4529	94	65	C14	940	177	105	F16	4168	8
26	"	4941	214	66	F16	411	56	106	E18	9	150
27	"	"	"	67	"	"	57	107	O18	4357	107
28	"	4376	48	68	E15	12	101	108	E17	2883	157
29	E14	4183	179	69	F16	474	123	109	K15	26	32
30	D15	813	200	70	E16	335	49	110	"	4327	155
31	D17	4785	182	71	G17	19	38	111	D16	3213	111
32	E14	4163	180	72	F17	4956	53	112	E14	13	85
33	F15	521	199	73	D17	5555	54	113	N17	4294	117
34	E15	4386	196	74	C13	4	46	114	T15	40	35
35	E13	1308	189	75	E13	1308	103	115	K14	5124	127
36	C14	3	188	76	F16	16	63	116	O18	4351	11
37	D18	4188	213	77	S K32	5290	106	117	E14	13	14
38	F15	521	195	78	D15	769	52	118	L15		24
39	"	"	197	79	E16	343	51	119	K15	26	13
40	E15	93	194	80	"	358	41	120	J12	4154	83

番号	地点	遺物番号	実測番号	番号	地点	遺物番号	実測番号	番号	地点	遺物番号	実測番号
121	M12	4318	12	161	P 17	4679	153	201	M14	4295	173
122	U13	4315	15	162	I 15	4173	113	202	J 17	4593	136
123	K15	4327	152	163	E 16	4168	90	203	K15	4327	131
124	"	26	33	164	F 17	17	96	204	"	"	145
125	I 13	4191	27	165	F 16	5260	28	205	S K 39	5277	142
126	N 12	4314	18	166	"	5261	102	206	N 15	4292	86
127	F 17	17	7	167	F 15	4164	110	207	S K 39	5277	143
128	H 13	2345	3	168	D 17	4464	68	208	M 15	4296	115
129	E 17	2883	10	169	M 15	4296	125	209	H 12	5507	156
130	F 15	4406	30	170	N 16	4293	89	210	K 15	4327	129
131	S K 61	5526	172	171	E 13	1308	91	211	"	"	130
132	E 15	1204	55	172	E 15	12	77	212	N 15	4292	88
133	T 15	5380	149	173	E 16	4168	29	213	M 15	4296	132
134	H 17	5550	6	174	F 14	14	69	214	K 15	4327	146
135	W 12	4195	4	175	表採		78	215	S K 39	5277	138
136	M 16	4321	163	176	E 15	12	73	216	"	"	139
137	S K 61	5526	172	177	E 13	1308	92	217	N 15	4292	87
138	N 15	28	2	178	F 14	14	70	218	K 12	4324	170
139	N 17	4294	118	179	M 14	4319	95	9	F 14	14	165
140	"	4294	119	180	F 16	443	100	220	K 15	4327	167
141	N 16	4315	34	181	E 15	12	98	221	N 16	4293	164
142	C 18	2826	47	182	"	"	79	222	D 17	4994	175
143	V 13	5326	154	183	F 14	14	166	223	G 12	5337	174
144	N 16	4293	9	184	E 15	12	72	224	S K 39	5277	158
145	"	4315	16	185	E 16	11	71	225	D 15	767	171
146	"	4293	76	186	E 13	1308	99	226	M 15	4280	176
147	M 16	4321	168	187	J 17	4593	135	227	L 17	4360	169
148	G 13	2309	89	188	F 16	417	25	228	D 16	528	178
149	E 15	4930	1	189	I 17	5115	17	229	E 16	5232	159
150	D 17	4802	114	190	S K 39	5277	140	230	R 15	12	162
151	E 15	57	109	191	"	"	"				
152	M 15	4296	116	192	J 17	4593	133				
153	F 16	16	66	193	S K 39	5277	141				
154	"	5260	122	194	D 16	664	19				
155	E 13	1308	93	195	E 15	4168	20				
156	E 15	258	128	196	E 16	4163	202				
157	G 17	19	201	197	J 17	4593	5				
158	E 15	176	97	198	"	"	134				
159	L 16	4323	105	199	表採		75				
160	D 14	1033	74	200	S K 39	5277	137				

いるもので、波状口縁深鉢の口縁部と推定される。淡橙褐色を呈し、胎土には多くの微砂粒が混和されている。

#### (4) 底部（第37図、図版53）

218～230は底部片をまとめたもので、時期的に特定できないものが多くなっている。218は底径約11cmの体部がゆるく立ち上がる浅鉢の底部と推定され、体部の織文施文から中期の所産と推定される。胎土、調整とも良好である。219は体部が膨らみを持って立ち上がり、粗く織文が施文されている。底部は丁寧に磨かれ平滑に整えられている。中期に位置付けられる。221は底径12.4cmを測るもので、幅の異なるもので1本越、1本潜、1本送の網代が認められる。内面の体部には炭化物の付着が見られ、底面は体部と異なり摩耗したような状態となっている。器表面では赤褐色を呈し、二次的火熱による変色が認められる。胎土には砂粒が多く含まれ、器表面の調整具合から中期後半段階のものと推定される。224はSK39から出土した後期気屋式の深鉢底部で、底径8.6cmを測る。内底面は面を取らずに、丸味をもっているのが特徴的である。体部は外面とともに微砂粒が浮き立つようなザラついた状態となっていて、化粧土を薄く横ナデしたものかと思われる。底面全体は二次的火熱により淡橙色を呈しているが、内面は黄褐色となっている。底面の網代圧痕は2種が認められ、中央付近のものが細かなもので、外周部分では幅6mmの繊維が平行して走るものが使われている。223はG12グリッドから出土した浅鉢底部で、底径13.5cmを測る大型品で、底面からの体部の立ち上がりは曲線を描いている。内面には輪積みの状態が残るような粗い擦り調節である。

#### 2 石器（第40～69図、図版55～59）

石器は土器の出土に比較して多く、多種多様な資料を検出した。しかし、遺跡立地の性格から遺構に伴ったり集中して出土するということではなく、所産時期を確定できる石器は形態的特徴が強く現れているものに限定される。出土状況を概観すると舌状丘陵の中央部分とその斜面、および南側谷地部での出土が目立ち、主丘陵の尾根斜面にあたる東地区ではごく散発的なありかたを示し、土器の出土状態に重なると言える。

石器の総数は282点を越え、内訳は尖頭器1点、搔器1点、削器1点、彫刻刀形石器1点、矢柄研磨器1点、溝状砥石5点、磨製石斧24点、打製石斧14点、局部磨製石斧1点、打欠石錐34点、石鎚7点、石錐2点、石匙6点、磨石類116点、石皿66点、玉2点で、他に鉄石英や珪質真岩の剝片多数が得られている。

実測は形状を止めているものを網羅する形で行い、ほとんど全点を図示することができた。磨石類では使用痕跡を充分に表示できなかったものもあるが、磨石類一覧表で使用状態を示した。

1 削器（231）（第40・41図、図版55） 尾根の中央部分、K15グリッドの杉の切株の下から検出したもので、表土層に近いレベルに位置していた。断面形状は不等辺三角形を呈し、一面には穂表皮を残している。表皮は凹凸が激しく、突出した部分は平滑となっている。剥離は図示の下の位置からなされたもので、背面は刃部の調整を除いては剥離面は一回だけである。外皮と内面の石質が異なるために境界が明確に現れている。先端部分の側縁には幅3.5cmに渡って加えられていて、その下では剥離幅が広くなっている。背面の下部には細かな押圧調整で刃部が形成されている。石質は淡灰色の珪質真岩である。

2 搔器（232） E13グリッドから出土した淡赤褐色の鉄石英質の完形品で、表面の一部に表皮を残している。上端から打撃を加え、下端は剥離調査痕が認められる。表面には側縁および上縁に細かな押圧剥離が施されているが、背面には調整を加えてはいない。表面の破綻は斜め方向にも走っていることから、横位置での調整が入っているものと思われる。

3 彫刻刀形石器（233） E12グリッドから出土した灰色の珪質真岩製のもので、図示した上端部に自然面を僅かに残している。上端部から打撃を加えていて、幅の異なる剥離面が並列し、剥離面の中央部分が窪むような状態となっていて、断面形状は台形状を呈している。背面には横位置での打撃が片側から加えられて調整されている。先端部分から片側には、やや粗い形で調整が施されていて、側縁部分は鋭角に近い状態となっている。こ

の反対側の側縁は一部に剝離調整で入れられ、整った刃部となっている。側縁の状態から、削器とした方が良いとも思われる、完形品である。

4 尖頭器 (234) D16グリッドから出土したもので、基部の先端は表皮を残している完形品である。長軸方向で粗い整形を行った後に、表裏ともに剝離調整を施している。剝離痕は図示した左側の面では、先端部から斜め方向に並んだ形で整えられているが、背面では調整方向が横、斜め位置と乱れている状態が観察できる。長さ5.2cm、重さ13.5gを測る。風化が進んで表面は濃灰色をなしているが、黒色の珪質頁岩製である。

5 剣片 (235~244) 定型的な形を取っていない剣片で、244の流紋岩質の例を除いて他は淡灰色系統の珪質頁岩質のものである。235・236・239は削器の231と同一石質のもので、235はJ16グリッドからの出土で、231の出土地点に近いと言えよう。表皮をはずして平坦に整えた上端からの加擊によって剝離した断面三角形状のもので、側縁での二次的調整は認めがたい。236は側縁に表皮を遺存させている薄い剣片で、表面の左侧縁に縦状剝離のような幅の狭い調整が施されている。238は側縁に表皮を遺存させ、弯曲した刃部には調整が入れられている。239はD17グリッドから出土したもので、上からの加擊による剝離面と斜め下位置からの剝離面が認められる。側縁には押圧剝離は見られない。243はF13グリッドから出土したもので、図示した上端に刃溝しの調整が見られ、その反対側の縁には剝離調整が認められる。

6 石鎌 (245~251) 形状の異なる7点の出土があった。245はE17から出土した流紋岩質のもので、基部、刃部共に調整が明瞭でない。246は片麻岩質の完形品での検出で、表裏ともに丁寧に剝離調整が施されている。刃部幅がしおり気味になっているのが特徴である。247は流紋岩質の尖端部を欠いているので、基部の抉りが深く整形されていて、比較的済手に作られている。248はU16グリッドからの出土で、周辺部に土器の出土が稀薄なことから獣に使用されて放置されたものと考えている。珪質頁岩質の基部の片側を欠いているだけで、表裏ともに入念に剝離調整が入れられている。中央部分がやや厚手に整形されている。249は東地区のL16グリッドからの出土品で、脚部の片側を欠損している。剣片の片側だけを表裏ともに剝離調整が施されていて、薄手の作りとなっている。250はE15から出土した黒色を呈した珪質頁岩質の完形品である。図示した左側に後線が偏っていて、表裏ともに丁寧に剝離調整が施されている。250はE15から出土した黒色を呈した珪質頁岩質の完形品である。先の250と同様に片側に稜線が寄っていて、先端部分で肉厚となり、基部はわずかな抉りが認められる。基部を含めて表裏全体に剝離調整が施される。

7 石錐 (245・253) 252はE15グリッドから検出した黒色の珪質頁岩質の完形品である。上端に表皮が遺存している。側縁は表裏ともに剝離調整が施されているが、上端部は一次整形のままとなっている。

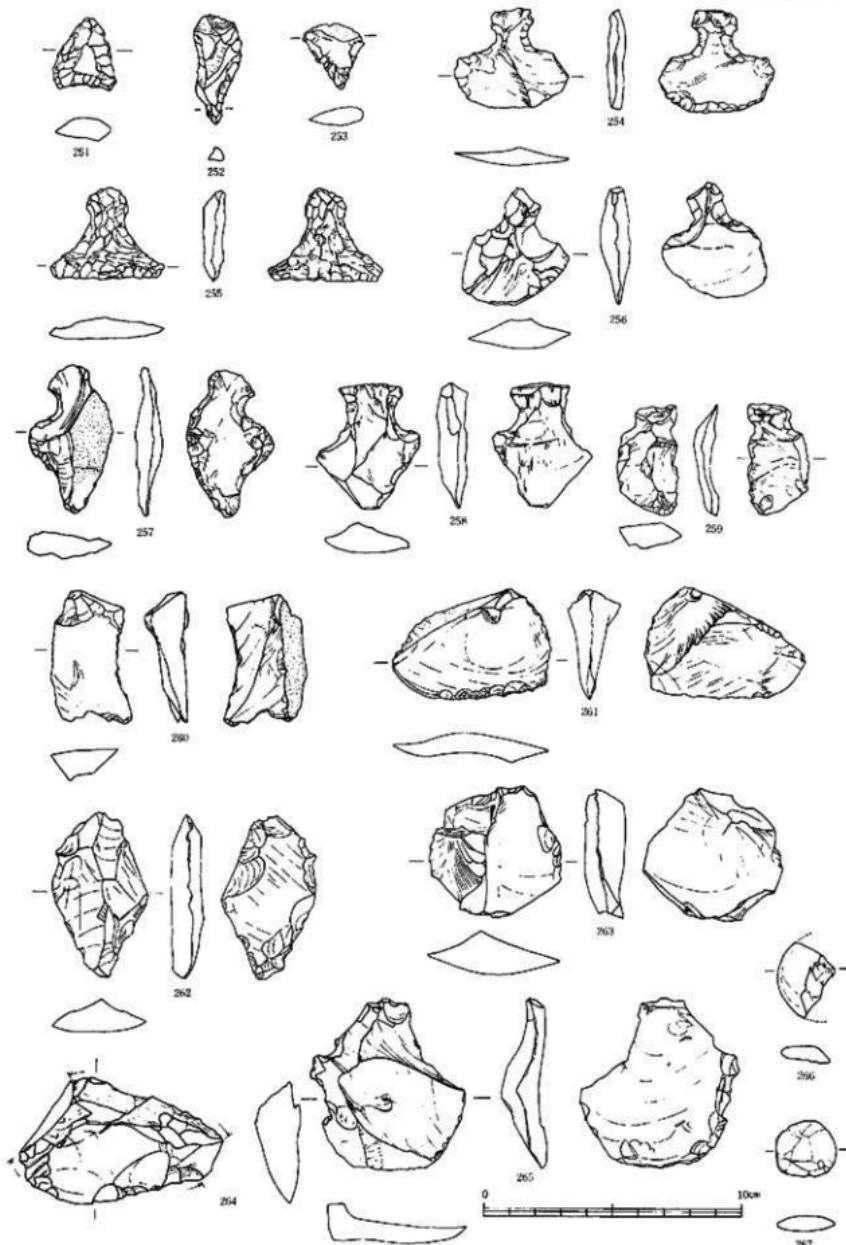
8 石匙 (254~259) 石匙は6点の出土で、縦型、横型共に3点づつである。丘陵部西端地区のF15・16グリッドを中心とする比較的狭い範囲での出土である。流紋岩質が2点で、外は珪質頁岩質である。245は抓み部の括れは表裏両面から調整が入れられているが刃部は片面だけで止どめている。剣片が取り出された時点での刃部に向かう稜線が端部になる位置では、調整は刃溝しに近い状況に整形されている。255は定型的な石匙で、表裏ともに入念な剝離調整が行われている。256は黄灰色を呈した珪質頁岩質の完形品で、さほど手を加えずに作られたものである。抓み部は表裏ともに剝離が施されているが、刃部は片側だけが細かく狭い範囲で調整が入っているだけとなっている。257~259は縦型の石匙で、257の片面に大きく表皮を遺存している流紋岩質の完形品である。抓み部とは離れて瘤状の突起が作り出されているのが特徴的で、その部分での器厚が最も厚くなっている。257~259は縦型の石匙で、257の片面に大きく表皮を遺存している流紋岩質の完形品である。抓み部の上端及び刃部の一端に自然面が観察できるもので、上端部では何度も加撃をしている剝離痕が見られ、刃部が片面からの剝離調整が成されているだけとなっている。259は灰黒色を呈した流紋岩質で、側縁に表皮を残している完形品である。刃部への調整が抓み部の調整に比べて少ないとから、右核から剣片が取り出された後、抓み部を整形して形を整えたものと推定される。

9 剣片 (260~265) 調査区の西丘陵部からは珪質頁岩の剣片、細片が多量に出土しているが、二次的に剝離調整ができるものは極めて少數で、図示した6点に止まる。傾向としては、比較的大振りの剣片が利用され

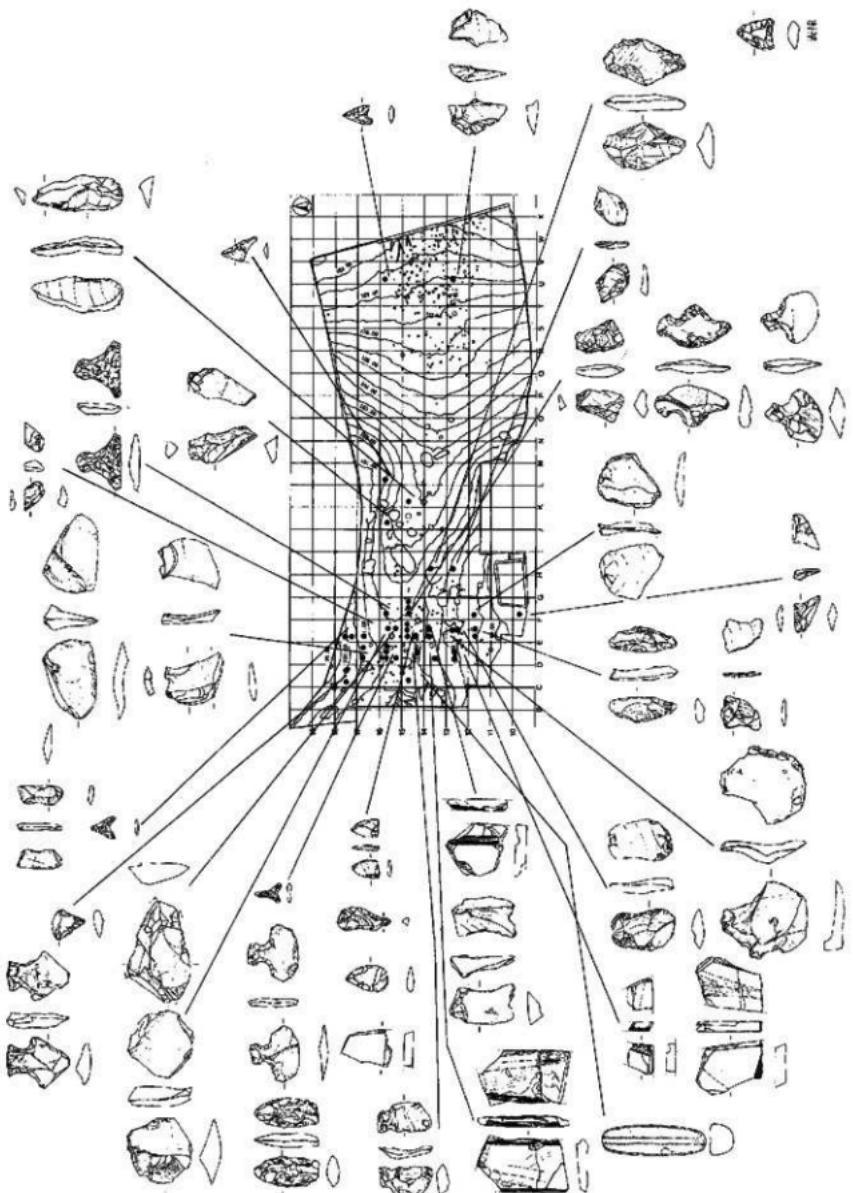


第40図 削器他実測図 (1/2)

能美丘陵東遺跡群 I



第41図 石器他実測図(1/2)



第42図 剣器・石器、矢頭骨器類器グリッド別分布図(1/4、1/6)

ていると言える。260は自然面を側面に残したもので、剝離調整で刃部を整えている。261も断面三角形状で、側面に残して、刃部には片面のみに剝離調整が施されている。262も断面三角形を呈し、側縁のない面で剝離調整が全体になされているだけである。264は平坦に近い背面のはほとんどは自然表皮を残しているものであるが、平面形は三角形に整えたようにも思われる。図示した左側刃流しの調整が、側縁は片側だけにやや粗雑な剝離が行われている。これらの剥片の所産時期を確定することはできない。

10 玉(266・267) 玉は2点の出土が見られ、東調査区のF16・18グリッドから得られた。石質はともに流紋岩質で、1点は残欠品である。267の完形品は径約2.2cm、厚さ0.6cm、重さ5gを測り、裏面はやや粗く平坦になされ、表面は中央部が盛り上がるような丸味を意図した磨きを施している。側縁も丸く整えられている。266も基本的な整形や磨きは同じと見られる。これらは穿孔を施して垂飾品とするのではないものと推定される。時期は不明である。

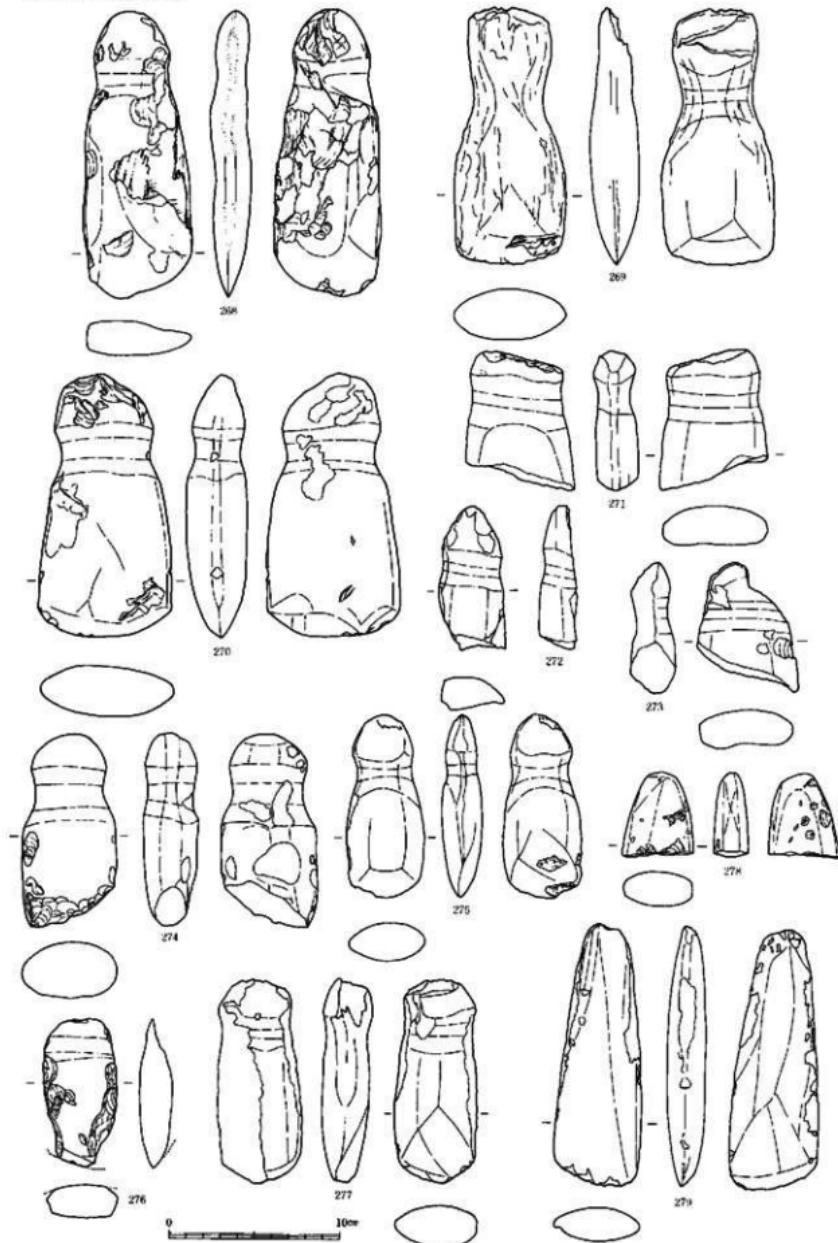
11 磨製石斧1類(268～277)(第43・44図、図版56) 頭部に溝を巡らせている類例の少ない形態を取るものと、磨製石斧1類とした。破片を含めて10点の出土が見られ、所産時期を特色づけるものとして注意される。出土地点は調査区西端の丘陵尾根筋で、E12グリッドを中心としている。石材は流紋岩と細粒砂岩が選択され、流紋岩質のものが7点である。細粒砂岩では風化のために、磨きの状態は観察できないようになっている。長さと幅のの大小によって、大・中・小に分けることができる。

1類A(268～274) 268は全長16.8cm、幅6.2cmの完形品で、比較的扁平な作りとなっている。表面は凹凸が目立ち、窪んだ部分で風化が進んでいるのは、使用中に欠損したものと推定される。頭部は丸味をもって整えられ、側縁はほとんど面を形成しない整形となっている。頭部のえぐりは幅約3cmほどで、断面形は皿状を呈し、深さ2～3mm程度である。側縁は体部においては幅の狭い面を形成するようである。刃部は両刃整形で、全体に良好な状態で遺存している。刃先は水平ではなく、片側が突出する整形で、使用による変化とも推定される。269も頭部の一部を欠損しているだけの完形品であるが、刃部と括れ部を除いて風化が進行して表面がざらついている。側縁は殆ど面を形成せずに、丸味をもっておさめられている。頭部と体部は厚みと幅が大きく異なっていることから、当初から括れ部と一体的に整形していたことが推定できる。270も全長15.5cmの完形品で、丸味を持った頭部の一部を欠損しているが、全体に磨き面を良好に遺存している。側縁は僅かながら幅の狭い面を形成しているが、括れ部分は丸く治められている。刃幅と厚みは出士例の中では最も広く、7.9cmと3.6cmを測り、重さは604gと類品中で最も重い。271は体部の片面が窪んでいる細粒砂岩質のもので、頭部を大きく欠損している。溝の幅は2.8cm、深さ4mmを測る。272は側縁部の残欠品である。273も頭部の残欠品で、偏平で丸味を持った頭部が窪める細粒砂岩質のものである。括れ部の端部尖り気味に磨いてある。274は刃部を欠損している細粒砂岩質のもので、尖り気味の頭部が括れ部の端部直上に位置する形態となっている。側縁は殆ど面を形成せずに、丸味を持って磨かれているようだ。

1類B(275～277) 275は風化が進んだ流紋岩質の小型の完形品で、出土の中では最小のもので、全長10.8cm、幅4.6cm、重さ143gを測る。頭部の側縁は明瞭な面を形成しているが、頭部端は丸く整形されている。刃部は丸刃で、両側を磨くのではなく片側だけを磨き込んでいる。287は刃部の一部が遺存しているが、剝離したために背面の状況は不明である。上部に抉りの溝が幅1.2cmで磨かれているのが浅いものであり、欠損した段階で新たに作り出されたものと推定される。刃部は両刃の丸刃を取るようだ。277は中型の完形品で、長さ12.1cm、重さ176gの流紋岩質のものである。頭部は体部に比較して僅かに厚手に整形されているのが特徴的である。刃部は丸刃で、片側だけが曲面を持つ片刃となり、刃先が歪んだようになっている。

12 磨製石斧2類(278～291) 頭部に溝を形成しない通常の磨製石斧を2類として分離したが、形態が個別に異なるような状態なので細分は行わず、個別に概略を記していく。出土地点は先の1類と同様に西地区丘陵の尾根筋を中心とした在り方を示している。石材は流紋岩が大部分で、凝灰岩質、細粒砂岩などが少數例となっている。完形品と頭部片は4点づつ、体部片1点、刃部片5点の計14点である。

279は長さ15.4cm、重さ267gの完形品で、頭部端および両側面の頭部側半分の磨耗が顕著に見られ、柄に着装



第43図 磨製石斧実測図(1)(1/3)



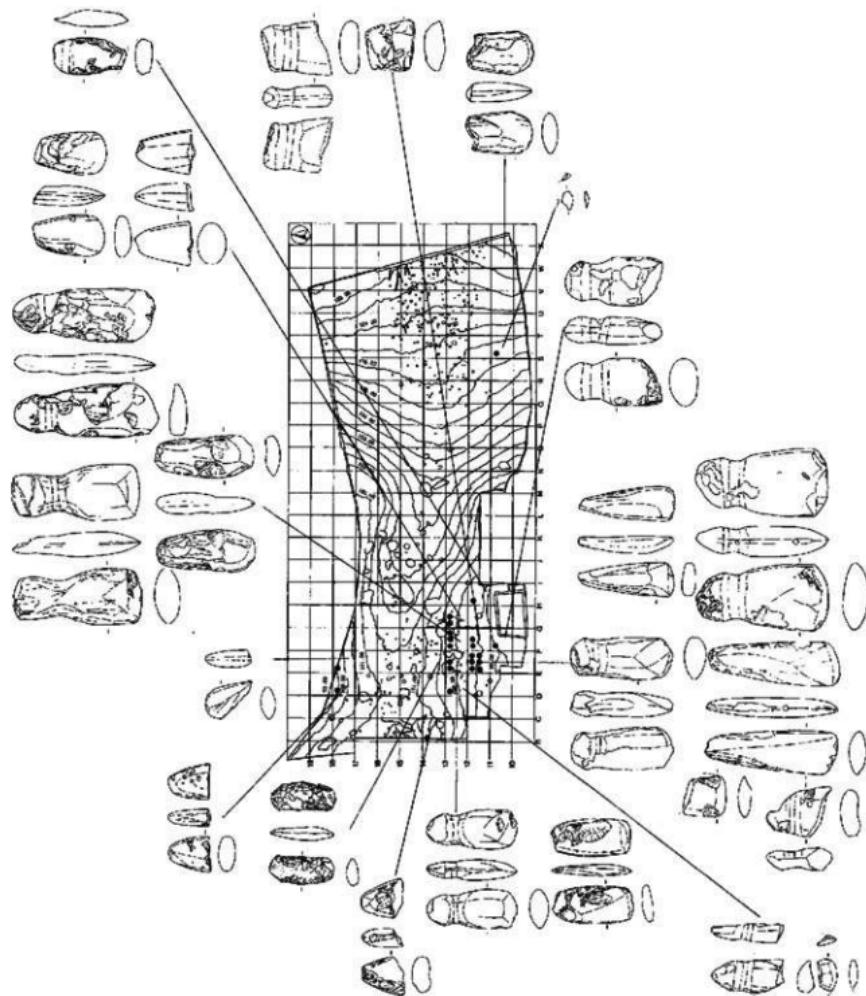
第44図 磨製石斧実測図(2)(1/3)

した状況を反映しているものと判断される。刃部は片丸刃の両刃であるが、片側部分の磨き込みが顕著である。287は頭部と片側縁の一部を欠損しているものであるが、279の刃部への成形をさらに進めていて、片刃に近い形状をとり、体部の湾曲も片刃を意図したもののように思われる。側縁の面はあるものの、定角式のような角が明顯ではなく丸味を取って磨かれている。

280は頭部の先端を欠いてくるものの、全形を止めている資料である。長さ9.6cm、重さ80gで、出土品の中で器厚が1.2cmと最も薄く作られている。器形は全体的に歪んでいて、欠損している頭部の器壁が薄くなっているのが注意される。側縁は丸味を持った狭い面が形成されている。281は片面と側面の風化が進行しているもので、長さ11.8cm、重さ190gを測る。全形は体部の中央部が欠損しているために、厚みのある頭部と薄くなった体部とでは歪んだような状態となっている。刃部は丸刃の両刃成形となっている。282は頭部を欠いているもので、刃部が片刃に近いかたちで一方が磨き込まれている。289でも同じような成形となっている。286は両刃成形である。283～285は頭部片、288は体部片、290・291は刃先の断片である。

13 局部磨製石斧(292) (第46図、図版57) 丘陵西地区、E14グリットから検出した凝灰岩質の小型完形品である。長さ7.6cm、幅3.3cm、厚さ1.5cm、重さ44gを測る。頭部近くには自然面を残していて、一角が欠損しているだけである。側縁の表裏から調整を行い成形し、刃部に限定して磨きが両面に施されていて、磨きが明瞭に認められるのは自然面を残さない方である。

14 打製石斧A類(293) 打製石斧は14例の出土が見られ、古相を示すものでA類として分離した。E12グ



第45図 磨製石片グリッド分布図

リットから検出した細粒砂岩質の短冊型の完形品で、長さ10.4cm、幅3.2cm、厚さ1.7cm、重さ81gを測る。頭部の一角に自然面を遺存させ、断面が三角形に成形されている。側縁の調整は表裏ともに行われているが、風化のために明瞭でなく、刃部は使用磨痕が風化かがつかみきれない。

15 打製石斧日類（294～306） 13例の打製石斧は西地区的丘陵からの出土だけでなく、東地区でも散発的な出土状況を示している。平面形状は撲型ないしは短冊型を呈しており、片面に自然表皮を残しているのが通例である。294は刃部を欠損しているもので、礫の曲面を利用した形状を取っているようだ。295は完形品で、長さ1.9cm、幅5.3cm、重さ139gを測る。側縁は表裏からの調整と片面だけの調整があり、刃部は両面から調整されている。296は刃部、頭部とも判別がむづかしいものである。297は流紋質の完形品で、長さ8.5cm、重さ139gを測る。側縁は表裏からの調整と片面だけの調整があり、刃部は両面から調整されている。298は刃部、頭部とも判別がむづかしいものである。297は流紋質の完形品で、長さ8.5cm、重さ56gの大きさで、側縁の調整が自然面を残す面でわずかに成されている程度で、裏面では一次剥離のままの状態となっている。刃部においても二次調整が行われておらず、使用磨痕も観察できないことから、打製石斧とするよりは側縁を使い刃器の可能性も考えられる。298は石英斑岩質の完形品で、長さ12.4cm、重さ260gを測る。表皮の縦線を左側に残して、側縁に剥離を加えているが、背面からの調整は粗雑である。299は長さ16.5cmと最も長い珪質頁岩質の完形品で、全体的に直線的で平板に作られている。

16 打欠石錐（307～339）（第48図、図版58） 打欠石錐は全体で34点の出土があり、欠損品3点を含めて33点を図示した。出土状況は丘陵西端の尾根上に集中する傾向を示し、他の地区では散発的な在り方を示していた。平面椭円形で偏平な自然縁の長軸両端に打撃を加えて組紐部を作り出すもので、長さ4.1～12.1cmの幅があるが、大きさは5cm前後の小型品と6cmを越える中型品、10cmを越える大型品に分類できる。重さでは中・小型品の26点が20～110gまでの間にあり、60g以下が19点と最も多くなり、本遺跡の打欠石錐は小型品が主体を占めていたと判断される。120～220gの間は空白で、230～440gまでの間に集中せずに散在している。

17 磨石類（340～451）（第50～59図、図版59） いわゆる凹石や磨石、敲石で複合した使用痕跡を残しているものを磨石類としてまとめた。出土総数は、116点と石器の中では最も多くの検出があった。選択されている石材は、遺跡の北側を流れている手取川から得られたと推定される河原石である。粗・細粒砂岩が大部分を占めていて、凝灰質角巖岩、珪岩、片麻岩、凝灰質流紋岩などが少数例として上げられる。

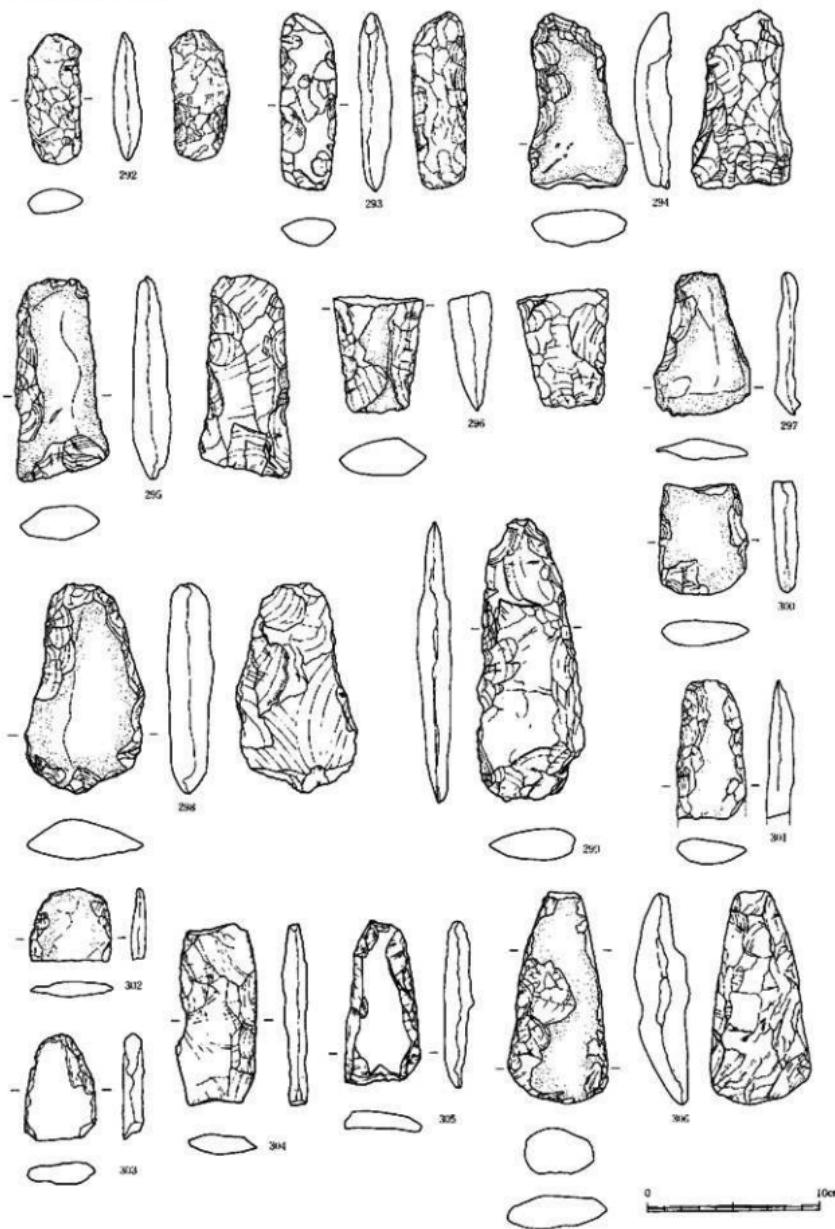
使用痕が明瞭な113点で複合痕跡をはずして見ると、片面だけに磨面を持つものは44点、両面使用のもの48点で、合計92点（81%）と割合が非常に高くなる。凹石では、片面で12点、両面で8点の合計20点（18%）である。側面に面取りがなされているものでは、片面では15点、両側面では19点の合計34点（30%）である。側面で敲打痕を見ると、片面だけでは8点、両側面を使用したものは41点となり、合計49点（43%）となる。側面で敲打痕と面取り面が複合する割合は少なくなることから、磨石類は磨き石と敲打石、振り潰すことと叩き潰すという作業に関わるもので大半が占められ、それに面取り石の押し潰すという作業に関わる道具は、石材選択の段階から分離しているものと考えられる。少数である凹石は、潰す作業とは異なる使用状況が推定される。

340～363までは片面ないしは両面が平滑になっているもので、磨石としての単純な使用状況が推定される。平面形は円形ないしは椭円形を呈し、完形品として遺存しているものが相対的に少なくなる傾向にあるといえる。

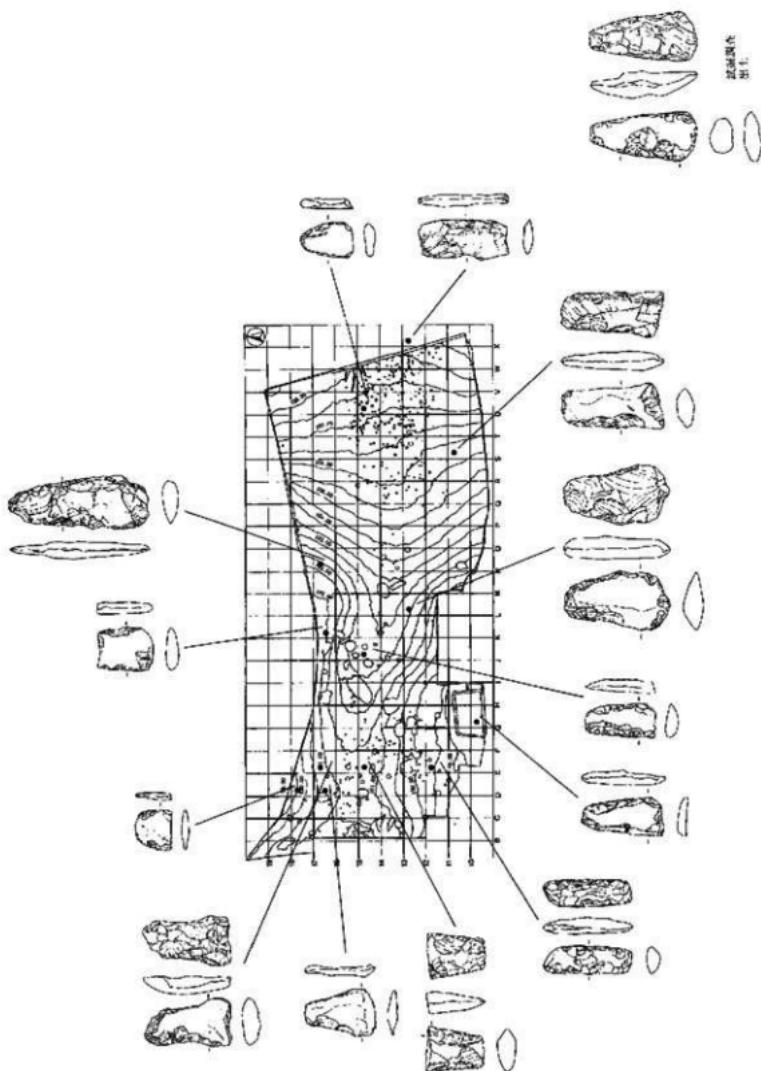
凹面として単純な在り方を示しているのは364の1点だけで、他の17点の資料は敲打や磨きなどと複合する形での検出である。くぼみの形態では、深くくぼんでいる例は少なく、両垂れ状に小穴が散在している例の方が多い検出されている。

365～385・407・408の23点は、表面に磨きが残り側面に敲打痕が見られる例で、円形あるいは椭円形を呈し、完形の状態を保っている例が先の磨石とは異なっている点である。側面の敲打痕は明確な潰れ状態をなすものではなく、まだら状の凹凸が見られるという在り方である。長軸方向の両端に敲打痕が遺存している場合には、打擊剥離や明確な潰れを見ることができ、敲打する対象が異なっていることによる違いかと推定される。

386～394・400・409・410・417・418・420・424・427・435・443～447・450の24点は、長軸の端部に敲打痕が



第46図 打製石斧実測図（1/3）



第47図 打製石斧アリ ド別分布図 (1/6)

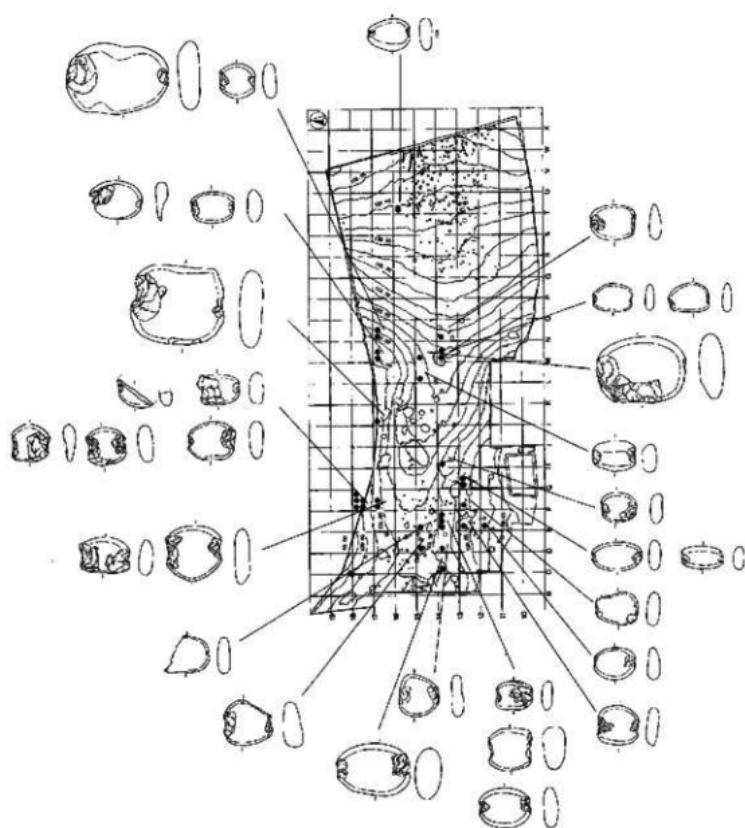
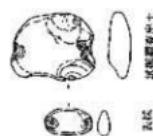


第48図 打欠石鍬実測図（1/3）

遺存しているもので、他の使用痕跡と複合している例が多く、単独での敲打痕は444などの少數に止まっている。387・410～443は側面に面取りがなされたようになるが、磨石のように平滑になることはなく比較的凹凸のある使用痕跡を残している資料で、磨石類全体の中で3分の1弱の35点を数え、主要な機能であったことが推定される。片側面ないしは両側面に面取りが遺存し、さらに長軸端部にも面取りが見られるものに414・431などがある。端部の面取りでは片端だけという形が多くなっている。使用される形状は、梢円あるいは長梢円形である場合が大多数で、面を広くとろうとする傾向にあるといえる。

18 矢柄研磨器A（452）（第58図、図版57） 試掘調査の際に出土した資料で、丘陵西端地区の尾根上に位置する土坑（SK51）覆土から検出された。同土坑からは偏平な河原石と円鏡が出土しているだけで、土器の検出はなかった。端部の一部を欠損しているが、今形を残している完好品である。長さ123mm、幅36mm、厚さ28mm、重さ

第49図 打欠石壁グリッド別分布図 (1/6)



第3表 石器計測一覧表(1) (単位 mm、g)

番号	名 称	石 質	長さ	幅	厚さ	重さ	遺 存 状 態	出土地	遺物番号	実測番号
231	削器	珪質真岩	73	28	14	19	完 形	K15	26	305
232	擦器	鉄石英	50	32	10	17	"	E13	5103	303
233	彫刻刀石器	珪質真岩	54	20	10	9	"	E12	3122	311
234	尖頭器	"	52	24	10	13	一部欠	D16	7	226
235	剥片	"	54	22	11	12		J16	4210	312
236	"	"	50	43	9	14		F12	3938	309
237	"	"	48	28	13	9		V13	5386	307
238	"	"	36	16	5	3		E18	4190	302
239	"	"	47	41	8	11		D17	4817	308
240	"	"	32	27	4	1		E12	3124	304
241	"	"	27	30	6	3		H13	2482	301
242	"	"	16	23	9	1		E17	10	314
243	"	"	21	23	9	2		F10	4145	306
244	"	流紋岩	37	26	10	7		F15	15	310
245	"	"	22	14	3	1		E17	10	313
246	石鏟	片麻岩	21	16	3	1	一部欠	D16	7	229
247	"	流紋岩	19	17	3	1	"	E18	9	227
248	"	珪質真岩	24	15	4	1	完 形	U16	4236	228
249	"	"	31	14	4	1	一部欠	L16	5106	221
250	"	"	33	20	5	4	完 形	E15	224	224
251	"	"	27	25	7	4	"	麦株	5558	225
252	石錐	"	43	18	9	7	"	E15	4558	222
253	"	"	25	22	7	3	"	C18	2820	223
254	石匙	"	40	45	7	9	"	D16	7	217
255	"	"	36	45	8	9	"	F16	16	218
256	"	"	46	42	10	13	"	F15	-	216
257	"	流紋岩	32	58	10	15	"	F15	15	214
258	"	珪質真岩	49	38	12	18	"	C18	2828	219
259	"	流紋岩	24	43	8	8	"	D15	4673	215
260	刃器	珪質真岩	51	28	12	19	"	E14	13	231
261	"	安山岩	42	61	17	35	"	D17	2618	234
262	"	珪質真岩	64	37	13	27	"	H14	2469	232
263	"	"	50	51	16	38	"	E16	395	233
264	"	"	80	50	18	65	"	S K19	5294	220
265	"	"	67	61	14	31	"	S K24	5234	230
266	土	流紋岩	29	22	6	4	半 欠	F18	5113	212
267	"	"	22	23	6	5	完 形	F16	4177	213
268	磨製石斧	流紋岩	168	62	22	350	完 形	F13	1793	32
269	"	"	151	65	33	423	"	F13	5478	33
270	"	"	155	79	36	604	"	E12	3120	36
271	"	砂岩・真岩	83	63	23	168	刃部欠	F12	4684	39
272	"	流紋岩	85	39	20	91	頭部片	D13	1299	40
273	"	砂岩	77	59	25	92	刃部欠	E12	3124	38
274	"	"	115	55	33	284	刃部欠	F11	5478	35
275	"	流紋岩	108	46	28	143	完 形	E13	1408	34
276	"	"	86	41	19	96	頭部片	H12	5278	42
277	"	"	121	50	27	176	完 形	E12	3121	37
278	"	"	50	40	20	68	頭部欠	D18	5078	50
279	"	"	154	51	23	267	完 形	E12	3119	45
280	"	"	96	43	12	80	一部欠	S K24	6138	44

## 能美丘陵東遺跡群 I

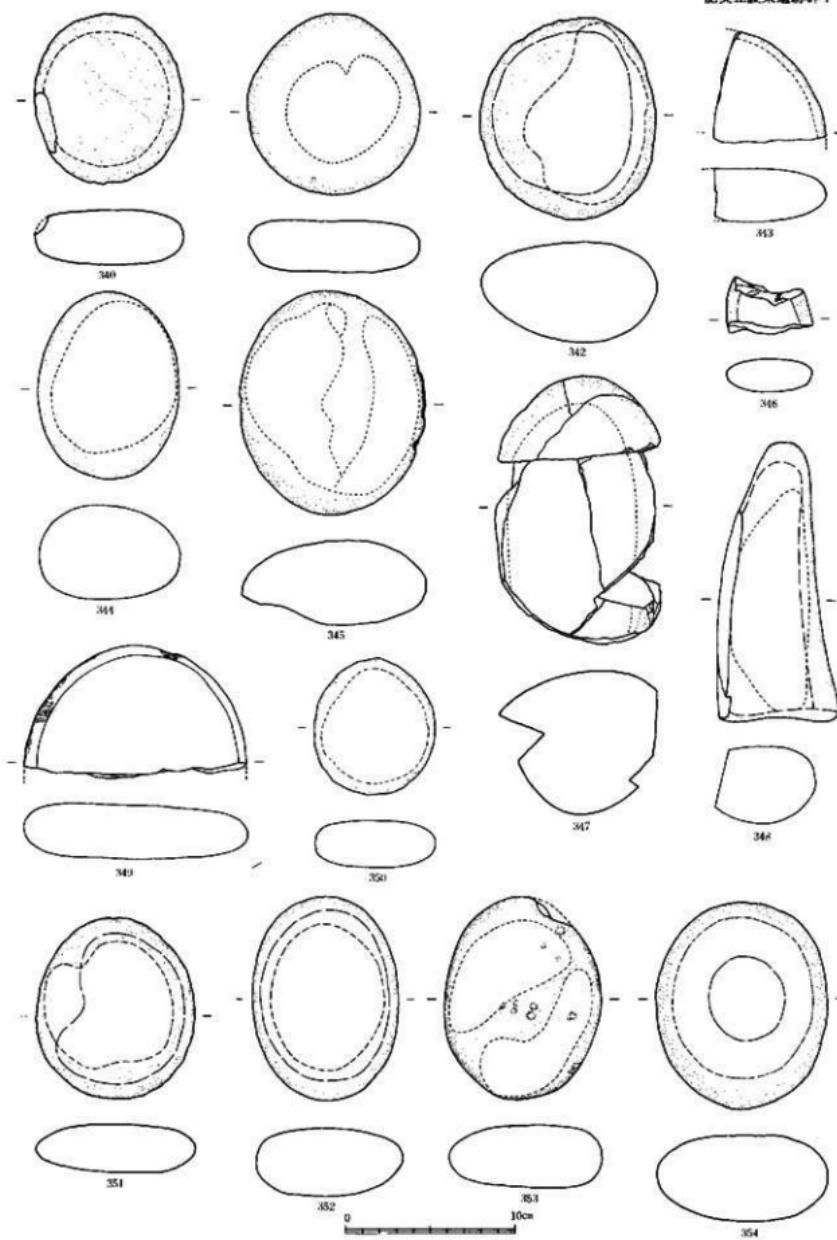
番号	名 称	石 質	長さ	幅	厚さ	重さ	遺 仔 状 態	出土地	遺物番号	実測番号
281	"	流紋岩	118	48	23	190	剝 落	F13	1794	46
282	"	"	87	48	23	156	刃 部	G13	5101	41
283	"	"	68	51	32	109	頭 部	G13	4685	47
284	"	"	50	45	22	64	"	S K10	5259	51
285	"	"	55	38	18	45	"	E18	9	52
286	"	"	78	47	22	124	刃 部	W11	4194	43
287	"	珪化變灰岩	113	38	16	136	完 形	E12	3118	48
288	"	流紋岩	58	59	25	143	頭 部	F12	3127	54
289	"	珪化頁岩	50	48	18	48	刃 部	E12	25	49
290	"	細粒砂岩	23	37	10	9	刃 部	D13	5	55
291	"	鐵灰質頁岩	14	23	5	2	刃 部	S11	5510	56
292	磨製石斧	鐵灰岩	76	33	15	44	完 形	E14	13	53
293	打製石斧	細粒砂岩	104	32	17	81	"	E12	3122	66
294	"	"	103	57	22	130	一部欠	E17	4189	65
295	"	流紋岩	119	53	21	139	完 形	S11	5361	58
296	"	石英斑岩	70	53	21	79	刃 部	E15	214	63
297	"	流紋岩	85	56	13	56	完 形	D17	2533	57
298	"	石英斑岩	124	89	27	260	"	L13	29	61
299	"	珠質頁岩	165	62	19	202	"	N17	4342	59
300	"	安山岩	64	52	15	72	頭 部	K17	4443	64
301	"	流紋岩	82	40	13	63	"	J15	4211	60
302	"	石英斑岩	43	48	9	19	"	D17	8	62
303	"	細粒砂岩	63	41	12	40	"	U15	5353	165
304	"	流紋岩	100	46	14	78	完 形	X13	5435	164
305	"	"	97	46	15	72	"	G10	4146	167
306	"	"	123	59	34	225	"	試掘	I② E1	288
307	打欠石鍬	中粒砂岩	41	36	14	28	"	H14	2466	20
308	"	(鐵灰質)流紋岩	46	32	10	19	"	M14	4295	18
309	"	流紋岩	49	36	18	48	"	L15	4208	9
310	"	頁岩	49	27	13	27	"	G13	2323	210
311	"	細粒砂岩	55	31	14	31	"	表株		17
312	"	流紋岩	47	34	11	18	"	S K49	5299	16
313	"	"	49	39	15	41	"	F13	23	13
314	"	細粒砂岩	49	35	16	38	半 欠	F18	18	11
315	"	中粒砂岩	48	37	17	43	完 形	E12	3124	12
316	"	流紋岩	59	34	15	34	"	G13	3779	26
317	"	"	51	37	17	47	"	M17	4359	24
318	"	細粒砂岩	50	38	16	44	"	T17	47	14
319	"	鐵灰岩	54	43	15	41	半 欠	E15	12	15
320	"	中粒砂岩	42	41	16	39	完 形	N17	4316	28
321	"	流紋岩	44	34	14	28	"	E14	13	19
322	"	(鐵灰質)流紋岩	48	50	14	48	"	D14	1012	19
323	"	細粒砂岩	48	46	17	48	"	E13	1421	25
324	"	"	44	44	14	34	"	F17	17	22
325	"	鐵灰質流紋岩	46	44	18	47	残 欠	"	17	21
326	"	頁岩	50	30	14	16	完 形	"	17	30
327	"	"	62	45	14	39	"	M17	4353	27
328	"	流紋岩	54	44	16	51	"	F17	17	23
329	"	"	51	41	14	45	"	N14	4276	31
330	"	粗粒砂岩	51	49	26	98	"	E14	1456	7

番号	名 称	石 質	長さ	幅	厚さ	重さ	遺 存 状 態	出土地	遺物番号	実測番号
331	"	細粒砂岩	60	41	17	54	〃	F16	429	8
332	"	中粒砂岩	57	54	24	81	〃	D15	742	211
333	"	細粒砂岩	58	47	17	75	〃	E14	13	6
334	"	礫灰質流紋岩	65	65	17	103	〃	F16	4177	5
335	"	細粒砂岩	86	61	30	224	〃	C14	980	4
336	"	礫灰質流紋岩	121	84	24	304	〃	N17	4352	1
337	"	細粒砂岩	104	77	28	341	〃	M15	4320	3
338	"	礫灰岩	98	80	30	243	〃	試標	I②E1	291
339	"	礫灰質流紋岩	110	91	27	433	〃	J17	4593	2

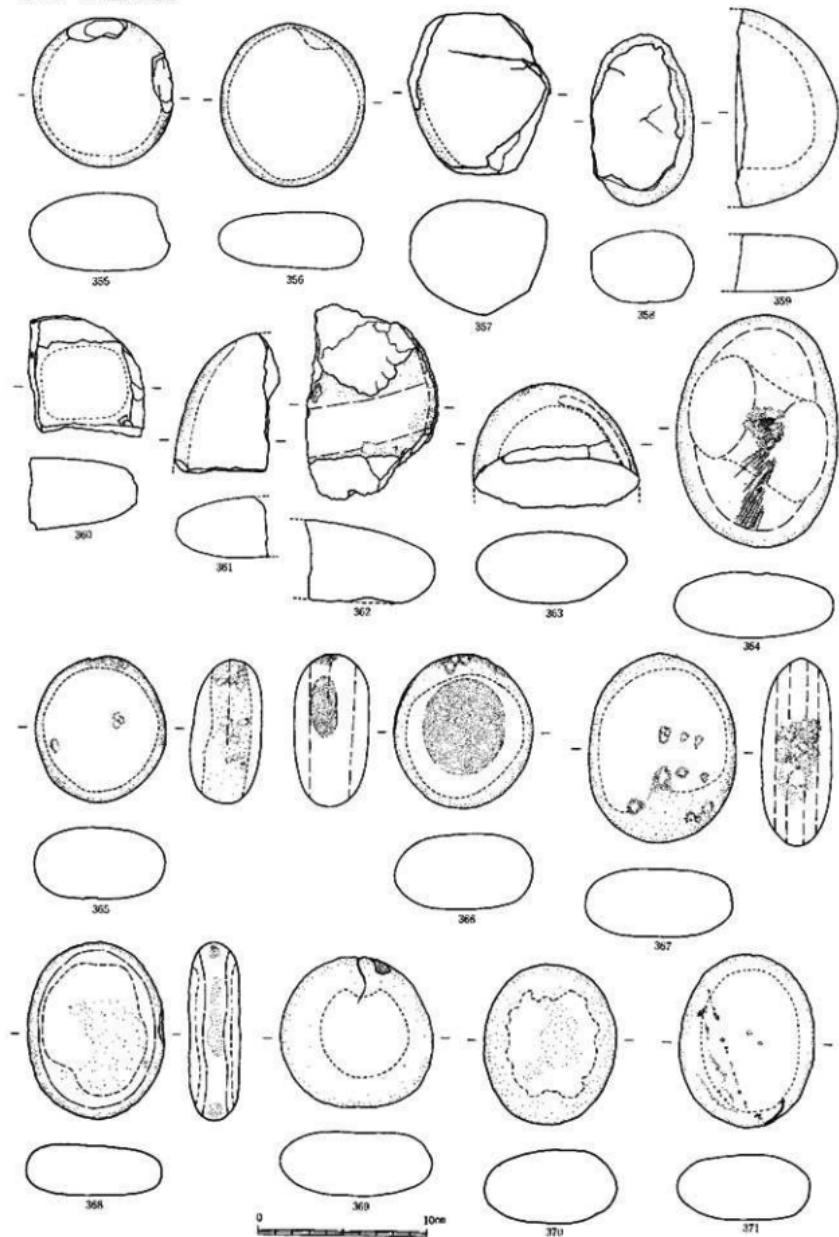
119gを測る中粒砂岩製である。溝のある面での平面形は長楕円形で、端部は丸味を持たせておさめている。側面形は中央部分が最も厚くなり、端部に向かって厚みを減じていき、長楕円形の片面をそいだような形状を呈している。上面の溝は7mm、深さ2mmを測り、ほぼ直線を保っているが、深さは中央部分が僅かに深くなっている。溝を境として、片側は外側に傾斜し、もう一方は水平となっている。背面は中央部に稜線が見られ、幅約1cmの面がその両側に見られ、磨きが全面に施されていたことが推定される。溝の状況やその周囲の面の在り方から、研磨に活用していたとは判断は出来ない。次ぎに報告する矢柄研磨器Bとの違いに大きなものがあると考えられる。

19 矢柄研磨器B (453~457) 調査区の西端、南傾斜面のD13-E15グリッドから出土したもので、453・454・456は一括の状態で検出している。周辺での同一層位での上器の検出は見られなかった。石材は細粒砂岩質で、水平堆積した層面で板状に剥離する傾向が認められる。453と454は深い溝の部分で接合するもので、図示できなかつたことをお詫びしておきたい。453は下端に位置している溝を持つ面は、磨石類の磨き面のように全体が平滑に磨きが施されている。裏面は凹凸のある剥離面が見られ、交差するような形での幅11mmの浅い溝がついている。深いほうの溝の幅は10mmで、深さ5mmを測り、内面には細い擦痕が平行して残されている。456においても同じような状況を呈していて、図示しなかつたが背面には剥離面と微かな溝を見る事ができる。453と456の磨きがかかっている面を合わせると、溝の部分は径10mmの円形となる。455の図示した面は磨きが施されている面で、背面は平滑に近いもののざらついている。溝の部分の遺存は認められない。側縁は直線的な部分は剥離面で、他を欠損した状態である。457は両側縁および背面の片側に擦痕を残す深い溝が入っていて、径1cm、深さ5mmに復元される。表裏面ともに剥離面を磨いているものの、磨きに澁淡があり平坦面を形成しない。使用している段階で面が不規則に剥離したために生じたのかもしれない。図示した上端部の両面に、やや傾斜する形での磨き面が見られる他、表裏面共に浅い凹線状の磨きが入っているのは、453の資料と同じである。

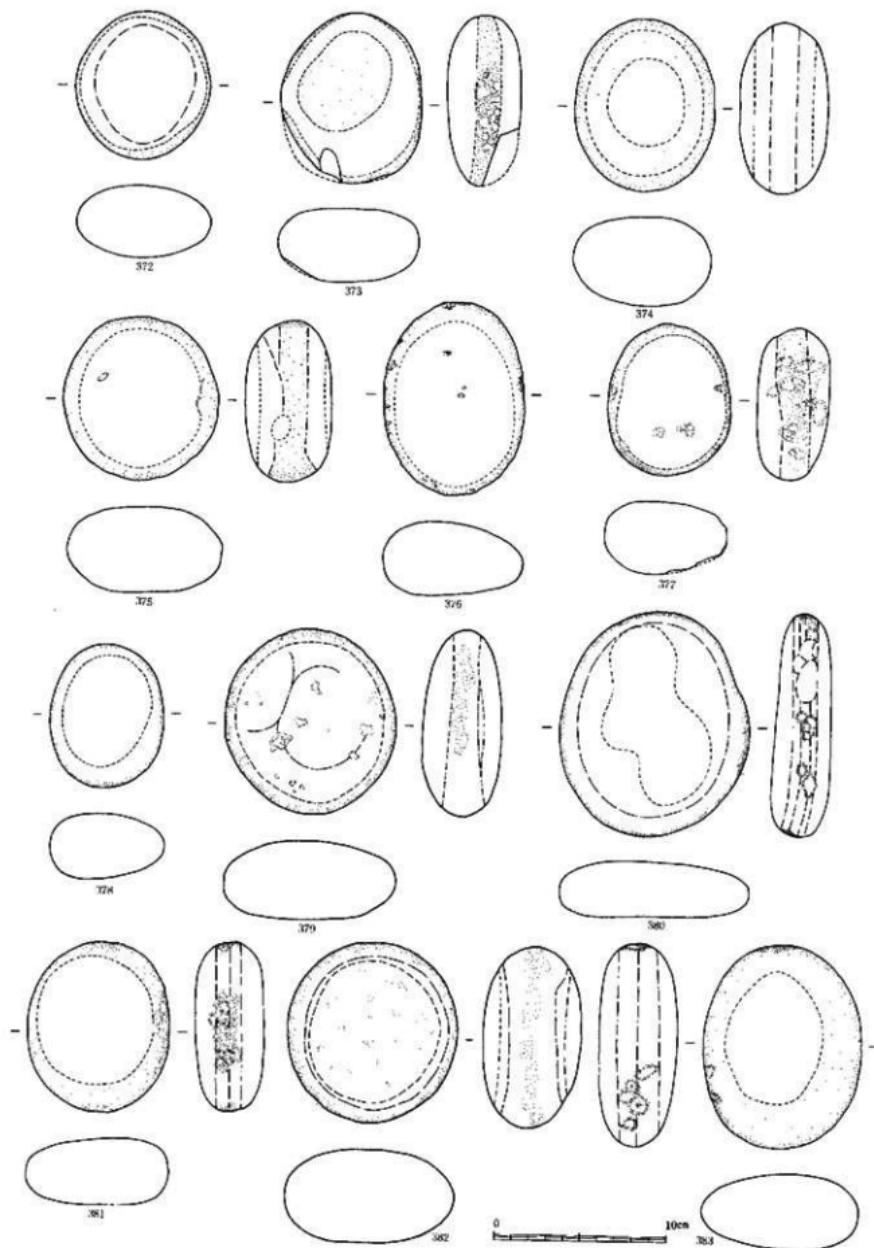
20 石皿 (458~513) (第60~67図) 石皿は磨石類に次いで出土が多く、総数で66点を数え、石器全体の中でも23%を占めている。石皿とはしたものの使用部分が皿状に明確に窪んでいるものは少數で、磨き面を確認できる偏平な形状を持ち、長さが20cmを越えるものを石皿として分類した。磨き面が周辺部分にまでおよび、さらに側縁に敲打痕を持つものなどがあり、磨石類を大きくした形態を取るものも含んでいるが、片手では使用しにくいうい点を考慮して石皿としているものがある。それは458~463などが上げられ、以下491までの資料までが考えられる。選択している石質は砂岩質で、偏平な形状を持っている。464・467・468・488・491などの資料は、端部に敲打による欠損が見られるものがあり、特に468・491などは等間隔に3ヶ所にそれが見られ、別の用途があったとも推定されるものがある。磨き面が全面にあるだけではなく、凹線状に窪むものが463~465などで認められる。石材で安山岩・流紋岩質の石皿は、細かな穴が開いているものが目だち、磨き面が中央部分に限られる傾向が指摘できる。平面形状でも円形・楕円形ではなく、不定形の形態のものが目立っている。505・507・508などは砂岩質のもので、中央部に凹面状の磨き面が認められるが、下半部が欠損しているのか、現状で完形であるのかの判断が難しい。511は大きく窪んでいる資料であるが、安山岩質であるために磨き面が確定できないものである。513は凹線状に磨きが認められるもので、石皿とするよりは筋砥石の形態に近いものがある。



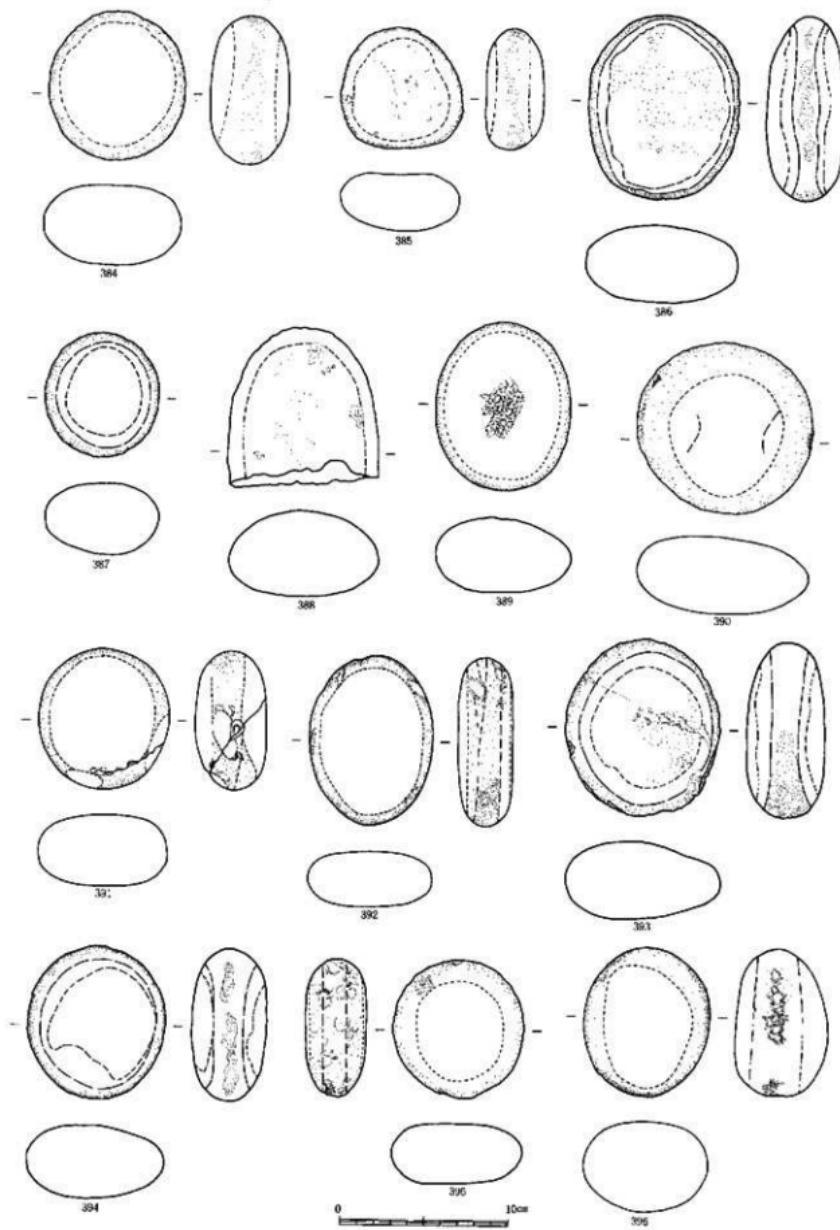
第50図 磨石類実測図(1)(1/3)



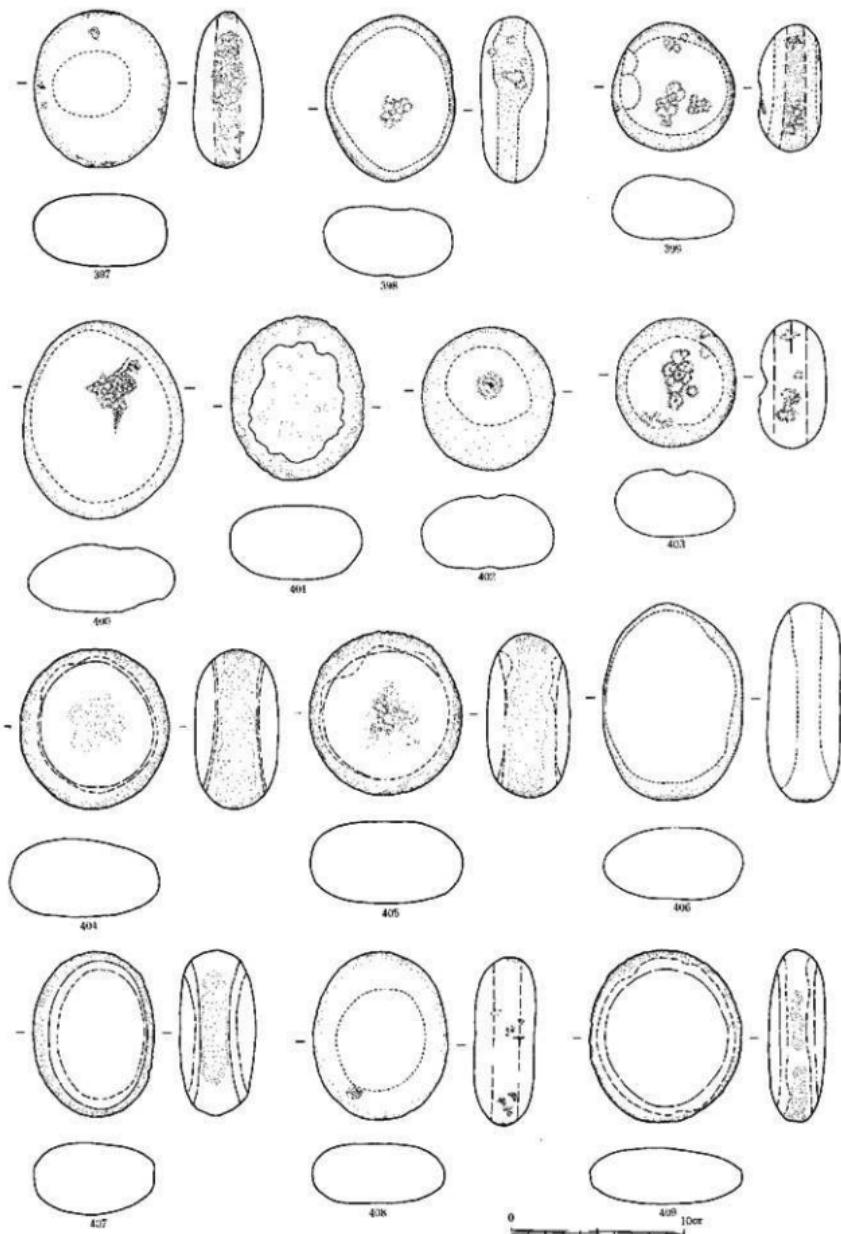
第51図 磨石類実測図 (2)(1 / 3)



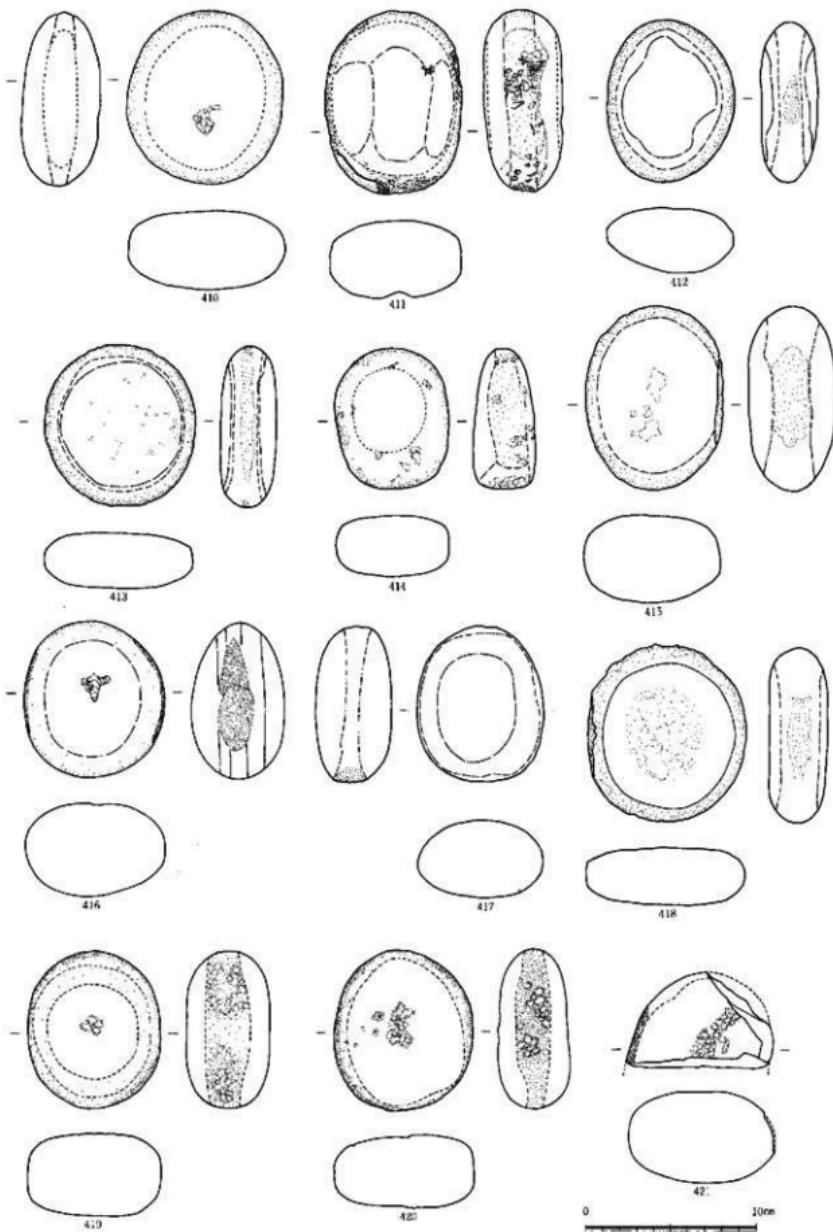
第52図 研石類実測図(3)(1/3)



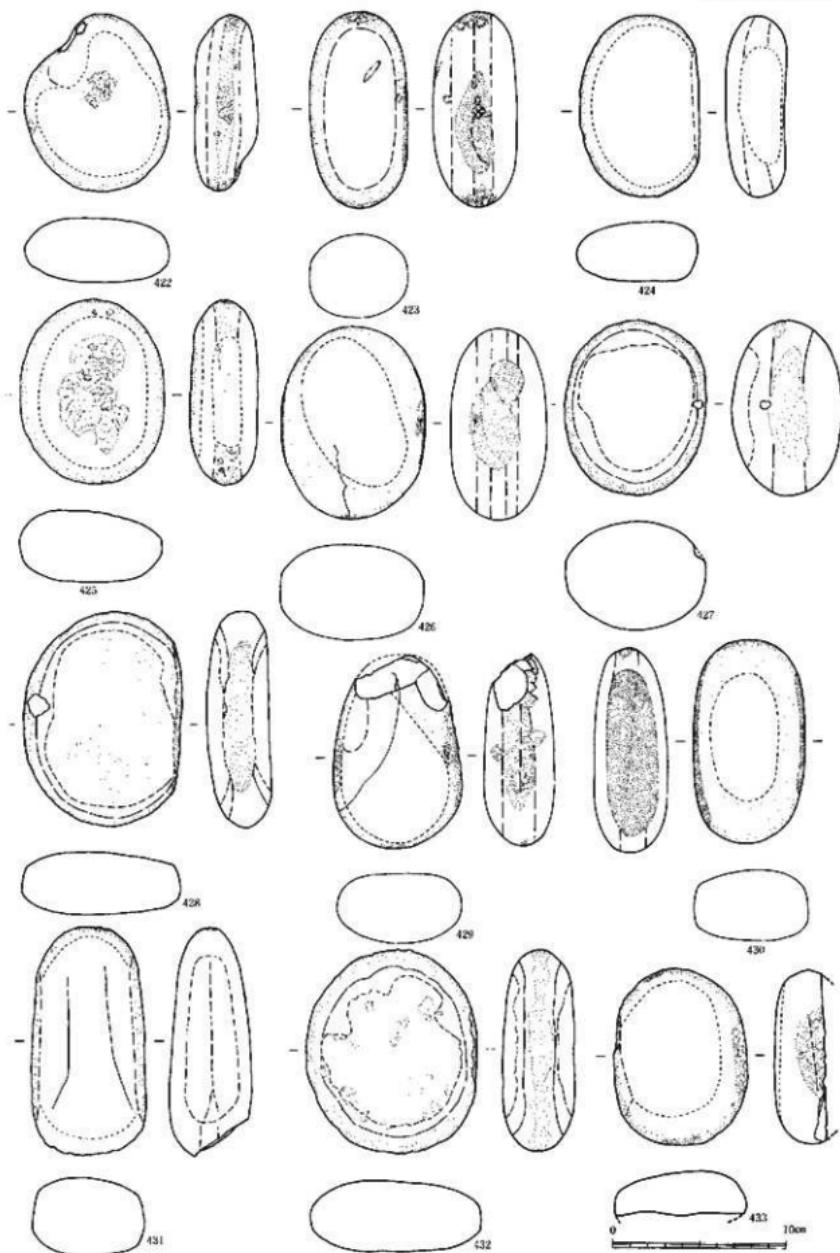
第53区 磨石類実測図 (4)(1/3)



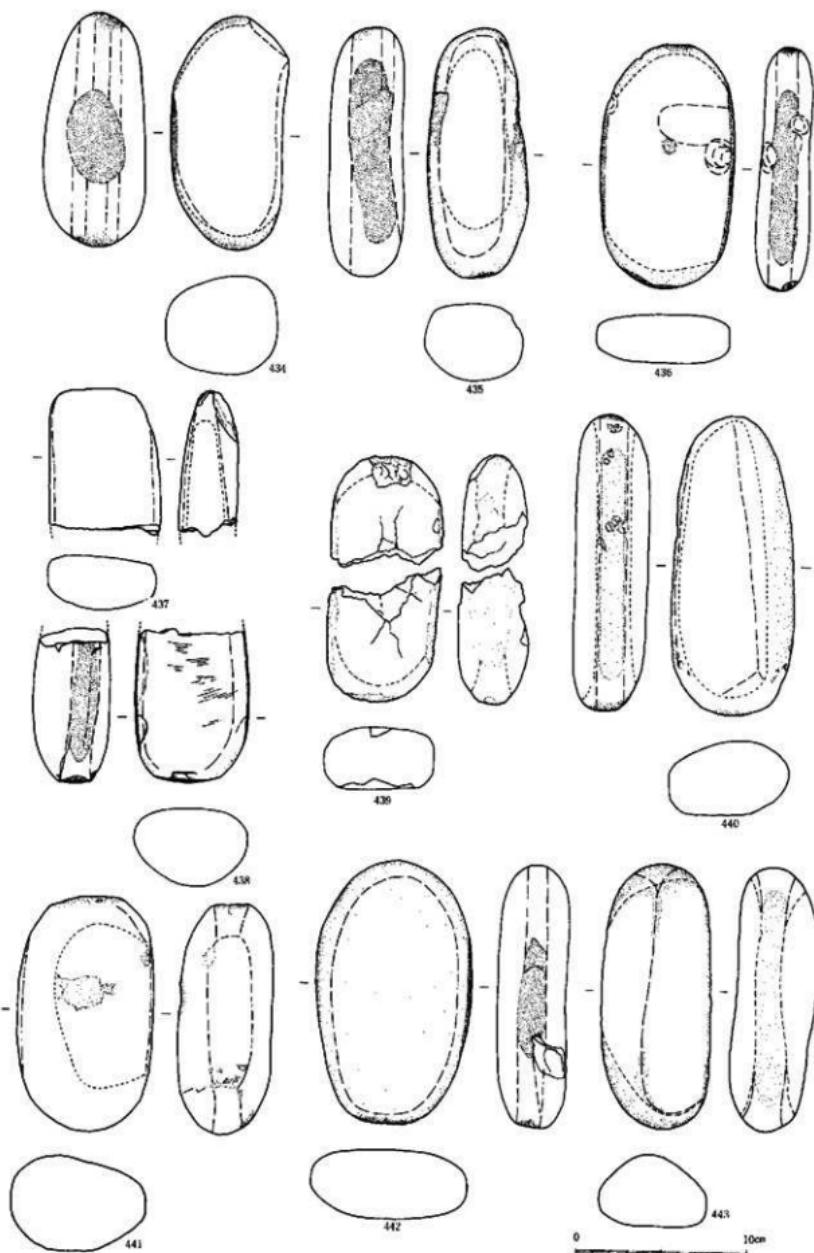
第54図 唐石類実測図(5)(1/3)



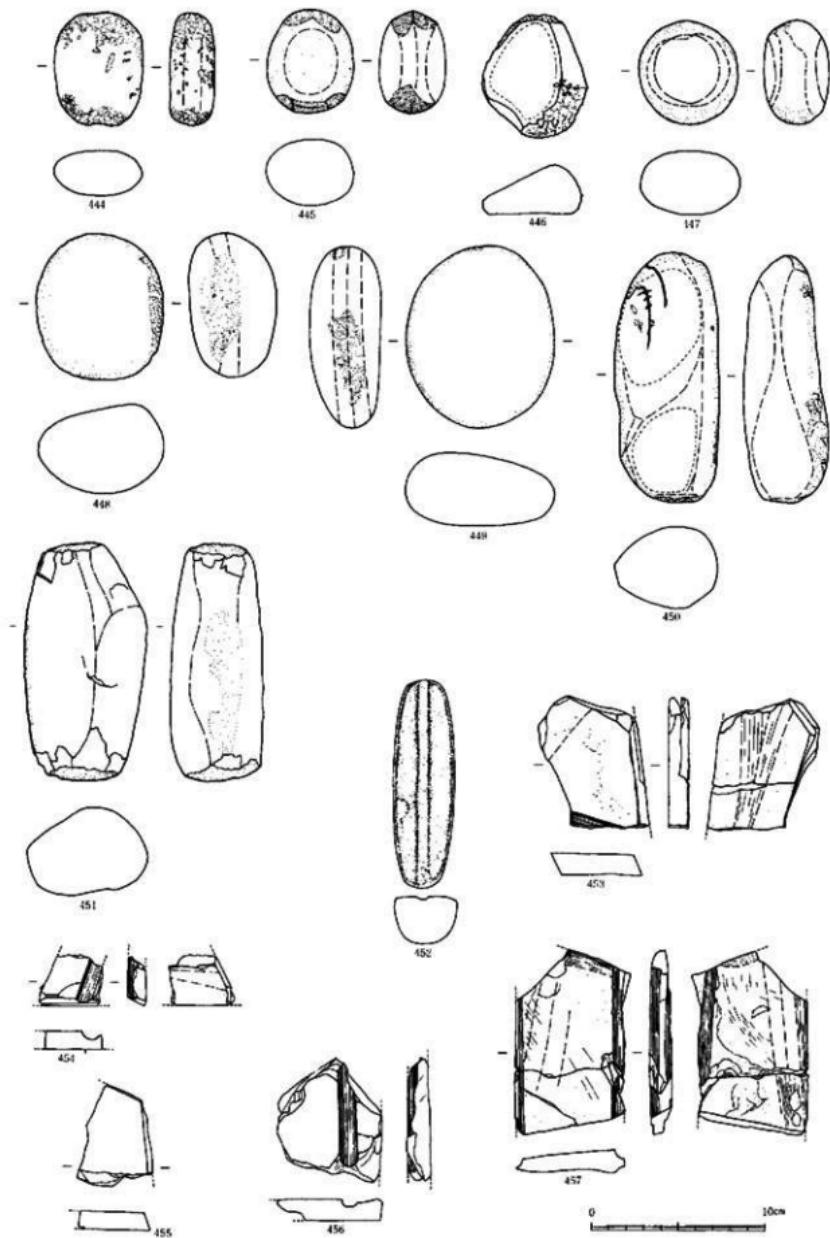
第55図 塗石類尖端圖 (6)(1/3)



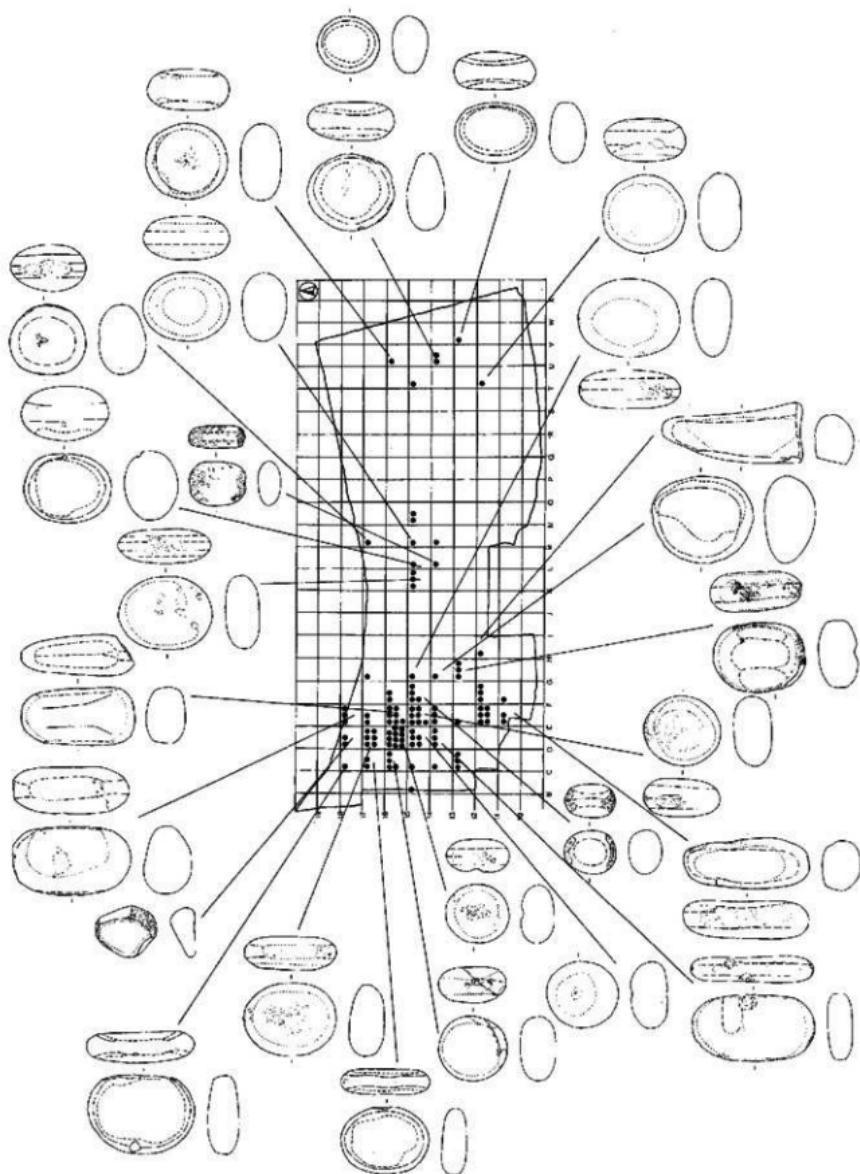
第56図 磨石類実測図(7)(1/3)



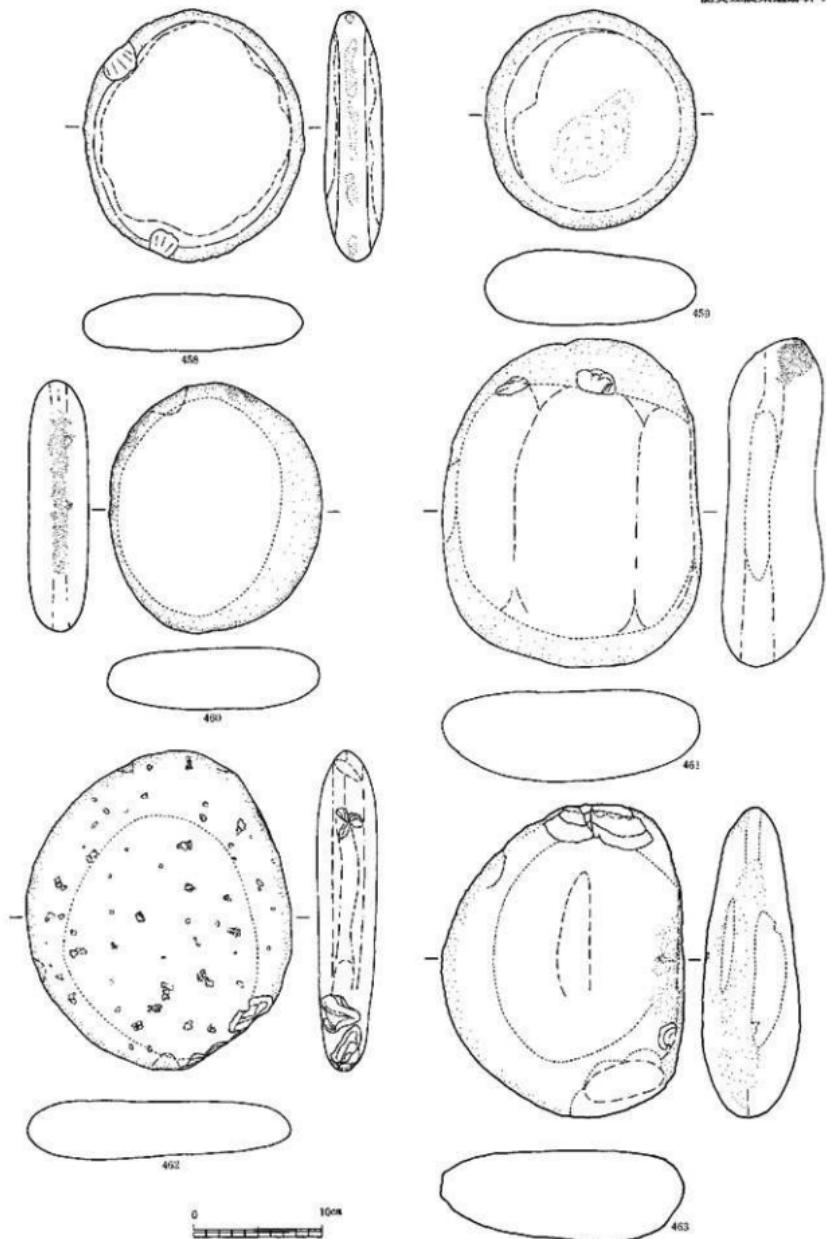
第57図 磨石類実測図(8)(1/3)



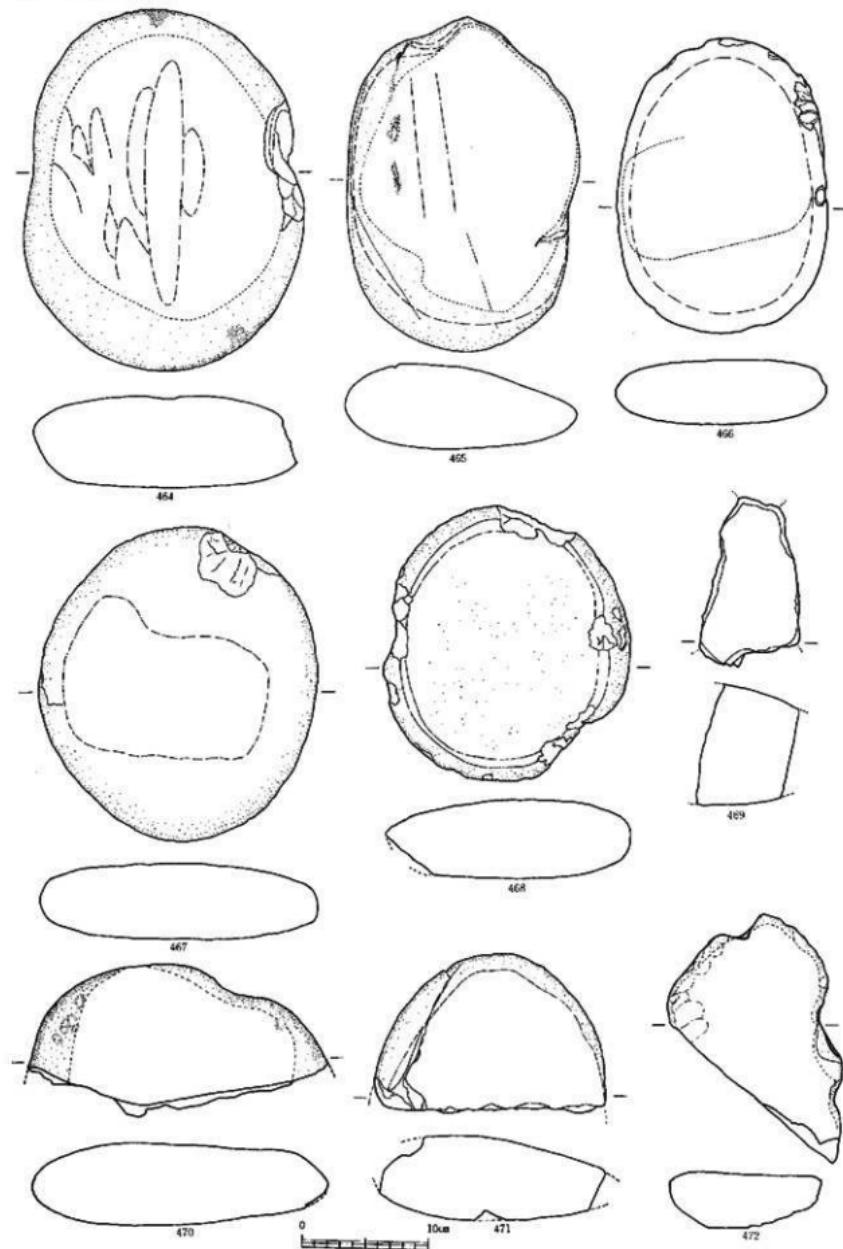
第58図 磨石類・矢柄研磨器実測図(9)(1/3)



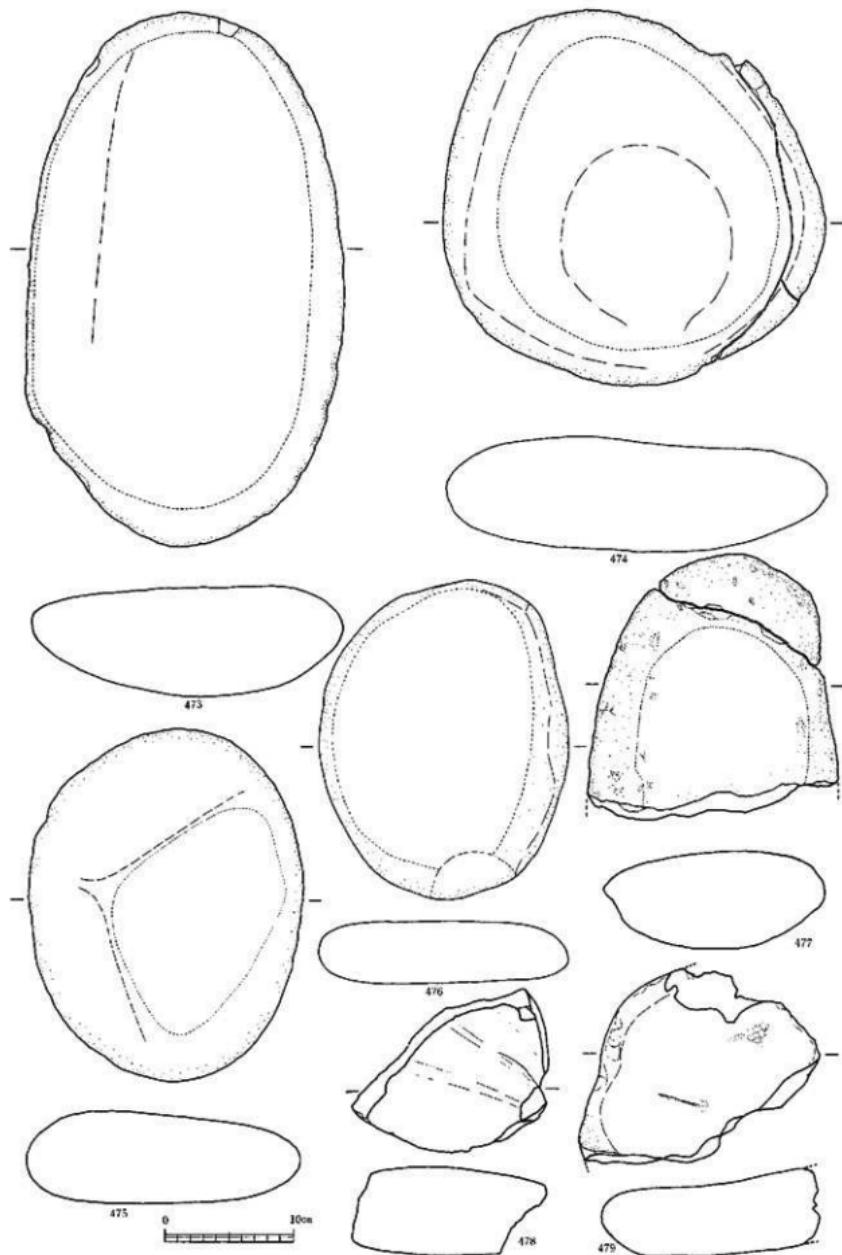
第59回 斎藤アリード別分布図



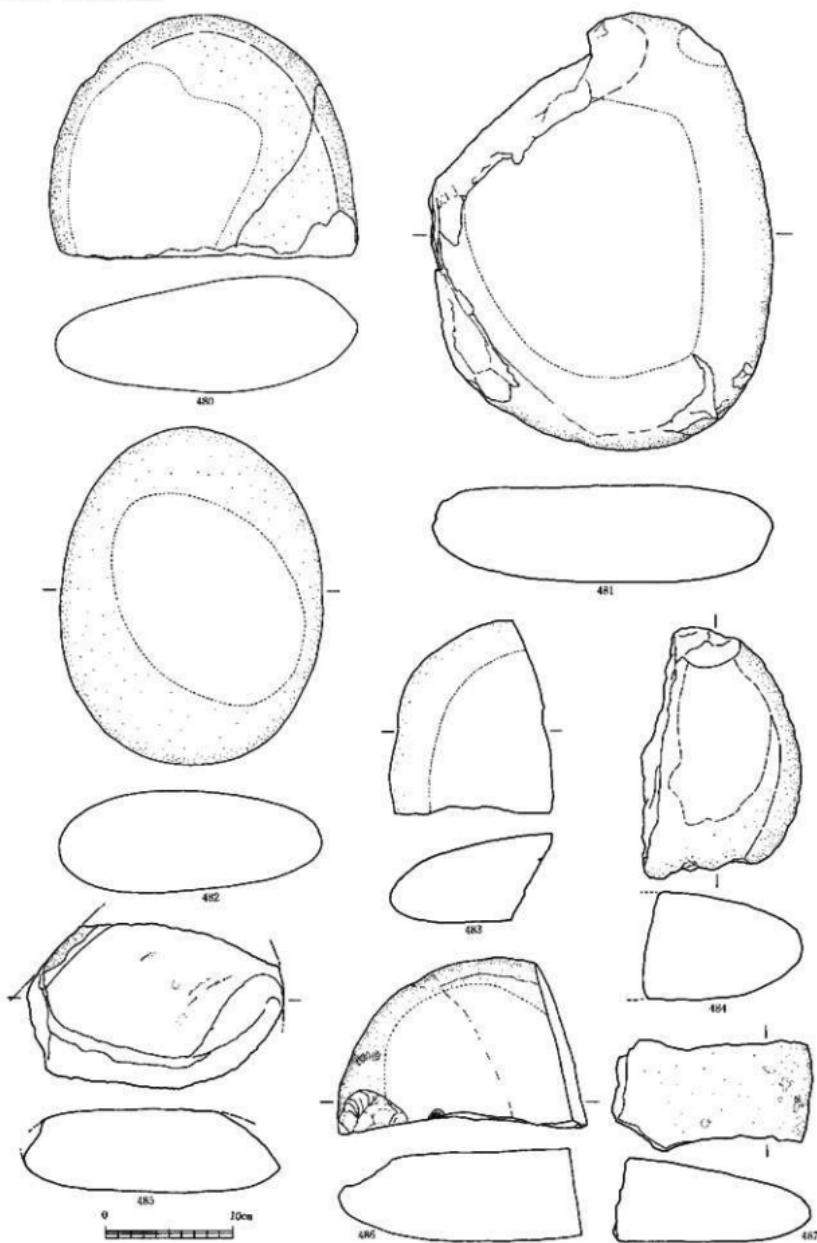
第60図 石器実測図(1)(1/4)



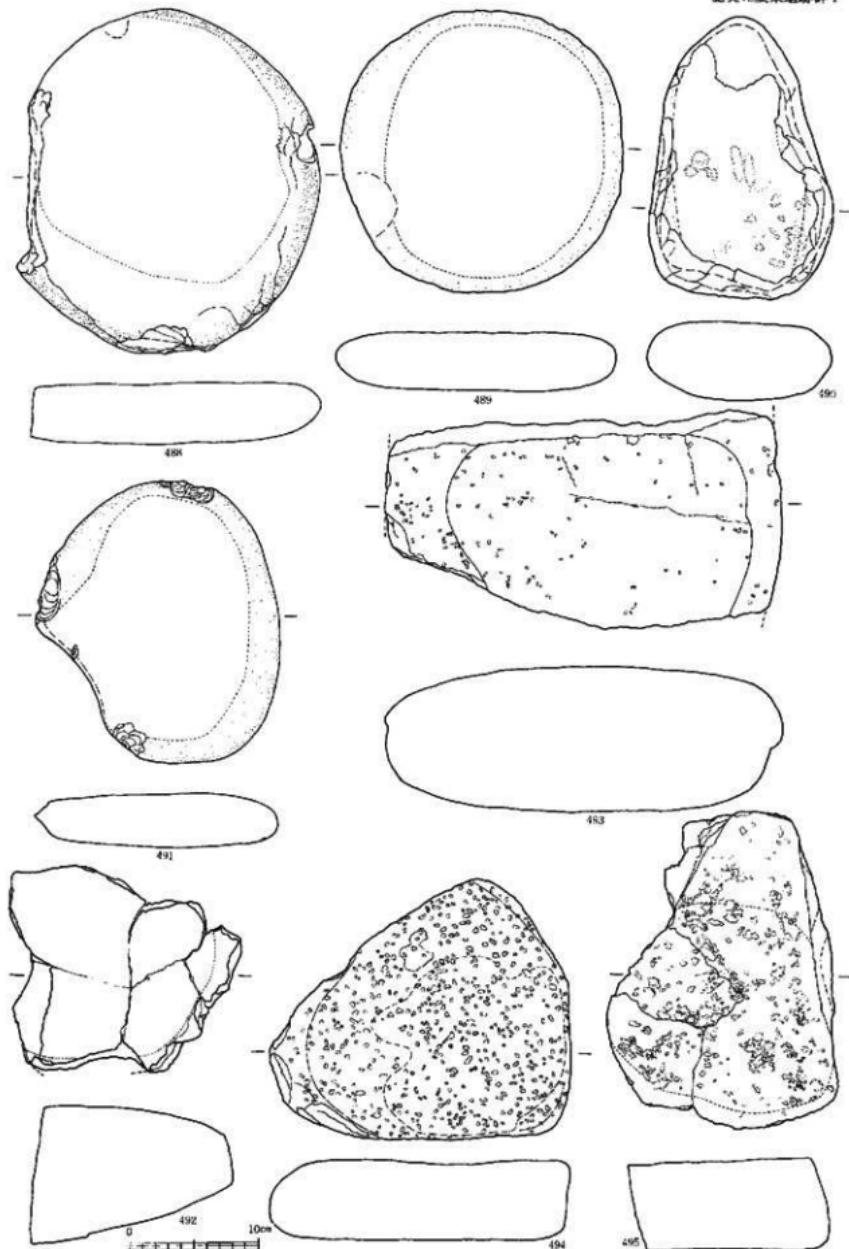
第61図 石皿実測図(2)(1/4)



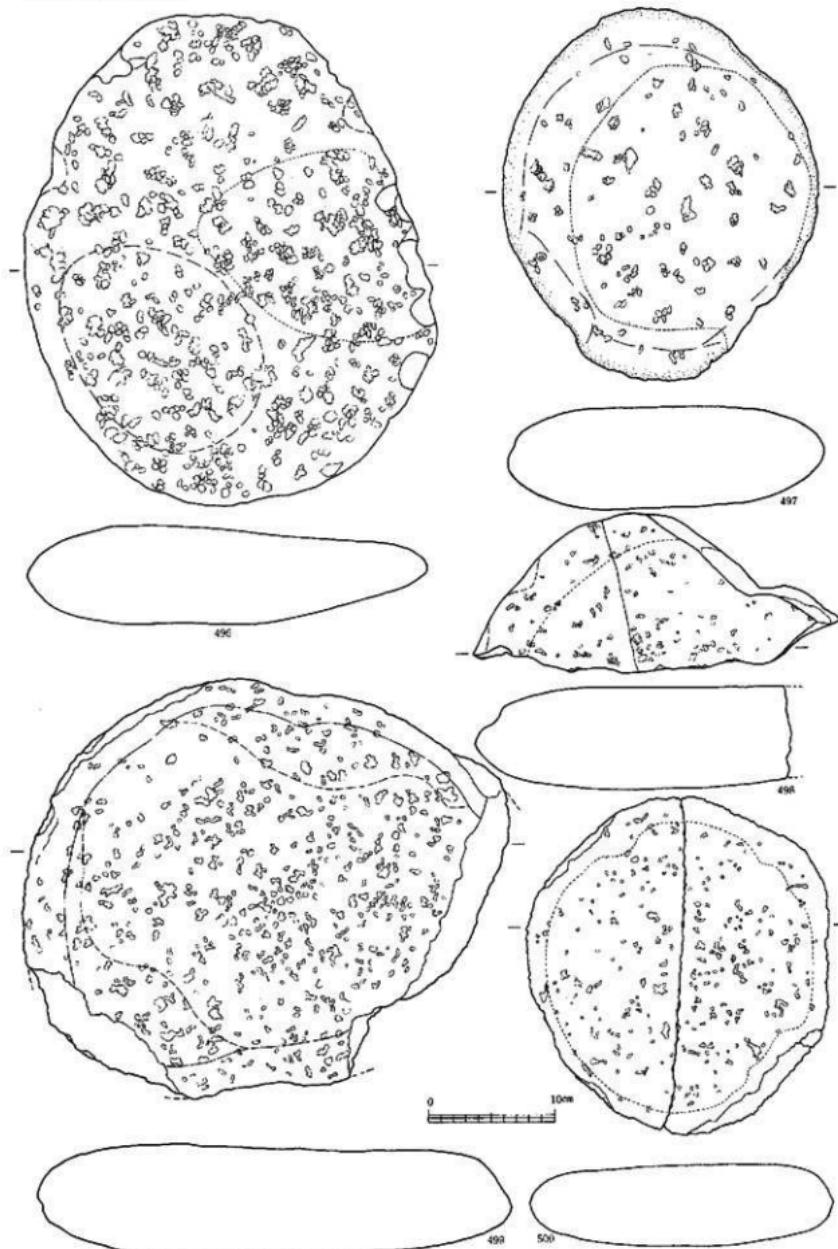
第62図 石器実測図(3)(1/4)



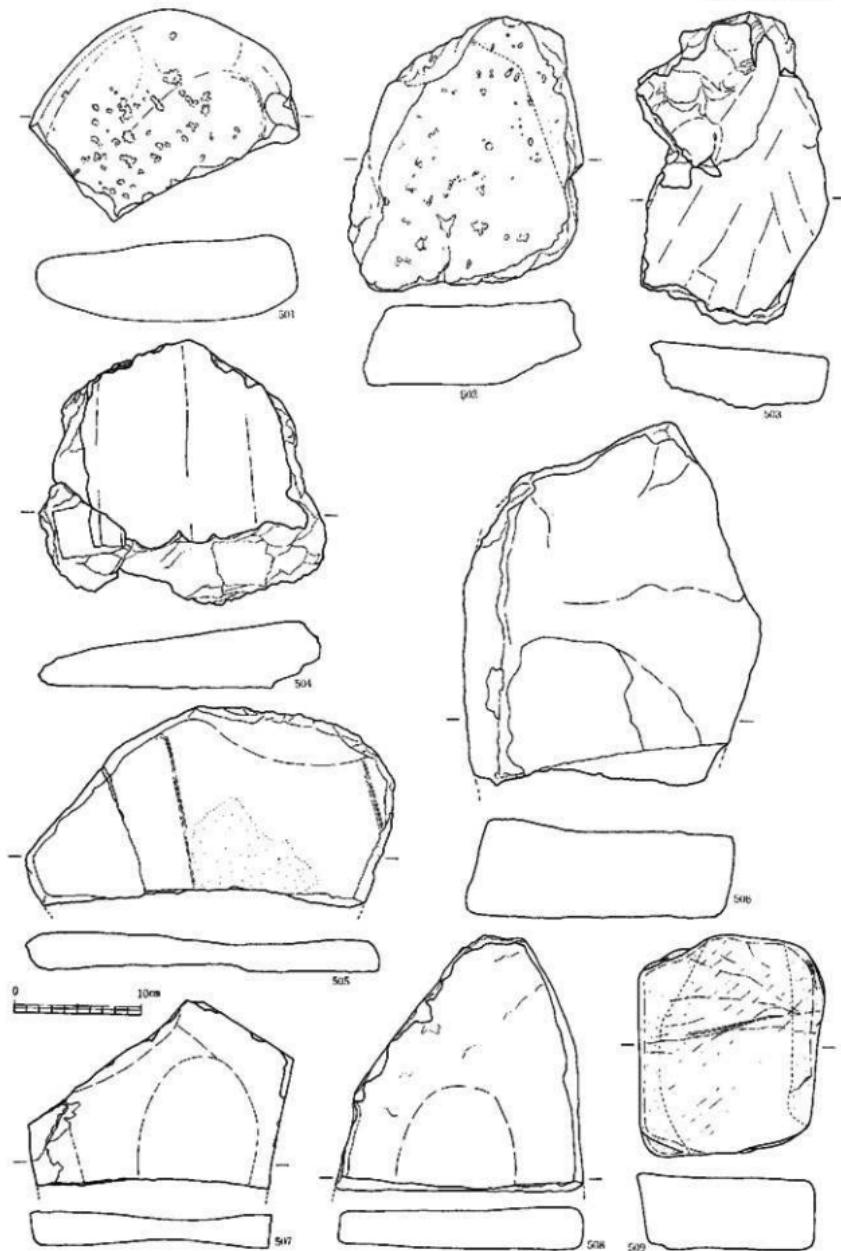
第63図 石皿実測図(4)(1/4)



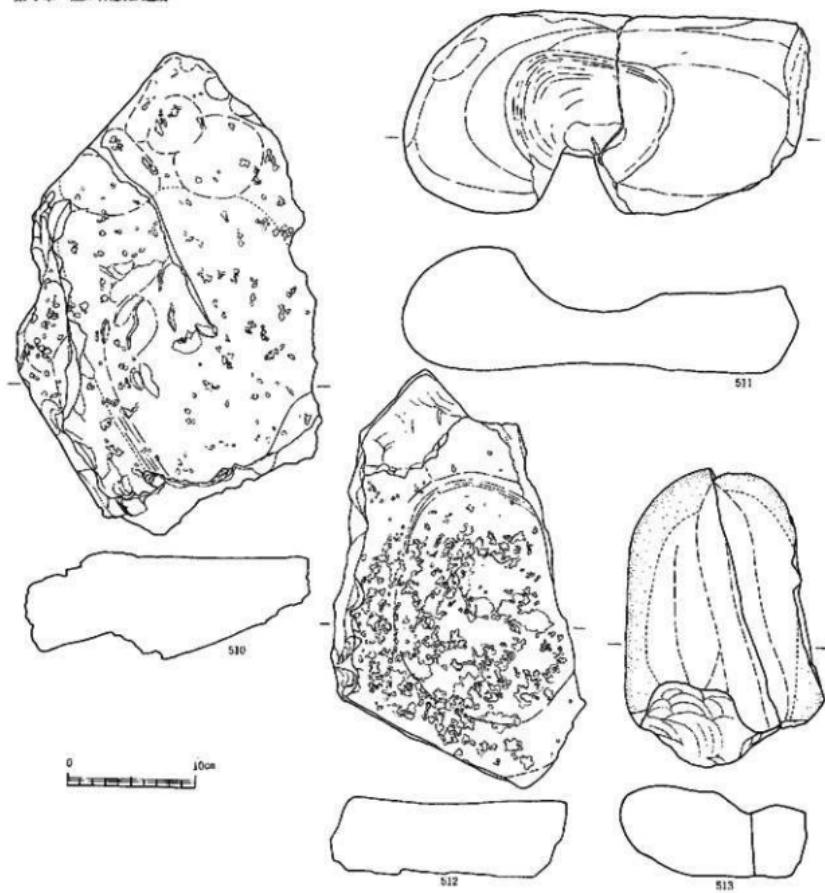
第64図 石皿実測図(5)(1/4)



第65図 石皿実測図 (6)(1/3)

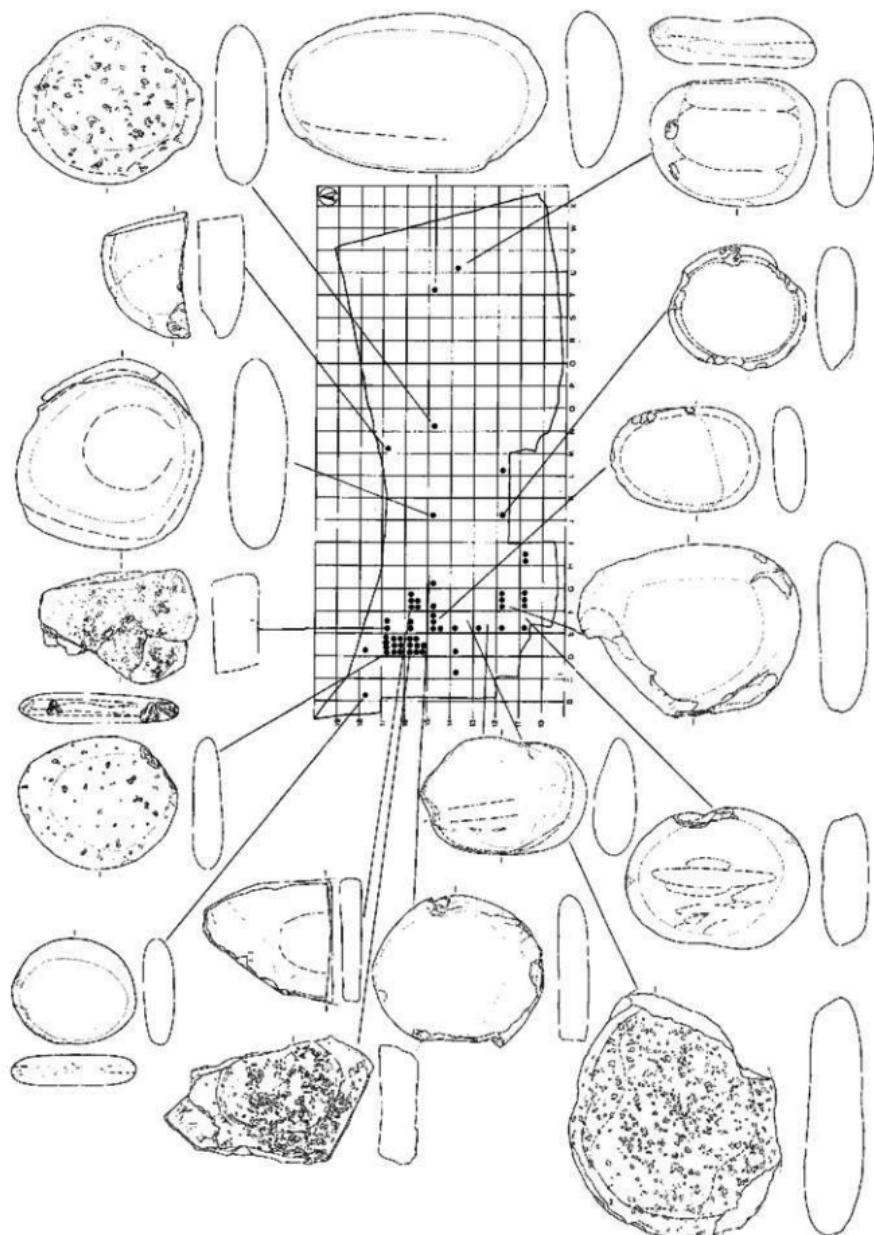


第66図 石器実測図(7)(1/4)



第67図 石皿実測図(8)(1/4)

第68図 石器グリッド別分布図



第4表 石器計測一覧表(2) (単位 mm、g)

番号	名 称	石 質	長さ	幅	厚さ	重さ	遺存状態	形	出土地	遺物番号	実測番号
340	磨石類	細粒砂岩	100	88	32	424	一部欠	椭円	E17	2953	87
341	"	"	107	100	30	473	完形	円形	D17	4680	201
342	"	灰質角礫岩	119	102	59	985	"	椭円	G14	4182	128
343	"	中粒砂岩	66	65	31	166	残欠	不明	E12	3124	145
344	"	珪岩	110	82	55	730	完形	椭円	D17	4779	129
345	"	細粒砂岩	131	108	50	918	一部欠	"	D16	4170	189
346	"	珪質岩	34	50	19	43	残欠	不明	E18	3117	168
347	"	珪岩	157	93	82	1716	一部欠	椭円	F12	3127	148
348	"	細粒砂岩	165	70	45	648	一部欠	棒状	H12	4144	134
349	"	中粒砂岩	78	130	34	484	残欠	円板	G17	19	74
350	"	安山岩	81	71	38	234	完形	椭円	試掘	I②E1	286
351	"	細粒砂岩	107	94	30	425	一部欠	椭円	E11	5235	161
352	"	"	120	86	40	612	完形	椭円	E16	4168	182
353	"	中粒砂岩	120	92	38	674	一部欠	椭円	C14	3	70
354	"	珪岩	122	98	51	931	完形	椭円	D15	6	67
355	"	中粒砂岩	87	81	46	468	一部欠	丸	C16	5134	192
356	"	灰質質流紋岩	96	85	33	389	完形	椭円	E16	369	93
357	"	細粒砂岩	95	83	67	692	残欠	球状	S K32	5540	162
358	"	中粒砂岩	100	60	42	351	半欠	椭円	E15	4384	197
359	"	"	116	59	34	350	半欠	椭円	E12	4157	178
360	"	細粒砂岩	67	65	42	300	残欠	不明	F15	15	78
361	"	粗粒砂岩	81	55	36	225	破片	不明	E12	3124	146
362	"	中粒砂岩	115	78	48	483	破片	不明	F12	3127	138
363	"	細粒砂岩	73	97	41	327	残欠	椭円	F16	4429	198
364	"	"	137	94	39	743	完形	椭円	試掘	I②E1	292
365	"	粗粒砂岩	88	76	42	417	完形	丸	D16	3214	98
366	"	中粒砂岩	89	82	44	479	"	椭円	E15	4374	191
367	"	"	111	85	40	575	"	"	K15	26	137
368	"	粗粒砂岩	105	80	30	391	"	"	S K31	5136	126
369	"	細粒砂岩	88	90	37	415	"	円形	D17	4994	86
370	"	中粒砂岩	95	78	43	452	"	椭円	F16	392	92
371	"	"	102	78	39	450	"	"	E15	4163	149
372	"	珪岩	87	79	43	422	"	円形	E18	4190	120
373	"	粗粒砂岩	100	83	43	462	一部欠	椭円	E15	12	75
374	"	中粒砂岩	102	80	52	580	完形	"	M15	28	85
375	"	細粒砂岩	96	91	50	588	完形	円形	T12	4215	90
376	"	"	114	83	42	598	"	椭円	D16	524	99
377	"	粗粒砂岩	89	71	42	383	"	"	D16	526	102
378	"	細粒砂岩	84	67	39	331	"	"	D15	779	96
379	"	流紋岩	109	101	46	660	"	円形	E16	4415	123
380	"	細粒砂岩	127	109	32	701	"	椭円	E16	5266	158
381	"	粗粒砂岩	100	83	40	525	"	"	F12	3127	142
382	"	中粒砂岩	107	100	57	850	"	円形	K15	26	186
383	"	"	120	91	45	753	"	椭円	G15	5329	199
384	"	粗粒砂岩	88	80	47	467	"	円形	試掘	I②E1	282
385	"	片麻岩	72	72	34	262	"	三角	試掘	I②E1	283
386	"	珪岩	111	89	45	651	"	椭円	D16	527	104
387	"	粗粒砂岩	84	66	43	273	"	円形	U14	5389	155
388	"	細粒砂岩	95	89	51	595	半欠	長楕円	D16	558	109
389	"	"	99	80	44	510	完形	椭円	N15	4292	122

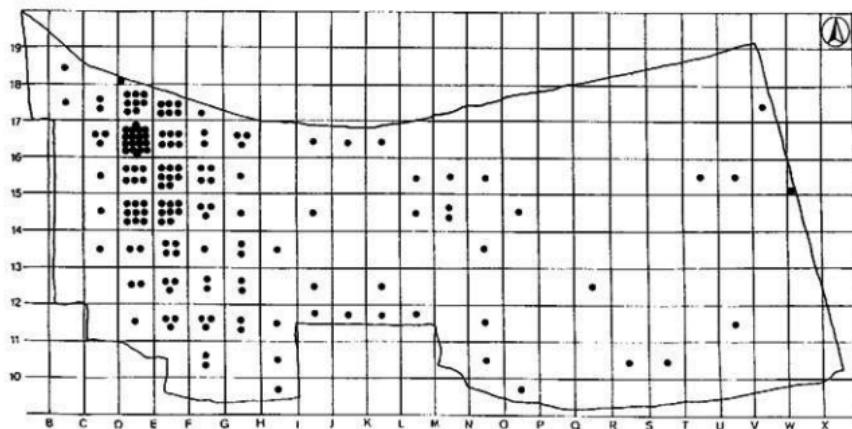
## 能美丘陵東遺跡群

番号	名称	石質	長さ	幅	厚さ	重さ	遺存状態	形	出土地	遺物番号	実測番号
390	"	珪岩	101	102	45	604	一部欠	円形	E13	1421	112
391	"	中粒砂岩	82	77	42	385	完形	"	C16	840	103
392	"	"	100	73	32	356	"	椭円	G13	2237	110
393	"	粗粒砂岩	104	91	45	586	"	椭円	U14	4234	119
394	"	中粒砂岩	90	81	44	410	"	"	C15	5133	160
395	"	"	81	78	36	328	"	円形	E16	4168	174
396	"	珪岩	88	73	54	494	"	椭円	E12	4185	173
397	"	中粒砂岩	93	79	42	424	"	円形	D17	5093	185
398	"	粗粒砂岩	98	76	41	478	"	椭円	T15	40	89
399	"	片麻岩	75	70	36	282	"	円形	N15	4292	121
400	"	細粒砂岩	117	93	42	602	"	椭円	D14	984	106
401	"	粗粒砂岩	97	77	44	449	"	"	D16	7	94
402	"	中粒砂岩	84	77	44	404	"	円形	D15	4639	195
403	"	砂岩	75	69	39	299	"	"	D16	3212	179
404	"	中粒砂岩	95	88	45	586	"	椭円	M14	4295	175
405	"	粗粒砂岩	96	90	48	592	"	円形	U16	4236	187
406	"	珪岩	116	79	42	644	"	椭円	E14	1612	88
407	"	中粒砂岩	97	71	43	436	"	"	V13	4201	171
408	"	粗粒砂岩	78	79	35	415	"	"	C16	5134	194
409	"	中粒砂岩	101	88	33	430	"	"	S K10	5196	156
410	"	凝灰質砂岩	102	92	47	653	"	"	試掘	I ② E 1	290
411	"	中粒砂岩	108	81	46	602	"	"	G13	2337	101
412	"	珪岩	96	74	33	398	"	"	C16	876	95
413	"	粗粒砂岩	95	88	32	418	"	円形	C13	4	276
414	"	細粒砂岩	82	67	35	309	"	椭円	E14	13	71
415	"	中粒砂岩	109	80	51	639	"	"	F15	15	76
416	"	珪岩	92	82	54	597	"	"	M17	4445	125
417	"	"	92	75	45	472	"	"	C13	1265	84
418	"	粗粒砂岩	94	82	41	490	"	円形	D15	6	69
419	"	凝灰質流紋岩	93	77	49	551	"	椭円	F15	15	77
420	"	粗粒砂岩	104	93	34	517	残欠	"	D15	6	68
421	"	細粒砂岩	56	90	54	302	完形	不明	D16	7	72
422	"	"	104	85	37	467	"	椭円	E15	166	140
423	"	中粒砂岩	115	57	49	496	"	棒状	D16	8	143
424	"	粗粒砂岩	96	68	34	414	"	椭円	試掘	I ② E 1	289
425	"	"	109	85	40	578	"	"	D17	4840	170
426	"	"	113	85	56	782	"	"	E16	4414	152
427	"	中粒砂岩	108	82	64	749	"	"	L15	4303	151
428	"	"	126	93	37	649	"	"	C18	2872	176
429	"	"	113	76	41	514	一部欠	"	K15	26	172
430	"	粗粒砂岩	120	64	42	542	完形	長楕円	F11	4954	181
431	"	中粒砂岩	134	68	47	676	一部欠	"	E16	4416	118
432	"	"	120	101	42	777	完形	椭円	G13	2337	100
433	"	細粒砂岩	104	77	28	321	半欠	"	E17	4169	184
434	"	"	138	66	60	836	完形	棒状	D14	1034	139
435	"	粗粒砂岩	147	59	46	608	"	"	E11	5235	154
436	"	凝灰質流紋岩	143	78	30	521	"	長楕円	D14	5329	200
437	"	細粒砂岩	84	65	32	257	半欠	椭円	E15	4382	132
438	"	石英安山岩	90	67	45	453	"	長楕円	S K31	5136	133
439	"	中粒砂岩	124	67	40	425	一部欠	椭円	試掘	I ② E 1	284

## 第4章 庄が星数日遺跡

番号	名 称	石 質	長さ	幅	厚さ	重さ	遺存状態	形	出土地	遺物番号	実測番号
440	"	流紋岩	175	72	44	888	完 形	棒 状	D18	4188	169
441	"	細粒砂岩	138	79	56	974	"	長椭円	E18	5080	91
442	"	"	155	93	41	944	"	"	D17	2618	130
443	"	中粒砂岩	156	64	44	632	"	棒 状	E15	4715	188
444	"	"	62	51	26	144	"	椭 圆	L14	4300	183
445	"	"	61	51	39	181	"	"	F15	511	115
446	"	流紋岩	72	61	30	159	"	三角形	D18	2820	83
447	"	中粒砂岩	62	58	38	191	"	円 形	E14	1466	153
448	"	安山岩	86	74	51	426	"	椭 圆	E12	4185	177
449	"	中粒砂岩	117	87	42	582	"	"	E12	3124	144
450	"	凝灰質砂岩	147	65	48	647	"	棒 状	表採		73
451	"	中粒砂岩	140	72	55	779	"	"	C13	4	275
452	矢柄研磨器	"	123	36	28	119	"	"	試掘	-	-
453	"	細粒砂岩	77	65	12	77	残 欠	不 明	D13	4884	207
454	"	"	31	37	11	15	"	"	"	"	209
455	"	"	59	44	11	41	"	"	E15	4741	166
456	"	"	74	62	14	62	"	"	D13	4884	208
457	"	"	109	67	12	121	"	"	D14	4160	163
458	石皿	中粒砂岩	197	172	46	2266	完 形	椭 圆	E15	5282	259
459	"	"	177	163	57	2307	"	円 形	E15	5142	257
460	"	"	195	185	48	2408	"	"	S K 5	5489	238
461	"	凝灰質流紋岩	257	196	71	5828	"	椭 圆	U14	5392	239
462	"	(流紋岩)	250	207	47	3570	一部欠	"	D17	4840	270
463	"	細粒砂岩	249	187	73	4377	完 形	"	F11	5522	235
464	"	中粒砂岩	284	218	74	6927	一部欠	"	F11	5522	250
465	"	"	262	184	71	4568	完 形	"	S K 34	5333	262
466	"	安山岩	231	184	50	3124	"	"	E15	4163	150
467	"	細粒砂岩	247	219	59	4526	"	"	D17	2529	260
468	"	中粒砂岩	215	194	61	3522	一部欠	"	J12	4154	116
469	"	石英安山岩	133	77	95	1363	破 片	不 明	E11	5095	81
470	"	中粒砂岩	234	119	67	2182	"	"	H11	4150	82
471	"	"	126	179	65	1680	半 欠	椭 圆	E15	4183	249
472	"	流紋岩	195	120	42	1027	残 欠	不定形	F12	3938	159
473	"	石英斑面岩	417	247	86	1180	完 形	長椭円	T15	5393	242
474	"	粗粒砂岩	298	282	87	10765	一部欠	椭 圆	S K 45	5494	281
475	"	細粒砂岩	275	213	73	6151	完 形	"	D17	4781	261
476	"	石英安山岩	251	196	48	3882	"	"	F16	400	240
477	"	流紋岩	201	192	75	4151	半 欠	長椭円	D16	610	136
478	"	粗粒砂岩	127	155	68	1514	破 片	不 明	C14	4181	204
479	"	安山岩	154	170	61	2158	"	"	L12	4156	117
480	"	中粒砂岩	190	238	90	5364	半 欠	椭 圆	E16	5265	241
481	"	"	343	266	72	9780	一部欠	"	F12	4896	255
482	"	粗粒砂岩	265	205	80	6402	完 形	"	D16	654	252
483	"	中粒砂岩	151	128	64	1611	残 欠	不 明	D17	5093	203
484	"	粗粒砂岩	198	123	86	2554	"	"	D16	649	135
485	"	細粒砂岩	129	202	68	2467	半 欠	椭 圆	H11	4150	196
486	"	中粒砂岩	127	196	70	2644	残 欠	不 明	M17	4298	251
487	"	流紋岩	156	88	66	1348	破 片	"	E12	4890	79
488	"	(流紋岩)	269	228	48	4690	完 形	椭 圆	G15	21	265
489	"	石英安山岩	219	219	45	3604	"	円 形	D18	5028	236

番号	名称	石質	長さ	幅	厚さ	重さ	遺存状態	形	出土地	遺物番号	実測番号
490	石皿	細粒砂岩	218	142	61	2975	"	長椭円	F11	5522	256
491	"	(流紋岩)	220	191	42	2555	"	椭円	D16	4600	237
492	"	流紋岩	159	169	108	3966	残欠	不明	D14	981	205
493	"	安山岩	171	309	120	9272	"	"	D17	5534	274
494	"	流紋岩	204	230	73	4769	完形	三角形	F12	4895	267
495	"	"	247	175	72	4252	残欠	不明	E17	5082	279
496	"	凝灰質流紋岩	385	310	76	9584	完形	長椭円	D17	2524	258
497	"	石英安山岩	291	247	80	8031	"	椭円	N15	5495	271
498	"	流紋岩	124	276	81	3194	残欠	不明	D17	5534	273
499	"	"	374	330	91	14000	一部欠	椭円	E14	4885	269
500	"	安山岩	266	238	63	5924	半欠	椭円	D17	4791	254
501	"	石英安山岩	275	205	62	2622	"	"	F16	441	288
502	"	流紋岩	207	179	71	3400	"	三角形	D16	4704	263
503	"	"	243	140	61	2325	"	不定	D16	529	244
504	"	"	202	219	50	2102	"	"	F15	479	245
505	"	中粒砂岩	259	157	25	1445	完形	"	D16	4899	266
506	"	(安山岩)	284	229	77	6764	半欠	方形	D17	4791	253
507	"	中粒砂岩	141	196	30	957	"	不定	E16	274	243
508	"	"	200	194	31	1744	完形	"	F16	5264	246
509	"	流紋岩	171	145	62	2704	一部欠	方形	E17	2921	202
510	"	"	375	239	84	6975	一部欠	"	F16	424	272
511	"	安山岩	280	159	97	6669	"	椭円	D17	2563	264
512	"	流紋岩	290	192	66	4822	残欠	不明	D16	530	280
513	"	粗粒砂岩	234	155	67	2928	"	椭円	S K19	5491	247



第69図 剥片グリッド別分布図(黒丸1個は1~5片を示す)

第五表 磨石類使用状態一覧表 (○は片面(側・端)のみ、◎は両面(側・端)使用のもの)

番号	面(唐)	面(凹)	側(兼打)	側(面)	端(兼打)	端(面)	番号	面(唐)	面(凹)	側(兼打)	側(面)	端(兼打)	端(面)
340	○						396			○			
341	○						397			○			
342	○						398	○	○	○			
343	○						399	○	○	○			
344	○						400	○	○	○		○	
345	○						401	○	○	○			
346	○						402	○	○	○			
347	○						403	○	○	○			
348	○						404	○	○	○			
349	○						405	○	○	○			
350	○						406	○	○	○			
351	○						407	○	○	○			
352	○						408	○	○	○		○	○
353	○						409	○	○	○			
354	○						410	○	○	○			
355	○						411	○	○	○			
356	○						412	○	○	○			
357	○						413	○	○	○			
358	○						414	○	○	○			
359	○						415	○	○	○			
360	○						416	○	○	○			
361	○						417	○	○	○		○	○
362	○						418	○	○	○			
363	○		○				419	○	○	○			
364		○	○				420	○	○	○			
365	○		○				421	○	○				
366	○		○				422						
367	○		○				423						
368	○		○				424	○	○				
369	○		○				425						
370	○		○				426	○	○				
371	○		○				427	○	○				
372	○		○				428	○	○				
373	○		○				429	○	○				
374	○		○				430	○	○				
375	○		○				431	○	○	○			○
376	○		○				432	○	○	○			○
377	○		○				433	○	○	○			
378	○		○				434	○	○	○			
379	○		○				435	○	○	○			
380	○		○				436						
381	○		○				437						
382	○		○				438	○	○	○			
383	○		○				439	○	○	○			
384	○		○				440						
385	○		○				441	○	○	○			
386	○		○				442	○	○	○			
387	○		○				443						
388	○		○				444						
389	○		○				445						
390	○		○				446						
391		○	○				447						
392		○	○				448						
393		○	○				449						
394		○	○				450						
395		○	○				451						○

剝片（69図） 珪質頁岩の剝片は全体に散布はしているが、集中しているのは縄文時代の遺物が検出された地点と重なっていると言える。総個体数630点、総重量11,749gを数えた。

### 3 古代・中世の遺物

#### 1 南西地区の遺物（第70～73図、図版60・61）

土坑群・埴土面が多数検出され、鉢津の出土が顕著であった調査区の西端の南斜面で出土した遺物群で、F・G・H・I 10～13グリッド包含層からのものが多く、遺構復土からの検出は極めて少量であった。個々の遺物で特徴的な項を記述していく。

**壺**（514～536） 514は口径11.8cm、器高2.6cmを測るもので、内面の体部と口縁の境には凹線が巡るよう強く押さえ込まれている。口縁の内外面ともに調整痕が明瞭に残っているものの、使用によって器皿全体が滑らかになっている。底面に窯印が深く付けられている。515は比較的小型品で径11.4cm、器高3.2cmを測り、底部と口縁との境がはっきりしており、口縁端部がやや外反傾向に立ち上がっている。口縁部内面では平滑に変化している。516は内面の境界が明確になっているもので、全体が使用によって滑らかになっている。517は口径12.6cm、器高2.5cmを測り、口縁の一部が欠損しているだけのもので、口縁部が低く成型されている。外周の底部と口縁との境は丸味を持って整えられている。内面では中心部が盛り上がるよう成型している。518は復元できたもので、口径12.6cmを測る。底部は厚く作られ、細い沈線による窯印が付けられている。519は口径12.9cmを測るもので、口縁端部は薄く成型されている。外周の底部と体部との境には細かく稜線があり、調整痕跡が明瞭に見て取れる。底面ではへら切りの痕跡が平行線となって遺存している。520は口縁端部の一部を欠いているだけで出土した完好品で、口径13.7cm、器高3.2cmを測る。底部と口縁との境には幅の狭い調整痕が残り、底面は僅かに削り調整が施され、撫でによって面を整えていて、細い沈線の窯印がつけられている。類似する窯印を付ける518とは、埴土、調整、器形とも大きく異なっている。522は色調薄茶色を呈する生焼け品で、口径13.8cm、器高2.8cmを測り、口縁部の外傾度が大きくなっている製品である。523は器表面がザラついているもので、埴土に多量の微砂粒が混和されている。口径14.8cm、器高3.4cmの大判品で、口縁部は外傾して立ち、底部と体部の境界は丸味を持って成型される。底面には窓切りの平行圧痕が見られる。524の器表面の一部は、使用によって平滑になっていく部分が見られるもので、内面底部に一文字の窯印が薄く付けられている。525は薄い灰色を呈している焼きの甘い資料で、底部と口縁部との器壁に差が小さくなっている資料である。口径14cm、器高3.5cmを測り、底面は中央部が高くなるような丸底状に成型されていて、内面では体部と底部の境に凹線状の圧痕が巡っている。526は口径13.2cm、器高3.6cmに復元されるもので、底部の端部で器壁が肥厚し、底部中央で薄く成型されている。口縁部は内窓しながら立ち上がるようになっていて、接合痕が段差となって残っている。528は口縁部の一部を除いて復元できたもので、口径12.6cm、器高3.4cmを測る。口縁部と底部の器壁の差は大きく、境は内外面とも丸味をもって成型され、内底面では段差が著しい。口縁内面端部では、対称的な位置に模様が付着しており。外周にもそれが認められ、灯火に使用したものと推察される。529は口径12.8cm、器高3.3cmを測るもので、3片に割れていたものが接合し、口縁部の一部を欠くだけの復元が出来た。体部と底部の境界は丸味を帯びて成型され、全体的に丁寧に作られている。割れていた1片の底部外面には平滑になっていて、割れた後二次的な使用が行われたものと推定できる。530は色調灰白色を呈する生焼け品と推定されるもので、535とともに一定量の割合で出土している。外傾して立ち上がる口縁端部でやや外展して伸び、体部と底部の器壁の差が小さくなっている。531～534は断片的な資料で、岡上復元を行ったものである。535は底部と口縁部との接合部分で器壁が大きく肥厚しているもので、内底面の平坦部が失われている。536とともに内面に灯心油痕が見られる。

**高台杯**（537～550） 537は口径10.6cm、器高3.6cmに復元された小型品で、体部と底部の器壁の厚さが大きく差がついている。外底面に窯印と推定される幅の広い沈線が引かれているが、全形は不明である。538も小型品で、口径10cm、器高3.7cmに復元された。口縁端部で外展するように成型され、高台は断面台形状の低いものが貼付されている。539は口径10cm、器高3.3cmの小型品で、口縁が急激に上がっているために、内面で境が明確に

なっている。高台は低く、押圧したために外側にはみだすようになっている。540～546は中型品であるが、図上復元できるまでの資料は極めて少なかった。540は口径13cm、器高3.6cmに図上復元できたもので、底部と口縁の器壁の差が小さくなっている。高台は断面三角形状を呈して、稜線で接地するように成型されている。淡青灰色を呈し、胎土、焼成とも良好である。514は底部外面が平滑になっていて、二次的な使用があったものである。544は底面に鋸い工具による×印の焼印が付けられている。546は口径15.4cm、器高4cmに図上復元できるもので、体部と底部の器厚の差が殆ど無くなっている。高台は底面の外周に沿わずに内側に付けられているのが特徴的である。574は大型品で、口径18.6cm、器高6.2cmを測る。内面は緩やかなカーブを描いて口縁に立ち上がり、内底面は静止させて拂で調整が施されている。高台内側の底部は回転削り調整が弱く入れられている。内底面の一部では平滑になった部分が見られ、二次的な痕跡を残している。548～550は小型高台杯で、色調は暗灰色を呈し、胎土は微砂粒が混和され、やや脆い印象を受ける。図示した以外に2点の出土がある。548は口径13.6cmに復元できるもので、内舟気泡に外に立つ口縁部である。外周では積み上げの段が見られるが、内面では丁寧に成型されている。549は底部片で、底径5.8cmを測る。高台外側は凹線が入るように、強く押さえられている。550は底径7.2cmに復元できるもので、内底面には平滑な部分が認められる。

**蓋（551～575）** 蓋器形は高台杯に比較して、量的に多く出土しているのが特徴的で、その内面が二次的に使用されて平滑になっているものが多く見られるのが、もう一つの特徴である。内面に平滑な面を持つたない例は少なく、図示した中で552・562・568・574上げるに過ぎず、大部分には二次的な使用痕が認められる。551～563は中小型品で、551は口径12.2cmに復元される。552は口径11.2cmに復元できるもので、内屈する低い口縁部が付き、天井部および口縁端近くまで削り調整で平坦になり、口縁とは鋸い稜線が形成される。553では天井部の端に幅の狭い削りが施される程度で止められている。内面は平滑になり、革と思われるものが微かに認められる。554は口縁端部に幅の狭い平坦面を置いて嘴状に口縁端部が伸びていくもので、口径12.4cmに復元される。555は口径12cm、器高3cmを測るもので、天井部分が丸味を持って高まる器形を持っている。天井部の端部には弱く範削り調整が施されている。556は天井部の削りが入れられ、わずかな段を置いて口縁につながっていく。器表面には輪が厚く飛んでいる。557は口径12.8cmに復元されるもので、口縁部は体部からそのままの形で納められている。558は口径12.6cm、器高2.2cmに復元されるもので、天井部と口縁部との境界に削りが入れられ、口縁部端部は内屈気泡に納められる、つまみ部は偏平で、中心が突起状に成型される。灰白色を呈し、焼成はやや不良。559はボタン状のつまみが付くもので、口径12.2cm、器高3cmに復元される。胎土に若干ながら砂粒を含んでいて、薄茶褐色を呈している。560は口縁が対称的な位置で欠損し、つまみ部分が失われている。内面は全面的に平滑になり、墨の汚れが周囲に付着していて、つまみ部の欠損は意図的に外した可能性が高いと推定される。564～575は大型品の蓋で、567は口径15.6cm、器高2.6cmを測り、一部に焼き歪みを持っている。天井部と口縁部の一部に回転削り調整が見られる。外周は風化を受けたと思われる器肌のざらつきがあるが、内面は色調を異にし平滑である。568は全形の半分を欠いているもので、口径17.4cm、器高3.4cmを測る大型品である。つまみ部分の周辺が段を持って高く成型され、その境目と口縁との中間部分に先端による1条づつの沈線が施されている。569はつまみ部を打ち欠いたとも推定されるもので、口径16.6cm、器高2.8cmに復元される。体部と天井部の境に幅の狭い削り調整が施されている。575は口径16cm、器高4cmに復元される。口縁部は輪積み痕を残し、凹凸が目立ち、天井部の削りはつまみ部の周辺にとどめられている。

**鉄鉢（576～579）** 本器種は器形的に特色があるところから、4点を図示することができた。576は接合することは出来なかったのであるが、図上復元を行った。口径15.8cm、体部径18.6cm、器高9.1cmに復元される。口縁部は内側を丸く整え、先端が尖り気泡に成型し、口縁近くの位置に最大径が来て、底部に向けて急激に下がっていく。底部は尖り底で、体部の下半分に削り調整が施され、内面は横拂でによって平滑に整えられる。色調は灰色を呈し、胎土は精選されているが、焼成はやや不良である。577は底部を除いて接合復元できた資料で、口径2.2cm、最大径23cm、現器高9.2cmを測る。口縁内外面とも横拂で調整、体部下半は弱い削りが入れられているようだ。最大径のある位置から下に、色調の変化がみられ重ね焼きの痕跡と推定できる。灰青色を呈し、胎土に若干

の砂粒が混和されている。578は口径21.2cmに復元されるもので、口唇の稜がなくなつて尖り気味の成型となつてゐる。口縁部および内面は刷毛による横撫でが入れられ、体部下半には範削り調整が施されている。577と同じ様に重ね焼きの痕跡が色調の違いによって認められ、内面全体が覆われていた状況がうかがえる。579は尖り気味の口唇部を持つもので、内外面とも撫で調整で整えられている。図示しなかつたが尖底部1点があり、内面全体に刷毛調整痕が見られるもので、鉄鋸すべてが器形、調整が異なつてゐる点が注意される。

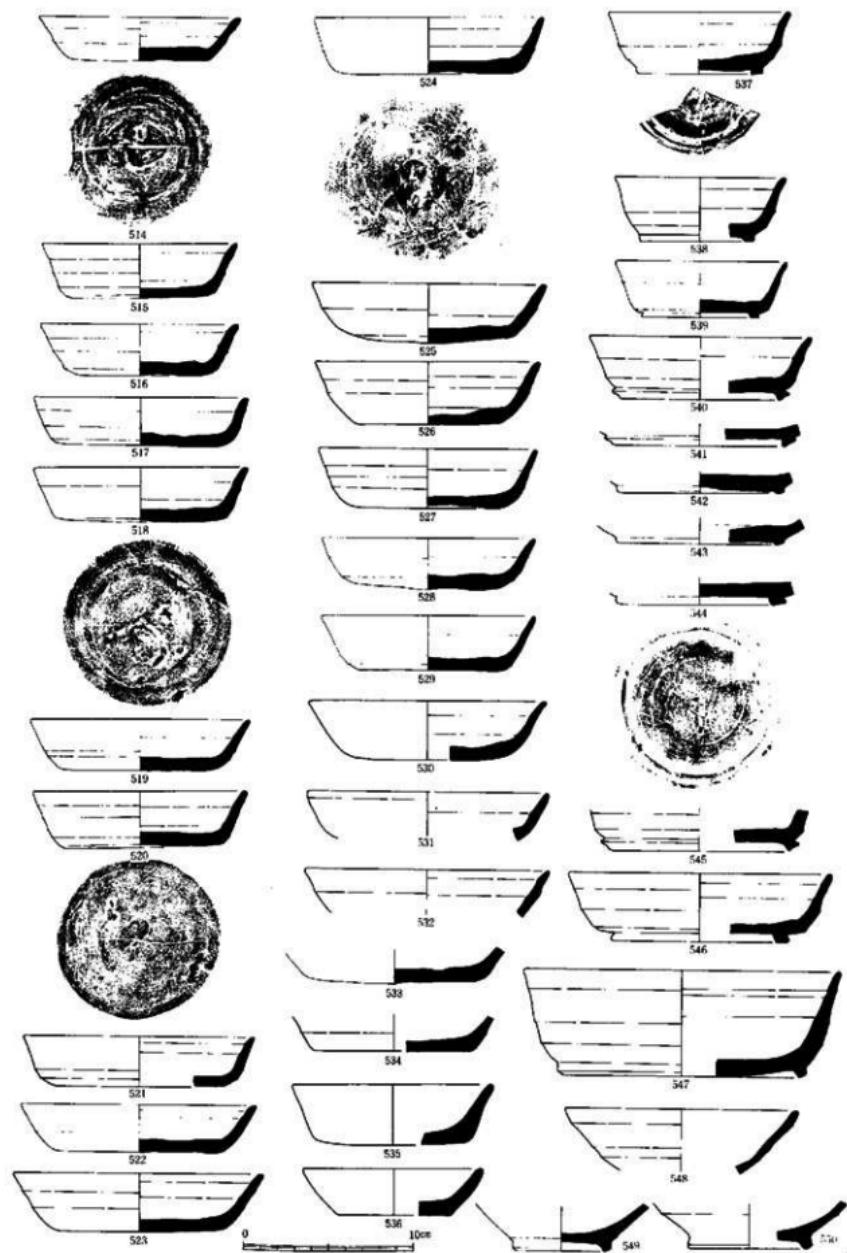
広口壺ほか (580~582) 580は広口壺の口縁部で口径18cm、現器高9.3cmを測り、581は瓶器種の底部片で、底径11.2cmを測る。外底面は粗雑な撫でが施されている程度である。582は瓶の口頸部で、最小径は3cm、現器高6.8cmを測る。

土師器壺 (583~589) 583は土師器の杯底部で、内外面ともに赤彩が入れられている。薄茶褐色を呈し、胎土は精選されていて、焼成とも良好である。内面は丁寧な調整が入れられていて、外底面には黒印の一部がみられる。赤彩土器の出土は少なく1点のみであった。584は高台、口縁部を一部を除いて接合復元できたもので、口縁部の片側が直立気味に成型されているところから、頗した器形で図示した。口径14.5cm、最大器高4.8cmを測り、口縁部と口唇の器壁の差がなく成型されていて、体部は凹凸が著しく残り内面の調整もやや粗雑である。高台は断面三角形状のものが張り付けられ、さらに撫でによって調整されている。淡茶褐色を呈し、胎土に砂粒は認められない。585・586は同一個体と推定できる内黒土器で、口唇端部を削いで尖り気味に、口縁部分は器面の凹凸が残される成型であるが、内面は平滑に整えられている。587は口径14cmに復元されるもので、口縁端部内面が肥厚して体部に移行していく。内外周ともに丁寧に調整され、内面は平滑に整えられ、全体的に薄く仕上げられている。黄灰色を呈し、胎土には少量の微砂粒が混和されている。器表面の一部に赤彩痕が見られる。588は高台部分が剥落したようになつた内黒土器で、内外面とも粗雑な撫でによって調整されている。589は小型の壺型土器とも推定されるもので、底面に糸引き正窓が微かに残されている。底部とともに器壁は薄く成型されているが、内外面ともに凹凸が立つ。

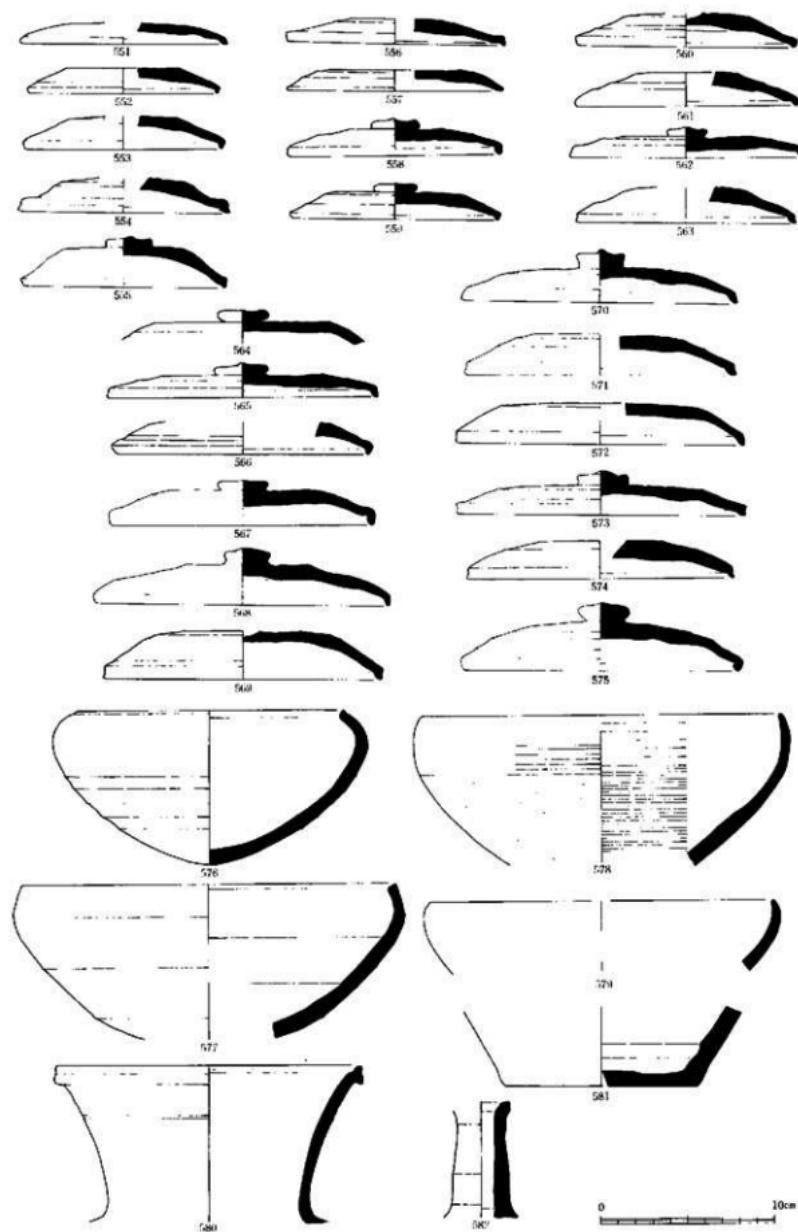
土師器壺 (590~607) 口径20~25cm前後の通例のものが多く、内外面ともにカキ目調整を施し、体部下半に叩き成型をなし、丸底に納めるものである。口唇端部のつまみ上げの形態によって細分され、口唇外側に面取をする594、口唇外側で押圧をいれる593、口唇を摘み上げて突き段を形成する596などがある。色調は淡黄褐色から灰茶褐色までの幅があり、橙味褐色を呈した焼成の良好なものが多く見られる。胎土には砂粒の混和は比較的小なくて良好なものが多い。598は口径21.4cm、現器高15cmに復元されるもので、口唇部分は摘み上げて尖り気味となつていて、口縁外周は撫で、頸部以下には粗いカキ目調整が入れられ、下半には叩き成型が施される。599は口径18.2cmに復元されるもので、内外面とも刷毛撫でによって調整され、体部に縱位置の沈線が入れられている。607は体部片で、外周は格子目の叩きが、内面は同心円文の叩きが入れられ磨消が施されている。体部上半では縱方向の粗雑な撫でがなされているが、カキ目調整痕は認められない。600・601は小型の壺で、600は口径15cmに復元される。摘み上げた口縁は有段となるが、丸味を持って成型され、頸部は横撫でが入れられている。602と603はS字状に口縁を成型する新段階の土師器壺の大型品と小型品で、段を付けた端部に短く内屈して立ち外展する口唇部が取り付けられたものである。602は口径12cmに復元され、口縁内面の段に炭化物が付着している。

その他の遺物 (608~611) 608~609は同一個体で赤彩が施された土師質土器であるが、全体器形および所産時期は不明である。608は底部片として図示したが、口縁部の可能性が考えられる。細くて高めの突帯が巡らされ、内面に内側からの穿孔が施されている。609では器壁が厚くなり、断面三角形の突帯が巡っている。内面の一部にも赤彩の痕跡が残っている。明黄褐色を呈し、胎土は精選され、焼成も良好である。610はフイゴの羽口で、送風する部分である。基部径8cm、内径2.8cmに復元され、器壁の厚さは2.3cmを測る。色調は明茶褐色を呈し、胎土に砂粒の混和は認められない。611は基部が袋状になった鉄斧の完形品で、長さ8.3cm、基部幅3.5cm、刃幅4cm、重さ95gを測る。

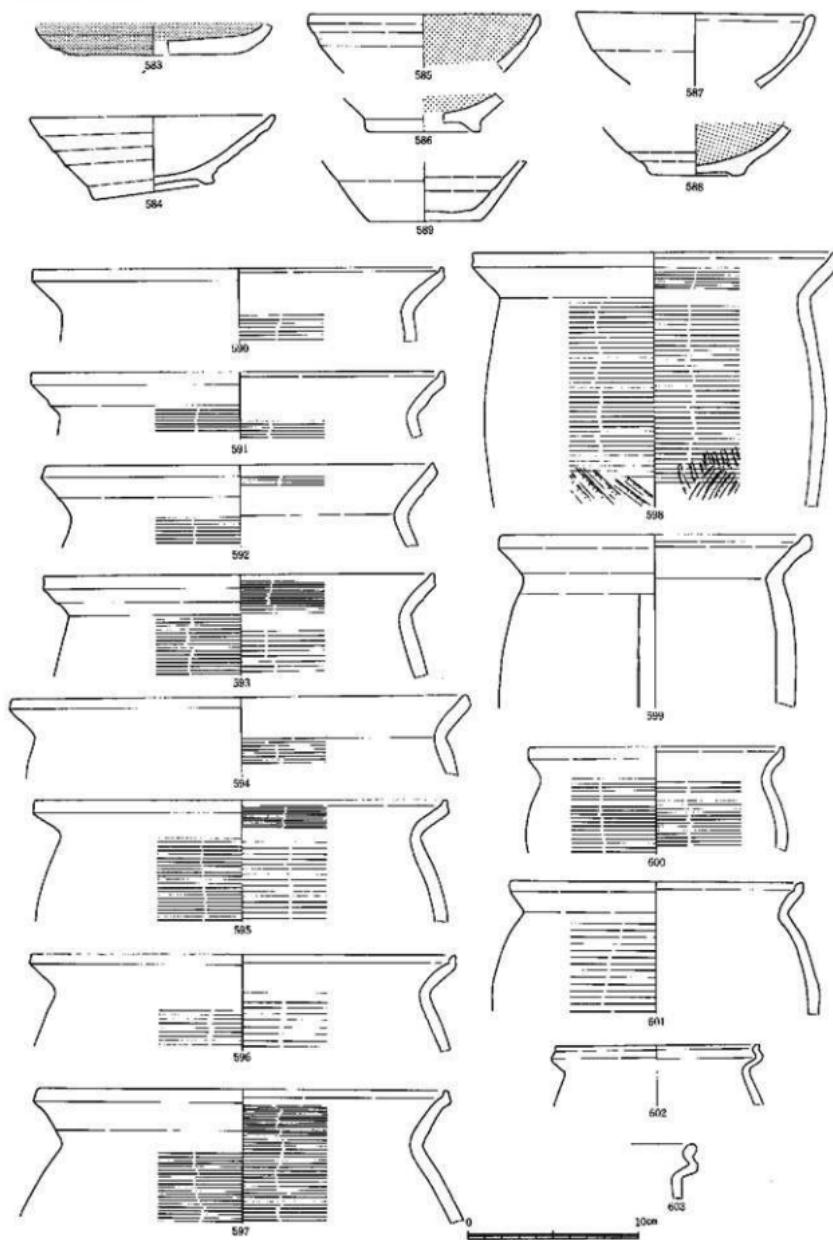
写真図版で示したが、中世に位置付けられる中国製の青磁が2点出土し、また、美濃、瀬戸の鉄釉片、越前焼片などが見られ、近世以降の陶器片も出土しているが、いづれも断片的である。



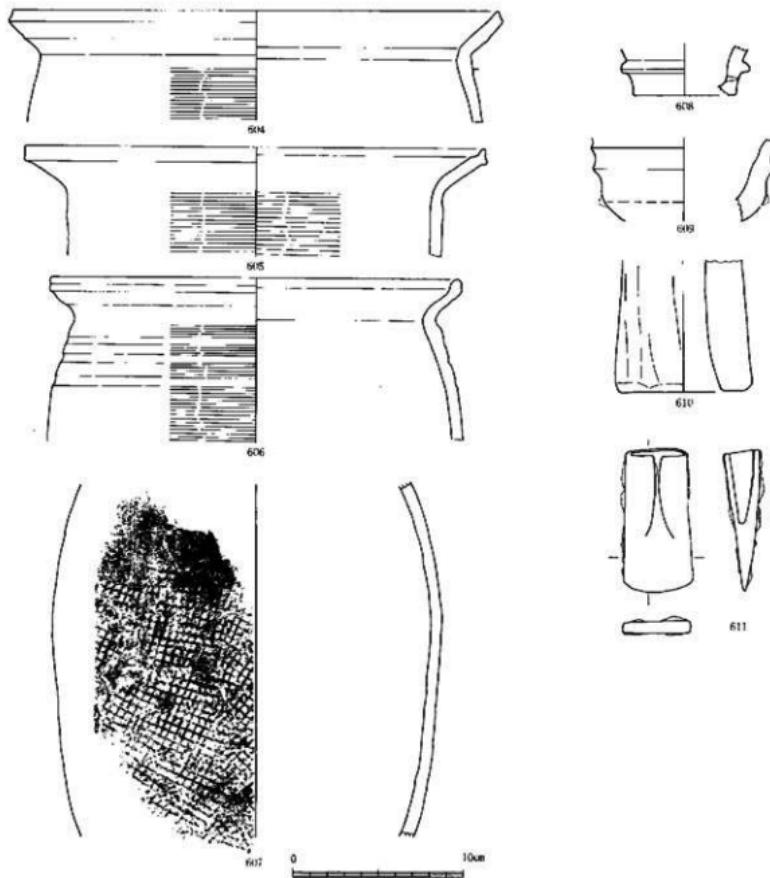
第70図 南西地区の古代の遺物実測図（1）(1/3)



第71図 南西地区の古代の遺物実測図(2)(1/3)



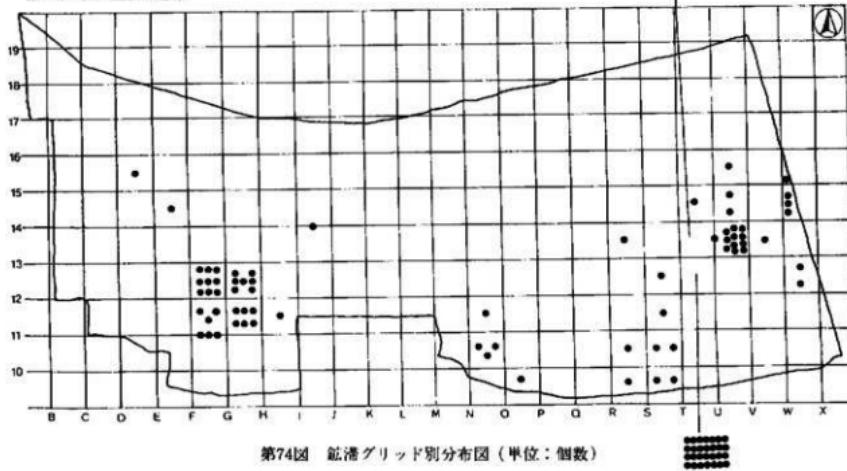
第72図 南西地区の古代の遺物実測図（3）(1/3)



第73図 南西地区の古代の遺物実測図(4)(1/3)

## 2. 東地区川土の遺物 (第74・75図、図版62)

**土師器坏** (612~633) 612~633までの坏は、U13グリッドで集中的に出土した資料である。同じ器種であるが、個別では違いが上げられる。612は口径13.3cm、器高3cm、底部4.2cmに復元されるもので、全体の半分が接合できた。体部下半部に墨書が認められ、617と同じ書体で「寅」と判別できる。内外周とも凹凸のある器體で、底部も体部と変わらない程度の厚さで作られている。色調は黄灰色を呈し、胎土には砂粒が多い。613は口径13cm、器高3.3cmに復元できるもので、口唇は丸味を持って成型され、内面は平滑に整えられている。614は焼き歪みを生じているもので、口縁部の立上がり方は高い位置で図示したものである。615は全形が復元できた資料で、口径13cm、器高3.6cm、底径5.8cmに復元できた。口縁端部に段が形成されたような状態になっているが、内面は平滑に磨かれている。底径がやや大きくなり、窪む傾向にある。616は口径13.4cm、器高4.3cm、底径5.6cmに復元できるもので、淡黄褐色を呈し、胎土は精良である。617は口径13.2cm、底径5.6cm、器高3.5cmを測るもので、器表面は凹凸があるが、内面は焼きが施されている。底部近くの側面に横位置で、草書体の「寅」が墨書きされていて、さきの612と類似した位置であり、同一人によるものと推定される。618は口径13.2cm、器高4.



第74図 篦溝グリッド別分布図（単位：個数）

2cm、底径6.8cmに復元できるもので、底部の外縁が迫り出すように成型されている。内面は平滑に磨きが施されている。619は口径13cm、器高2.8cmに接合復元できた資料で、全体に歪みが生じている。

622は口径13cm、器高3.5cmに復元されるもので、底面は摩耗しているために図示がなかったが、回転糸切り痕が認められる。体部の一部に淡茶褐色の部分が見られ、赤彩痕の可能性が考えられる。

**土師器高台坏** (634～648) 634は637とともにU13グリッドのP30から出土したもので、口径13cm、器高5cm、底径5.6cmに復元できたもので、歪みのために傾いている。内底面に凹凸が出来ているが、内面は撫でによって比較的の平面となっている。外底部の高台の中に、「上」字の墨書がなされている。635は口径13.6cm、器高4.8cm、高台径5cmを測る。内面および外周の高台近くまで黒色の付着物が見られ、灯心油痕と考えられるが、即断は出来ない。636は大型品で、口径16.2cm、器高5.8cm、高台径8.6cmを測る。比較的薄手に成型されていて、摩耗のため調整痕は判別できない。637高台径8cmを測る大型品のもので、底面の中央部に糸切り痕が認められる。639は内黒土器で、暗文のようなものがあるが確定は出来なかった。634の外底面は黒色になっていて、墨を使っていたのではないかと推定される。646には糸切り痕が遺存している。647・648は内黒土器で、648は高台が剥落してしまったものである。

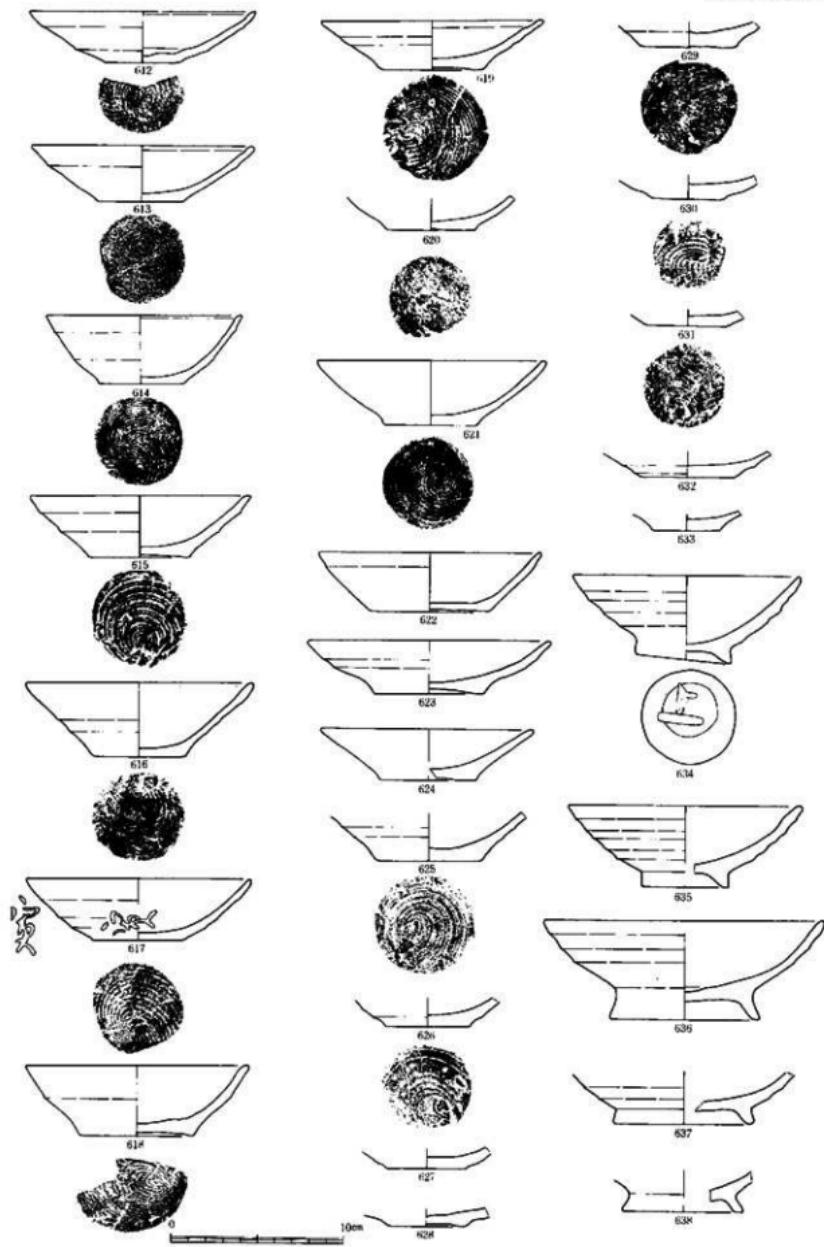
**甕** (648・649・653～656) 648は高台部の剥落した坏の可能性も考えられるが、摩耗のため確定は出来ない。649は底径7.2cmを測る小型甕の底面部である。654は口径15cmを測り、口唇が外側にせりだす短い口縁部を持つもので、撫でによる器面の凹凸が目立つ。653が体部にあたるものであろう。656は内傾する口縁をもつもので、頸部に煤の付着が見られる。656はP35から出土した受口状の口縁となる甕で、体部に撫でによる凹凸が現れている。656は666とともにT14グリッドのP35からの出土品である。

**反転** (651) 651はS14グリッドから出土したもので、灰釉の高台部分である。高台径7cmを測り、高台は丁寧に成型されている、内底面では口縁に移る手前の部分で、褐色の釉が点状に付着している。色調は灰色を呈し、胎土は密で精良である。

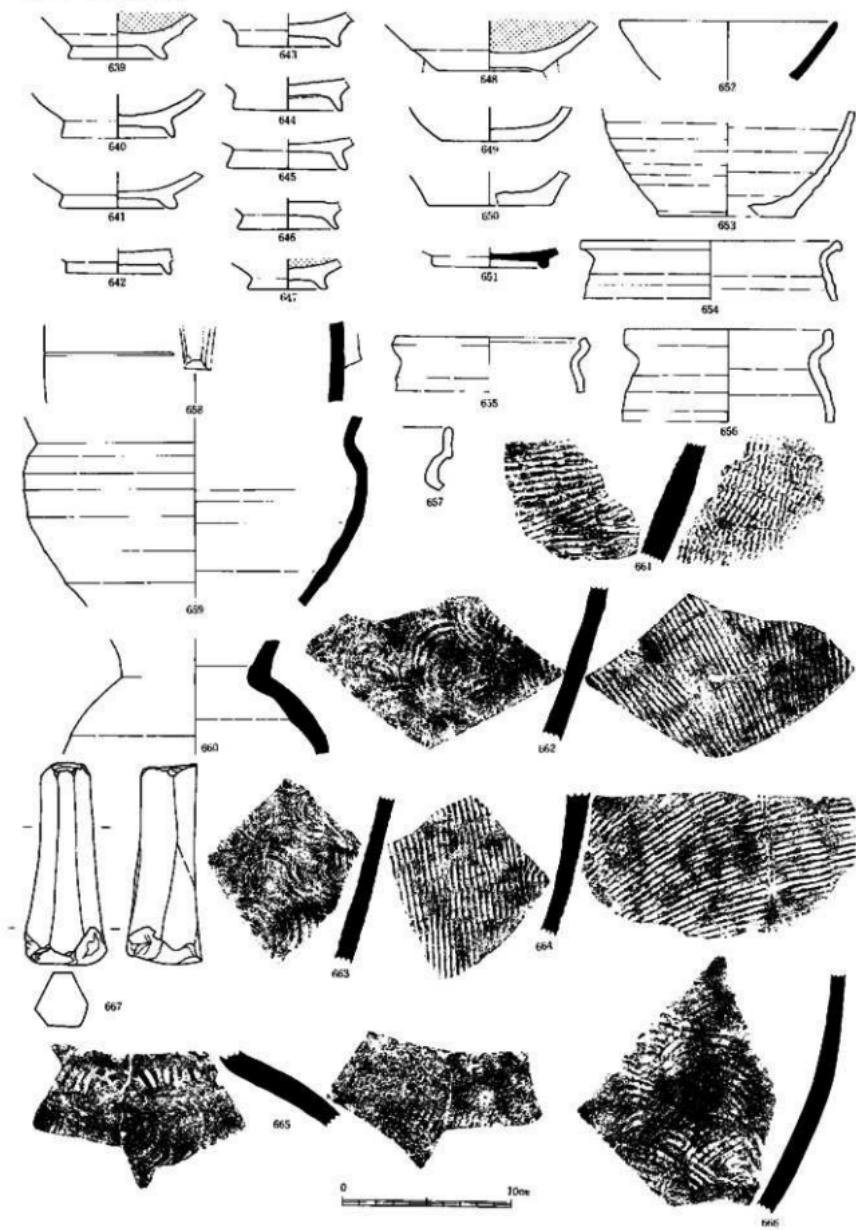
**弦生土器** (657) S14グリッドから1点だけの出土で、小片の為に径は不明である。有段口縁で、口縁部に撫印線が微かに認められる。

**須恵器** (652・658～666) 652はT15グリッドのP19から出土し高台坏の口縁部である。658は双耳瓶の体部片で、659も広口壺の体部片である。660は壺の肩部片である。661～666は大型甕の体部片である。664内面の叩きは、二次的な使用によって平滑になっているものである。665は甕の肩部片である。

**埴石** (667) 六角柱となった埴石が1点だけ出土しているが、所属時期は不明である。



第75図 東地区の古代の遺物実測図（1）(1/3)



第76図 東地区の古代の遺物実測図（2）(1/3)

**鉛津**（第76図・図版62）鉛津の出土は、古代の遺物散布状況に密接につながり、南西斜面と東部に集中している。總個体数は115個、總重量4,349gに上がる。製鉄遺跡とは量的に少ないとなどから、小鍛冶に關係する鉛津と推定される。

## 第6節まとめ

### 1. 繩文時代

本遺跡は繩文時代草創期に所産した矢柄研磨器を初めとして、前期、中期、後期の気脛式土器までの遺物が少しづつ出土しいるのが特色である。本遺跡の東、北部の庄が屋敷A・C・D遺跡で展開している住居址群が中期の新崎式期を盛期としている在り方を考えれば、平野部から丘陵内に入り込む通路的な側面と一時的なキャンプ地であったことが想定される。繩文土器・石器の出土状況を、グリット別分布図で中期始めの新保式を境として前後に分けて示したが、前期の土器は集石炉跡などの遺構と重なるようにして分布しているのが認められ、中期以降の土器はやや東より地点を変え全域で散発的に出土するという傾向が見られる。後期の気脛式土器が限られた地点で出土している以外は、散在した在り方から一時的なキャンプ地と思われ、時期ごとに利用地点が異なるものと理解される。遺物の出土状況から丘陵の全域が使われたのではなく、西端の三方が谷に臨んだ狭い尾根鞍部を選地しているのである。庄が屋敷遺跡群の中では最も標高の低い位置にあり、周辺への展望が開けないところであるが、丘陵内部への通路であり、秋口の渓水期でも涸れることのなかった谷頭からの流水の存在が重視された結果と推定される。

繩文時代の遺構は、集石炉跡2基と落とし穴1基、土坑数基が上げあられるだけと少数であった。4基の配石遺構については時期を確定できるだけの資料は得られず、比較的規模の大きい第1号配石遺構は時期的には下る可能性が高いと考えている。集石炉跡は前期に位置付けられるもので、県下においては田舎浜町吉田野寺遺跡出土例に次いで検出となった（註1）。試掘調査段階で出土した矢柄研磨器を含む土坑からは、偏平な石が見られただけで土器は検出されなかった。落とし穴は中期に所産したもので、尾根筋の幅が最も狭くなった地点を占地しているのが留意される。

土器は全形を遺存しているものではなく、小片となっているものばかりであったが、3群43類に細かく分類した。その中で、編年的位置が明確とはなっていない前期前半についてその概略を考えていく。

第1群土器は前期に所属するものでまとめた。1～3類土器は細かく刺突文が施されている県下では類例の極めて少ない資料であった。能都町真鍋遺跡第2群土器（註2）、羽咋市寺家オオバタケ遺跡第1群土器（註3）、押水町免田一本松遺跡（註4）などが報告されているだけで、その位置付けについては器種構成も明瞭ではないことから、北白川下層1式～北白川下層Ⅱa式までの幅があり、北陸での朝日C式（註5）細分の手掛かりを摸索している過程の中にあったと言えよう、内外面ともに二枚貝条痕調整が見られない類は、北白川下層式から分離して考える必要があるようだ。4類Aは結節回転が施され突堤が廻らされている土器で、県下での出土例は報告されていない。そして、突堤の巡る5類土器と突堤に爪形文を施す4類B、20類などと併せて、類似例は新潟県巻町布目遺跡（註6）の第II群土器の中に見出す事ができる。ループ文を施した6類土器は、真鍋遺跡で出土例が見られ他、穴水町甲・小寺遺跡（註7）、富山県大門町小泉遺跡（註8）などで報告されていて、関山式土器で盛行する繩文施文が明確ではない事などから北白川下層Ⅰb式（註9）に比定されると考えるが、平整ではなく突起状の波状口縁となる点に保留が求められる。22類は繩文地文に粘土紐貼付のもので、覗ケ森式あるいは福浦上層式土器（註10）に比定されるが、波状貼付ではない事から、覗ケ森式土器の可能性が高い。23・24類は結節沈線文、結節浮線文、鋸齒状印刻文などの特徴から福浦上層式土器に否定できる。

前期の土器は各型式が錯綜するような状態となるのは、前半の段階が周辺地域の型式名で呼び変えるほどに北陸地域での様相が不鮮明であったからである。能登島町佐波遺跡や穴水町甲・小寺遺跡、富山県権堂寺遺跡（註11）などが報告されていた程度であった北陸の状況は、近年の富山県大門小泉遺跡、同小杉町南太閤山1遺跡

(註12)、田鶴浜町吉田野寺遺跡、水見市十二町干瀬排水機場遺跡(註13)などの調査成果から地域性の把握に進展が図られている段階であるといえる。本遺跡の資料は限定された地点からの出土で一括りが高いと言えるが、反面長期に渡っての土器資料が見られることからの配慮が必要である。ここでは、南太閤山Ⅰ遺跡を報告された山本正敏氏の編年に沿って考えていく。南太閤山Ⅱ群は花積下層式(註14)に比定され、押圧縄文、櫛歯状になる押し引き沈線文、地文に貝殻条痕文が特色で、石川県の佐波式、富山県の権現寺式の大部分が包括されるとしている。本遺跡では見られない資料群で、本遺跡の形成の上限を見ていく上で重要である。南太閤山Ⅲ群は関東の関山式に並行するとされているが、編年表では二ツ式から関山Ⅱ式までの幅を持たせている。それを背景としたのであろうか第7類の連続刺突文を付けるものを本遺跡では確認できないのは、一定の地域性および時期差を反映したもののように思われる。南太閤山Ⅳ群との類似性が高いことが認められる。北白川下層Ⅰb式に比定した爪形文(17類)の位置付けで見ると、重複する状況が想定される。Ⅱ群土器が時期幅を広くとらえた群とし型式としなかったことは、北陸地域にあっての遺跡や資料的な限定から細分へ向けての試案としての位置付けなのであろう。

本遺跡出土土器と類似例が多い新潟県の巻町布日遺跡との比較では、羽状縄文土器の量的な差や縄文の在り方が多様な面など大きな違いが見られるが、連続刺突文、結節回転文、平底と丸底の混在などに南太閤山Ⅱ群土器や本遺跡での主体的な土器との類似するとしている第9類の櫛歯状刺突文土器をはずし、さらに連続刺突文の第7類の系統的分離を考え、布目式と並行する形で南太閤山Ⅲ群を限定した型式として考えたい。その上で、北白川下層式土器群の縁辺に位置している石川県の地域性を含めて、土器の系統性をとらえていかなければならず、今後の資料の増加に期待を寄せざるを得ない。

出土した石器群は多種多様であったが、その中で注目されるのは矢柄研磨器と基部に抉りの入った磨製石斧の出土である。典型的な形態を有しているものとしては、著名的な岐阜県坂下町椎ノ湖遺跡出土例に次ぐ、2例目の発見である(註15)。本遺跡の試掘調査で検出され検出され、遺物包含層からではなく土坑覆上からあることが特筆されるが、土坑内から他の遺物は検出されなかった。矢柄研磨器は長さ123mm、幅36mm、厚さ23mm、重さ119gを測る完好品で、椎ノ湖遺跡例では、長さ128mm、幅45mm、厚さ23mm、重さ(143g)と報告されているから、幅で1cm弱の差があり、厚さでは0.5cm厚く、本遺跡の例がやや細身であり、厚みを増しているといえる。

矢柄研磨器は山内清男氏によって旧大陸や新大陸からの類似遺物の比較を通して、縄文時代の年代を考える基礎的資料として石器の出現と共に取り上げられ、土器や弓などとともに大陸から伝来した可能性が高いと位置付けられた。紀元前2,500年頃に大陸から伝わった新石器時代文化が縄文文化であるとの時代区分は、炭素14年代測定法から与えられた年代への批判であり、「相互の交換物質を抽出し、それによって相互年代決定の方法である。」(註16)とされ、断面三角形の鎌、植刃、玦状耳飾、石製刀子などを大陸渡米文物と考えられている。その後、縄文時代の上限をめぐる論争へと展開していくこととなるものの、山内氏のよって取り上げられた椎ノ湖遺跡出土例から、現在までに典型的な矢柄研磨器の出土は皆無に近く、研究そのものが停滞を余儀なくされてきた。そして、各地域、各時代から出土する溝を付けた砥石を集成された宮下健司氏の論文では(註17)、「矢柄研磨器」に対しての再検討が行われている。山内氏の言う矢柄研磨器は「卵を二つ割りにしたような形で、その平坦面に一本の溝が通って居る。従て形に則りていれば、有溝砥石といつてもよいものである。」という規定があり、さらに「我々が矢柄研磨器と厳密に規定しようとして居る、一定の形態用途を持つ器物は、特殊な場所と時代に限られて存在するものであるかも知れぬ。」と述べ、溝のある砥石ということで矢柄研磨器を幅広くとらざるを得なかつた為に有溝砥石として規定を拡大したことが、機能的分類と形態的分類を合わせた分類であると、後年、宮下健司氏は批判され、形態的分類から出発した有溝砥石の分布・変遷・用途の研究がなされている。有溝砥石を矢柄研磨という限定された機能と機能名で呼ぶことに疑問を持ち、「有溝砥石はときには矢柄や木器の先端あるいは玉類を研磨したことがあったかも知れないが、やはり被加工物の主体は縄文に石器とともに多用された骨格器であった可能性が高かったとみたいのである。」と縄文文化が海へ展開していくひとつの手掛かりとなつたのが有溝砥石であると結論づけられている。山内清男氏が矢柄研磨器と命名し、大陸出土遺物との相互年

代気ってお決定を意図した事については、否定的な見解かと思われる。

宮下健司氏の有溝砥石での分類から（註18）、本遺跡出土の矢柄研磨器Aを見ると、平面形は6類に分類された内の卵形・梢円形のI型に属し、断面形はカマボコ形のA型で、溝の数は単条のaに分類することができる。類例は草創期段階に位置付けられるものが多いとの視点が生まれてくる。これは、手に持てる大きさで、完通・非完通を問わず、溝幅10mm前後の溝を持つものとして有溝砥石をば広くとらえた為と理解され、分類の基準境界が不明瞭になった結果と考えられる。典型的な矢柄研磨器を止揚させる系統的な時期別変遷を考えいく必要があると思われるが、時期幅が限られた石器である可能性が高いと推定されるので困難が予想される。それは、矢柄研磨器という石器を有溝砥石のI形態ではあるが、分離させて考えていくことである。山内清男氏が大陸との関連を想定した遺物には、断面三角形の錐、植刃などがあり、その他に块状耳飾、石製刀子など各時期で関連遺物が指摘されている。芹沢長介氏は「周辺文化とに関連」（註19）のなかで、いわゆる「植刃」は尖頭器の折れた部分であり、無関係の類似にすぎないとしているものの、石錐、石刀などでは肯定的な視点で評価されている。理化学年代の問題点を指摘している中村五郎氏は（註20）、矢柄研磨器・断面三角形の錐などの他に底部施土器や有角石斧、円盤形スクレーパーなどの遺物からの大陸文化との検討を行っているが、芹沢長介氏が指摘しているように、中国およびシベリヤの大陸考古学の成果は現状において絶対的基準の達していないものであり、年代決定や伝播ルートにおいても将来的な課題とせざるを得ないが、無関係の類似としている遺物についても急な結論に置くのではなく縄文文化の中での検討を加えていき、交差編年法による相互年代決定を徹底させて行くべきものと考える。

さて、本遺跡出土の矢柄研磨器Bであるが、形状は不定形の平板な砂岩質の石材で、幅10mm、深さ5mmの半円形の溝が内部に多くの擦痕を残して完通し、溝のある面が平滑に磨かれ、その背面には溝と斜交ないしは直交する位置に浅い磨き溝が付いているもので、磨いてある面で溝部分を合わせると径10mmの管状となり、背面から紐などで括りつけて使用したもので、矢柄研磨器Aより実用的な形態を取っている点に注意が必要だ。県内では縄文時代全般に渡って類例の検出例は見られないが、桃ノ瀬遺跡で一片の出土が見られる。典型的な矢柄研磨器は一対のものを向かい合わせて、手持ちで使用するとの想定であるが、本例によって背面から縛って使用したと考えられ、平板で磨面がある砥石についても再考を要すると考える。さらに、矢柄研磨器Aの対となる面での平坦面が確保できていないことや溝が半円ではなく、溝底面に擦痕が明瞭ではないことなどから、利器としての疑問を持たざるを得ないものがある。

さて、矢柄研磨器A・Bの2種ともに縄文時代の所産と推定しているが、他の石器では該期に想定されるものに、局部磨製石斧とした292と打製石斧A類の293、石鏃250などが上げられる。磨製石斧は小型品で自然面を依存し、刃部に磨きが認められる。打製石斧A類は断面三角形状に成型されているものである。石鏃は基部が円基に成型されているものである。その他では、削器（231）、挫器（232）などが上げ得るもので、幅約20m、長さ約30mの範囲での出土であるが、複合した時期を包含した遺跡での成果であり、その明確な位置付けは今後の課題である。土器では草創期に位置付けられるものの検出は確認できなかったが、隣接する庄がが屋敷A遺跡の第1号住居址の覆土から、表裏縄文施文のものが1点だけ出土している。本遺跡からの距離は約7~80m程度である。

磨製石斧1類としたものは、頭部に溝を巡らせている特異な形態になるもので、大型・小型を含めた全体では10点が上げられる。刃部は丸刃で、体部断面形は中央が膨らみ先端が尖る円盤形を呈し、頭部平面が梢円形で尖がり気味に成型されるのが特色である。通例の磨製石斧の破損品で、溝を造り出そうとしている276の1例が認められる。検出例が少数であれば、磨製石斧の中での特異形態とも思われるが、大型品から小型品まで同じ形態を取り、通常の磨製石斧と共存していたと推定される。類例は押水町宿東山遺跡（註21）で板灰岩質の1例が上げられるだけで、現在的にはその時期、製作地などに対しては不明であるが、本遺跡での各時期ごとの土器の出土状況と各期での石器の組合せから、前期の南太陽山乙II群土器期（ニツ木式、関山I式期）に所産した可能性が高いと考えている。県下での該期の遺跡での調査は限られており、比較的報告例の多い東日本地域で出土例が認め難いことや石質などから、地域的な限定はあると思われるが西からの影響を想定し、本類の磨製石斧を辰

口型磨製石斧と仮称していきたい。

他の磨製石斧では片刃の287が、擦裁磨製石斧の可能性が推定できる。

## 2. 古代

古代の遺構は南西斜面地区と東地区と2地点が距離を置いて検出され、出土した土器から形成された時期が異なっている事が認められた。低丘陵とはいえ山中で掘立柱建物跡が発見されたのは、寺院址である小松市八幡淨水寺跡（註22）・小松市里川上遺跡（註23）や小銀治を行っていたと見られる押水町宿向山遺跡（註24）などとごく限られた時期と性格のもので、特異な立地を取っている遺跡と言え、時期的に後者と類似する在り方と言える。本遺跡の2地点で共通しているのは、比較的小さな鉛滓が多数出土することと焼土面が顕著に見られることで、共に鉄製品の小銀治を行っていた工房跡と推定できるからである。なお、本遺跡の北側に展開する庄が屋敷A遺跡の南西端部に、同時期と推定できる竪穴式住居址が1棟単独で立地しているのが見られるが、その性格および本遺跡との関係は現在のところ不明である。

南斜面では縄文時代の遺物包含層が斜面の半ばで薄くなり、変わって古代の遺物が出土する状況になり、土坑群、焼土面、平面略圓形の集石遺構等が検出された。集石遺構は火熱を受け角が立つ径10cm程度の礫からなり、それらが層をなして堆積するという形をとらずに傾斜に沿うように見られ、施業された礫の集積と考えられた。端に径40cmを越える石があるが、特別な使用痕跡は認められなかった。礫群は小銀治と関連しているものと推定できるが、その性格は不明である。焼土で比較的厚みを持つものは2地点で見られ、その周辺にも小規模な焼土面が展開していた。焼土面を中に土坑、ピットが配置されていることから、少なくとも2カ所での小銀治が営まれていたものと推定できるが、時期的な異同は確認できなかった。

出土品は図示できるものは網羅したと考えているもので、供膳具、煮炊具は平野部の集落址と同じと言えるが、貯蔵具が極めて少量である点が目立ち、本遺跡の性格を表している。杯の大部分は底部と口縁部との器壁の差が見られ、外傾度も比較的弱いのが特徴であり、一部、外傾度が強くなる532や、粗雑な成型で軟質な焼きの535などは後出するものと推定した。高台杯においても同様の傾向が見られ546などが分離でき、胎土、色調などが変わっている548以下の小型高台杯はさらに下るものであろう。蓋器形で目立つ点は、内面に磨き跡が遺存している例が25点の内21点と非常に多いことで、宝珠部分だけを取り去ったり、一部に墨の痕跡を持つところから転用視と推定されるが、小銀治工房で視を多用する目的としたところのものは不明である。鉄鋸器種が4例出土し、いずれも口縁部の処理が異なっている点が注意され、時期判断が比較的容易にできる。土師長胴甌の603などは後出的なものである。本地点の遺物は、吉岡康暢氏の土器編年（註25）で見ると8世紀後葉のⅡ期に位置付けられ、後出的名ものは10世紀のⅣ期段階であろう。

東地区的堀立柱建物跡は3棟程度の重複した在り方を示し、5カ所の焼土面が検出されたが、継続的に利用されており、各棟の前後関係は不明確である。焼土の内、第1・2号堀立柱建物内部の大きなものが最も火熱を受けていて、小銀治炉と推定される。本地區は丘陵内の鞍部の比較的平坦な地形の中に位置し、本調査区東側の林道を越えて展開している。庄が屋敷C遺跡の南端でも小銀治炉と考えられるものが検出されている。本地區では古代の包含層が形成されていて、焼土面の断面で見られるように、ほとんど建物を建てた際に削平・盛り土作業を行っていないと考えられる。建物跡の南側で検出した墨書きを含む土師器杯の集積は、土坑内にあった可能性が高く、土坑の深さは20~30cm程度が推定できる。本地点では長さが20~30cmにもなる石が検出されていて、火熱の痕跡は認められなかったが、一部に磨痕が認められ、台石としての利用があったと推定される。

出土土器は小片となったものが多く見られたのであるが、国示できる資料としては环集積を除いてはごく限られている。杯の集積地点からは「實」の墨書き土器2点が得られていて、その草書体は手慣れた印象を受ける。出土土器の構成は、供膳具が大部分で、少量の貯蔵具、煮炊具が加わるという形で、須恵器の退潮が著しい状態となっている。供膳具は殆ど土師器杯で占められ、移入品の灰釉が1点のみ出土した。煮炊具でも変化が見られ、大型の長胴甌は見られず、中小型品が少量出土するという状態である。須恵器甌では口縁部片は見られず、胴部

片が少量出土しただけである。内1点の内面は二次的な磨きによって平滑になるものがあるが、転用鏡とは断定は出来ない。本地点での編年の位置付けは、器種構成と土師器壺の口縁形態から、吉岡後藤氏の編年の中頃に比定される。

辰口町域内の古代の遺跡は、岩内遺跡、能美窯跡群、辰口西部遺跡群と数多くの遺跡で発掘調査が実施されている（註26）。その中で注目されるのは辰口西部遺跡群で、下開発地区周辺が天平勝宝七年（755年）に立庄した「東大寺領幡生庄」の比定地に推定されている事である。幡生庄城の確定はできてはいないし、本遺跡が地域的に包括されていたとは考えにくいが、小鐵冶工房立地の歴史的背景を見ていく上で重要な発掘成果である。辰口西部遺跡群は8世紀3四半世紀頃の第Ⅰ期に活発な展開を見せ、8世紀末から9世紀前半でピークを向かえ、さらに地点を変えながら第Ⅱ期の10世紀前半まで継続していくが、10世紀半ば以降は急激に衰退していくとのことである。本遺跡の南西地区は活動が活発になった第Ⅱ期と重なり、東地区は庄家級建物、拠点的集落が推定しがたくなる10世紀前半の第Ⅲ期と重なると見られる。本遺跡が庄園の展開・衰退の時期と連動していると言えるが、直接的な影響下にあったか、時代的開発の進展に沿っていたのかの判断は困難である。

本報告書をまとめるにあたり、本センター職員をはじめとして多くの方々の御教示を受けた。深謝。

#### 引用文献、参考文献

- 註1 土肥富士夫・津田耕吉・四柳嘉章他 1983 「吉田野寺遺跡」七尾鹿島広域圏事務組合
- 註2 四柳嘉章 1986 「第1群土器」「第2群土器」「石川県能都町真鍋遺跡」能都町教育委員会
- 註3 越坂一也・湯尻修平 1984 「羽咋市気多社僧坊跡群」石川県立埋蔵文化財センター
- 註4 松山和彦・北野博司他 1991 「押水町冬野遺跡群」石川県立埋蔵文化財センター
- 註5 富山県立氷見高等学校歴史クラブ 1964 「富山県氷見地方の考古学遺跡と遺物」
- 註6 小野昭・小熊博史 1987 「巻町布目遺跡の調査」「巻町史研究Ⅱ」新潟県西蒲原郡巻町
- 註7 四柳嘉章他 1972 「甲・小寺遺跡」石川県穴水町文化財保護専門委員会
- 註8 高橋修宏・松井政信他 1982 「小泉遺跡」富山県大門町教育委員会
- 註9 納谷克彦・森川昌和他 1979 「島浜貝塚」福井県教育委員会
- 註10 納谷克彦 1982 「北白川下層式土器」「縄文文化の研究Ⅱ」雄山閣
- 註11 小島俊彰 1986 「第5群土器」「石川県能都町真鍋遺跡」能都町教育委員会
- 註12 小島俊彰 1965 「極楽寺遺跡発掘調査報告」富山県教育委員会
- 註13 山本正敏・岸本雅敏 1986 「南太閤山1遺跡」富山県教育委員会
- 註14 桑山龍道 1980 「菊名貝塚の研究」菊名貝塚研究会
- 註15 紅村弘・原寛 1977 「東海先史文化の諸段階〔資料編〕1」
- 註16 山内清男 1968 「矢柄研磨器について」「日本民族と南方文化」平凡社
- 註17 山内清男 1969 「縄文時代研究の現段階」「日本と世界の歴史 第1巻」学習研究社
- 註18 山内清男 1969 「縄文草創期の諸問題」「ミュージアム 224」
- 註19 宮下健司 1978 「矢柄研磨器の再検討」「信濃 30-4」信濃史学会
- 註20 宮下健司 1983 「有溝紙石」「縄文文化の研究 7」雄山閣
- 註21 井沢長介 1965 「周辺文化との関連」「日本の考古学 1」河出書房新社
- 註22 中村五郎 1990 「原始古代編」「越後町史 第一巻 通史編」福島県淹根町
- 註23 山本直人・北野博司 1987 「治東山遺跡」石川県立埋蔵文化財センター
- 註24 堀内光次郎 1911 「浄水寺墨書き資料集」石川県立埋蔵文化財センター
- 註25 小松市埋蔵文化財調査室 1992 「卑田川E遺跡礎石建物跡」「小松市埋蔵文化財調査だより」
- 註26 米沢義光・藤田邦雄・宮下栄仁・他 1987 「猪向山遺跡」石川県立埋蔵文化財センター
- 註27 吉岡康暢他 1983 「東大寺横江庄遺跡」松任市教育委員会・石川考古学研究会

- 註26 山本直人 1986 「石川県能美郡辰口町岩内遺跡発掘調査報告書」 石川県立埋蔵文化財センター  
 小嶋芳孝・北野博司・松山和彦 1993 「岩内遺跡・長浜遺跡群発掘調査報告書」 石川県立埋蔵文化財センター  
 安 英樹 1993 「県土幹線軸道路整備事業(加賀産業開拓道路)関係埋蔵文化財発掘調査報告書」 石川県立埋蔵文化財センター  
 北野博司・山本直人 1988 「辰口西部遺跡群 1」 石川県立埋蔵文化財センター

## 補追(付図、図版54)

本遺跡の報告書執筆を終了した段階で、縄文土器の古手で報告漏れのあることが判明したので、追加して図化をおこなった。不手際をお詫びしたい。個々について観察を記載していく。

667はG17グリッドから出土した口縁部片で、口唇に圧力が加えられ大きく波打ち、外側に迫り出すようになり、その直下に微隆起線が巡らされている。口唇と微隆起線から東京都なすな原遺跡出土の例に類似するのであるが、口縁部内面が口唇部からの粘土が覆い被さるように肥大しているのが異なっている点である。淡黄褐色を呈し、胎土には砂粒の混和は見られない。

668は2本の微隆起線が見られるL12グリッドからの破片で、内面の横撫でを見て縦位置としたものである。淡茶褐色を呈し、胎土は良好で砂粒の混和は見られない。

669はC・D17グリッドの畦畔から出土した微隆起線土器で、押さえによる凹線が入っている。盛り上がりはゆるやかで、間隔は8~10mmとやや不揃いである。内面の調整は不規則な凹凸面となっていて、色調は暗茶褐色を呈し、胎土に纖維の混和あり、若干の砂粒が見える。

670はD17グリッドから出土したもので、上下の判断がつかないものである。幅3mmで先端から平らな工具の叢沈線が等間隔で巡らされている。内面の調整はやや粗い撫でで、器表面には炭化物が付着している。茶褐色を呈し、胎土には、纖維痕と僅かな砂粒が認められる。

671はE15グリッドから出土した口縁部で、口唇部が尖り気味に成型されている。器表面は無筋の繩文が、内面は横方向の条痕調整が施されている。淡褐色を呈し、胎土に僅かな微砂粒が混和されている。

672・673はE18グリッド、674はD17グリッドから出土した同一個体の土器と判断できるものであるが、上下の位置は不明である。674の上端は繩文が途切れた形となっているのは、結節繩文巡らせている為と考えている。内面には幅14mmの間に3本の条が入る条痕調整が施されているが、凹凸はその儘となっている。色調は淡茶褐色を呈し、胎土には纖維および砂粒の混和が顕著に認められる。

675はE15グリッドからのもので、繩文は無筋が使われているが、上下判別つかない。内面は条痕調整が施されている、暗茶褐色を呈し、胎土には纖維および微砂粒が若干混じっている。焼成は良好である。

576はE15グリッド出土の破片で、表面は条痕調整のようにも見えるが判断がつかない。内面は細かい擦痕が残る部分と半截竹管状工具による横撫でが上下に見られる。暗褐色を呈し、胎土には砂粒は含まない。断面の色調は茶色がかかった黒褐色をなしていて、保存状態は良好である。

677はE16グリッドから出土したもので、先に第3群土器3類に分類した194・195と同じ個体と推定される。口縁は湾曲を成していく波状口縁になるものと考えられる。列点は先端が丸くなつたもので、左から右方向に施されている。色調は淡褐色を呈し、胎土に砂粒の混和が若干認められる。草創期段階の窓紋土器の可能性も考えられるが、胎土や色調、波状口縁になる事から前期前葉の佐波式と推定しておきたい。

678はE17グリッドから出土した破片で、第1群3類の9-10と同じ類である。ハの字形の刺突が巡っていて、小破片ではあるものの上と下では器壁の厚さが大きくなっている。茶褐色を呈し、胎土に若干の砂粒を混和するが良好で、焼成も良い。

679・680は同一個体で、尖底の681が付く可能性が考えられる。第1群土器1類(1~3)と6類(19~25)とした土器と同一個体で、器高が20cm前後になると推定される。体部の上半と下半とを分けて施文していくのは、巻町市日遺跡で平底器形の類例が見られる。施文や色調などは1・6類と同じである。681の尖底は、淡褐色

を呈し、胎土、焼成とも良好で、底面に使用による擦痕などは認められない。

682はF16グリッドから出土した底部片で、外底面に繩文施文が見られる。底径7cm弱に推定される平底で、内底面の隅に炭化物の付着が筋状に残っている。外周は二次的火熱による変色があり、赤褐色を呈し、内面は淡黄褐色となっている。胎土に僅かに砂粒の混和が認められる。

683・684はD14グリッドからの出土品で、前者は発掘時に縦方向の傷がついてしまった口縁部で、口唇部は面取りがなされている。暗褐色を呈し、胎土、焼成とも良好である。684は3本の沈線が見られるのであるが、工具の判断は困難である。茶褐色を呈し、胎土、焼成とも良い。

685はC・D17グリッドの畔群で検出した破片で、胎土に織維痕が見られる。内面の調整は平坦で条線が擦痕として残るような工具で撫でられているが肌面は荒れている。淡茶褐色を呈し、内面は暗褐色となっている。

686はE13グリッドから出土した体部片で、施文は無節の撫糸文かと推定される。暗褐色を呈し、胎土には織維痕が見られ焼成は堅歛である。

687はE16グリッドで出土した外反する頸部片であるが、上下は判別できなかった。羽状繩文がめぐらされるもので、内面は比較的平滑に整えられている。淡茶褐色を呈し、胎土、焼成とも良好である。

688SK19（集石炉跡）から出土したもので、上下の関係は不鮮明である。表は撫糸施文で、内面はやや段差のついた撫でが施されている。暗褐色を呈し、器表には煤が付着している。F17グリッドの689は同一個体片と推定できるもので、色調が異なっている。器表は淡茶褐色、内面は暗褐色を呈している。底部近くになるのであろうか内面は平滑に整えられている。

690はD16グリッドから出土した体部片で、やや細めで浅い条痕調整が施され、内面は凹凸のある撫でが入れられている。器表には煤の付着があり、暗褐色を呈し、胎土には砂粒は含まれず良好である。

691E16グリッドから丁寧した体部片で、胎土、焼成とも672の群と類似している。繩文は撫糸文のようにも見えるが判然とはしないもので、茶褐色を呈している。

692はL15グリッドの出土で、繩文草創期、前期遺物が出土している地点から離れている。撫りの細かな繩文が施文されていて、内面は撫でが入れられている。淡茶褐色を呈し、胎土に微砂粒が混和されて、やや脆い印象がある。これらの事から、繩文時代晩期ではなく弥生時代中期の天王山系土器と推定される。

693・694はSK20の風倒木痕跡の覆土から出土した体部片で、半載竹管文および沈線文が施されている。694は捲曲していることから頸部片と推定される。期表には煤が僅かに付着し、暗褐色を呈している。胎土には少數の微砂粒が混和され、焼成は堅歛である。所産時期は前期中葉以降と推定している。

695～697は爪形文が施文されているもので、F17・18、E17グリッドからの出土品である。695は尖り気味に成形された口縁部片で、697は頸部片であろうか。いずれも内面ともに丁寧に成形され平滑に整えられている。暗茶褐色を呈し、器表には煤の付着が見られる。

698はF18グリッドから出土した無文土器の小型品である。口唇部は面取りが入れられ外反する短い口縁が付けられる。内面の調整は軽くナデが入れられる。明茶褐色を呈し、胎土、焼成とも良好である。

699はE13グリッドからの破片で、繩文地文に結節浮文が置かれている。結節浮線文の間は撫で調整が入れられている。内面は平滑に整えられている。器表面は黄褐色を呈し、胎土に砂粒は見られない。

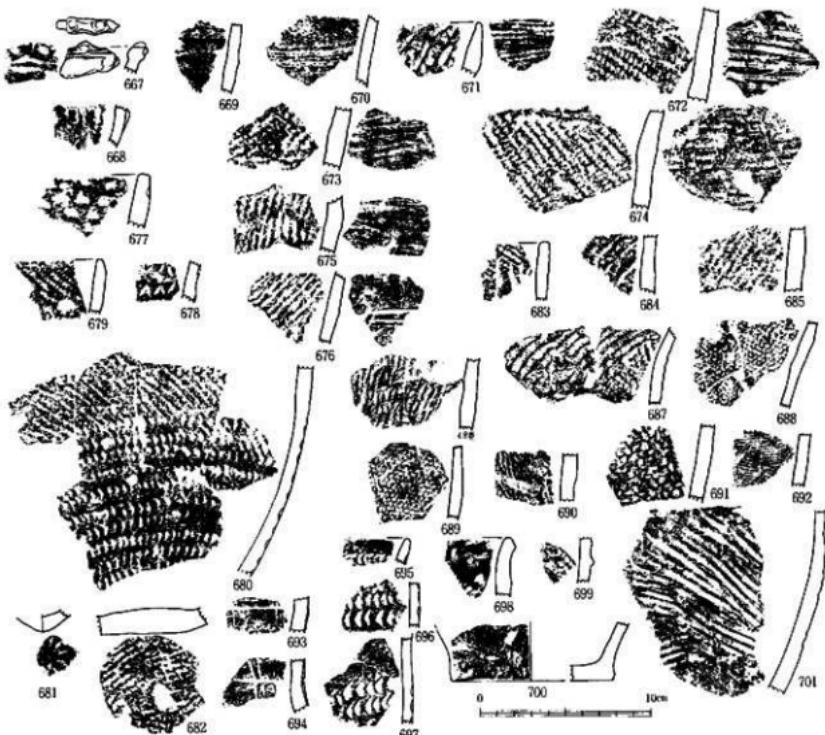
700はE15グリッドで検出した底部片で、底径9.6cmに復元できる。器表には比較的細かな斜繩文が確実に入れられている。底面は丁寧に面取が施されている。黄褐色を呈し、胎土には砂粒の混和が目立つ。

701はH13グリッドから出土した胴部片で、幅18mmに4本の条の入る工具で、斜め方向に調整が施されて、内面は平坦に整えられている。黄褐色を呈し、胎土には石英、長石などが目立って混和され器表面に現れている。断面で見ると、内部は黒色を呈している。これらの事から、弥生時代の柴山出村式土器に比定される。

補追した資料は、草創期の隆起線文・微隆起線文土器、前期の前葉の佐波式、関山式並行、北白川下層Ⅱb式並行、弥生時代前期の柴山出村式、中期の天王山式などが断片的ではあるが比定できた。しかし、型式名を想定できない資料も多く見られるので、今後さらに検討を加えていきたい。

参考文献

- 佐々木洋治 1982 「隆起線文土器」『縄文文化の研究 3』 雄山閣  
岡本 勇編 1982 「縄文土器大成 1」 講談社  
小林達雄編 1990 「縄文土器大観 1」 小学館



付図 庄が星敷B遺跡 縄文・弥生土器拓影実測図(1/3)

## 第5章 庄が屋敷D遺跡

### 第1節 地形と層序

#### 1. 地形（第77～79図）

庄が屋敷遺跡群の広がる丘陵は、概ね南から北へ、樹枝状に伸びる五筋の尾根により構成されている。庄が屋敷D遺跡は、このうち東端から二番目の尾根平坦部に立地する。当尾根はN-18°-Eの方向を示し、東側中央付近に短い瘤状の支脈がある他は、先端部に到るまでは幅約15～20mの頂部平坦面を保っている。東側北半には深い開析谷（西湯谷）が入り込み、斜面は急で一部崖状を呈する。一方尾根東側南半、及び西側を限る谷は浅く、ともに西湯谷の一枝谷を構成している。

当尾根の頂部付近は、西側尾根との分離地点より南20m程度までは傾斜が急であるが、それ以北は標高108～110mを保ち、顯著な定高性を示している。ただし微視的にみると、微高地が幾つか起状する地形を呈し、そのような微高地を中心に旧石器・縄文前期・中期・古代の各時代の遺物・遺構がまとまりをもって存在している。

なお調査グリッドは公共座標に合わせて設定し、10m間隔のメッシュを組み南北軸をアルファベット、東西軸をアラビア数字で表現した。この結果設定された10×10mのグリッドは西北隅の座標をとって命名することとした（第77図）。

#### 2. 層序（第80図）

第80図は尾根平坦部中央付近（第79図A-Bライン）の土層断面図である。1層は縄文・古代の遺物を包含するもので、平坦部のはば全域で確認される。2層は尾根西側の斜面にのみ見られる谷の埋土であり、縄文・古代の遺物はほとんど含まれない。3～6層はいわゆる赤土で、縄文・古代の遺構は3層上面で検出された。旧石器時代の石器は3層中に包含され、4層以下は無遺物層である。（滝川）

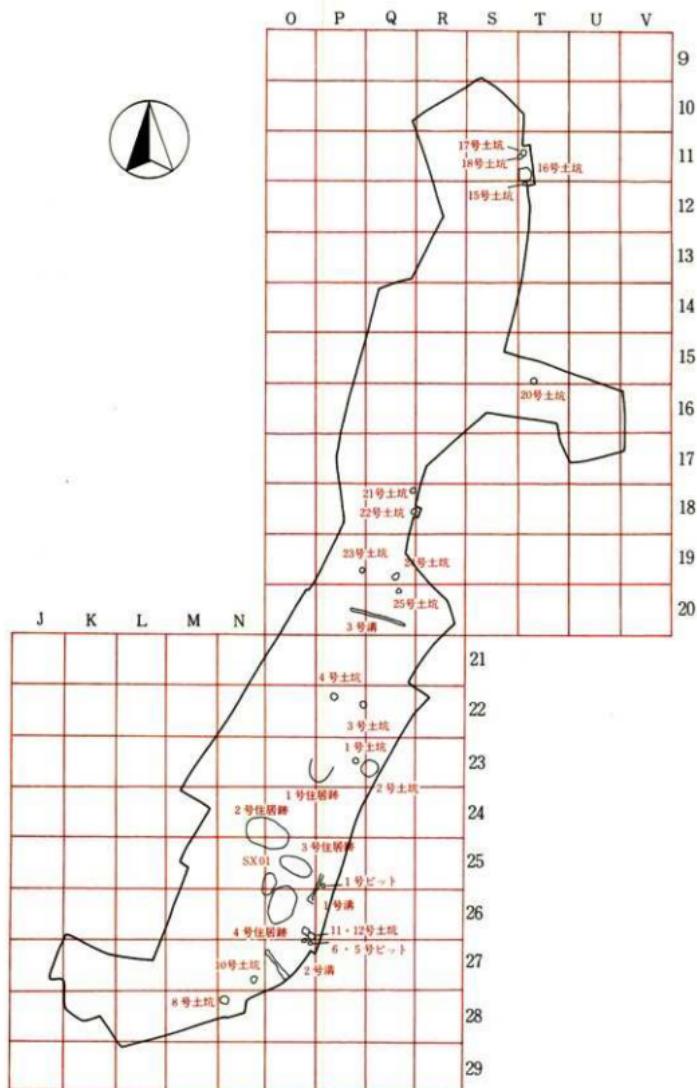
### 第2節 遺構の配置（第78・79図）

旧石器時代に関しては21ライン付近の微高地南側に広がる石器ユニット1単位を確認した。縄文時代前期の遺構としては、尾根先端部のU11区で土坑が2基確認されたのみである。これに対して中期の遺構は尾根付け根寄り、24ライン付近の微高地を中心に住居跡4棟が検出された。尾根主軸に平行するもの・直交するものそれぞれ2基ずつある。この他時期は確定できないものの、縄文時代の遺構と考えられる土坑が5基ほど認められる。このうち撲土をもつ土坑2基は18ライン付近に、陥穴2基は22ライン付近にそれぞれ隣接して検出された。

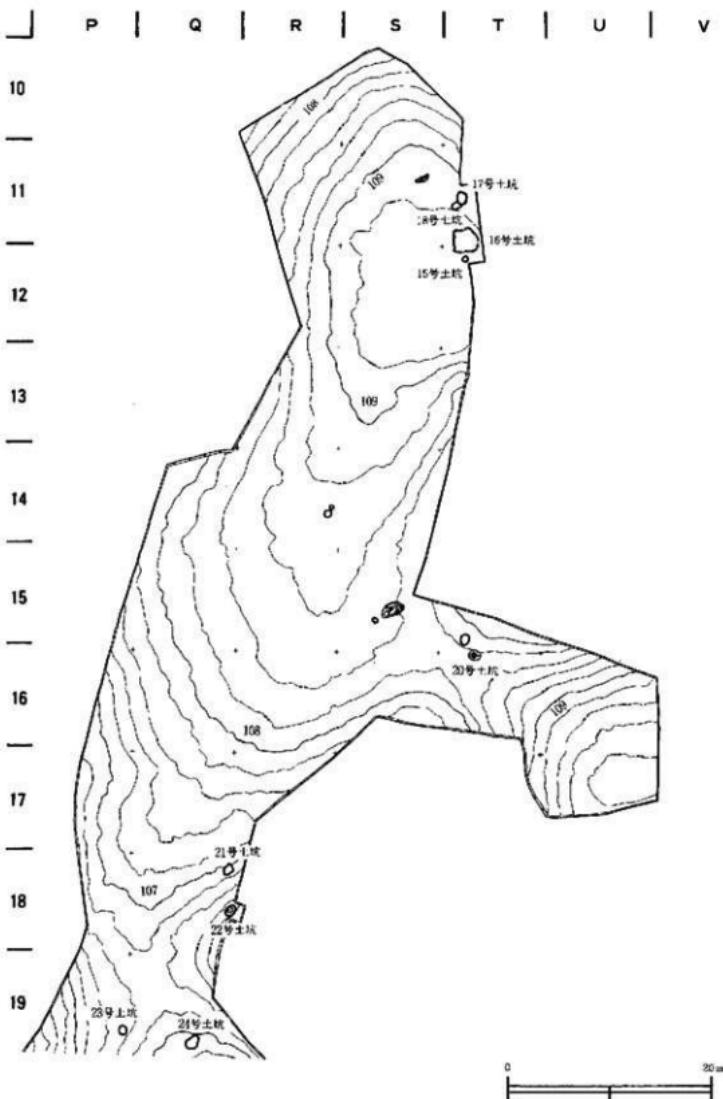
古代（10世紀代）の遺構はP26・Q26区に集中している。土坑・ピット群の範囲は尾根東側南半を限る浅い谷に面し、溝によって区画される。

なおこの他土坑・製炭土坑が數基散在しており、古代以後に属するものと考えられる。

（滝川）



第77図 椰査区全体図及びグリッド配置図 (1/1000)



第78図 遺構配置図 北半 (1/500)



第79図 遺構配図 南半 (1/500)

### 第3節 旧石器時代の遺物

#### 1. 調査区の設定

P22区周辺における遺構検出の際、基本層序3層（第80図）中から石器が出土した。このためO22・P22・Q22区に10×1mのトレンチを4m間隔で設定し、3層を掘り下げたところ、P22区～Q22区のトレンチで石器が数点認められないので、周囲を拡張しその広がりを確定した。なおトレンチを南へ延長したが、P23・Q23区では石器の出土は認められなかった。

#### 2. 出土状況（第81～83図）

庄が屋敷D遺跡で検出された石器群（ユニット）は1単位のみである。このユニットはP22・Q22・Q23グリッドにかけて広がりをもつもので、最大で径約14mの範囲に収まる。石器のまとまりは北西部と南東部とに分かれ、北西部の方に半数以上集中している。石器はいずれも3層（第80図参照）に包含されているが、一部4層上面近くで検出されたものである。

#### 3. 遺物

出土した石器は、ナイフ形石器1点、石核4点、剥片17点、碎片1点の計23点である。ただしこのうち4点は縄文時代の包含層・遺構掘り下げ及び杉の切株除去作業の際に出土したもので、正確な出土地点は抑られておらず、第81～83図の分布図からは除去してある。石器素材としては流紋岩が過半数を占め（13点）、次いで珪質凝灰岩が5点、凝灰岩が2点、チャート・メノウ・玉髓が各1点ずつ確認されている。なお流紋岩と凝灰岩に関しては母岩別に分類を行い、それぞれ6単位・2単位を識別し得た（第6表）。

流紋岩A……剝離面の凹凸が激しく、風化が進み、赤色の脈が顕著に見られる。

流紋岩B……剝離面の凹凸が激しく、硬質で石英の脈が顕著にみられる。

流紋岩C……灰色を呈し白色の微粒子を含む。

流紋岩D……剝離面は平滑で、軟質。

流紋岩E……剝離面は比較的平滑で、硬質、石英粒子を多分に含む。

流紋岩F……暗赤褐色を呈し、硬質。

凝灰岩A……淡黄色を呈し、硬質。

凝灰岩B……黄灰白色を呈し、軟質。

石器の器種別・石材別分布状況と接合関係については第81～83図に示した（なお図中の数字は石器の取り上げ番号であり、図番号との対照は第6表に記した）。石核と剥片との接合例、剥片同士の接合例はそれぞれ1例のみで、いずれも北西集中部で確認される。また北西集中部を構成する石器群のはほとんどは流紋岩製で占められ、その他の石材によるものは散在する傾向にある。

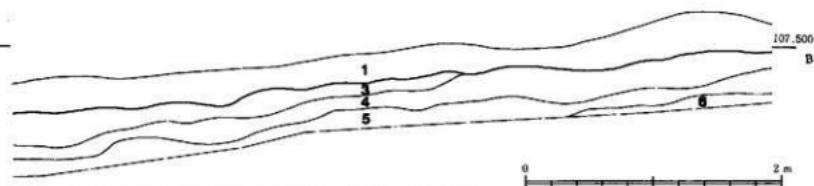
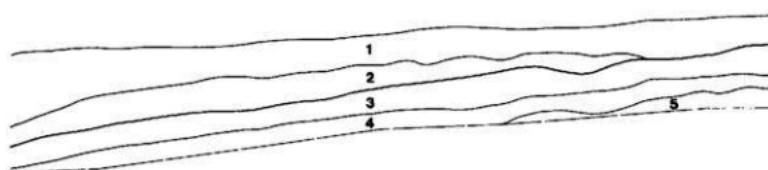
##### ナイフ形石器（第84図1）

流紋岩製すづまり小形剥片を素材とする。背面側と腹面側とで剝離方向はほぼ90°異なる。打面側を基部とし、背面からの折断により打瘤を除去する一方、背面と側縁も折断することにより整えている。プランティングは平坦剝離に近く、右側縁基部よりのみ施されている。いわゆる立野ヶ原型ナイフに属するものであろう。なお流紋岩Cによる石器はこの1点のみである。

##### 剥片（2～7）

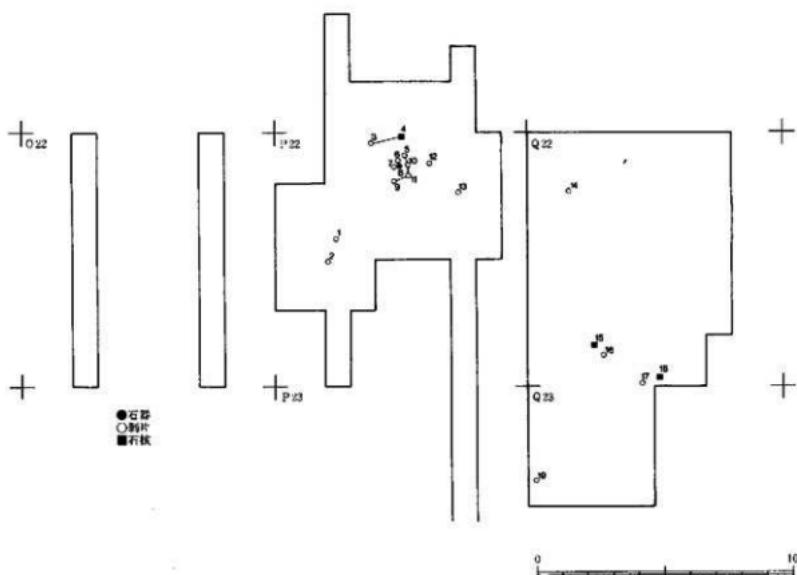
2・3は1のような立野ヶ原型ナイフ形石器の素材になると考へられるすづまり小形剥片である。2は珪質凝灰岩製で、長幅比はほぼ1:1である。3の素材は凝灰岩Aで、長幅比はやはり1:1程度である。いずれも背面の剝離方向は一定していない。

107.500

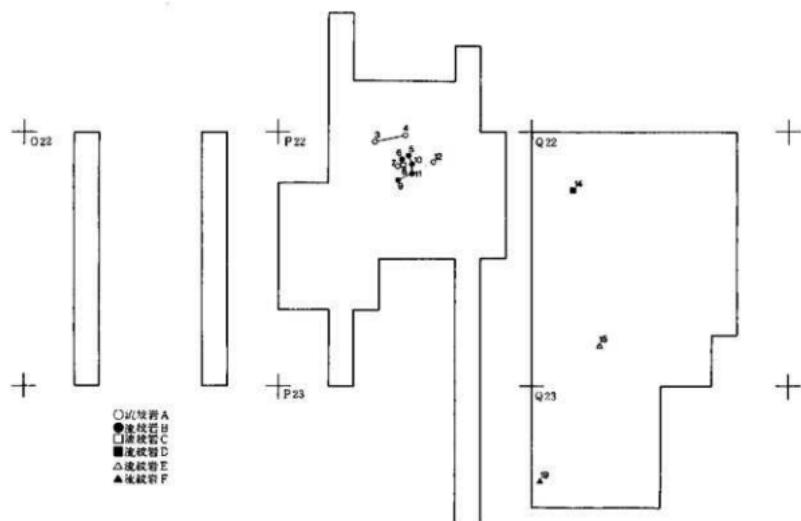


1:褐褐色土(縦文・古代包含層) 2:黒褐色土 3:黄褐色土(IH石器包含層)  
4:褐黃褐色土 5:黄褐色土 6:黄褐色土

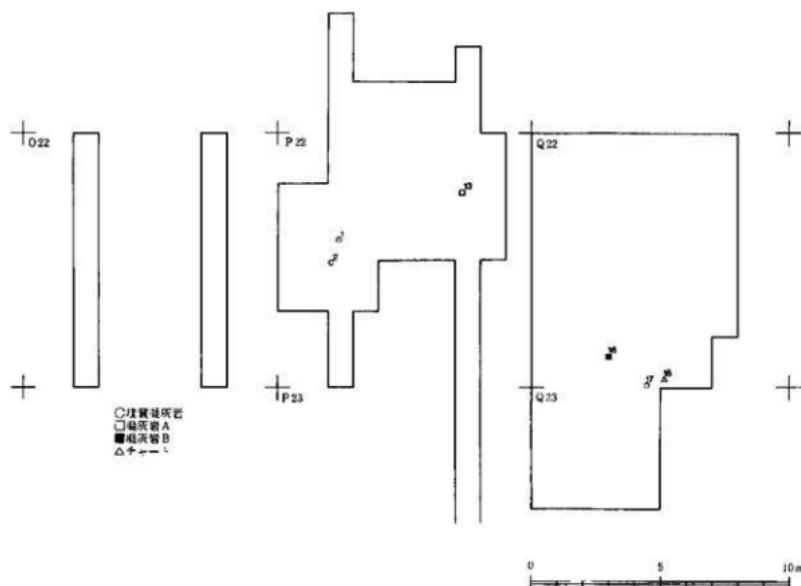
第80図 基本層序 (1/40)



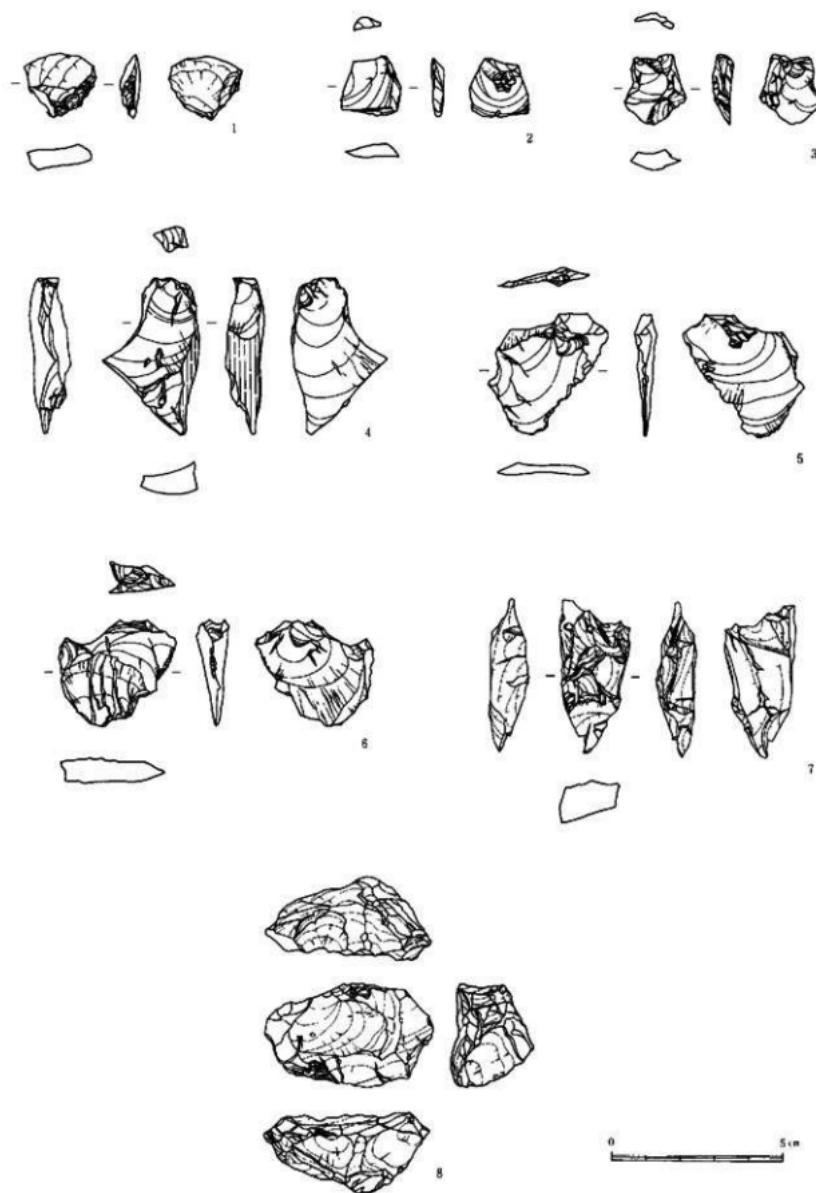
第81図 IH石器時代石器の分布 (器種別) (1/200)



第82図 旧石器時代石器の分布（石質別1）（1/200）



第83図 旧石器時代石器の分布（石質別2）（1/200）



第84図 旧石器時代の遺物 (2/3)

4は不定形の縦長剣片で、素材は珪質板岩製である。背面・断面の剥離方向はほぼ一致し、打面は平坦打面である。右側縁は節理面を残す。左側縁は打面側・末端側とともに背面からの折断により整形されている。

5・6は珪質板岩製の不定形剣片である。背面の剥離方向は一定していない。いずれも背面右側縁に細かな凹凸が観察され、使用痕の可能性がある。

7はメノウ製である。肉厚な横長剣片であるが、打面・末端側とも折断されており断面は台形状を呈する。

#### 石核(8)

1~3のような寸づまりの縦長剣片を生産したと見られる石核である。全周からの剣片剥離が行われる作業面が一面あり、ここを打面として周縁でも90°近い角度で剥離作業がなされている。最終的には周縁部作業面を打面に入れ換へ、再度最初の作業面から剣片を剥ぎ取っている。断面形態は三角形もしくは船形を呈する。

接合資料(写真図版72N<sub>5</sub>+N<sub>10</sub>+N<sub>11</sub>+N<sub>9</sub>)

流紋岩Bを素材とする剣片4点の接合例である。剣片剥離に際して打面調整を行うことはなく、平坦面もしくは節理面から打点を180°転位しつつ剥離作業を進行させている。

#### 4.まとめ

庄が屋敷D遺跡出土の旧石器は、寸づまりの小形剣片・これを素材とするナイフ形石器・素材を剥取した石核が確認されており、立野ヶ原系石器群に属するものと考えることができる。また石器の分布状況は小範囲におさまる、この点でも当該石器群の一般的な在り方と一致している。石材は流紋岩・板岩が優位を占め、そのそれぞれから寸づまりの剣片が生産されている。一方縦長に近いやや大型の剣片も両方の石材に認められる。ただし打点を固定するような明確な技法によるものではない。唯一点出土したナイフ形石器と共に母岩を有する石器はみられず、他の接合する資料も多くないことから、出土資料の大半は持ち込みによるものと考えられる。

(滝川)

第6表 旧石器時代石器属性表

No.	標因番号	器種	大きさ(cm)・(g)				石質	出土地点	備考
			全長	最大幅	最大厚	重量			
1	2	剣片	1.7	1.8	0.4	1.0	珪質板岩	P-22	
2	4	剣片	4.6	2.8	0.9	9.3	珪質板岩	"	
3		剣片	3.0	2.8	1.7	9.5	流紋岩(A)	"	4と接合
4		石核	4.4	3.5	2.6	27.6	流紋岩(A)	"	3と接合
5		剣片	2.1	2.9	1.3	7.0	流紋岩(B)	"	9・10・11と接合
6		剣片	2.5	1.8	0.6	2.1	流紋岩(B)	"	
7		剣片	3.2	2.3	1.2	4.7	流紋岩(A)	"	
8	1	ナイフ形石器	1.9	2.2	0.8	1.1	流紋岩(C)	"	立野ヶ原型
9		剣片	4.8	4.2	1.3	19.4	流紋岩(B)	"	5・10・11と接合
10		剣片	5.5	4.2	1.4	17.1	流紋岩(B)	"	5・9・11と接合
11		剣片	5.2	5.6	1.6	27.4	流紋岩(B)	"	5・9・10と接合
12		剣片	3.6	2.5	1.7	13.4	流紋岩(A)	"	
13	3	剣片	2.1	1.8	0.6	1.3	板岩(A)	"	
14		剣片	5.3	3.1	2.2	23.6	流紋岩(B)	Q-22	
15	8	石核	5.1	3.1	2.4	24.5	流紋岩(B)	"	
16		剣片	3.2	3.3	1.4	8.5	板岩(B)	"	
17	5	剣片	3.6	3.5	0.7	3.8	珪質板岩	"	
18		石核	3.3	2.7	1.9	19.4	チャート	"	
19		剣片	2.1	1.9	1.1	3.5	流紋岩(B)	Q-23	
20		石核	1.7	1.6	0.9	2.3	土器	P-21	
21	7	剣片	4.5	2.1	1.3	9.6	メノウ	Q-22	
22		砂片	1.0	1.3	0.4	0.3	珪質板岩	"	
23	6	剣片	3.1	3.5	0.8	6.7	珪質板岩	P-22	

## 第4節 縄文時代の遺構と遺物

### 1. 住居跡

庄が屋敷D遺跡では縄文時代の住居跡が合計4棟確認された。いずれも中期前葉新崎式に比定され、尾根南側の微高地中央から北側裾部に立地している。

#### 1号堅穴住居跡（第85図）

##### 【位置】

尾根南側、P23区に位置する。周辺は南から北へ下る緩斜面で、住居跡の北側は微高地間の鞍部となっている。住居跡南端の標高は107.7mである。主軸の方位はN-24°-Eである。

##### 【形態・規模】

平面図は長円形を呈するが、北端が流失しているため長軸全長は不明である。確認できる残存長は約5.2m、短径は約4.6m、深さは約9cmを測る。

##### 【覆土の堆積状況】

床面は黄褐色を呈する地山面（基本土層3層、第80図参照）で、床面上には暗黄褐色のやや汚れた土（第85図4層）が堆積しており、この上を黄灰褐色土（第85図2層）が覆う。壁が比較的良好に遺存する南端では、地山の崩れとみられる黄褐色土（第85図3層）が三角堆積をなす。

##### 【壁の状況】

鞍部に向いた北側では流失が甚だしく、掘り力を確認することはできなかった。一方南側は遺存が良好である。長軸南端付近の壁は傾斜が緩やかで、垂直近くになるような箇所はみられない。傾斜角は約30°である。概して浅い皿状の落ち込みといった形状を呈する。

##### 【柱穴】

1号住居跡では床面を5cmほど掘り下げて精査したにもかかわらず、柱穴であることが確実なピットは検出できなかった。第85図では床面からの深さが約20~50cmを測り、柱穴の可能性があると思われるピット（8基）を図示している。これらはいずれも略円形の平面形を呈し、住居主軸に対し、西側に偏って配置されている。

##### 【炉跡】

炉跡は破線・スクリーントーンにより図示した。地床炉1基が確認されている。住居跡長軸上北寄りに位置し、平面形はいびつな菱形を呈する。長軸約80cm、短軸約55cmを測る。床面からの高さは2~3cm程度である。

##### 【住居内土坑】

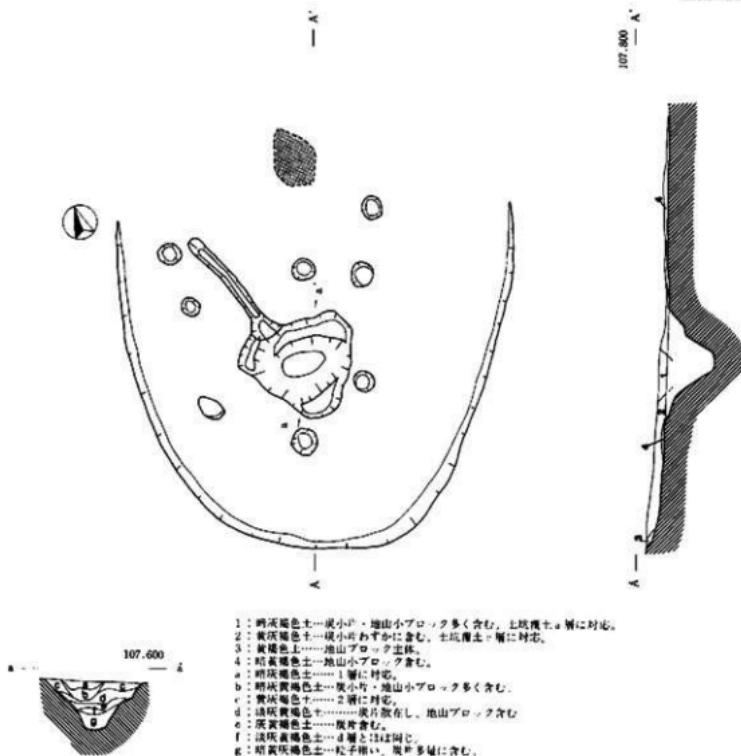
住居内土坑は住居南側主軸上に1基認められる。略三角形の平面形で、一辺約115~120cmを測り、二段掘りの掘り方をもつ。床面からの深さは上段が約10cm、下段最深部で52cmを測る。土坑内の覆土は、a~b層、c~f層、g層に大別される。最下層のg層は炭片を多く含み、後述する2号住居内土坑・4号住居内土坑にも同様の土層堆積が確認される。c~f層は軟ね灰黄褐色系の砂質土で、濃淡・地山ブロックの含み具合により分層され互層状の堆積を呈する。なおc層は住居覆土2層に対応し、住居内土坑が住居廃絶後もある程度開口していたことを示唆している。a・b層は炭小片・地山小ブロックを多數含む。住居の大部分が埋まつた後も、土坑上部はわずかな痕みとなっていたと思われ、そこに堆積した土層であろう。土坑が二段掘りになっていること、また最上層の落ち込み方から、土坑に蓋が付随していた可能性がある。

（滝川）

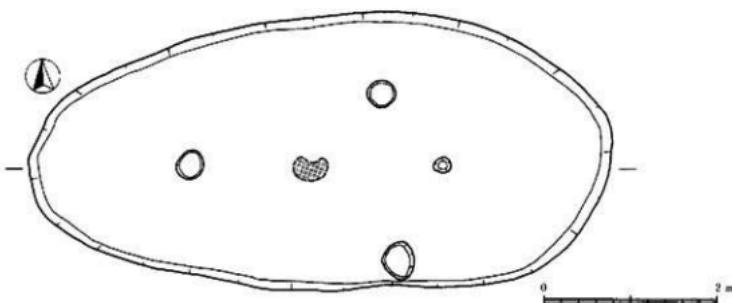
##### 【土器】（第87図9~12）

床面上に付近から9・10、覆土上面付近から同一個体である11・12が出土している。

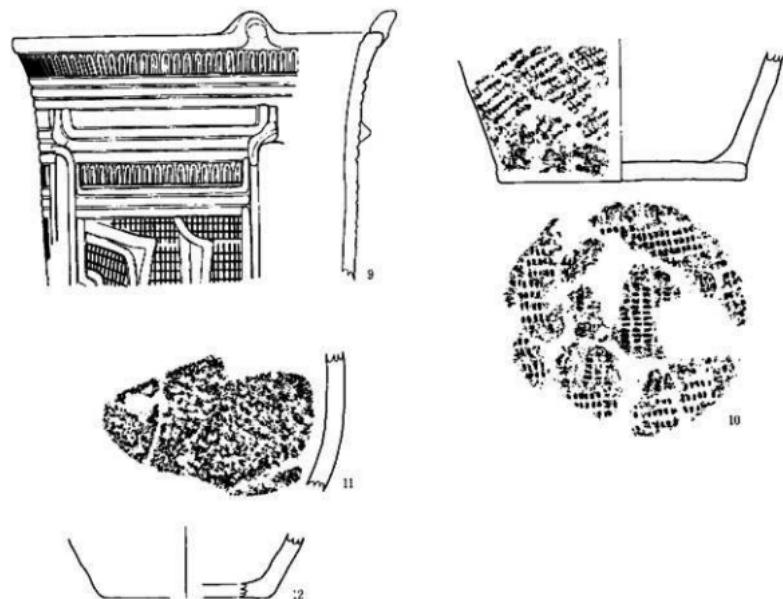
有文深鉢9では2段にわたり蓮華状文を配し、その間には上下を3条の横位半隆起線に挟まれたやはり横位の幅狭な無文帯が存する。加えて2段目の蓮華状文の下にも横走する3条の半隆起線がみられる。蓮華状文の施文手法は弁の上端を爪形文で表現し、各弁の本体が縦位の短い半隆起線となるよう仕上げられ、弁の中央には丁寧



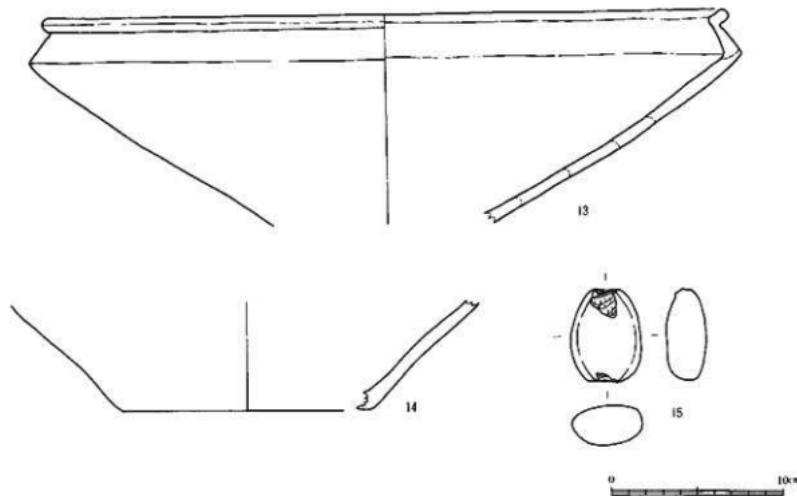
第85図 1号竪穴住居跡 (1/60)



第86図 3号竪穴住居跡 (1/60)



第87図 1号竖穴住居跡出土遺物 (1/3)



第88図 3号竖穴住居跡出土遺物 (1/3)

なタッチで1条の縦沈線が配されている。向かって左から右へ順次施文が進められた状況も観察できる。胸部ではクランク状の半降起線を骨格として、その間を格子目文で充填するが、全体の構成は不明。格子目文は縱方向+横方向の順で施されている。幅8mmの面をもつ縦上端には中凹みの半円形突起が付されるが、遺存口径から判断して4単位とはならないようである。これに対して横位無文帯は貼付文等によって4分割されており、その下には縦位無文帯が底部までのびると判断され、胴部文様帯もやはり4分割されている可能性が高い。全体としては筒状の器形を呈し、口径は21.9cmを測る。色調は暗褐色を基調とし、外面で媒状物、内面では炭化物の付着が所々で見取れる。

10は外面に縦文を施す深鉢の底部で、底径は14.2cm。橙褐色を呈し、胎土中には角礫状の粗い砂粒が多く含む。底部外面にはスダレ状压痕が観察され、内面の底部より数cm上位では炭化物が帶状に付着している。11・12も外面に縦文を施す深鉢の底部で、底径は9.7cmに復元される。明橙褐色を呈し、胎土中には石英砂粒が多く含まれる。11の内面でも炭化物の付着が認められる。

#### 【石器】

図示したものはないが、覆土中から輝石安製の剝片1点(6g)、覆土下層周辺から黒色頁岩製の剝片6点(29g)が出土しており、後者には二次加工を有し石巖未製品と思われるもの1点が含まれる。その他、住居内土坑覆土上層を中心に同一母岩と推定される炭灰岩系の石材による剝片類も45点(464g)の出土がみられ、一部に接合関係が認められる。

(松山)

#### 2号竪穴住居跡(第89図)

##### 【位置】

尾根南側、P23区に位置する。微高地北西裾部に立地し、主軸の方位はN-64°-Wである。住居床面東端の標高は107.97mであるのに対し、西端は107.77mを測り、約20cmの比高差がある。

##### 【形態・規模】

平面形は長円形を呈し、長軸8.82m、短軸5.6m、検出面からの深さ10~20cmを測る。

##### 【覆土の堆積状況】

床面は黄褐色を呈する地山面で、床面上には2~5cm程度の厚さで汚れた暗黄褐色の土(第89図4層)が切れ切れに堆積している。この層は地床が・住居内土坑上には堆積しておらず、住居存続時の堆積土とみられる。住居壁体沿いには地山の崩れとみられる黄褐色土(3層)が三角堆積をなす。3・4層上には住居廃絶後の流入土である灰黄褐色土(2層)が広汎に広がっている。1層は最終流入土で、住居内土坑付近にみられるが、その中心は土坑直上に位置せず、南西方向にずれている。

##### 【壁の状況】

地山面の高い東側は壁の遺存もよく10~15cmの高さを保つ。概ね緩やかに立ち上がり、傾斜角は35°程度である。一方谷に面する西側は、削り放しに近い状態であり、はっきりとした壁の立ち上がりを確認することはできない。

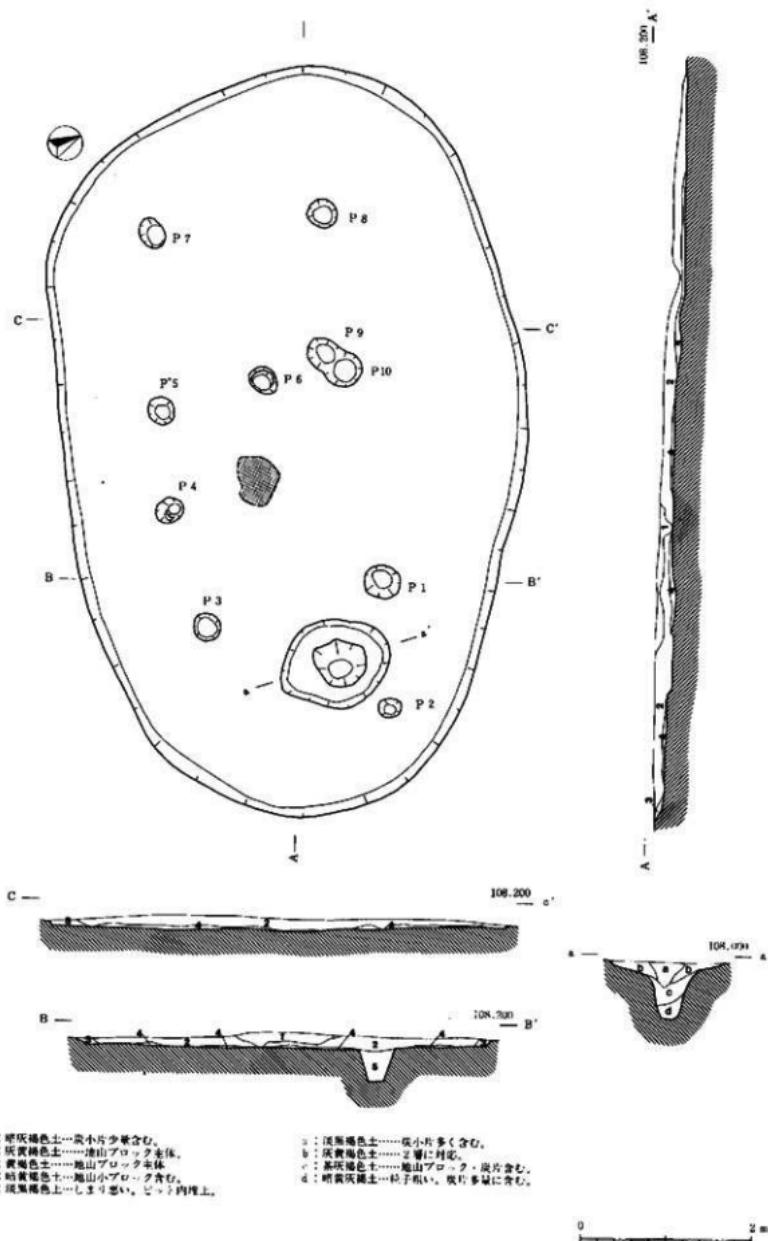
##### 【柱穴】

2号住居跡においても、床面を掘り下げ精査したにもかかわらず、柱の配置は明確にできなかった。第89住居跡平面図に掲げたピットは、いずれも径30~40cmを測る略円形を呈するが、検出面からの深さはまちまちで、浅いものは15cm程度、深いものは50cmを測る。このうちP1~P6は深さ約30~50cmを測り、柱穴である可能性は高い。住居西側のP7~P10は比較的浅いが、位置的にみて柱穴である可能性は残る。なお住居北縁沿いにはピットらしいピットは検出されておらず、柱の配置は住居主軸に対して南にずれていることが考えられる。

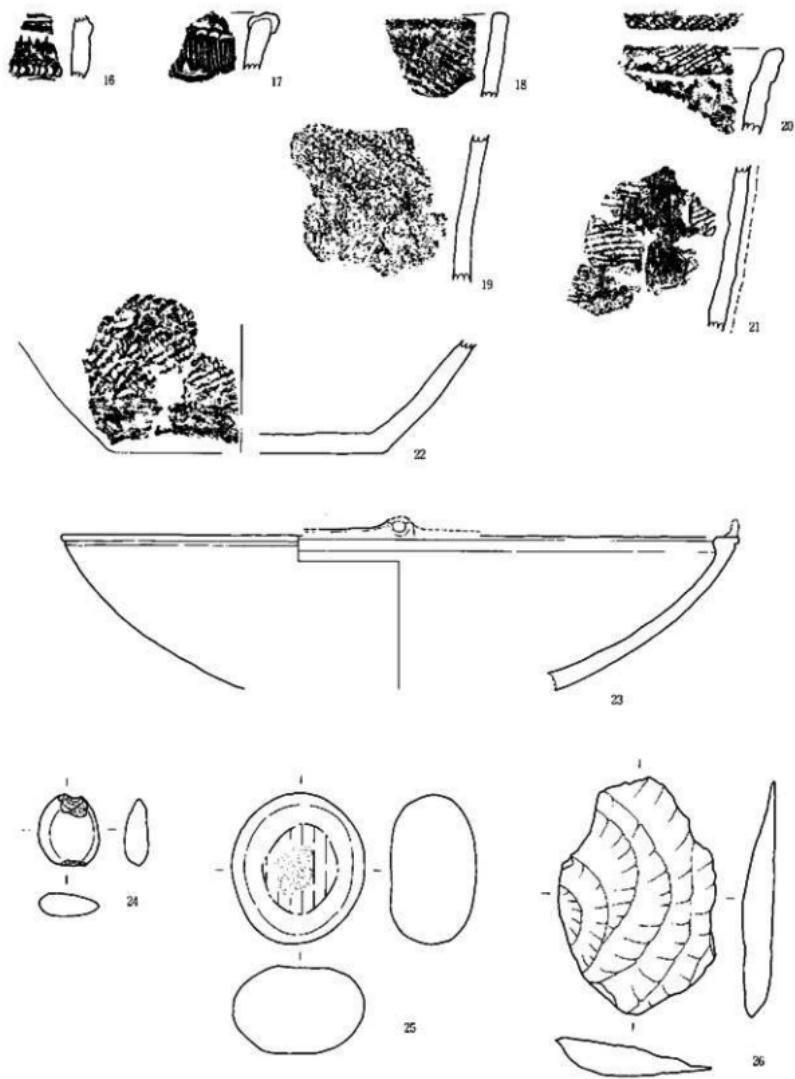
##### 【炉跡】

約60cm×45cmの不整形なひろがりをもつ焼土面が1箇所確認され、地床炉とみられる。住居中央東南よりに位置し、住居主軸からはずれている。焼土面の高さは床上3~4cm程度である。

##### 【住居内土坑】



第89図 2号竖穴住居跡 (1/60)



0 10cm

第90図 2号竪穴住居跡出土遺物 (1/3)

住居東端北寄りに設けられており、二段掘りである。上段は南北にやや長い長円形を呈し、南北約138cm、東西約110cm、深さ5~12cmを測る。下段は上段のほぼ中央、幅80cm、深さ約65cmのピット状を呈する。

土坑内の覆土はa層（上）、b・c層（中）、d層（下層）に大別できる。d層は当遺跡の住居内土坑通のもので、炭片を多量に含み、粒子の粗い暗黄灰褐色土である。中層のうちb層は住居内で最も広汎に認められる灰黄褐色土（第89図2層）に相当する。a層は淡黒褐色の色調を示し、炭小片を多く含む。a層はピット状の落ち込みを呈しているが、土坑に蓋が付随しているとみるならば、以下のような解釈も可能であろう。すなわち住居廃絶後しばらくの間、蓋は土坑を覆い続けるものの、隙間からの土砂の流入（b・c層）を許し、土坑内が埋没しきる前に陥没、その際に堆積していた土砂が落ち込んでa層を形成したというものである。 （滝川）

#### 〔土器〕（第90図16~23）

覆土上層から17・20~22、覆土中から16が、また住居内土坑からは18・19が出土している。残る23については正位で下端が住居内土坑覆土にくい込む状態で検出された。

16は有文深鉢の小片で、上下両端に刻目文を有する横位無文帯がみられる。17もやはり有文深鉢の口縁部片であり、爪形文をもって上端としてその下にやや粗雑な感じの平行沈線を配して蓮華状文を描出している。橙褐色を呈し、胎土中には石英砂粒を多く含む。18・19は外側に繩文を施す深鉢の口縁及び胴部で、同一個体である。暗褐色を呈し、外面には模状物が付着する。20・21も同一個体で、外面及び口縁端部に繩文を有する。20の上部が帯状に肥厚するほか、21の外側では幅1cm程の継位貼付文が剥落した跡が観察できる。胎土中には燒土塊がみられる。底部である22の外側においても繩文が施されているが、底部近くの3cmくらいはヨコナデによる無文部となる。外底面では当初の網代圧痕らしきものが、ミガキにより消されてしまっている。淡い明橙褐色を呈し、底径は約16cmに復元されよう。23は口縁端部に幅約1.5cmの面を有する浅鉢で、断定はできないが恐らく玉抱き三叉文風の文様の突起が1個遺存する（突起の総数は不詳）。外面では丁寧なナナダ調整が行われており、口縁付近には1条の沈線が廻る。淡黄褐色を呈し、胎土中には均一な感じで砂粒が多く含まれている。口径は39.6cm、遺存高9.0cmを測るが、これの底部片は全く検出されなかった。

#### 〔石器〕（第90図24~26）

石鍤24と剣片26が覆土上層から、磨石類25が床面直上から出土している。25は両面に磨拭、片面に凹みが観察できる。比較的軟質の石材を用い、片面に大きく自然面を残し扁平な形状を呈する26については性格不詳としかいえない。図示しなかったが、その他にも流紋岩の剣片1点（14g）、黒色頁岩の石剣調整剣片1点（112g）、1号住居跡住居内土坑のそれときわめて類似する凝灰岩系の剣片6点（23g）が出土している。 （松川）

#### 3号堅穴住居跡（第86図）

尾根南側、O25区に位置する。微高地の頂部付近にあって、主軸はN 64° - Wを指し、尾根にはほぼ直交している。平面形は長円形を呈し、長軸6.78m、短軸3.34m、深さ約5cmを測る。

覆土の堆積状況は、木の根の擾乱により腐植化した部分がかなり広がっているため明瞭さを欠くが、概ね以下のように捉えることができる。底面は地山面で、暗黄褐色土が薄く覆っている。その上位に灰黄褐色土が流入している。掘り方の立ち上がりは緩やかで、底面と壁との間に明瞭な屈曲を確認することはできない。また柱穴は明確に検出することができず、第86図に示した深さ20~30cmを測るピット4基が、かろうじて可能性をもつものといえる。焼土面は1箇所認められ、40×20cmの規模のものが、遺構ほぼ中央に位置している。この西側に接して浅鉢が正位で検出された。なお住居内土坑は認められない。

本遺構は、1・2・4号住居に比べ、かなり小規模であること、住居内土坑を伴わないこと、柱穴の配置が不明瞭であることなどから、住居跡として確定することはできないが、焼土面を有しその西側に浅鉢が据え付けられていた点から、住居跡である可能性をもつ遺構として扱っておきたい。 （滝川）

出土遺物としては、第88図13~15の3点を図示しておいた。13は明瞭な稜線をもって内屈したのちに口縁が短く外反する浅鉢で、前述のとおり焼土面の西に接して正位に据え付けられていたものと考えられる。口径40.0cm、遺存高12.5cmを測るが、底部片は全く検出されておらず、当初から底部が除去されていた可能性が高い。口縁上

端と焼土上面がほぼ同じレベルで、体部下半が床面に掘られた小さな穴に埋められた状況が観察されている。口縁部については遺存率が低く、突起の有無については確認できない。暗橙褐色を呈し、内外面とも丁寧なヨコナデによって調整されており、内面のごく一部に黒色のものが付着するが、その性格については不明。14もやはり浅鉢の底部だが、13とは明らかに別個体である。底径は16.8cmに復元され、淡黄橙褐色を呈し、これも内外面ともに丁寧にナデが施されている。深鉢については、細片が散点みられるのみである。

石器としは、図示した石錐15以外にも13の内部から蔽石と思われるものが1点、覆土上面からは黑色頁岩製の割片1点(4g)が出土している。  
(松山)

#### 4号堅穴住居跡(第91図)

##### 【位置】

尾根南側、O26区に位置する。2・3号住居より南に位置し、微高地のはば頂部、尾根筋に平行して造営されており、主軸の方位はN-24°-Eである。本遺構の南側で尾根は高度を増し急傾斜となる。このため床面も南側が高く、北端の標高108.1mに対して、南端は108.19mで約10cmの比高差がある。

##### 【形態・規模】

平面は長円形を呈し、長軸約7.9mを測る。北東部分が風倒木による擾乱を受けているため、短軸の正確な長さは不明であるが、5m前後に復元できよう。深さは北側の浅い部分で10cm、南側では20cm前後を測る。

##### 【覆土の堆積状況】

床面は黄褐色を呈する地山面であり、汚れた暗黄褐色土(第91図7層)が厚さ2~3cm程度で薄く覆っている。住居壁体沿いには三角堆積をなす黄褐色土(6層)がみられる。これより上位は住居廃棄後の流入土が層をなしているが、住居北半と南半とで土層堆積の様相が異なる。北半はしまりの弱い茶褐色土がほぼ水平に堆積しているのに対し、南半では北側を除く三方向から、黄灰褐色土(3層)・淡黄灰褐色土(4層)・暗灰褐色土(5層)が住居内土坑に向かって流入している。このことは上坑部分が住居廃絶後しばらくの間、完全に埋没せず周囲より低かったことを示唆する。また住居南側に急斜面を控えているため、南方向を中心とする土砂の流入が頻繁に生じたものと思われる。

##### 【壁の状況】

壁の立ち上がりは概して緩やかであり、特に北側では浅い。南側は比較的屈曲が強く、傾斜角は25°前後である。

##### 【柱穴】

本住居跡で検出された柱穴はP1~P5の5基である。径20~30cmの不整円形を呈し、深さは40~50cmを測る。確認できた柱穴は5基のみであるが、これは北東の一辺が風倒木の擾乱を受けているためであり、P5の東側にいま1基の存在が見込まれる。すなわち本来の柱配置は、長軸両端の柱が2本となり、長軸を挟んで2基1対のかたちをとる、6本柱であったと推定される。短軸方向では中央列(P1~P4)部分の幅が最も広く、配置の平面形は継長の六角形を呈する。

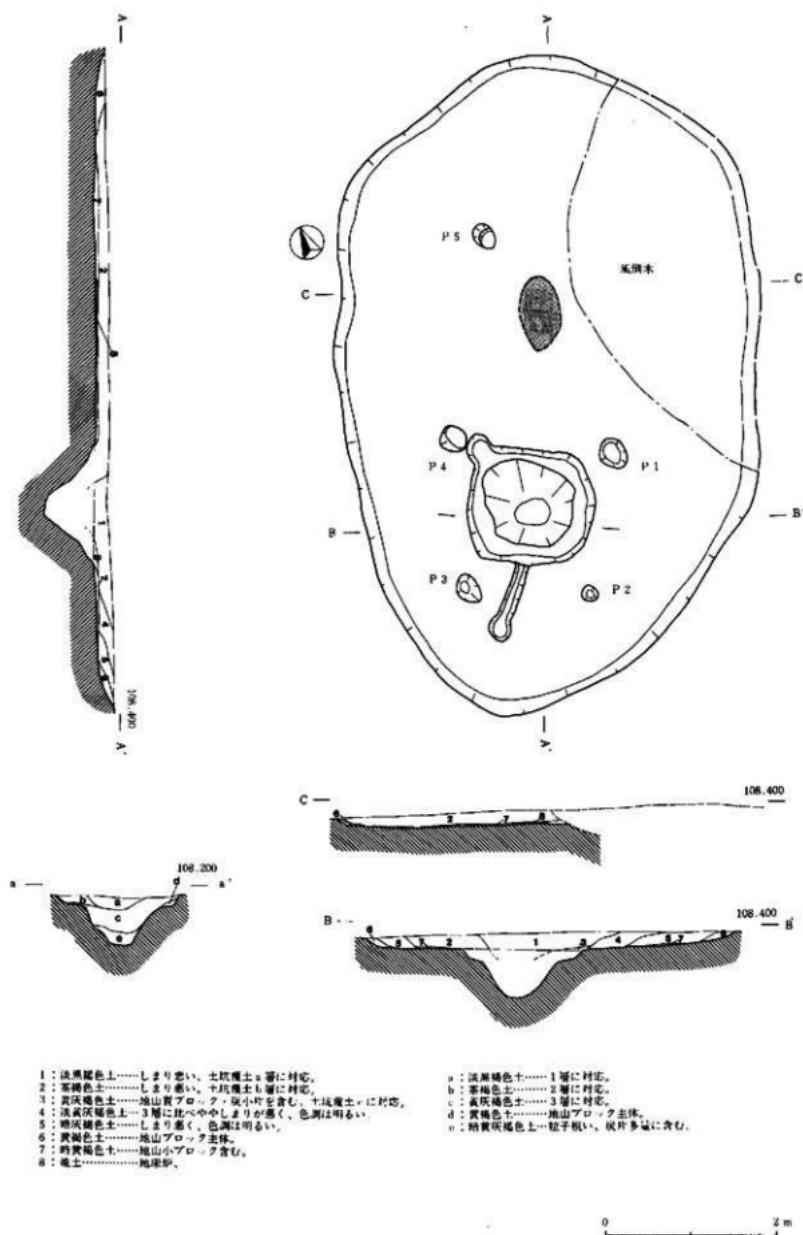
##### 【炉跡】

炉跡は地床炉1基が認められ、住居長軸上北寄りに位置する。88cm×48cmの広がりをもつ長円形を呈し、その長軸は住居長軸にはほぼ一致している。焼土面の高さは床上2~3cmを測る。

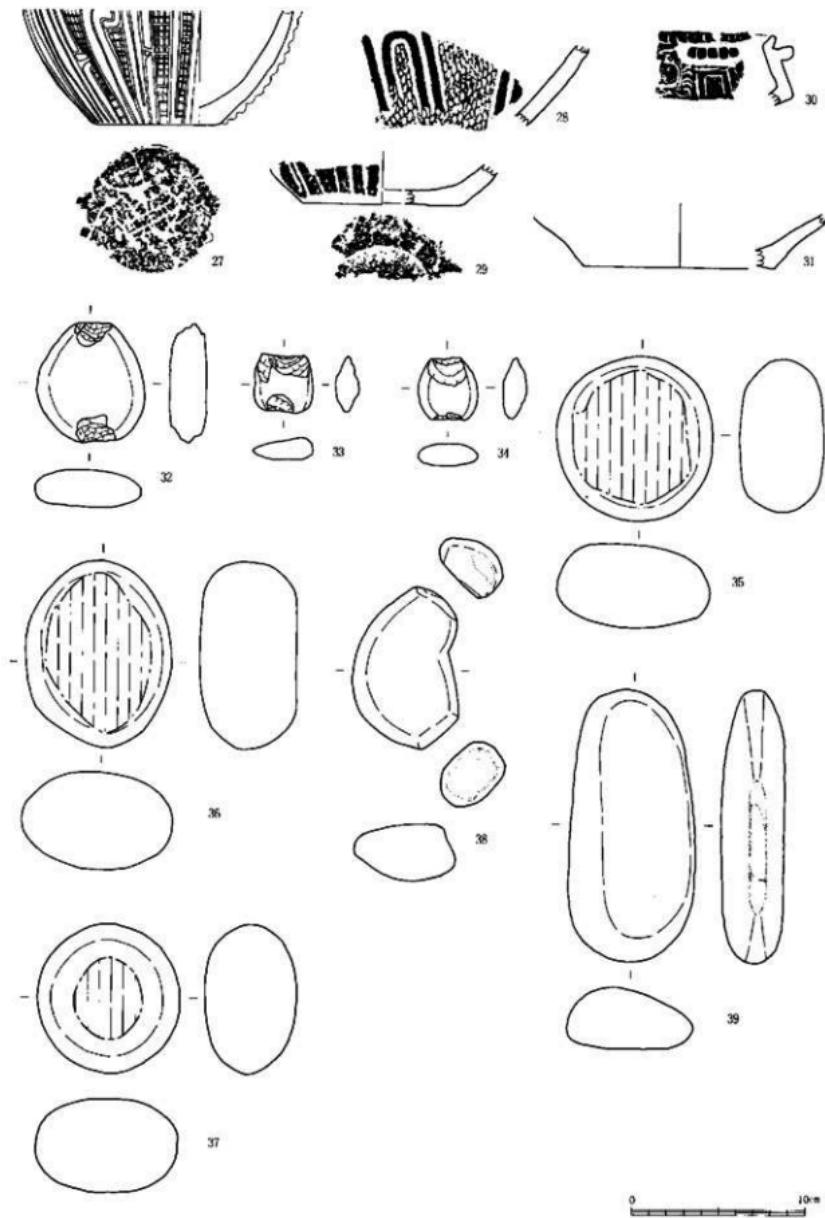
##### 【住居内土坑】

住居内土坑は1基認められ、住居長軸上南寄りに位置する。掘り方は二段掘りで、上段は南北約136cm、東西約150cmの略方形を呈し、深さ10cm程度、下段は径100~120cmの不整円形を呈し、最も深いところで50cmを測る。

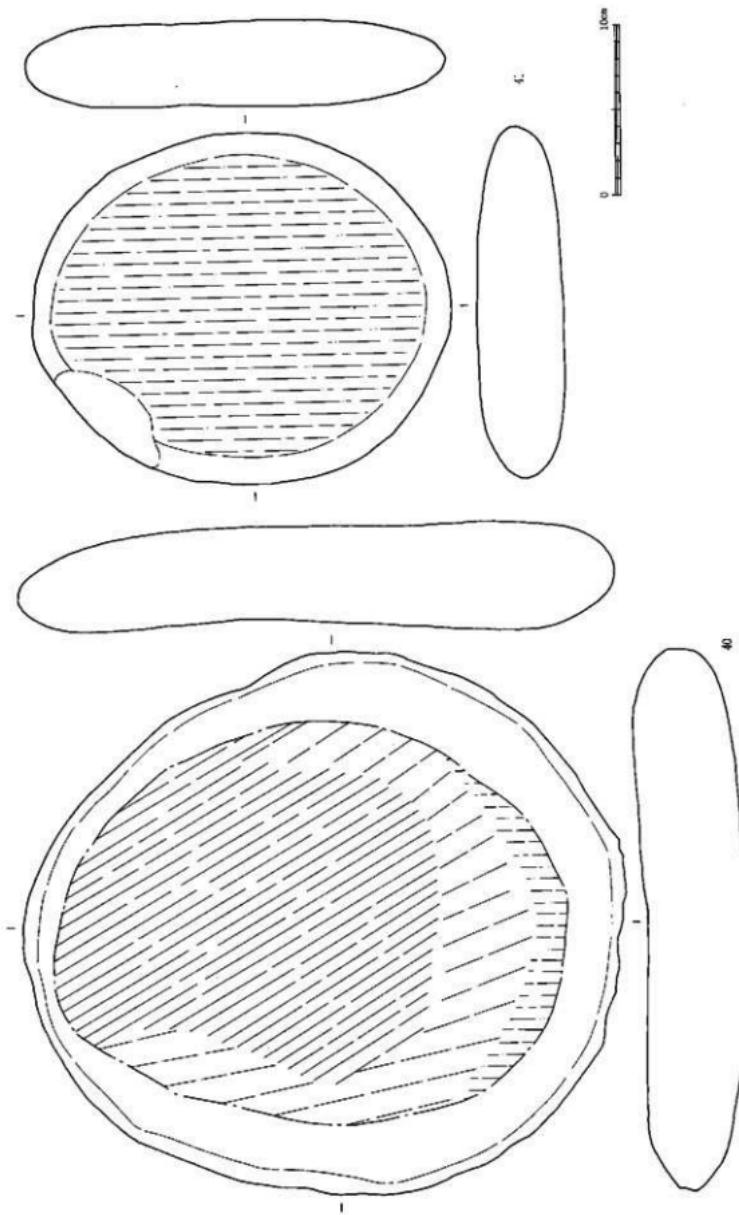
土坑内の覆土はa層(上層)、b・c層(中層)、d層(下層)及びe層(初期流入土)に大別できる。下層を構成するe層は、1号及び2号住居内土坑の最下層と同質であり、住居存続中に堆積していた可能性をもつ。上層・中層はそれぞれ住居覆土に対応し、住居廃絶後に堆積したことが明らかである。また中層においては南からの流入が北からのそれよりも先行していることが知れる。以上のように住居内土坑は、住居が存続している間は、



第91図 4号竖穴住居跡 (1/60)



第92図 4号竪穴住居跡出土遺物(1) (1/3)



第93図 4号竪穴住居跡出土遺物2 (1/3)

少なくとも上部に空間を残していたと考えられる。当住居跡も1・2号と同じく、住居内土坑に蓋が付隨している可能性がある。

(滝川)

## 〔土器〕(第92図27~31)

覆土上層から27・30・31、住居内土坑の下部から28・29が出土している。

27は文深鉢の胴下半部で、半隆起線でB字状文風の文様を描出し、その間を格子目文で充填している。胴部の文様を分割するように爪形文を施した貼付隆帯が縱走するが、2条を1対としそれが向かい合うように4条が貼付されていたものと復元される。(現在は3条しか遺存していない)。外底面の中央にはスタレ状圧痕らしきものが観察できるほか、内面には炭化物が帯状に付着する。明褐色を呈し、胎土中の砂粒には花崗岩風化物由来のものが目立つ。

28・29は接合しないが、同一個体の可能性が考えられる。前者では縄文地文上に太い半隆起線で文様が描かれ、外面には煤の付着が認められる。底部外面が中凹みとなる29でもやはり太日の半隆起線による文様が施されているが、その構成は不詳。底径は9.5cm位であろう。

くの字状に内屈する器形の30は浅鉢と考えられる。屈曲部から上位が文様帶となり、最上部に爪形文、その直下にキザミを有する横位の貼付隆帯がみられる。その他にも押引きの爪形文による楕円形区画の一部と思われるものや幅の狭い半隆起線による文様を伴っている。残る31もやはり浅鉢で、底径は11cmを測る。

## 〔石器〕(第92図32~39、第93図40~41)

床面直上から35・37・38、壁に貼り付くような状態で33が、覆土下層から39、覆土上層からは32・40が出土している。その他にも住居内土坑の下層出土の34・36、風倒木による擾乱部分出土の41があげられる。

32~34は石鍤で、穂の両端を打欠くものである。35~37は磨石で、両面に磨痕が認められる36は全体に黒ずんでおり、焼けた可能性が考えられる。38・39は敲石で、前者では両端、後者では一側邊において敲打が行われている。また、後者の機能部位は細長い楕円形の面をなす。残る40・41は石皿である。断面がわざかに中凹みぎみとなる前者では使用痕が片面のみに限られるのに対して、後者では両面ともが使用されている。

圓化しなかったものでは、黒色頁岩の剝片1点(5g)、楕円形で扁平な形状で軟質の粗粒砂岩を用いた台石などがみられる。

(松山)

## 2. 土坑・落ち込み

調査区内における立地から北部の一群(14~16・18号土坑)、中部の一群(21・22号土坑)、南部の1号落ち込みの三者に大別できる。このうち北部の一群の周辺からは明確に縄文時代中期以降に属する土器は検出されておらず、土坑群も前期に營まれた可能性が高い。次に中部の一群については壁の一部の焼上化が特徴といえる。なお、中・南部のものは出土遺物に恵まれないために年代決定の決め手を欠くが、覆土・形状等から推して縄文時代に位置付けられる蓋然性が高いと思われ、本項に含めて報告することとする。以下若い番号順に説明を加えてゆきたい。

## 14号土坑

## (遺構)

S11区北東部に位置する。長さ約115cm、幅50cmの不整な楕円形を呈し、覆土は上層では暗黄褐色土、下層は茶褐色土。当初、土坑ではないかと思われたが、地山に斜めに入り込んでいく形状等から木の根に由来する可能性が高く、遺構として扱わない方がよいであろう。

## 遺物(第96図42)

覆土最上層から42が出土している。口縁端部外側を帯状に肥厚させるもので、外面には羽状縄文風の縄文、内面には横位の沈線が1条みられる

## 15号土坑

## 遺構(第94図)

T12区の北側に位置し、北側に40cm離れて16号土坑が所在する。直径約60cmの不整な円形を呈し、深さは12cmと浅い。覆土は茶褐色土の単層。

#### 遺物（第96図43～45・47・48、第97図60）

土器としては、波状縁で、口縁に沿って鋸歯状印刻文、その下位に集合的な細かい半隆起線により渦巻文と推定される文様を配する43・44・47（同一個体）があげられる。暗橙褐色を呈し、胎土中には石英の砂粒が多く含む。半隆起線間の残部は彫去されているようである。網文地文上に結線浮線文を配する45は、包含層出土の49と同一個体である。その他、胎土が淡灰灰褐色で外面に網文を施す48なども出土している。

石器では両面に磨痕、片面に凹みがみられる磨石類60を図示したが、これ以外にも剣片6点及び薄岩の小さな塊りがみられる。剣片には不純物が少なく透明度の高い黒曜石が1点含まれる。

以上、出土遺物からは網文時代前期・福浦上層式の時期が考えられる。

#### 16号土坑

##### 遺構（第94図）

T11区南西に位置する。一辺2.5m前後の不整な正方形を呈する。覆土は暗灰黄褐色土の単層。上部の包含層を掘り下げる過程において不明瞭な焼土面と思われるものが検出されており、遺構の形状からもこの遺構が小規模な堅穴住居跡である可能性が想起されるが、調査においてそれを裏付けるまでには至らなかった。

##### 遺物（第97図61～65）

土器では底部が2個体以上が検出されている（未図化）。石器では磨石類5個が覆土上層からまとまって出土している（61～65）。62～64の両面に凹みが認められ、65の左右両側縁には敲打による面がみられる。残る61は表裏面の磨痕のみ。その他にも磨石片2点、剣片4点が出土している。

#### 18号土坑

##### 遺構（第94図）

T11区西部に位置し、17号土坑（製炭土坑）によって北東部を切られる。長さ約110cm、幅約65cmの梢円形プランに復原され、深さは約10cmを測る。覆土は茶褐色土の単層。

##### 遺物（第98図66・67）

土器の出土はみられなかった。覆土上層からは磨石66と有縁の石皿67がセットをなすように検出されている。前者の表裏面においては磨痕が看取されるが、後者は表面の風化が著しく肉眼による使用痕の識別は容易ではない。

#### 21号土坑

##### 遺構（第94図）

Q18区北東端に位置する。後述する22号土坑と同様に尾根東斜面上を占める。出土遺物に恵まれず、時期を特定することは難しいが、上層に堆積した焼土性の土（暗褐色土）を切り込んだ形跡が認められず、それを除去してはじめてプラン検出できた点から判断して、網文時代に属する可能性が高いと思われる。長辺が約1m、短辺が80cm弱の不整な長方形を呈し、深さはせいぜい8cmに過ぎない。斜面上部側にあたる西壁の一部が赤化（焼土化）しているほか、覆土にも炭粒や焼土粒を含む土層が目立つ。

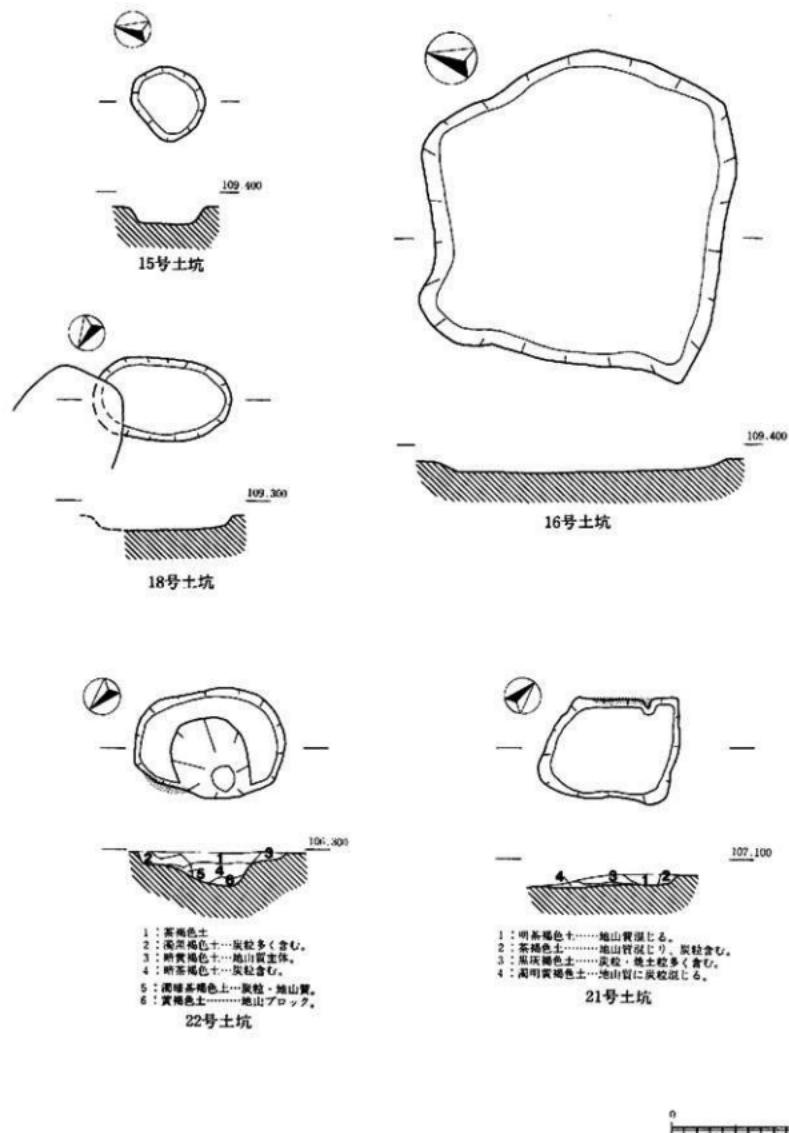
#### 22号土坑

##### 遺構（第94図）

21号土坑の南に3m、Q18区とR18区の境界線上に位置する。長径約120cm、短径約90cmの梢円形で深さが約10cmの主要部分に、直径約60cmの円形で深さ約25cmを測る相対的に深い部分が伴い2段掘りとなる。21号土坑と同様に斜面上部側にあたる壁の西北部の一部が焼土化しており、覆土には炭粒を含む土層がみられる。出土遺物はみられなかったが、これを網文時代の遺構として扱った理由は21号土坑と同じ。

#### 1号落ち込み（S X01）

##### 遺構



第94図 繩文時代の土坑(1) (1/40)

O25区の西南端部を中心に、N25・N26・O26各区にかけて位置する。東南の4号竪穴住居跡とはとりわけ近接した位置関係を有し、その間わずか30cmばかりのところもある。北東約2.5mには3号住居跡も所在する。長径約4.5m、短径約2.6mの楕円形を呈し、深さは数cmに過ぎない。覆土は暗黄灰褐色土の単層。主軸方向はN-20°-E。縄文時代の竪穴住居跡群に近接する点、これもやはり竪穴状をなす点、後述の磨石類74が出土している点から縄文時代に属する可能性が高いと考えられる。しかしながら、周辺を精査しても柱穴と思われるビットや焼土面等を検出することはできず、結局、性格不明の遺構というはかない。

#### 遺物（第99図74）

中央部の覆土上面に近いところから磨石類74が出土している。両面ともに磨痕が伴う。

（松山）

#### 3. 竪穴

覆土等から推して縄文時代に属すると判断される土坑のうちには、深さ1mを越えるものが3基含まれる。これらについては、県内における既応の調査知見に照らして狩猟用の陥落（おとしあな）とされてきた土坑群との形状の類似が指摘できよう。尾根上に営まれているが、いずれも微高地（ピーク）間の鞍部に立地する傾向が窺われる。3号及び4号土坑では後述するように構築時点での一部埋め戻しが想定される。

#### 3号土坑

##### 遺構（第95図）

P22区東部に位置し、1号竪穴住居跡からは北東に約15mを測る。長径約120cm、短径約105cmの不整な楕円形を呈し、深さは約145cm。底部の南東には小テラスが伴う。

覆土においては、第13層以上と第14層以下の間に明瞭な違いが認められる。後者においては黒褐色土・暗褐色土など表土に近い土壤の混入がほとんどみられず、粘土質のブロックが再堆積した状況がみられた。これについては土坑壁の観察から掘削直後に埋め戻された可能性が高いと理解された。一方、これに対して前者では第1・2・4・7・8・13層などの褐色系の色調を呈する土層、第6・10・12層など地山ブロックを主体とする土層、或はその中间的性格を帯びると思われる土層が交互に重なり合いつながら順次埋積していく状況が知られる。恐らく竪穴廃絶後の自然な埋積過程を示すものであろう。こうした覆土の堆積状況については、土坑底面がひじょうに堅密な粘土層である点を勘案して、土坑の機能上必要な何らかの設備（例えば上端の尖った杭）を設置するため、地山（いわゆる赤土）上面より下位のうちの約三分の一強を埋め戻したとも解釈できよう。しかしながら、第14層上面において小ビットを検出することはできず、この裏付けを得るまでには至らなかった。

なお、覆土第7層付近から縄文が施された土器の細片が1片出土しており、胎土等から推して新崎式に属するものと判断されるが、もちろんこれをもって遺構の年代を語ることはできない。

#### 4号土坑

##### 遺構（第95図）

P22区北西部に位置し、前記の3号土坑からは5mの距離にある。長さ約130cm、幅約95cmの隅丸長方形を呈し、深さ約115cmを測る。

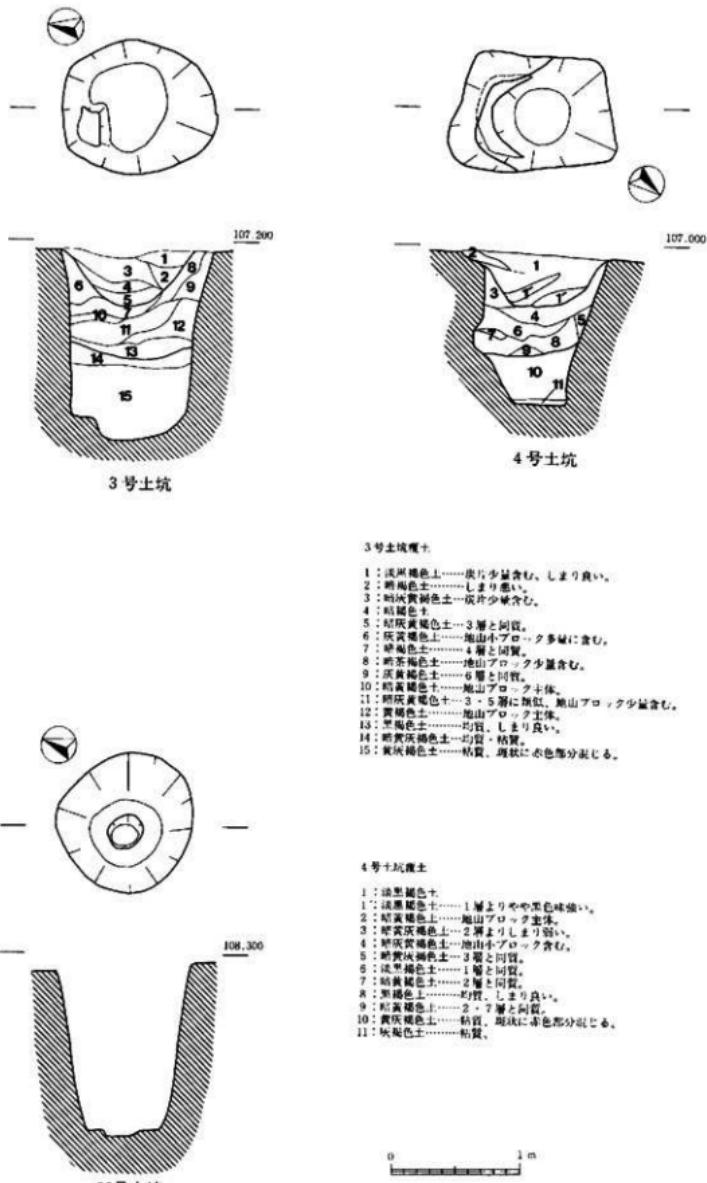
覆土については3号土坑と同様の傾向が指摘でき、ほとんど混じり気のない粘土質ブロックからなる第10・11層については、3号土坑の第14・15層に対比されよう。また、この真上を黒褐色土（第8層）が被覆する状況も同じといえる。本土坑の第10層上面においても小ビットは検出されなかった。出土遺物も皆無である。

#### 20号土坑

##### 遺構（第95図）

調査区北部から東に派生する小さな尾根の付け根部に立地し、T15区とT16区の境界を占める。直径約110cmの円形を呈し、深さは約130cmを測る。底部には直径約30cm、深さ約5cmの円形で浅いビットが付属する。平成3年度の試掘調査の折、確認のための掘り下げを行っているため、土層の記録は実施されていない。遺物の出土はみられなかった。

（松山）



第95図 繩文時代の土坑(2): 陷穴 (1/40)

## 4 包含層出土遺物

## 土器（第96図46・49～59）

外面に縄文を施し口縁端部にキザミがみられる46（S12区）、縄文地文上に結節浮線文を配する49（T11区）、胴部との接合部分に連続なオサエ旗が看取される底部50（S11区）は、14・15号土坑土坑に近接する出土地点から推していずれも縄文時代前期に属する資料と考えられる。この周辺から明確に中期以降に比定できる土器の出土はみられなかった。また、幅約5mmに比較的幅広の粘土紐を貼付して口縁帯に二重の上弦の弧線を表現する51（T15区）は、壺状の特異な器形を呈するものである。所々に燃え文と思われる地文が残り、口縁帯の粘土紐上には原体不詳ながら刺突が施された形跡が確認できる部分もみられる。その他、頸部と胴部の境にも幅約1cmの隆帯が1条廻る。51については施文の技法から前期の鏡ケ森式の古い部分との類似性がたどれるかもしれないが、器形の問題もあり結論は保留たい。

52～56は、本遺跡で堅穴式住居跡群が営まれた縄文時代中期前葉の新崎式の時期に比定される。口径が40cmを超える大型のバケツ状の器形に復原される有文深鉢52（P21区）は、半隆起線間の横位無文帯の下端に爪形文が施される。破片上部にはヘラ括きによる縦位平行沈線がみられるが、これが縦位格子目になるか蓮華状文になるのかは不詳。（恐らくは後者）有文深鉢53（N25区）の胴部下端では半隆起線が継走するが、半截竹管状工具を用いたその施文からはやや雑な印象を受ける。54（O21）・55（N25区）ではともに横走する半隆起線のうちのいくつかに爪形文を伴うが、後者では横位無文帯の上下両端にそれぞれ刻目文が施されている。残る56（P25区）は、深鉢の口縁部に付される中凹みの半円状突起である。

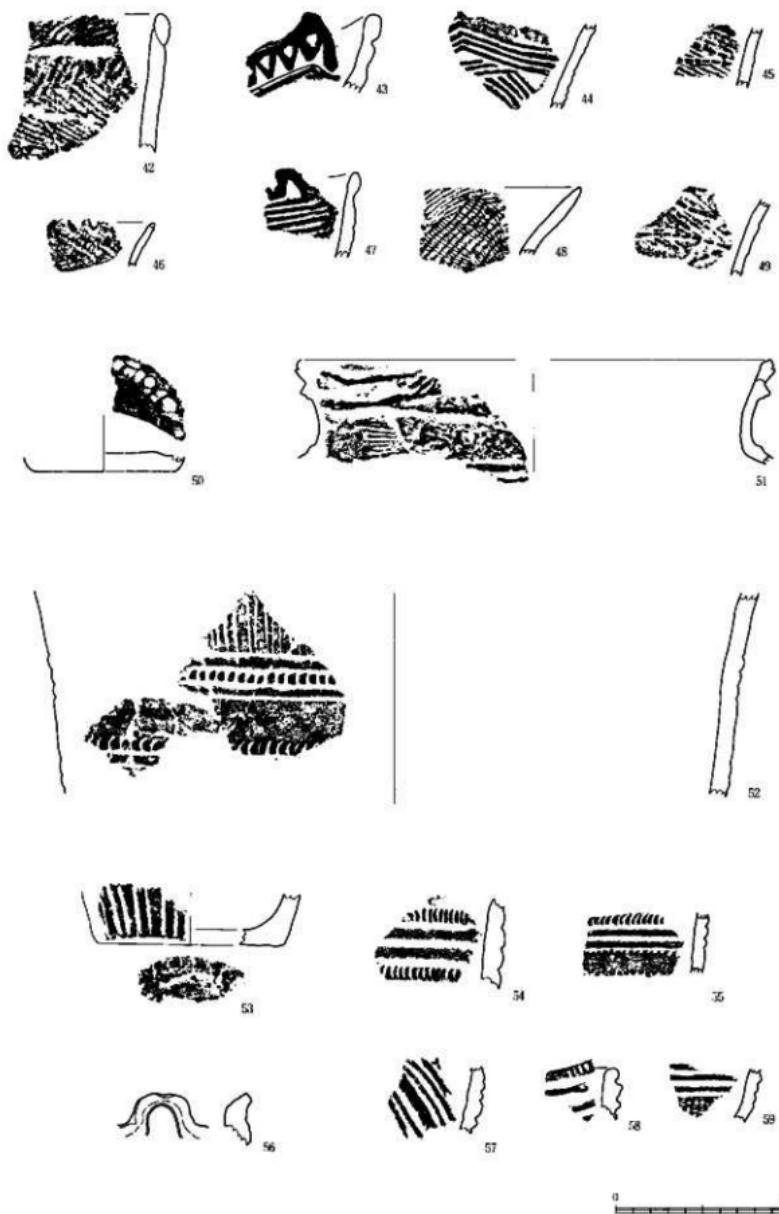
斜行する基盤線の両側に半隆起線が平行する57（R15区）、櫛状刺突を伴う58・59（ともにR14区）は、いずれも中期でも新崎式に後出する古府式頃に位置付けられよう。出土範囲は、調査区北部の前期の土坑群と同南部の堅穴式住居跡群の中間にあたる。

## 石器（第99図68～73、第99図75～79、第100図80～82）

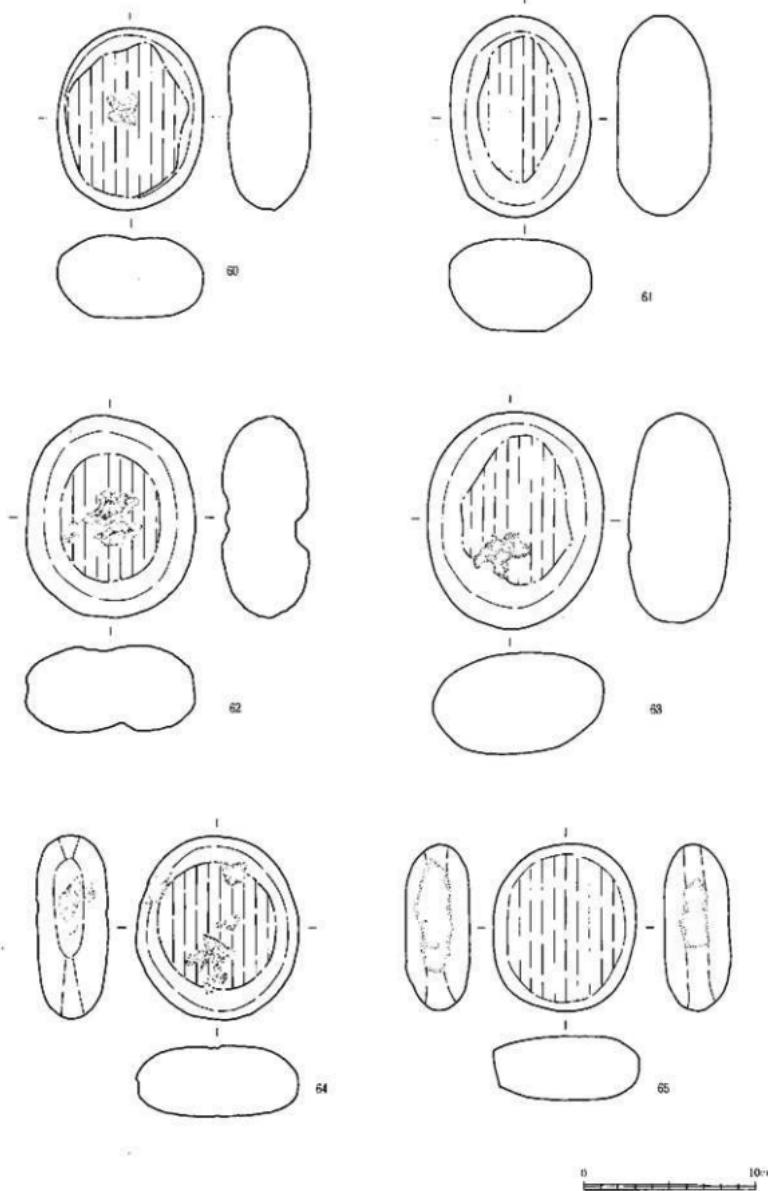
包含層からは、石錘6点、磨製石斧1点、打製石斧1点、磨石類（いわゆる凹石や敲石を含む）が12点、石皿が1点出土しており、これに試掘調査時に得られた石錘1点、磨石類3点、石皿2点を加えることができる。

68～70は右鍤である。先端部を欠損する磨製石斧72は左侧面が平坦であるのに対して右側面は丸味を帯びる。本遺跡で唯一の出土例である打製石斧は72は小型で薄手といえる。表面には自然面が大きく残り、その一部に磨滅（範囲はスクリーントーンで表示）が認められるが、これについては着柄に起因するものとも考えられる。続く75～81は磨製石類である。75は表裏両面の全体に磨痕がみられる梢円形の磨石。76も磨石であるが、顯著な磨痕は片面のみに限られる。また、同じく77でも弓なりに湾曲した側面に最も明瞭な使用痕を有している。球状の礫を素材とする81においても一部に弱い磨痕が伴う。78・79は凹石である。両面が磨面となる前者では表面に2つの凹みもみられ、左右両側においても弱い（使用頻度の低い）敲打痕が観察できる。後者は磨痕・凹みとともに片面に限られる。なお、前者は出土地点（S11区）から考えて縄文時代前期に属するものと判断される。最後の82は石皿であるが、半分以上を欠損する。凸面となる表裏両面において使用痕が明瞭で、その他、邊縁部の外周において剝離痕がみられるがこれについては性格不詳といえる。

(松山)



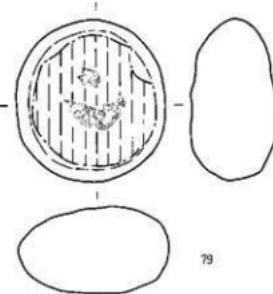
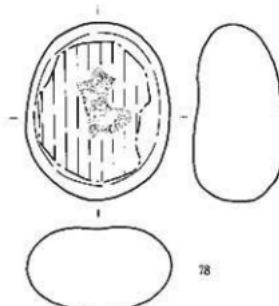
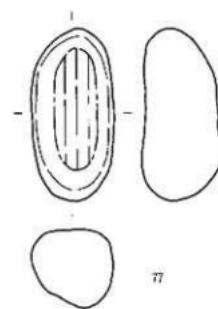
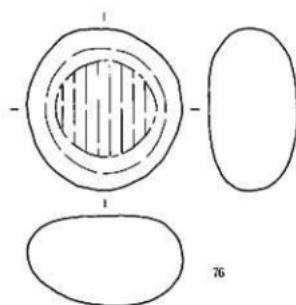
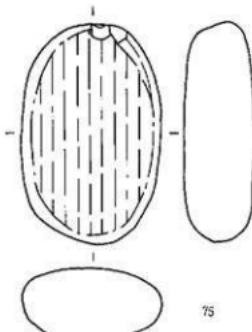
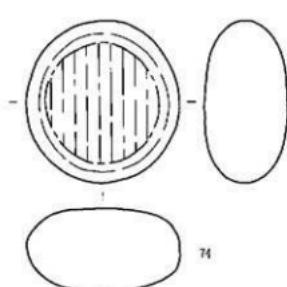
第96図 龍文時代上坑・包含層出土遺物(1) (1/3)



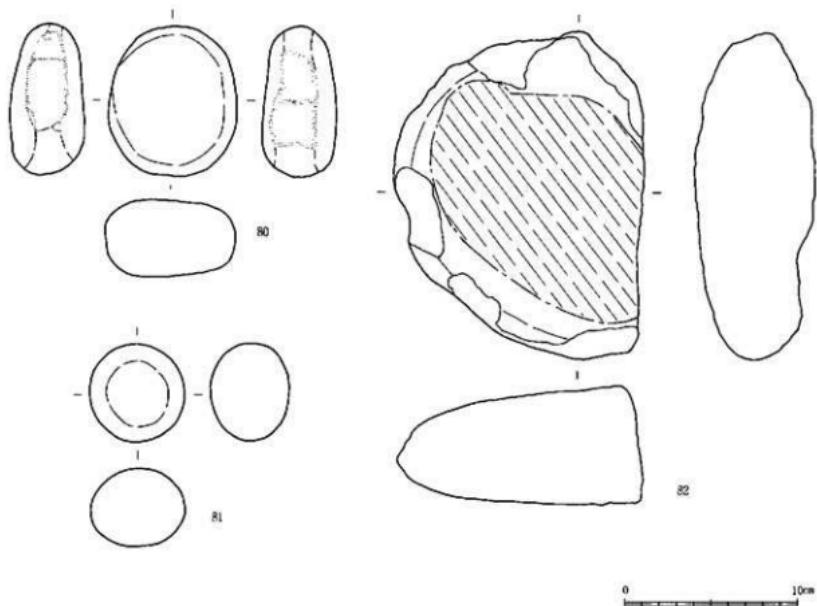
第97図 繩文時代土坑・包含層出土遺物(2) (1/3)



第98図 繩文時代土坑・包含層出土遺物(3) (1/3)



第99図 繩文時代土坑・包含層出土遺物(4) (1/3)



第100図 繩文時代土坑・包含層出土遺物(5) (1/3)

第7表 繩文時代石器属性表

探査番号	器種	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	備考
15	石錐	3号住居跡	5.4	4.2	2.3	84	粗粒砂岩	
24	"	2号住居跡	4.3	3.6	1.4	34	中粒砂岩	
25	磨石類(凹石)	"	8.9	7.8	5.0	518	粗粒砂岩	両面に磨痕、片面に凹み
26	剝片	"	14.0	9.2	2.2	249	板灰岩	片面に大きく自然面が残る
32	石錐	4号住居跡	7.1	6.4	2.2	134	板灰岩?	
33	"	"	3.2	3.5	1.3	24	細粒砂岩	
34	"	"	3.7	3.5	1.4	26	"	
35	磨石類(磨石)	"	9.6	8.9	4.9	639	粗粒砂岩	両面に磨痕
36	" (" )	"	11.0	8.8	5.7	757	中粒砂岩	全体的に黒ずむ。
37	" (" )	"	8.8	8.4	5.6	554	粗粒砂岩	両面に磨痕(片面は不明瞭)
38	" (鐵石)	"	9.3	6.0	3.2	304	"	両端に敲打痕
39	" (" )	"	16.0	7.3	3.6	670	"	一側縁に敲打痕
40	石皿	"	35.3	32.1	5.6	9300	安山岩?	片面に磨痕、中凹み状
41	"	"	24.8	20.8	5.1	3779	中粒砂岩	両面に磨痕
60	磨石類(凹石)	15号土坑	10.5	8.5	4.7	689	粗粒砂岩	両面に磨痕、片面に凹み
61	" (磨石)	16号土坑	11.7	8.2	5.6	809	"	両面に磨痕
62	" (凹石)	"	12.0	10.0	5.2	839	"	両面に磨痕及び凹み
63	" (" )	"	9.3	8.0	4.5	1072	"	"
64	" (" )	"	10.9	9.6	4.3	656	"	"
65	" (鐵石)	"	9.8	8.6	3.8	526	"	両面に磨痕、両側縁に敲打痕
66	" (磨石)	18号土坑	9.3	8.0	4.5	502	"	両面に磨痕
67	石皿	"	30.1	21.1	4.6	4133	角閃石安山岩	有縫
68	石錐	排土	3.2	3.0	0.9	10	板灰岩	
69	"	P21区	5.4	4.8	1.5	46	石英斑岩	
70	"	M25区客土	6.3	4.9	2.6	120	粗粒砂岩	
72	磨製石斧	M25区	(13.0)	5.6	2.8	(315)	蛇紋岩	先端部欠損
73	打製石斧	Q20区	10.6	4.7	1.8	84	細粒砂岩	自然面に着柄による磨滅?
74	磨石類(磨石)	S X01	9.6	9.0	4.9	588	中粒砂岩	両面に磨痕
75	磨石類(" )	P21区	12.9	8.7	4.1	679	粗粒砂岩	両面に磨痕
76	" (" )	M25区客土	11.1	9.2	5.3	646	安山岩?	片面に磨痕
77	" (" )	M25区	10.2	4.9	4.8	332	中粒砂岩	一側縁に磨痕
78	" (凹石)	S11区	10.5	8.5	5.0	669	粗粒砂岩	両面に磨痕、片面に凹み
79	" (" )	M24区	9.6	8.9	5.0	580	"	片面に磨痕、片面に凹み
80	" (鐵石)	R17区	8.7	7.6	4.4	453	"	片面に磨痕、両側縁に敲打痕
81	" (磨石)	調査区南端	5.8	5.6	4.6	190	中粒砂岩	全面に磨痕
82	石皿	S11区	(14.8)	19.4	7.0	(2191)	細粒砂岩	両面に磨痕

( )は遺存値

## 第5節 古代以後の遺構と遺物

### 1. 古代の遺構と遺物

#### 1号土坑

##### 遺構（第102図）

P23区、微高地南東側に立地する。平面形は東西にやや長い楕円形で、断面は浅い皿形を呈する。長軸110cm、短軸90cm、検出面からの深さは5~10cm程度である。覆土はしまりが悪く、茶灰褐色の色調を呈する。出土遺物は認められないが、覆土及び立地から古代に属する遺構である可能性が高い。

#### 2号土坑

##### 遺構（第102図）

P23・Q23両区にまたがり、1号土坑の東に近接する。ほぼ略円形を呈する皿状の土坑で、西から東へ緩やかに下る微高地斜面に位置している。径約300~340cm、深さ約10cmを測る。底面直上には地山ブロックで構成される上層が流入し、この層より上位は黒褐~暗茶褐色のしまりのない土が堆積していた。縄文土器の細片が2点出土しているが、覆土の状況からみて古代の遺構である可能性が高い。

#### 10号土坑

##### 遺構（第102図）

尾根の南端、N27区に位置する。周囲は南から北へ下る傾斜面である。南北にやや長い不整形を呈し、南北約140cm、東西約110cm、深さ5~20cmを測る。暗灰褐色のしまりのない土が堆積し、底面近くに20cm大の円礫が2個みられた。遺物は出土していないが、覆土・立地の状況から古代の遺構と考えられる。

#### 11・12号土坑

##### 遺構（第102図）

O26区、尾根東側の深い谷に面した斜面落ち際に立地する。後世の擾乱によって切り合い部分が削平されているので、両者の先後関係は不明である。11号土坑は平面が不整形な矩形を呈し、底面には段を有する。東西約150cm以上、南北約120cm、深さ10~33cmを測る。覆土は暗灰黄褐色のしまりの悪い土に、地山ブロックが混じる。12号土坑は略円形の平面形を呈し、底面に向かって細鉢状に落ち込む。最大径約150cm、深さ約80cmを測る。覆土は11号土坑に類似している。

##### 遺物（第104図87）

両土坑とも土器器の小片が若干みられる。このうち第104図87は12号土坑から出土した土器器の口縁部である。口縁端部の折り返しが著しく、10世紀頃の年代が考えよう。胎土には細砂粒を含み、施皮は並で、色調は暗茶褐色を呈する。また図示していないが、11号土坑からは内面黑色土器器の高台破片などが出土している。

#### 1号ピット

##### 遺構（第101図）

O26区、東側斜面落ち際に立地する不整形のピットで、長径約70cm、深さ約70cmを測る。古代の遺構が集中する範囲において最も北側に位置している。出土遺物は図示していないが、土器器の口縁部の小片がある。

#### 2号ピット

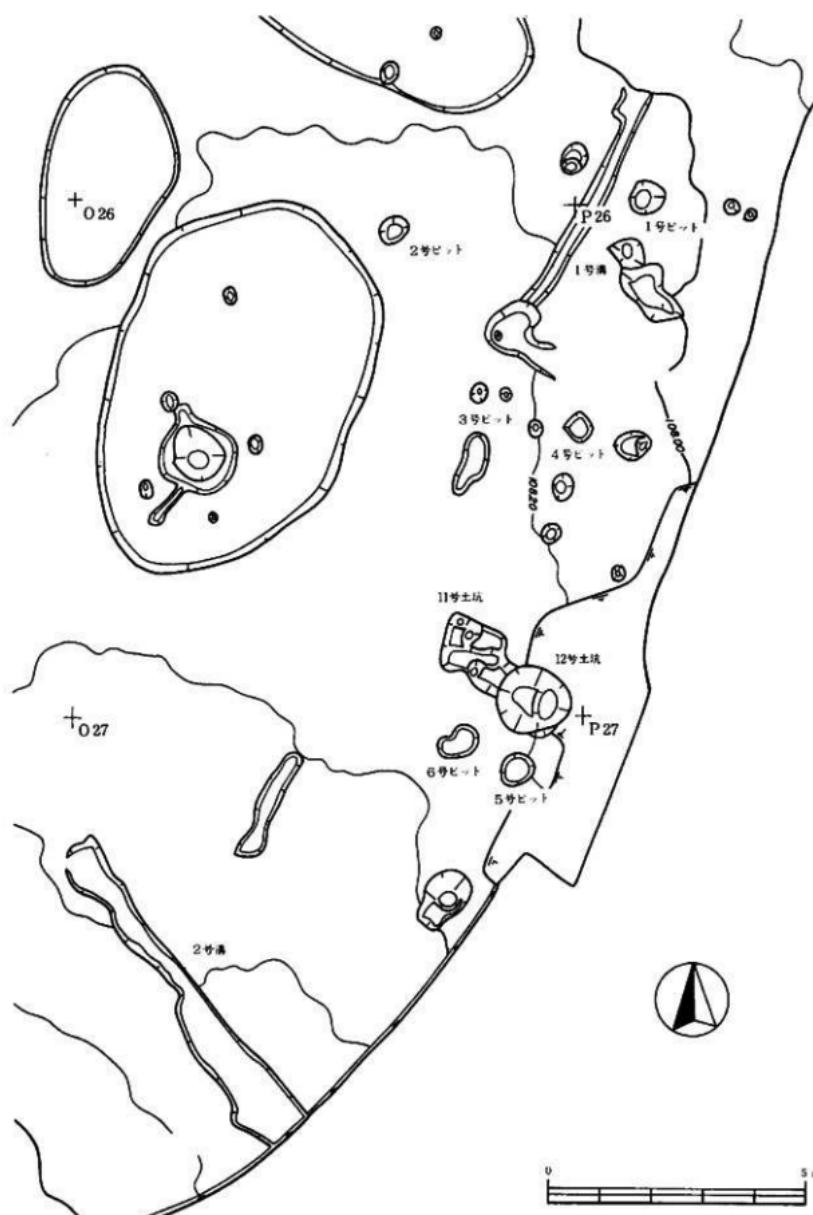
##### 遺構（第101図）

O26区に位置するが、古代に属する遺構としてはやや西方に孤立して存在する。径60cm程度の略円形を呈し、深さは約70cmを測る。覆土は淡赤褐色の色調を呈し、上部には拳大の礫が詰まっていた。遺物は出土していない。

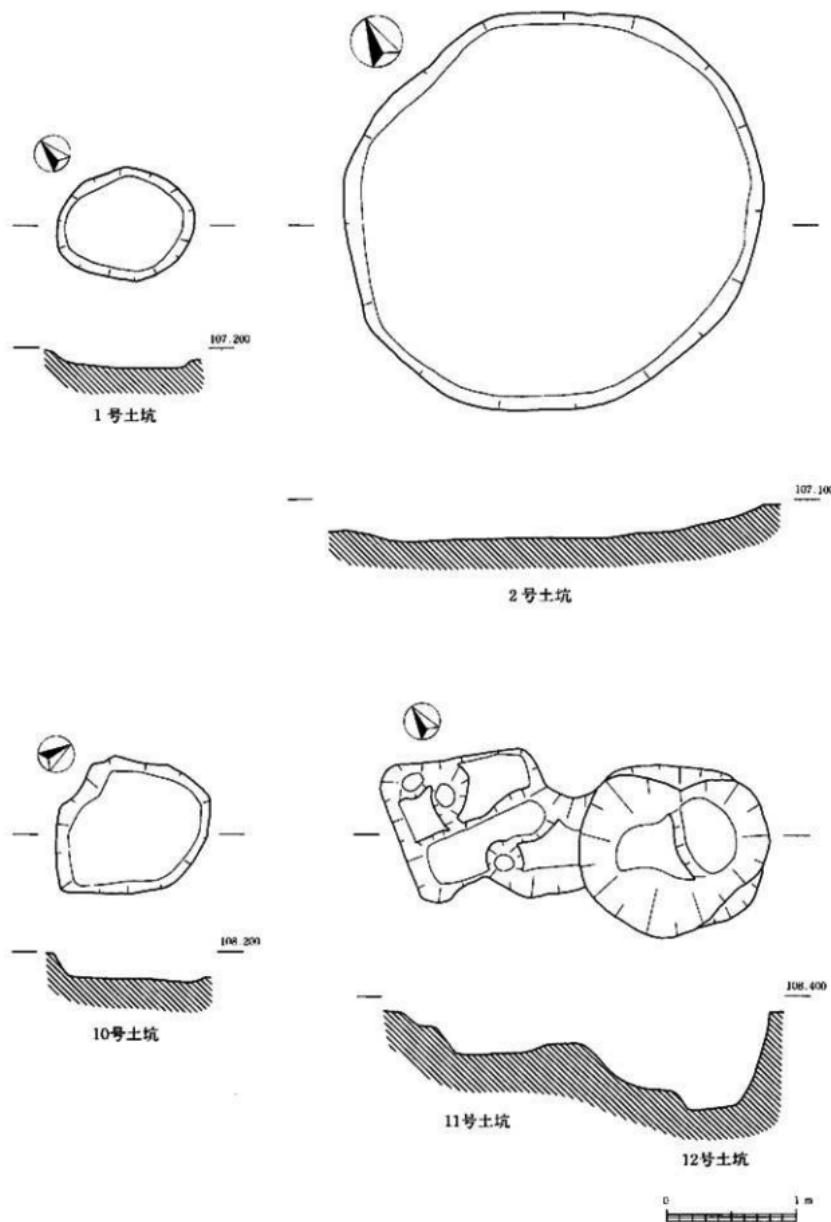
#### 3号ピット

##### 遺構（第101図）

O26区、斜面落ち際によりやや西側に位置する。径約30cm、深さ約20cm、断面半球状の小ピットである。覆土は



第101図 古代遺構集中地点 (1/100)



第102図 古代以後の遺構(1) (1/40)

淡赤褐色の色調を示すしまりのない土で、他の古代の遺構の多くと同様である。

#### 遺物（第104図92）

第104図92は須恵器双耳瓶の体部片で、残存部分の最大径が16.4cmに復原される小形品である。外面には二条の沈線が巡り、面取りされた耳が貼り付けられるが、わずかに下端が遺存するのみである。

#### 4号ピット

##### 遺構（第101図）

O26区、斜面落ち際に立地する。一辺約40cm、深さ約15~20cmを測る略方形のピットである。覆土は淡赤褐色の色調で、炭片を含み、しまりは悪い。

#### 遺物（第104図91・96）

土師器壺（91）・鉄釘（96）が出土している。土師器壺91は復元口径32.8cmを測る。口縁部は直立気味に立ち上がり、端部に到って短く外反する。外面胴部上半へ口縁部・内面全体はロクロナデ、外面胴部下半には回転ケズリを施す。色調は明黄褐色で、胎土は砂粒を多く含み、やや粗い。焼成は良好である。鉄釘（96）は、頭部が欠損し、残存長6.5cmを測る。体部上方の断面は5×6mmの方形を呈する。

#### 5号ピット

##### 遺構（第101図）

O27区に位置する。径約70cm、深さ約25cmを測る略円形のピットである。底面中央には焼土が認められた。

#### 遺物（第104図83・84・86・88~90）

土師器壺・土師器壺の破片が出土している。

土師器壺83は、全体の1/3程度が遺存していた。口径13.0cm、器高3.9cm、底径5.4cmを測る。体部は直線的に立ち上がり、口縁端近くに到って小さく屈曲する。口縁端部は尖り気味に収める。外面にはロクロナデによる凹凸が著しいが、内面は平滑に整えられている。底部外面に回転糸切り痕が残る。色調は淡褐色を呈し、焼成は並、胎土には細砂粒を少量含む。土師器壺84は底部1/4程度の破片で、復元底径6.7cmを測る。色調は淡褐色を呈し、焼成は並、胎土はやや粗く0.5~1.0mm程の細砂粒を多く含む。86・88~90はいずれも長刺窓の破片である。86は口径10~12cm程度の小片である。くの字に屈曲した頸部に統いて口縁部は内傾気味に立ち上がり、口縁端部では内外面に拡張されている。淡黄褐色の色調を呈し、胎土には0.5~1.0mmの細砂粒を多く含む。89は胴部中央付近の破片で、上部にはカキメ、下部には打ち込みの脱したタタキメが顯著に残る。胎土・色調は88に類似する。90は胴部下半で、色調・焼成・胎土とも89に類似するが、タタキメは打ち込みがやや浅く、別個体であろう。これら5号ピット出土の遺物の年代は10世紀とみられる。

#### 6号ピット

##### 遺構（第101図）

O27区、5号ピットの北西に接続している。長径約70cm、深さ約20cmを測る不整形ピットである。

#### 遺物（第104図85）

有台の内面黒色土師器壺が1点出土している。体部上半以上を欠き、口径・器高は不明であるが、高台径は6.8cmを測る。底部外面には回転糸切り痕が残り、根広がりの厚みある高台が貼り付けられている。体部はやや丸みをもって立ち上がる。内面には幅2~3mmの直線的なヘラミガキがみられ、底部付近では乱雑ながら格子目を幾つか重ねるように施されている。淡橙褐色の色調を呈し、胎土には0.5mm程度の砂粒を少量含む。10世紀後半頃の年代が考えられる。

#### 1号溝

##### 遺構（第101図）

P25・P26・O26区に跨る。延長約5.8m、幅30~40cm、深さ約10cmの規模をもつ尾根筋に平行する溝である。北端は削り放し、南端は東（谷側）にL字状に屈曲し約1mほどで同じく削り放しにより終息している。この溝より西側には古代の遺構・遺物とともに少なく、なんらかの区画の役割を担っていたと推定される。遺物は土師器

片が少量出土した。

#### 2号溝

##### 遺構（第101図）

O27区に位置する。延長7.0m以上、幅40cm～100cm、深さ約10cmを測り、尾根筋に直交している。この溝より南には土坑2基がみられるのみで、斜面も急になる。遺物は出土していないが、淡茶褐色の縦まりの悪い覆土からみて古代の遺構であり、1号溝と同じく区西の溝として機能したものと考えられる。

##### 包含層出土遺物（第104図93～95）

93～95は分布調査時に出土した須恵器で、93は瓶頸の頸部、94は蓋の胴部である。95は内外面とも平行タタキメを残す蓋の胴部である。

## 2. 製炭土坑

#### 8号土坑

##### 遺構（第103図）

N28区、尾根付け根寄りの傾斜面に立地する本土坑は2段掘りで、上段は南北165cm、東西150cm、深さ4～5cmを測る不定形・皿状の形態を有し、下段は南北にやや長い楕円形を呈し、長軸約110cm、短軸90cm、深さ48cmを測る。覆土は3層に分かれるがいずれも焼土塊・炭片を含み、特に2層（第103図）は炭粉が主体となる。また土坑壁には赤化した箇所が認められ、これらのことより木炭を焼成するいわゆる「伏せ焼き窯」であると考えられる。遺物は出土しておらず構築年代は不明である。ただし先述の2号溝から約15m程度しか離れておらず、位置関係から古代に遡る可能性がある。

#### 17号土坑

##### 遺構（第103図）

尾根の先端近く、T11区に位置する。南北120cm、東西90cmの長円形を呈する。深さは約20cmを測り、底面は広く平坦で、従って断面は浅い皿形の形態をとる。覆土は3層に分かれ、上層は黄褐色、中層は暗灰黄褐色を呈する。下層は黒褐色の炭粉層で、木炭の破片を含んでいる。また上坑壁上半のはば全周、及び底面の一部は赤化しており、「伏せ焼き窯」であると考えられる。木炭以外遺物は出土しておらず、構築年代は不明である。

## 3. 時期不明の土坑・溝

#### 23号土坑

##### 遺構（第103図）

P19区、微高地北側斜面に立地する。径約92cmを測る略円形の土坑である。覆土は淡茶褐色の色調でしまりが悪い点は古代の遺構に類似するが、炭片があり混じらず、径2～3cmの地山ブロックが多く含む点で異なる。出土遺物はなく、時期は不明である。

#### 24号土坑

##### 遺構（第103図）

Q19区、微高地北側斜面に立地する。長径約150cm、短径約104cm、深さ10～20cmを測る不整形の浅い土坑である。覆土は23号土坑に類似する。出土遺物はなく、時期は不明である。

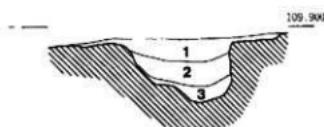
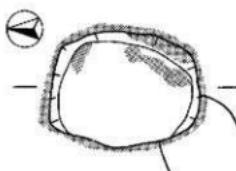
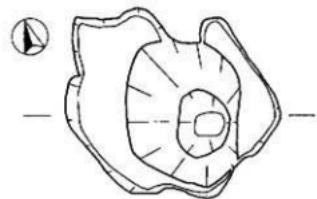
#### 25号土坑

##### 遺構（第103図）

Q20区、微高地北側斜面に立地し、24号土坑の南に近接する。径80cmの略円形を呈する二段掘りの土坑で、一段目は10cm程度、二段目は約25cmの深さをもつ。覆土は23・24号土坑に類似する。出土遺物はない。

#### 3号溝

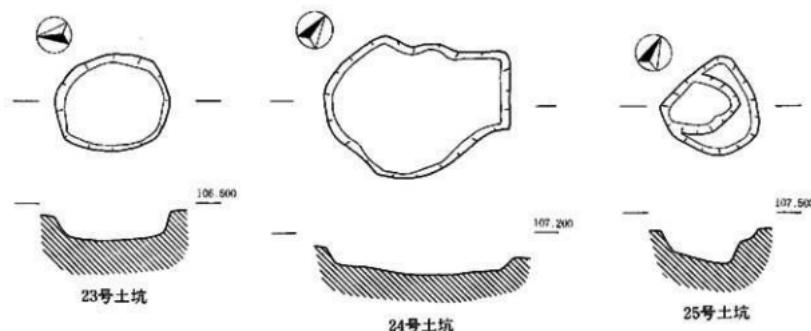
##### 遺構（第79図）



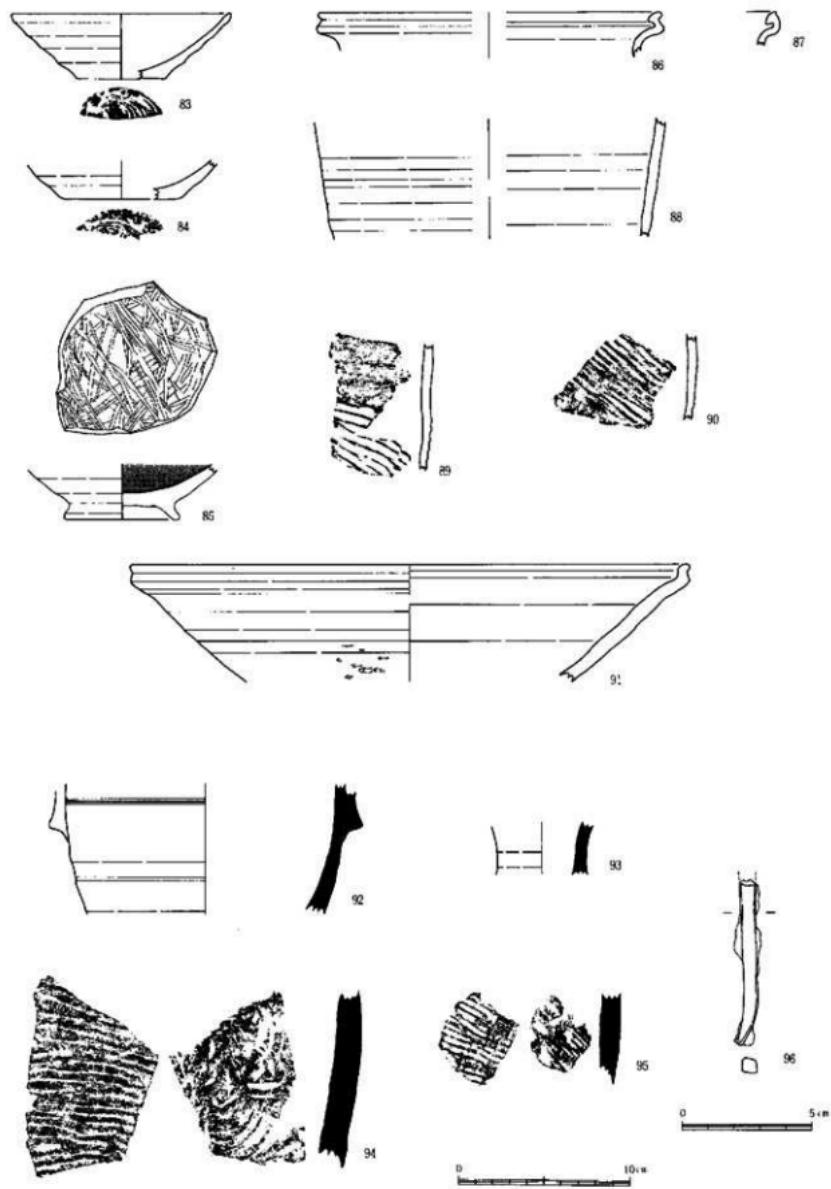
1 : 黄褐色土…地土・沃含む。  
2 : 淡黄褐色土…地土・灰片多く含む。  
3 : 淡黄褐色土…地山ブロック・灰塊含む。

17号土坑

8号土坑



第103図 古代以後の遺構(2) (1/40)



第104図 古代遺構・包含層出土遺物 (1/3 96のみ2/3)

P20～Q20区にかけて東西に延びる溝で、延長約11.5m、幅40～50cm、深さ10～20cmを測る。その東端は最高地頂近くに達し、等高線に直交するよう掘削されている。東端底面の標高は107.7mで、西端では106.3mである。3号溝は表土面すでにその落ち込みが確認されていたもので、出土遺物は認められないものの、造溝の時期はかなり新しいことが推測される。ここでは近代の地境の溝である可能性を考えておきたい。

(滝川)

## 第6節 おわりに

各時代の概要についてもう一度ふりかえってみたい。

まず、旧石器時代ではナイフ形石器を含む立野ヶ原系の小規模な石器群が検出されている。火山灰の分析は行わなかったが、恐らくAT下位に位置付けられると思われる。現時点では加賀地方における最古の遺跡である可能性が高いといえよう。

次に縄文時代中期前葉の新崎式期の堅穴住居跡については、隣接する庄が屋敷A及びC両遺跡の1993年の発掘調査で約70棟が確認されるところとなっており、本遺跡例もそれらとの関連のなかで理解されるべきであろう。

最後に少數の遺構・少量の遺物のみに留まって必ずしも性格を明らかにできなかった平安時代については、本書でも記されたごとく庄が屋敷B遺跡の東部において同時代の掘立柱建物群が検出されていることから、それとの関連にも注意を払う必要があろう。

本章を執筆するにあたっては、庄が屋敷遺跡群の調査担当者はもとより柄木英道・本田秀生・木立雅朗・柿田祐司の各氏より有益なご教示を得ている。また、旧石器時代の遺物の石質同定については小島和夫先生にお願いした。ここに記して感謝申し上げる次第です。

(松山)

### 参考・引用文献

- 松島吉信他 1981 『白岩藪ノ上遺跡調査概要(2)』 立山町教育委員会  
浅香年木他編 1987 『辰口町史第二巻前近代編』 辰口町役場  
山本正敏・酒井重洋・橋本正春他 1987 『北陸自動車道遺跡調査報告—朝日町編3-』 富山県教育委員会  
加藤三千雄 1988 『新保・新崎式土器様式』『縄文土器大観3』 小学館

## 第6章 庄が屋敷A遺跡

### 第1節 遺跡の位置と環境

庄が屋敷A遺跡は辰口町字宮竹地内の丘陵上に位置する。東方に庄が屋敷C遺跡が南方には庄が屋敷B遺跡がそれぞれ谷を1つ挟んで隣接している。尾根の形状はラクダのこぶのように南と北にわずかな高まりを見せ、中央付近にごく浅い鞍部を持っている。本調査は南側の敵高地周辺とそこから北西に突出した狭小な尾根上を調査範囲としている。したがって遺跡が築かれている地形は調査区南東の標高110.81mを最高所として四方へなだらかに降っている。西北端との比高差が最も大きく4.37mを測る。調査区西方の谷への落ち込みは急峻である。調査した面積は約5,000m<sup>2</sup>で庄が屋敷A遺跡全体のおおよそ1/2にあたる。

### 第2節 調査の経過

平成4年7月15日から重機により表土の除去を開始し、8日間でほぼ終了した。この時点で敵高地を示す南北区から北側へ緩やかに傾斜する斜面上で黒褐色の長楕円形をした平面プランが検出され、繩文土器の細片が数点確認された。その他の地区からの出土遺物は極めて少なく、遺物包含層の特定はできなかった。

#### 〈調査日誌抄〉

平成4年

- |        |  |        |                                       |
|--------|--|--------|---------------------------------------|
| 7月15日  | 重機により表土除去を開始する。(27日に終了。)                     | 10月28日 | 1号住居跡の出土遺物の取り上げを開始する。                 |
| 8月28日  | 調査区のグリッド設定の準備。南北方向にアルファベット、東西方向にアラビア数字を使用する。 | 10月30日 | J 31・32区で炉跡と土器を伴う堅穴住居跡を検出する。2号住居跡とする。 |
| 9月1日   | 唯一遺構と思われるプランが検出された北斜面を重機により拡張する。             | 11月4日  | 2号住居跡の土層断面図を作成し、遺物を取り上げる。             |
| 9月21日  | 東部から遺構検出作業開始する。                              | 11月12日 | 1号住居跡の出土遺物取り上げを終了し、引き続き住居内の精査を実施する。   |
| 9月29日  | 北斜面の長楕円プランを1号住居跡とする。                         | 11月16日 | 1号住居跡内1号土坑から繩文土器、磨石、石皿が出土する。          |
| 9月30日  | 遺構検出作業を南部へ拡張。                                | 11月19日 | 1号住居跡内1号土坑出土遺物を取り上げる。                 |
| 10月2日  | 遺構検出作業を北西尾根上へ拡張。                             | 11月20日 | 雨のため航空測量中止となり24日に延期する。                |
| 10月7日  | A 42区より遺構掘り下げ開始。遺構検出作業を北部へ拡張。                | 11月24日 | 航空測量を実施する。周辺炭窯の調査を開始する。               |
| 10月14日 | 1号住居跡を掘り下げる。15号土坑から繩文土器、石器が出土する。             | 12月8日  | 炭窯の実測作業を終了する。                         |
| 10月16日 | 各土坑の土層断面図、平面図の実測作業を開始。                       | 12月9日  | 現地の発掘作業を終了する。                         |
| 10月27日 | 1号住居跡の遺物出土状況の写真撮影を行なう。                       |        |                                       |

### 第3節 遺構

繩文時代の堅穴住居跡1棟と土坑数基、古代の堅穴住居跡1棟、時期不詳の焼土坑10数基、溝3条が検出された。そのほか性格不詳の土坑を多数検出した。

## 1 繩文時代の遺構

## (1) 住居跡

1号住居跡（第108・116～119図、図版78・79・87）

調査区内の中央部からやや東側でM32～33区、N32～33区、O32～33区にまたがって検出された。北斜面の肩部付近に位置するが、未調査区に該当する北部尾根上へと統くため東西両斜面よりもことさら傾斜が緩くなっている。平面プランは長軸が北西から南西方向にある長楕円形の一端が南側へ出っ張ったような不正楕円形を呈する。長軸が10.5m、短軸方向で最大幅8.9mを測る。床面の掘り込みは南端隅で5cmを測るが北縁部は流出によるものであろうか不明瞭で、平面図ほど明瞭ではない。床面は中央部がやや産みながら、全体に北側へ傾斜している。住居跡内には炭化物の混入した淡黒褐色土や黒褐色土が一様に堆積し、繩文時代の遺物を含んでいる。厚層は床面中央で約30cmを測る。土器や石器の出土は覆土層に認められ、床面に付くものはない。出土した土器は大半が極小片で中央付近に散在する程度である。住居跡南端N32区側壁付近で1の表裏繩文土器の破片が単独で出土している。そんな中で磨石類7点、石皿10点が南側の出っ張り部分に集中して出土しているのが特徴的である。

貯蔵穴と思われる土坑が住居跡の東側に寄って検出された。平面プランは不整楕円形で長軸134cm、短軸100cm、床面からの深さは最深部で40cmを測る。東側半分が2段掘りとなり、土坑底部は平底状を呈する。2の深鉢は上層の淡黒褐色土中から側壁に貼り付くようにして出土している。下層の暗黃褐色土には小円碟や石器の製作に伴う剥片が合わせて19点出土している。主柱穴は不明瞭で、床面上に検出された黒褐色のビットを掘り下げたところ径15cm～25cmで不規則に並ぶビットが検出されたが、中には木根痕も含まれていると思われる。P1・P2がやや深く58cm・45cmを測る。石皿の24・31はそれぞれP4・P3から出土している。

その他石器では5の剥片が1号土坑付近から8の磨製石斧がO32区で住居跡側壁付近で出土している。

## (2) 土 坑（第110・116・117・120図、図版85・86）

1号住居跡の北部から東部にわたる一角で検出された土坑で、100号土坑を除いて住居跡からの距離は半径9m以内に位置する。土坑内には住居跡で遺物を包含している覆土と同様に炭化物が混入した淡黒褐色土や黒褐色土が單一に堆積し、遺物も出土していることから、当概期の遺構とした。

17号土坑 M35区、1号住居跡の北6mの地点で検出された。長軸85cm、短軸60cmの楕円形で深さ22cmを測る。土坑底部から、石皿の破片が2点出土している。

87号土坑 O34区、1号住居跡の北東6mの地点で検出された。径約1mの平面略円形で鍋状に掘り座む。深さ30cmで側壁付近には暗黃褐色土が流れ込み、中央部には炭化物を多量に含む淡黒褐色土が堆積する。淡黒褐色土から繩文土器27が出土し、下層北側よりから打製石斧8と石皿35が出土している。石皿は磨面が底面とほぼ平行する状態で出土している。

100号土坑 M38区、調査区北端で検出された。13～16・25の土器が出土している。

101号土坑 P33区、1号住居跡の東方8m、87号土坑の北東5mの地点で検出された。長軸80cm、短軸60cmの楕円形で深さ25cmを測る。若干炭化物を含む淡黒褐色土から繩文土器29や土器の細片が出土している。

102号土坑 P33区、1号住居跡の北東9mの地点で検出された。101号土坑の北側に隣接する。径80cmの円形で深さ27cmを測る。土坑底部より土器が出土している。

## 2 古代の遺構

## (1) 住居跡

2号住居跡（第109・121図、図版80・81）

J31・32区にまたがり検出された堅穴住居跡である。1号住居跡から西方約15mの地点で西斜面の肩部に位置する。検出された平面プランは南北にやや長い変形隔丸方形で、南東隅がつぶれたような形態を示す。南北に長辺が7.7m、短辺が6.7mを測り、東西方向に6.3mを測る。住居跡内の覆土は炭化物や純土を含む暗茶褐色や淡黒

褐色土が中央付近に見られるほかは、同じように炭化物や焼土を含む暗黄褐色土が下層に堆積する。検出面から床面の深さは東側で37cm、西側で10cmを測り、やや西へ傾斜する。

住居跡の平面プランを検出した当初から南東隅には焼上粒が多数認められたので慎重に掘り下げたところ、かまどであることが判明した。規模は70cm×65cmの範囲に焼土が広がり、主軸は住居跡のものよりやや西に傾く。かまどを構築する際に床面を皿状に若干掘り下げた形跡が認められるが顯著ではなく、先端方向に向かってゆるやかにせり上がる。焼土の厚さは5~10cmである。かまどの西壁には地山を約10cm掘り除めて幅17cm、高さ25cmの礫を2基並置してある。礫は赤褐色によく焼け、剥落した破片の一部がかまど内から出土している。かまど内には支脚は認められないが、土器器窓が散乱状態で出土している。かまど焼き口付近から3が出土し、中央から2が、先端西寄りから5が出土した。4はかまど内と住居跡覆土から出土した遺物が同一個体であると判明したものである。破壊の影響を被った甕が一旦かまど外へ持ち出された可能性がある。床面には深さ30cmのP1・P2・P3が検出され、深さ11cmとやや浅いP4と合わせて柱穴の候補としておきたい。

### 3 時期不詳の遺構

#### (1) 焼土坑 (第113・114図、第2表、図版82~84)

全部で16基検出されている。本遺跡内では南斜面から西斜面に分布しており、北及び東斜面には構築されていない。平面プランを大別すると隅丸方形5基、円形6基、略円形3基、不整形2基がある。床面の断面形態は、浅い皿状のものや船底形、矩形などがあって、船底形が最も多く8例を数える。床面よりも壁が赤褐色によく焼け、覆土下層には炭や焼土粒を多量に含む黒褐色土が堆積しているのを通常の形態とする。

平面が円形のものでは4号土坑が直径130cmで最も大きい。53号土坑は径77cmとやや小型だが側壁がよく焼けている。床面中央部には極浅い皿状の窪みがある。38号土坑が径55cmと最も小さい。5号と6号は隅丸方形で遺構間距離は1mと接近している。側壁は赤褐色によく焼け、6号土坑では焼壁上端が土坑内へ一部張り出す。この他に平面プランが類似し、遺構間距離が5m以内の至近距離で造営されたグループとして11号・13号土坑、48号・51号土坑、53号・55号土坑を挙げることができる。また、隅丸方形プランを呈する上坑の主軸は等高線に平行するものではなく、直行あるいは斜行している。

#### (2) その他の土坑 (第111・112・116・118図)

ここで挙げた土坑は、遺構検出段階で表層に炭化物の混入した淡黒褐色土、暗茶褐色土、黒褐色土が認められたものである。出土遺構は26号土坑から石皿22と45号土坑から繩文土器17・18がわずかに出土したにすぎない。各土坑の覆土内には炭化物の混入が一様に認められるが、掘り方や土坑底部の形状が複雑で、各土坑の性格については詳細不明である。風倒木痕の可能性がある。

#### (3) 溝 (第115図、図版86)

1号溝 1号住居跡と2号住居跡の間にありM31区から北西方向に延びる溝である。両端が細く突き出し中央に向かって幅を広げ、最大幅は3.9mである。中央部はくびれて幅約1mを測る。深さは17cm前後と浅く、周辺の地形に添って北西へ傾斜する。遺物の出土はない。

2号溝・3号溝 調査区の北東にあり溝底部にピットを作りたとしてまとめた。溝の幅は40cm~114cmと開きがある。2号溝はほぼ等高線に平行に掘り込まれ、溝底部には暗茶褐色土が堆積する。断面形態はA-A'ラインで矩形に、B-B'ラインではラッパ状のU字形となる。検出面から溝底部までの深さは5cm~28cmで溝底部には溝の主軸に直交するよう深さ約5cmのピットが作られている。溝の底にはやや砂質系の暗黄褐色土が堆積する。3号溝はP37・38区にあり次期調査区内から等高線をやや横切るように派生し、P37区で収束する。溝北端部では幅114cmで検出面から溝底部までの深さは28cmである。溝底部のピットは径70~50cmの橢円や円形で深さ10cm前後のものが多い。溝の主軸に直交することは2号溝と共通する。溝底部やピット内には引き締まった暗灰褐色土が堆積する。

埼玉県東の上遺跡で検出された「波板状凹凸面」を持つ道路遺構と構造的に共通するようである。

## 第4節 出土遺物

### 1 繩文時代の遺物

#### (1) 土器 (第116図、図版89)

出土した上器は細片がほとんどで、全形が把握できるものは少ないので、以下においては文様を基準に便宜的な分類にとどめることとする。

##### 第1類 表裏縄文土器

##### 第2類 羽状縄文土器

##### 第3類 縄文地上に細い粘土紐を貼るもの

##### 第4類 口縁部に斜格子目文をもつもの

##### 第5類 口唇に刻みをもつもの

##### 第6類 縄の細半隆起線を密に引き並べるもの

###### A 口縁上方から垂下せるもの

###### B 口縁上方から右下がりに斜行するもの

###### C 縦位の山形文を施文するもの

##### 第7類 縄文地に半隆起線を引くもの

###### A 縄の半隆起線を等間隔で引き並べるもの

###### B 直曲線で文様を描くもの

###### C 太い半隆起線を引くもの

##### 第8類 底部片

#### 1類 (1)

器壁の表裏に縄文を施すものである。口縁に近いためか器厚が8mmから3mmへと急速に減じ、実測図では明示しえなかつたが、破片上端がやや角度を変え外反して立ち上がる様子がうかがえる。胎土は灰褐色を呈し黄色や乳白色の砂粒を含んでいる。内外面の縄文はほぼ縦位に施されたLRの単筋縄文である。外面の文様は摩滅によりやや不明瞭だが、内面は比較的深く施文される。外面には算の付着が認められる。

#### 2類 (2)

羽状縄文を施す深鉢である。底部を欠いているが、全体の器形をほぼうかがえる良好な資料である。体部はほぼ直線的に立ち上がり口縁付近は小さく外反する。口縁形態はゆるい波状口縁で、口唇上端は丁寧な面取りが行われて平滑である。器厚はほぼ7mmと均一を保ち、胎土には2~5mmの砂粒が含まれる。羽状縄文の施文法は波頂部口唇外間に山形の細い無文帯を残す他は、口縁から体部外側全体にわたり横位の羽状縄文を巡らせる。内面は無文で指頭圧痕の凹凸が隨所に見られる。胴部上方では暗茶褐色を呈するが胴部下方では茶褐色に変じる。下部には若干の煤付着が認められる。

#### 3類 (3~7)

縄文地に細い粘土紐を貼って施文する土器である。3は口縁部に口縁と平行に2本の粘土紐を貼り付け、その上を棒状具による押圧痕を施す。下段の細い粘土紐上はそれが十分ではない。内面上端部には粘土の貼り付けとナデによる段を作りだしている。4は斜縄文を施す口縁部外面上端部とやや下方に口縁と平行に2本の粘土紐を貼り付けで結節浮線文を配する。一方、内面上端部の肥厚部には縄文が施文される。同様に5は結節浮線文が縦方向に垂下し、6は曲線を描く。7は細い粘土紐を網目状に貼り付けている。粘土紐に沿って基部には沈線が見られる。

#### 4類 (8~10)

口縁に細半隆起線を引き、格子目文あるいは斜行する文様帯を持つものである。8・9は共に右下がりの半隆起線文を細かく引いた後で間隔を広くして左下がりに引き、格子目文を作る。10は本類に属する器種の口縁に付く「の」字形の突起である。

#### 5類 (11・12)

口等部に刻み目をもつものである。11は口縁部に横方向と左下がりの平行半隆起線を施文し粗雑な格子目文を作る。11は口等部にはC字形の刻みを持つ。12は波状口縁を有し器形は口縁部がやや外反して立ち上がる。胴部には撚糸文が施される。

#### 6類

細半隆起線を密に施文するものを一括した。施文は口縁部から胴部全体に及び文様の方向や形によって3タイプに分類できる。

##### 6A (13~20・22)

細半隆起線を口縁上方から胴部へと垂下させるものである。13・14は同一個体で口縁上端に斜格子文を施し隆起帶で加飾する幅狭の文様帯を有する。15~19は深鉢の頸部付近にあたり、横方向の平行細半隆起線で口縁部と胴部の文様を区切る。15と16、17と18は同一個体である。17・18の外面には煤の付着が認められる。20は胴部で22は底部である。

##### 6B (13)

細隆起線文を口縁上方から右下がりに斜行して引くものである。

##### 6C (23・24)

縦位の山形波状文を施文するものである。23は4条の平行半隆起線文で24は隆起帶で口縁部の文様を区切る。

#### 7類

縦文地に半隆起線文を施文するものである。文様により3タイプに分類できる。

##### 7A (25・26)

直曲線が施文されるものである。25は縦位の直線と山形文が施文される。26は2本の曲線が交差してY字形となっている。

##### 7B (27)

半隆起線を等間隔に引くものである。縦文地に半載竹管によって縦方向に引かれた平行半隆起線の間隔はやや広めである。胎土に砂粒を多く含む。外面は黒褐色を呈し、煤が付着している。弱いキャリバー形か外形する深鉢の頸部である。

##### 7C (28)

太い半隆起線を引くもので、深鉢の頸部にあたる。線幅は1.5cmを測り、右から左へ半サイ竹管を力強く押し引いている。胴部は斜縦文を転がしている。外面の色調は橙色を呈し焼成は良好で堅く焼きしまっている。

#### 8類 (29)

底部片を取り上げた。深鉢の底部で底径10.3cmを測る。底部外面は軽いナデ調整をしているが、中央部には指頭圧痕が残る。内面及び胴部立ち上がり外面は凹凸が目立ち、全体に作りは粗雑である。胎土には1~5mmの砂粒を多く含む。

以上、文様を主体に分類したが、以下編年的位置付けについて述べたい。

1類の表裏縦文土器は早創期の長野県小佐原遺跡、三枚原遺跡、朽原岩蔭遺跡で見られるほか、県内では早期末から前期初頭頃の標識遺跡である柴山湖底貝塚遺跡、甲小寺遺跡から出土している。また昨年発掘調査された小松市六橋遺跡からも出土している。(調査担当 本田秀生氏より教示) 今回出土した土器は小片なため編年的位置づけは不詳とせざるを得ない。1号跡住居跡覆土から川土としているので以下2類の説明で述べるような該期に相当するものか、一方では当遺跡から南方へ50m離れた庄が屋敷B遺跡で出土した縦文草創期の矢柄研磨器との関連も無視できず意見の分かれるところである。2類の横位羽状縦文土器は1号住居跡1号土坑内より出土して

いることから、1号住居跡の標識資料と言える。特徴としては口縁が小さく外反することと波状口縁頂部の狭い無文帯を作ることが挙げられる。波頂部の無文帯は口縁の外反角度や口唇部の面取りの方法など詳細な点で違いはあるが極楽寺遺跡、佐波遺跡のそれらと類似する。(ただしこれら二遺跡の出土遺物は破片であるため口縁以下の文様が斜繩文か羽状繩文か判然としない。)甲・小寺遺跡でも口縁の外反角度が弱いが同形態の羽状繩文土器が出土している。このようなことから、2類の土器はある程度前後の時間差が考えられるものの前期初頭を中心とした羽状繩文土器群に含まれるであろう。3類は細い粘土紐を添付し結節浮繩文を施す土器で、福浦上層式に相当する。4類から8類は新保式の土器群である。4類の斜格子文は「口辺に斜行する半隆起の平行を引き、次に反対方向に斜線を加えて格子目文を作るもの」(高橋1952)に該当する。細半隆起線文を縱位に密に引く第6類の土器は、長野県大洞遺跡第4群土器(古)に酷似しており、中期初頭の梨久保起併行に位置づけられている。また7類Aの繩文地に幾何学的真曲線を引く25・26も同遺跡に認められる。7類Bの28の頸部片は徳前C遺跡に併行する。7類Cの太い半隆起線文は新しい相模が認められるが、今回は文様による便宜的な分類のためにとりあえずこの類に含めた。8類の底部は6類Aの底部である。

#### (2) 石器 (第117~120図、第1表、図版90)

石器の出土総数は35点を数える。大半が1号住居跡及び該期の土坑内覆土から出土している。石器の内訳は磨石類、石皿類がその他の器種に比べて量が多く、磨石12点、石皿14点を数える。剝片石器では石鏃2点、石匙2点、小剣離痕のある剝片1点をあげたが、この他に調査区内からは黒色頁岩の剝片が多数出土している。石英の剝片は2点出土したが製品は1点のみであった。

##### 石鏃 (1・2)

わずかに2点出土している。1は平面形が正三角形を呈する石英の石鏃である。抉りが最大長の1/4程度まで調整されている。小型ではあるが側縁部及び抉りに両面調整が施された丁寧な作りの完成品である。2は黒色頁岩製で平面形が二等辺三角形で、1と同様両面調整により側縁部と抉りが作られている。左側縁が直線で、右側縁がやや外湾する。

##### 石匙 (3・4)

黒色頁岩製が2点出土している。3はつまみが刃部に対して上に付く。両側縁部にわずかかな調整痕が見られる。4はつまみが刃部に対して斜上に付く石匙である。3、4いずれも片面に主要剝離面を生かした完成品である。

##### 剝片 (5)

多数出土した黒色頁岩製の剝片のうち小剣離痕のある剝片を取り上げた。片面には自然面を大きく残し、一側縁部にはほぼ大きさが一定した連続する小剣離痕が認められる。

##### 石鏃 (6・7)

打欠石鏃が2点出土している。偏平な梢円あるいは円錐の長軸両端部を打欠している。

##### 打製石斧 (8・9)

8はやや軟質の流紋岩で全体に磨耗している。刃部付近が基部に比べて広がった菱形をしている。側縁加工は少なめで片面に自然面を大きく残している。小形品ですんぐりした作りである。9は流紋岩で短冊形を呈する。刃部が一部欠損している。

##### 磨製石斧 (10)

1点出土している。側面に明確な面が取られているのは片面だけ丸みのある作りをしている。平面形が楔形を呈し、頭部が尖り気味となる。胸部の断面は卵形となる。頭部には敲打痕が認められる。

##### 磨石類 (11~13・18・19)

11点出土している。共通点は側縁のいずれかの部位に敲打痕を伴うことである。磨石と蔽石の区別は判然とはしがたく磨石類として一括した。

敲打痕が付く部位により分類でき、以下にその特徴を述べたい。11・12は側面全周に弱い敲打痕が觀察される

ものである。11は片面の側縁近くに径約1.3cm程の円錐形をした剝離痕が2箇所認められる。13・14は両端に敲打痕が観察されるものである。13は磨痕が片面で弱いが、上端中央が敲打により局部的に凹面化している。14は薄い小判形を呈し、両端には敲打作業による摩耗で小さな平坦面が作られている。15は片面が弱い敲打痕で覆われるものである。小さな球形をしている。16・17・18は一側縁に敲打痕が確認されるものである。18には局部的に大きな剝離痕が認められる。19は側縁両端に敲打痕が確認されるものである。片面がよく磨かれている。21は両端部及び片面に敲打痕が確認されるものである。片面の敲打痕は図上には表現されていないが、中央付近で直径4cmの円形内に確認される。また、両側縁は磨石としての使用頻度が高く、磨痕が顕著で断面形態が方形を呈する。

#### 石皿（第118～120図）

14点出土している。その内12点は1号住居跡覆土やピットから出土している。33を除き、一部欠損または完形品で残りはよい。概して磨き具合は弱く磨痕内に自然面を伴うものが多く、磨面中央部が皿状に窪むものは認められない。また、すべての石皿の側縁に敲打痕が確認されている。25・26は側面に敲打痕が確認され、磨石類の大型品とも見えるであろうか。24・27・28は幅に対する厚さの比率が高く、ずんぐりしている。その他の製品は厚さの比率が低く板状を呈する。磨痕は両面と片面に持つものとがあるが、敲打作業面の範囲は28が端部に29は片側面に限定されるもの以外は敲打痕が側面全周を巡る。32・33は欠損品だが残存側面部に敲打痕が認められる。32・33・34には最大幅が2～4cmの剝離痕が盤面に認められ、荒れた状況を呈している。31は表面上端と裏面下端にそれぞれ最大幅5cmと7cmの剝離痕が認められ、かなり力強い敲打作業がおこなわれている。

## 2 古代の遺物

### (1)須恵器（第121図、図版90）

1は無台环身で体部と底部の境は明瞭ではなく、やや丸みをもった底部から内湾ぎみに体部へ立ち上がるようである。焼性は堅緻で灰色を呈する。底部の器肉は厚手で外面には回転ヘラ切りの後軽いナデを施し、「×」のヘラ記号が記されている。内面はロクロナデの痕が明瞭で、胎土には白色の柔らかい微砂粒が含まれており、中には5mm大のものが混入する。これは、辰口産の製品に共通して認められる特色と言える。丸みを持った器形が古相を示すようだが、出土遺物が1点と限られ、しかも表採遺物であることから具体的な時期判断の決め手を欠く。

### (2)土師器（第121図、図版90）

出土した遺物は煮炊具の長甌に限られる。2・3は須恵器系の作りの長甌底部で、外面には平行線文の叩き目、内面には同心円文の当て其痕を残す。3の内面下半には窓ハケメが認められる。4は口径20cmの長甌である。器形は胴部がやや膨らみ、頸部がくの字に屈曲する。口縁端部は短く内屈ぎみに上へ立ち上がり、内面には明瞭な段が残る。調整は口縁が内外面ともにナデが施され、胴部外面はカキ目が認められる。内面にはナデ消されたカキ目がわずかに見え隠れする。4の口縁端部の形態はこれより前段回によく見られるような口縁の延長線上端部を丸くおさめる形態と逆くの字状に立ち上がる後出例の中間に相当すると考えられる。口縁端部のつまみあげ技法については松任三浦遺跡中層、上岸尾遺跡、辰口西部遺跡群に類似例が見られる。古岡編年Ⅱ～Ⅲ（古岡1983）、田嶋編年Ⅱ（古）～Ⅳ（田嶋1988）に相当し、8世紀後半から9世紀前半とある程度の時期幅を想定したい。5は丸底長甌の胴部下半である。胴部中ほどにはカキ目の後ケズリが施される。底部外面粗雑なナデとともに凹凸が著しく、二次加熱により赤橙色によく焼けていて、器表の剥落が認められる。

## 第5節まとめ

今回の調査から繩文時代と古代の遺構・遺物が検出された。主な遺構は堅穴住居跡がそれぞれ1棟づつで出土遺物も僅少なため、遺跡の性格に言及することは不可能である。しかし、南加賀では繩文時代前期初頭頃に想定される堅穴住居跡の調査例が少ない中にあって、辰口町では旭台遺跡に統いて2例目となる。佐波式期の遺跡分布の特色は、大半が能登半島の内浦側に集中し臨海形立地をとる点にあるのに比較して、この2遺跡は海岸から

10km内陸に入った標高100m前後の能美丘陵上で集落形態をとらずに営まれていて、しかも尾根先端からある程度の距離をおいている。加えて磨石・石皿類の出土が卓越することが特徴的である。また、古代の堅穴住居跡が丘陵上で築造された例は辰口町においては初めてである。当時8世紀後半から9世紀前半頃には辰口町西部地域で盛んに開墾・開田が行われていた東大寺領鷺生庄との対比が象徴的である。

これらの事例から導き出される詳細な考察と結果については、次年度以降に引き続き行われる庄が屋敷遺跡群と周辺丘陵内の発掘調査結果により今後さらに肉付けされてゆくと思われる所以、それに期待してここでは既往の報告のみにとどめておきたい。

なお本稿の執筆にあたり西野秀和、本田秀生、松山和彦、木立雅朗各氏より多大な御教示を得た。記して感謝の意を表したい。

#### (参考文献)

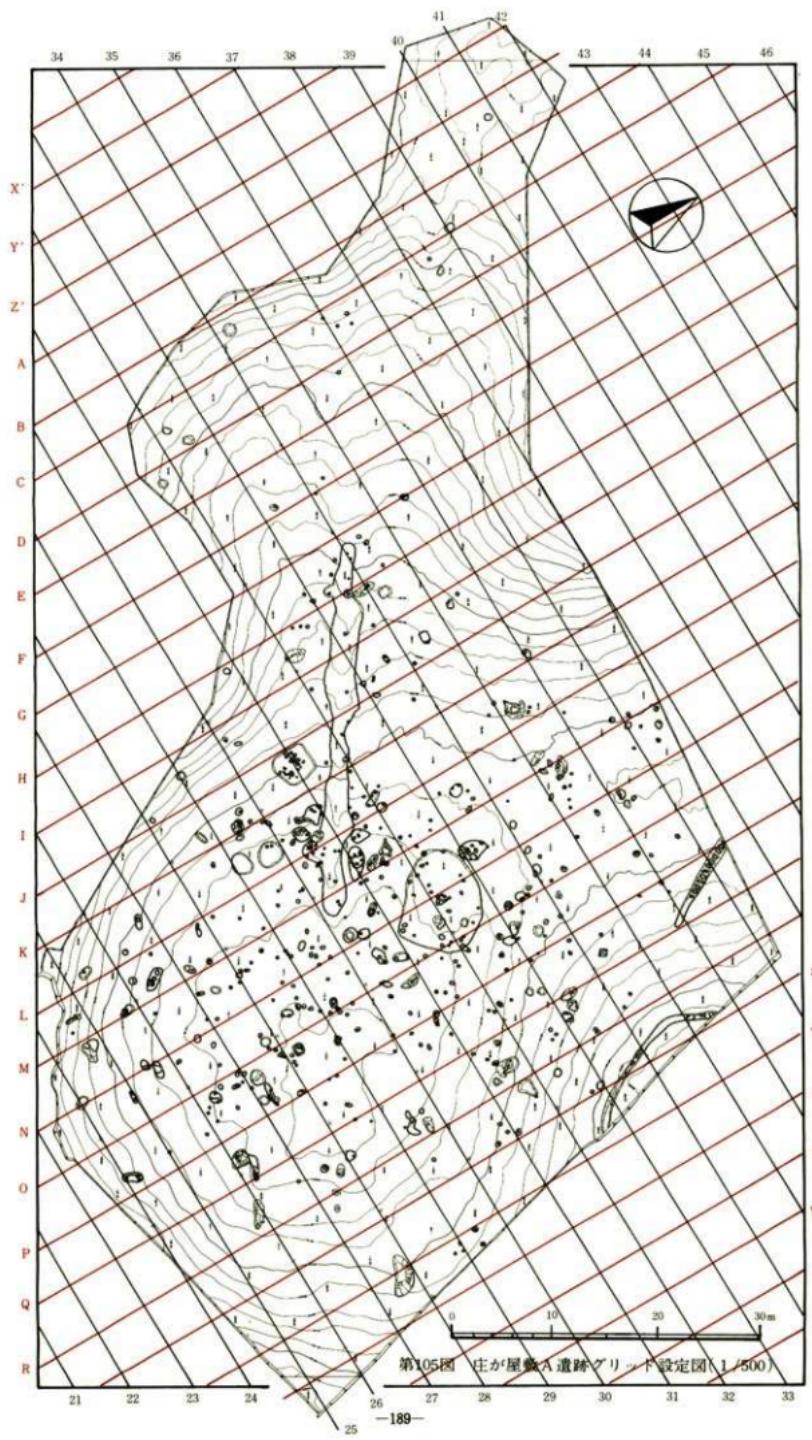
- 沼田啓太郎・上野与一・小村茂他（1973年）「柴山高庭文貝塚の調査」小松市立博物館
- 四柳嘉章・藤原雄他（1972年）「甲・小寺遺跡」石川県穴水町文化財保護専門委員会
- 浜岡賢太郎・四柳嘉章他（1983年）「吉田野寺遺跡」七尾鹿島広域圏事務組合
- 富山県教育委員会（1965年）「極楽寺遺跡発掘調査報告書」
- 中島宏（1981年）「表裏縄文土器の研究」『埼玉考古学論集』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 四柳嘉章・越坂一也・小島俊彰他（1986年）「石川県能都町真鍋道跡」能都町教育委員会・真鍋遺跡発掘調査団
- 市沢英利他（1987年）「第4節大洞遺跡」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書1』日本道路公团名古屋建設局・長野県教育委員会
- 神村透他（1987年）「第2節下り林遺跡」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書1』（財）長野県埋蔵文化財センター
- 湯尻修平・米沢義光（1986年）「鹿島町徳前C遺跡調査報告（Ⅰ・Ⅱ）」石川県立埋蔵文化財センター
- 古岡康暢（1983年）「東大寺領横江庄遺跡」松任市教育委員会・石川考古学研究会
- 北野博司（1988年）「辰口町西部遺跡群！」石川県立埋蔵文化財センター
- 望月精司・福島正実他（1988年）「シンボジウム北陸の古代土器研究の現状と課題資料編」
- 飯田充晴（1991年）「埼玉県東の上遺跡の道路遺構」『季刊考古学第36号』雄山閣
- 西野秀和他（1983年）「鹿島町徳前C遺跡（N）」石川県立埋蔵文化財センター
- 四柳嘉章（1982年）「第2章原始時代の遺跡・遺物」『能都町史第三卷－歴史編』能都町
- 小島俊彰（1977年）「珠州郡内浦町松波新保遺跡発掘資料再見」『石川考古学研究会誌第20号』石川考古学研究会
- 加藤三千雄（1987年）「高松町・押水町入会東間坂手山遺跡出土土器の資料再紹介」『石川考古学研究会誌第30号』石川考古学研究会
- 小島俊彰（1985年）「朝日貝塚の朝日下層式土器再見」『人鏡第9号』富山考古学会

第8表 石器細目表

番号	器種	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	備考
1	石鎌	15号土坑	1.3	1.3	0.25	0.23	石英	両面調整
2	"	"	2.5	1.7	0.4	1.48	黒色頁岩	"
3	石匙	N32区	5.8	2.5	0.9	18.2	"	
4	"	M38区	4.2	3.2	0.9	14.5	"	
5	剝片	1号住居跡	8.5	2.5	1.4	21.4	"	小剝離痕
6	石鍤	77号土坑	3.5	3.8	1.5	22	流紋岩	
7	"	I35区	5.1	4.5	2.2	60	"	
8	打製石斧	87号土坑	11.5	5.3	3.0	174	"	
9	"	L27区	10.8	5.6	1.6	120	"	
10	磨製石斧	1号住居跡	10.5	4.2	3.0	198	安山岩	
11	磨石類	表採	7.5	6.5	4.2	318	中粒砂岩	片面磨痕、側面全周に弱い敲打
12	"	85号土坑	8.2	7.5	3.8	326	粗粒砂岩	両面磨痕、"
13	"	1号住居跡	8.0	8.4	4.3	435	"	片面磨痕、両端敲打
14	"	"	8.1	5.5	2.9	180	中粒砂岩	両面磨痕、"
15	"	"	6.3	6.0	4.7	242	"	片面磨面、片面敲打
16	"	"	8.5	6.4	4.2	337	"	両面磨痕、一側面敲打
17	"	"	9.6	7.7	3.7	403	"	"、"
18	"	"	10.3	8.5	4.3	519	"	片面磨痕、"
19	"	62号土坑	9.4	7.9	4.0	428	"	両面磨痕、両側端敲打
20	磨石類(凹凸)	表採	9.2	5.9	4.1	317	中粒砂岩	"
21	"	1号住居跡	12.1	6.8	4.7	713	粗粒砂岩	両側面磨痕、両端・片面敲打
22	石皿	26号土坑	16.9	17.3	43.5	2,041	中粒砂岩	両面磨痕、側面全周敲打
23	"	1号住居跡	24.8	18.8	6.4	4,493	粗粒砂岩	"、"
24	"	"	26.7	22.1	11.3	9,069	"	"、"
25	"	"	14.8	13.3	4.2	1,254	流紋岩	片面磨痕、"
26	"	"	18.3	14.1	6.0	2,291	粗粒砂岩	両面磨痕、"
27	"	"	23.3	17.0	8.3	4,511	中粒砂岩	両面磨痕、"
28	"	"	23.7	15.3	7.2	4,099	粗粒砂岩	"、端部敲打
29	"	"	22.5	18.8	5.3	3,240	流紋岩	"、側面敲打
30	"	"	22.2	25.4	6.8	5,878	中粒角礫岩	"、側面全周敲打
31	"	"	25.2	22.0	7.5	4,770	粗粒砂岩	"、両端剝離
32	"	"	23.0	25.2	6.0	5,066	流紋岩	片面磨痕、側面敲打
33	"	"	10.2	21.2	6.1	1,627	流紋岩	両面磨痕、残欠側端部敲打
34	"	"	30.4	26.8	8.0	9,443	細粒礫岩	"、側面全周敲打
35	"	87号土坑	24.2	21.2	4.7	2,874	"	"、"

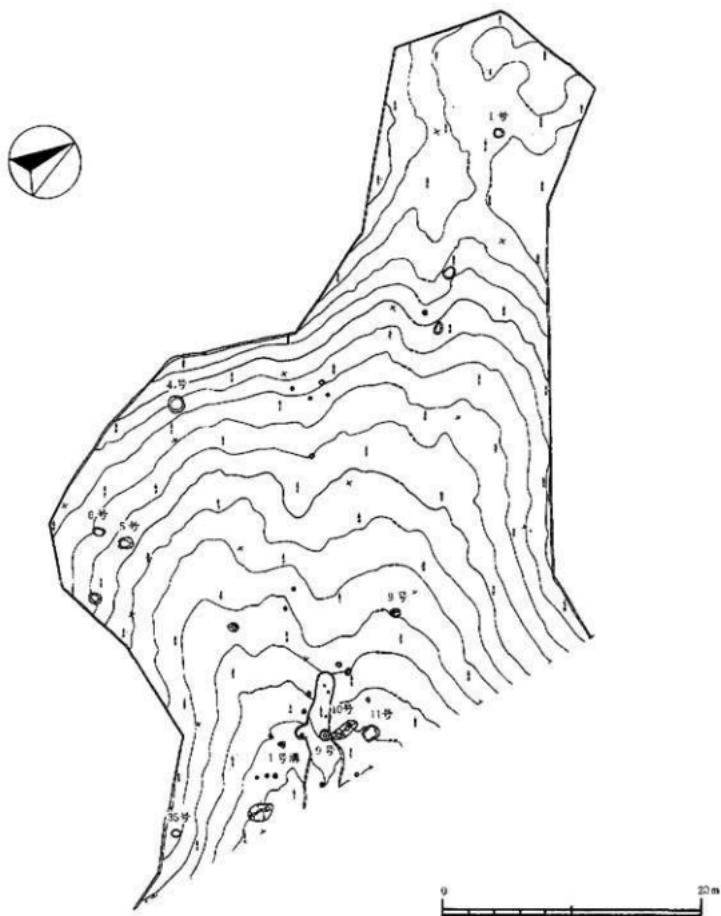
第9表 焼土坑細目表

遺構番号	位置 (区)	平面プラン	規模 (cm)	断面形態	深さ (cm)	備考
1号土坑	A41	略円形	長80、短65	船底形	17	焼壁ほぼ全周
4号土坑	B35	円形	径130	"	37	焼壁半周
5号土坑	C33	隅丸方形	100×50	"	20	焼壁全周、床面一部焼土
6号土坑	"	"	90×40	皿状	14	焼壁全周
9号土坑	G36	不整形	長80、短60	"	10	焼壁一部
11号土坑	H35	隅丸方形	110×80	船底形	46	焼壁全周、床面一部焼土
12号土坑	I36	不整形	長85、短67	皿状	6	焼壁なし、床面一部焼土
13号土坑	I35	隅丸方形	105×75	矩形	23	焼壁ほぼ全周、床面一部焼土
35号土坑	H31	円形	径70	"	12	焼壁一部
36号土坑	I30	略円	長83、短80	船底形	21	焼壁1/3
38号土坑	K27	円形	径55	"	13	焼壁一部
48号土坑	O28	"	径100	皿状	13	焼壁1/3、床面一部焼土
51号土坑	N28	"	径96	船底形	27	焼壁ほぼ全周
53号土坑	Q28	"	径77	皿状	13	焼壁全周、床面一部焼土
55号土坑	Q29	略円形	長115、短95	矩形	10	焼壁1/4、床面一部焼土
71号土坑	N25	隅丸方形	120×70	船底形	36	焼壁半周

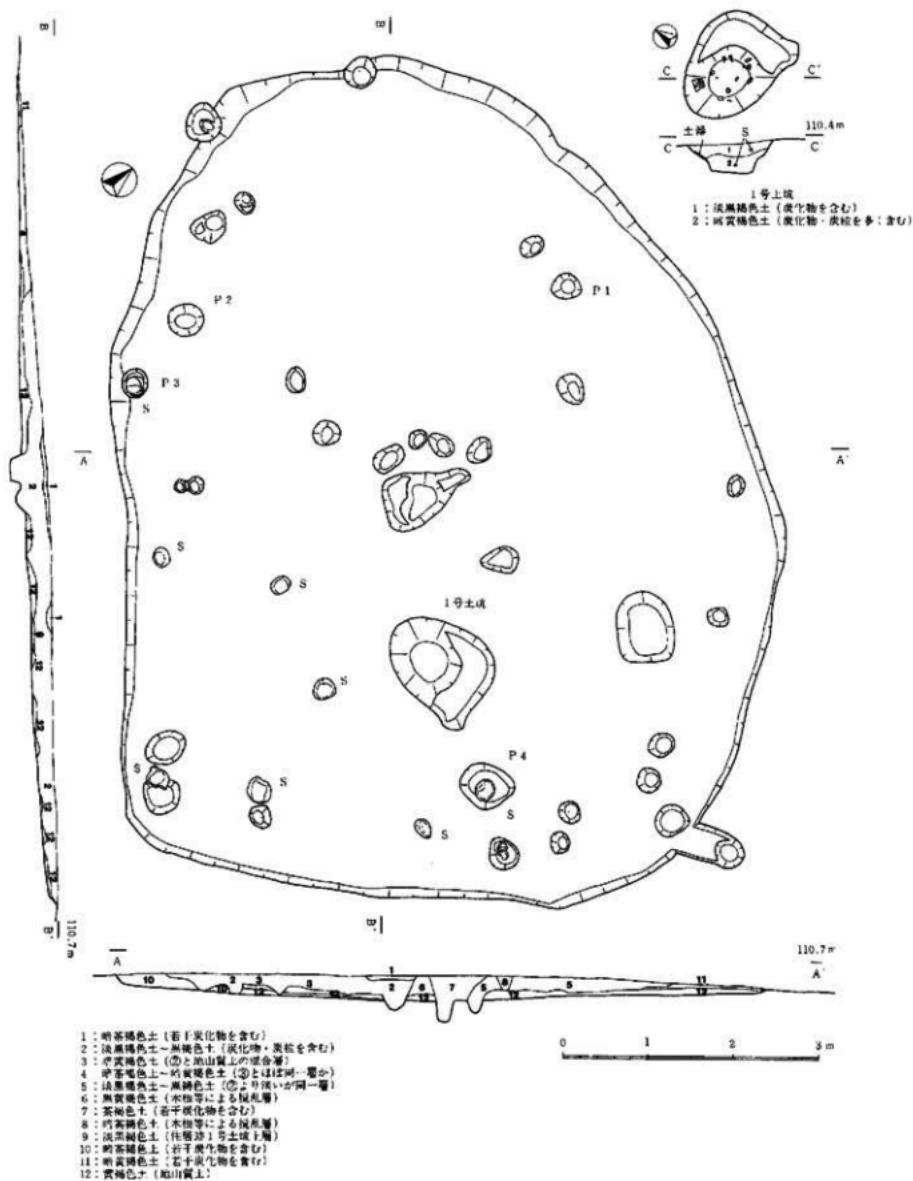




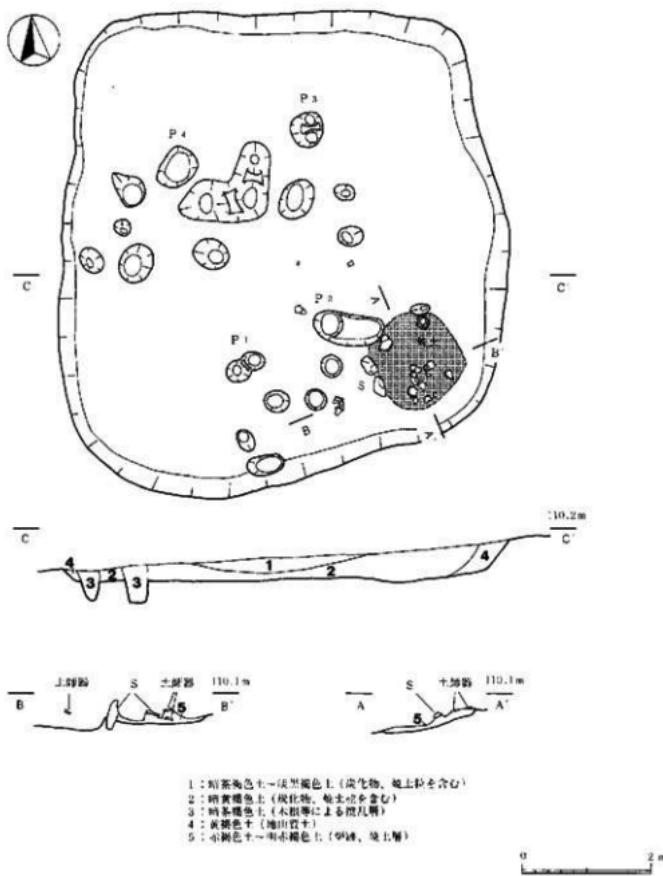
第106図 東地区遺構配置図（土坑は番号を表記）(1/400)



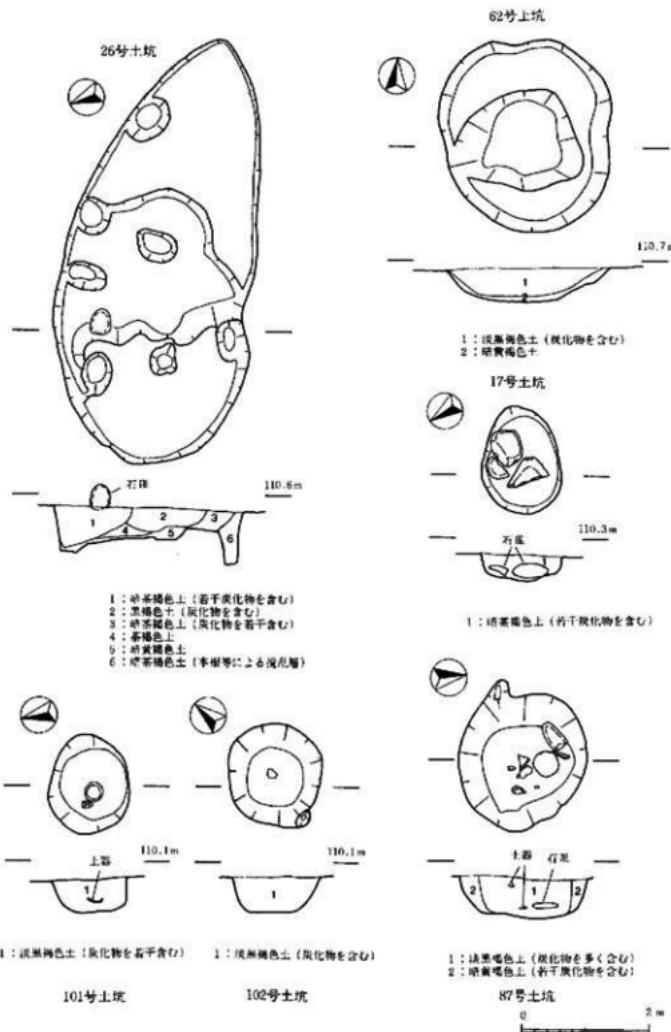
第107図 西地区遺構配置図（土坑は号数を表記）(1 / 400)



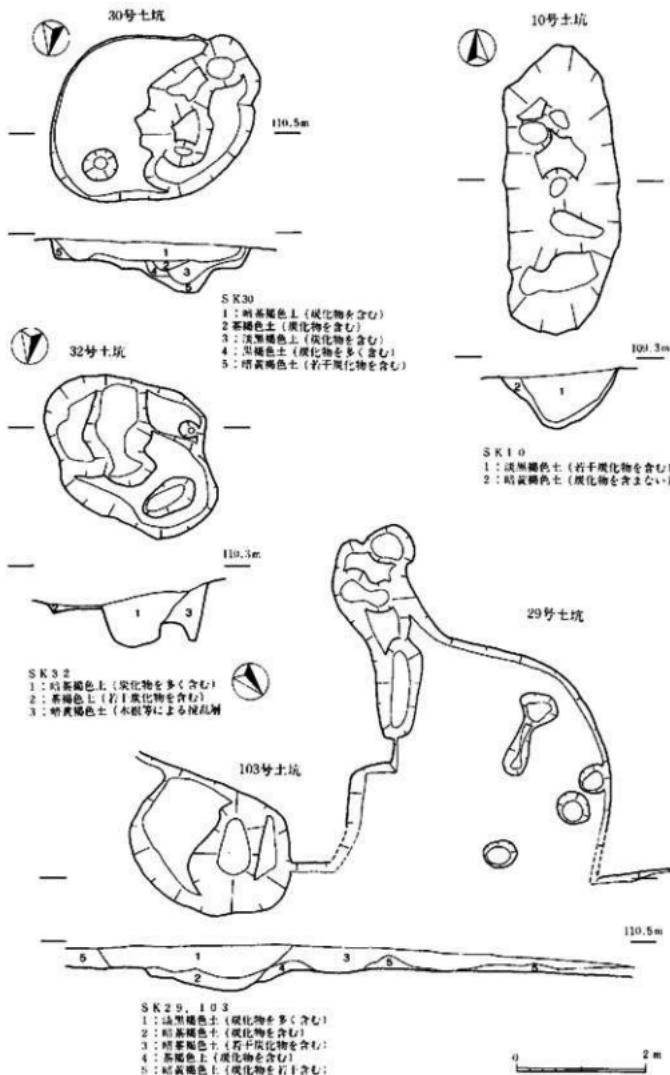
第108図 1号住居跡実測図 (1/60)



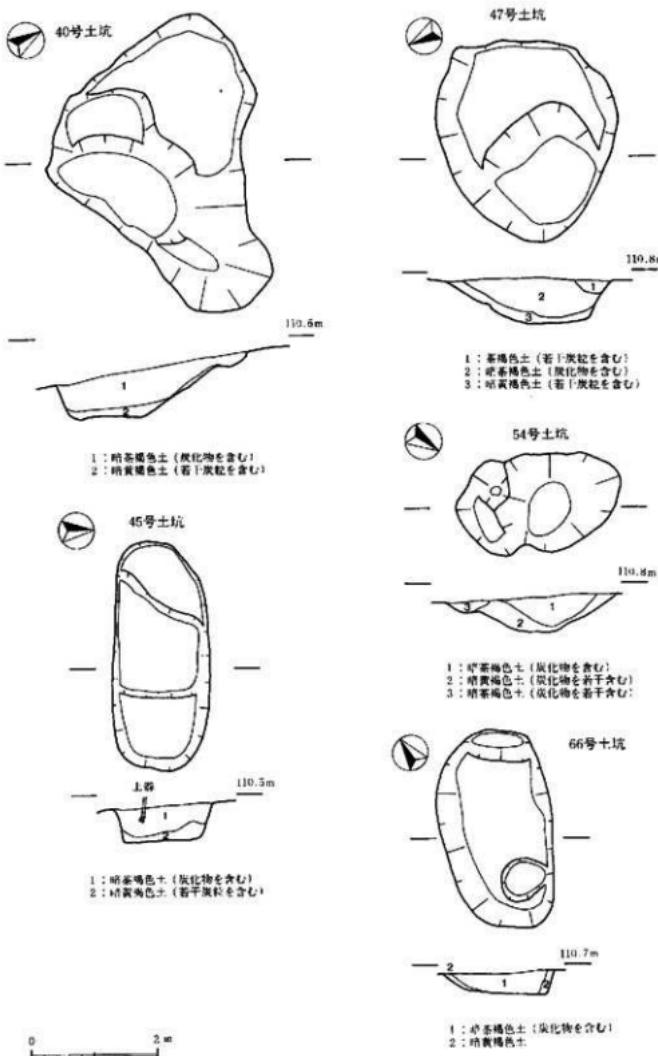
第109図 2号住居跡実測図 (1/40)



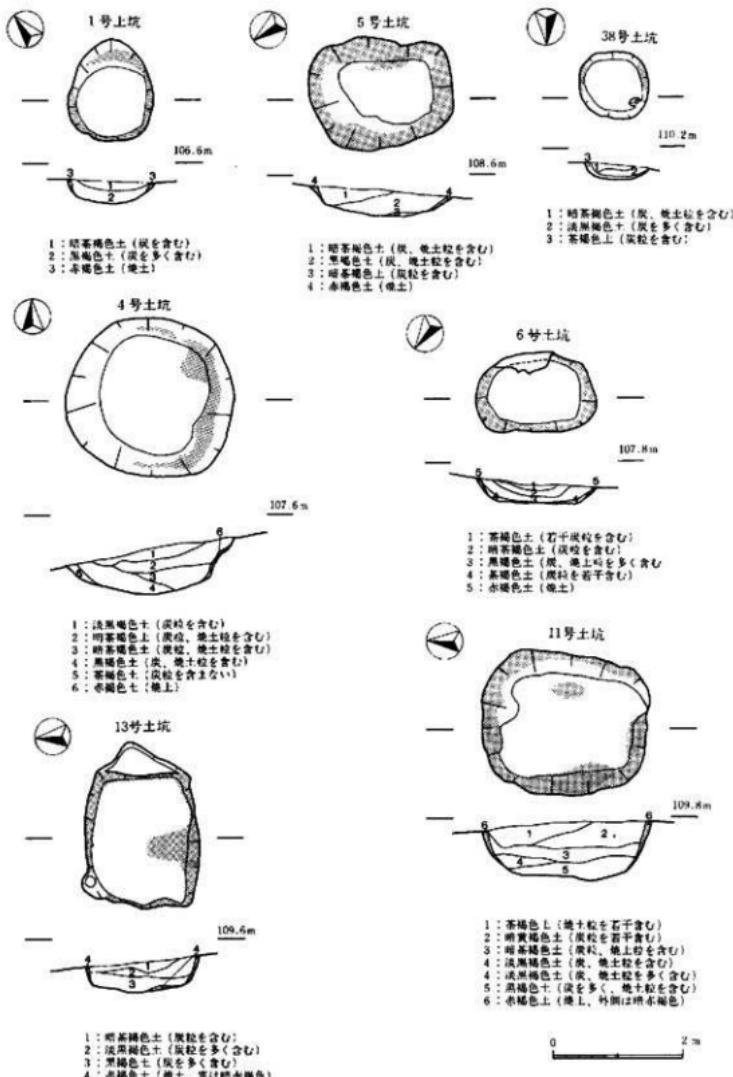
第110図 土坑実測図 (1 / 40)



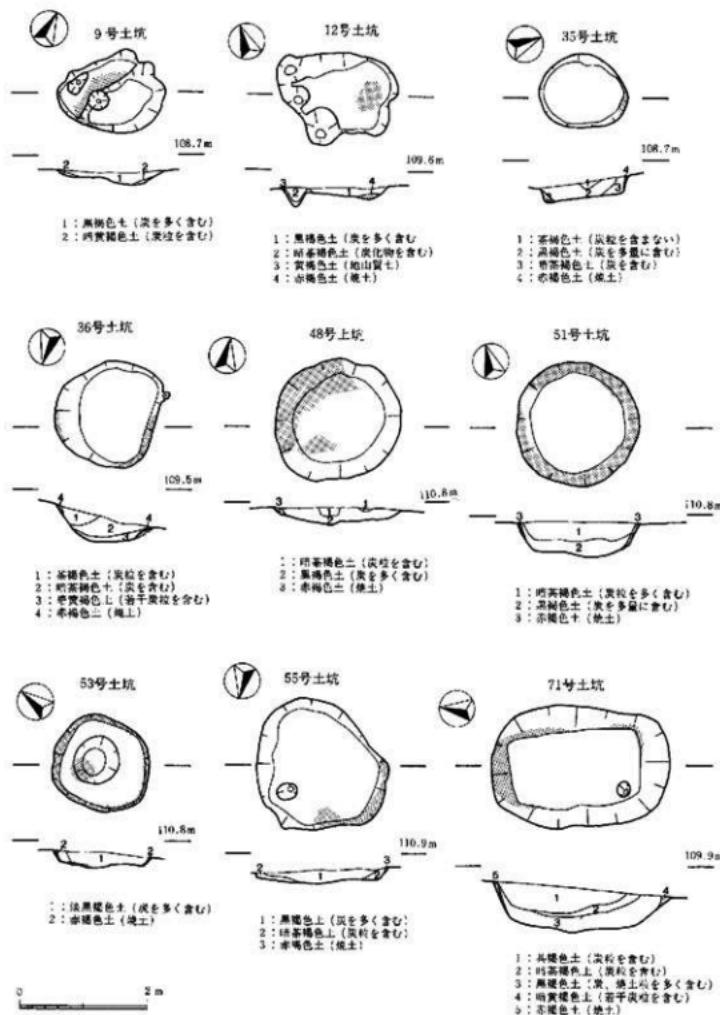
第111図 土坑実測図 (1/40)



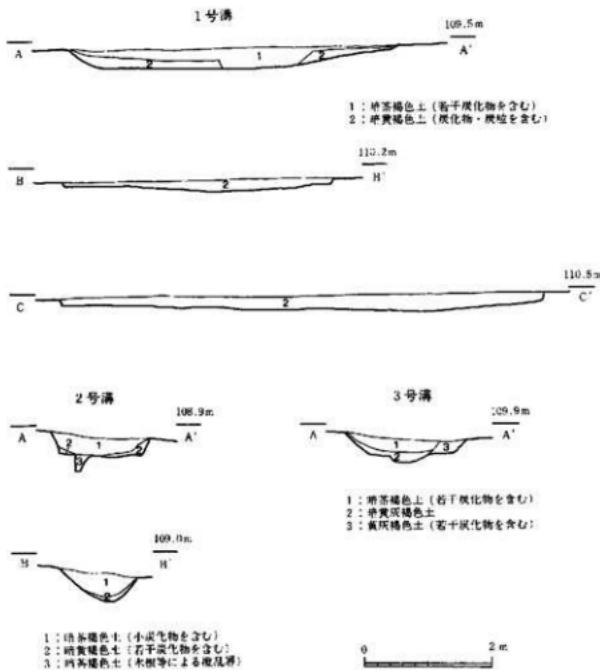
第112図 土坑実測図 (1/40)



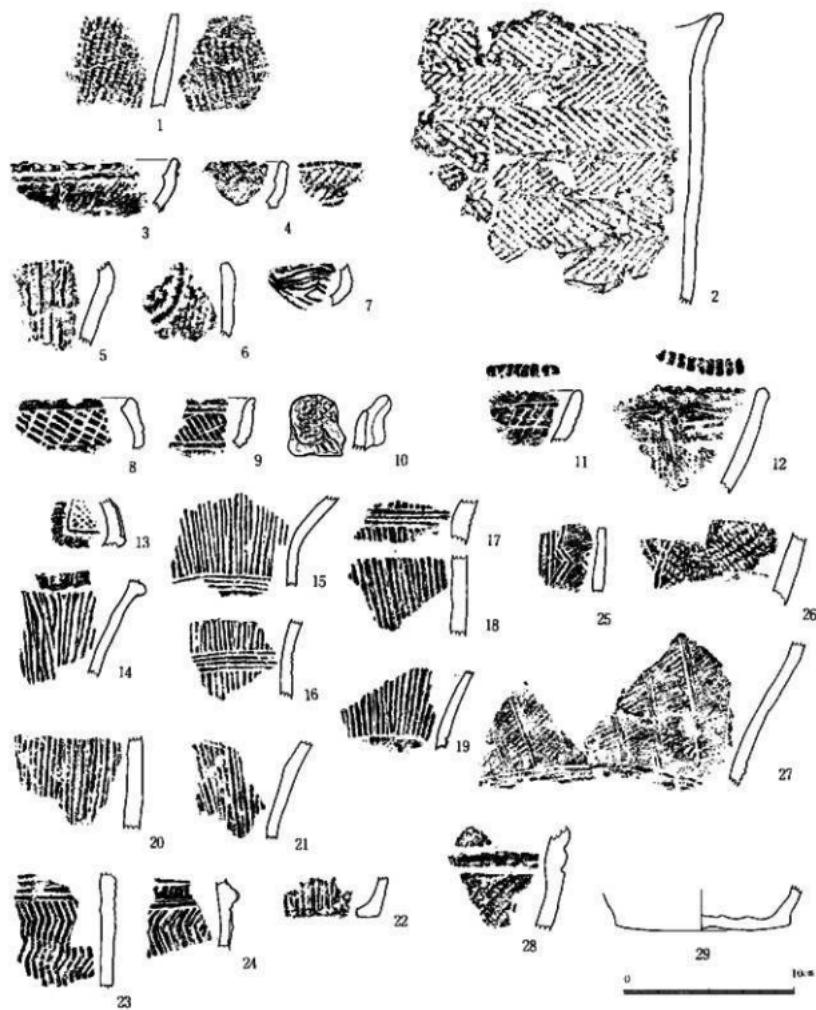
第113図 墓土坑実測図 (1/40)



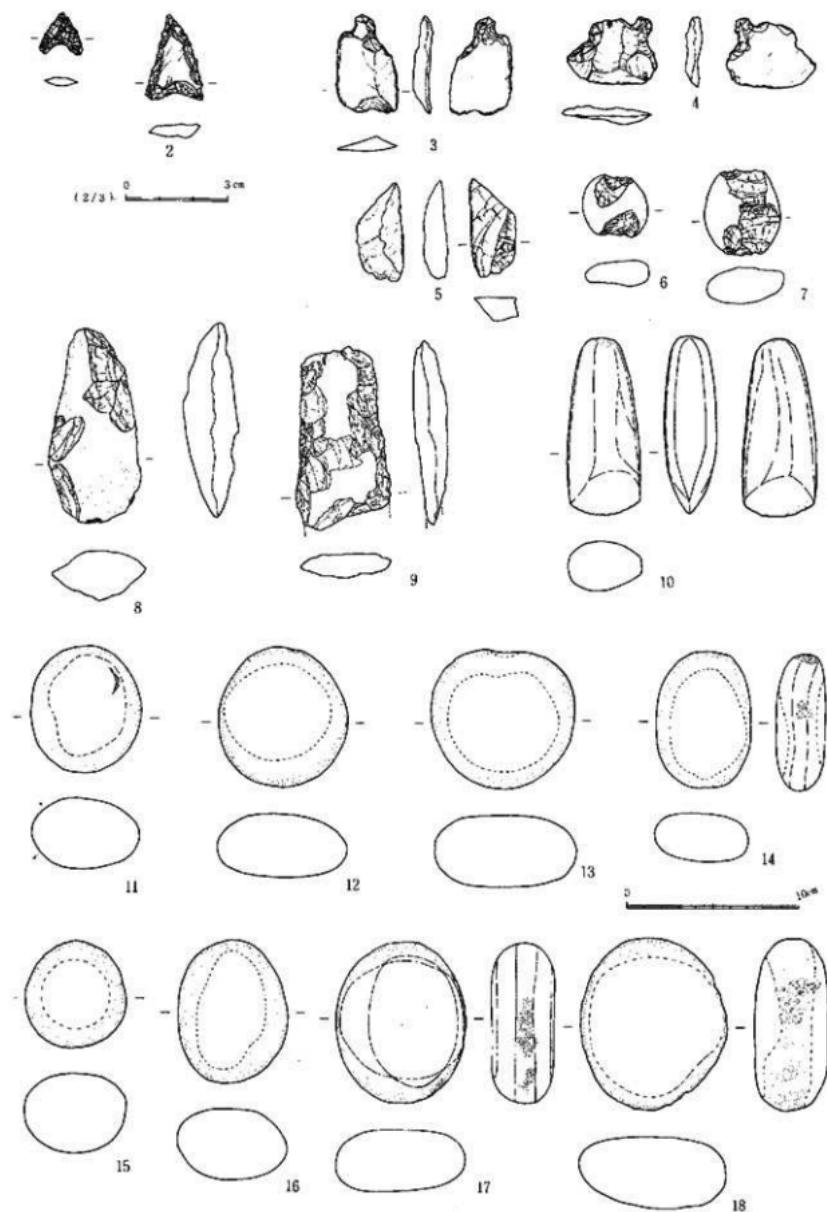
第114図 墓土坑実測図 (1/40)



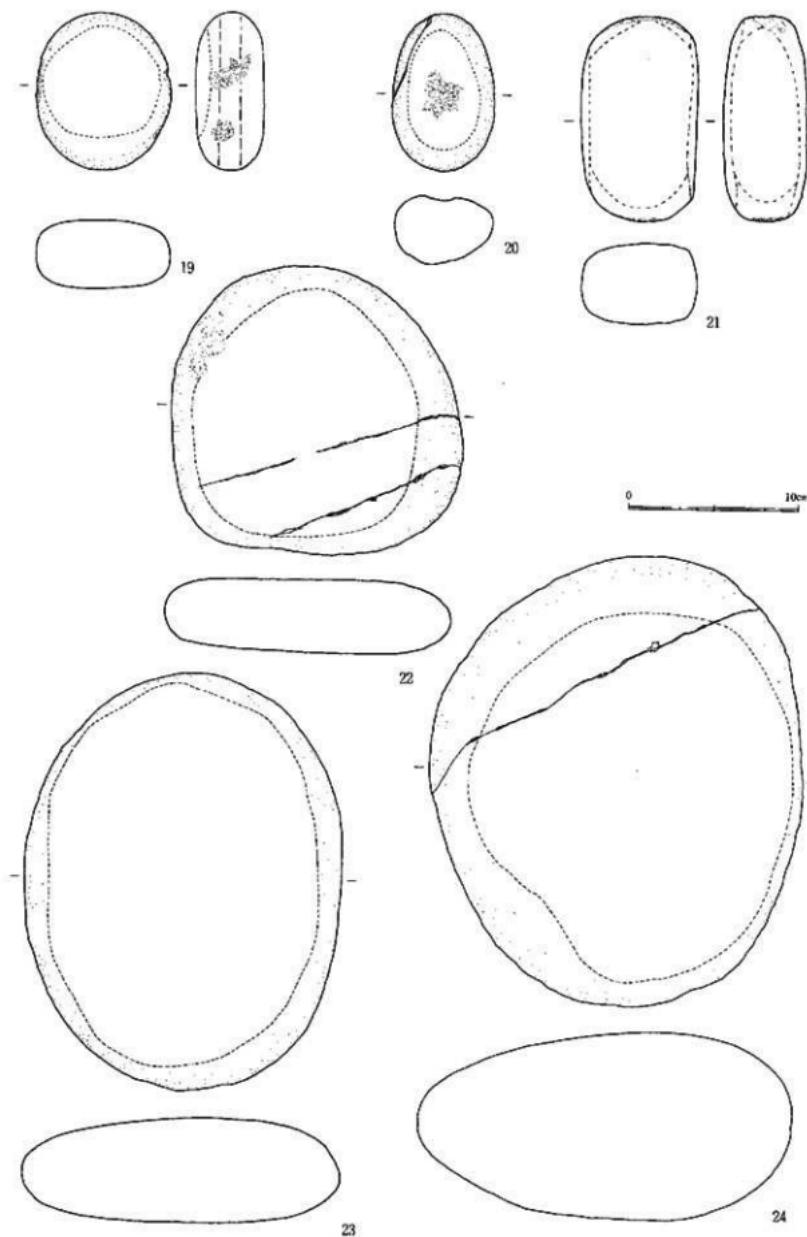
第115図 溝土層断面図 (1/40)



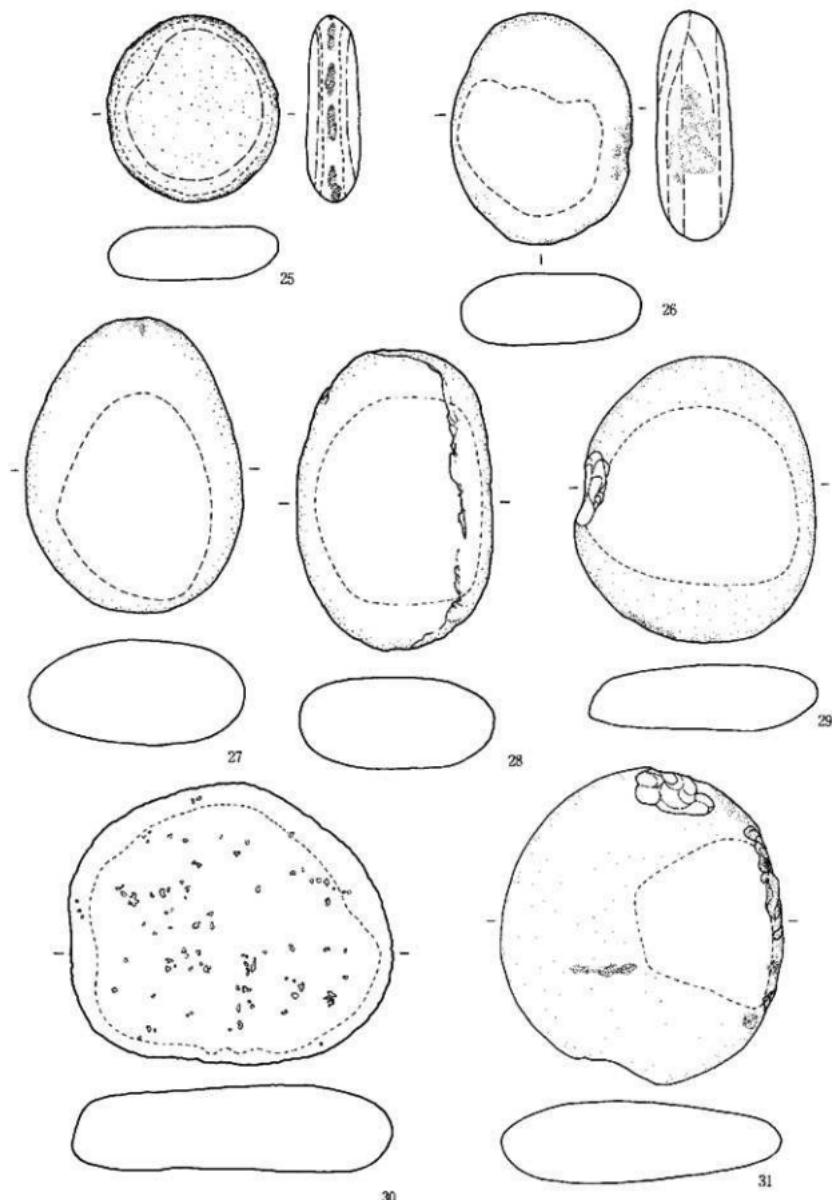
第116図 縄文時代の出土遺物（土器）(1 / 3)



第117図 縄文時代の出土遺物(石器)(2/3, 1/3)

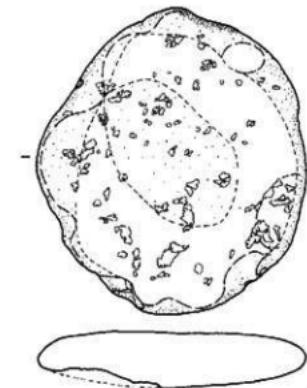
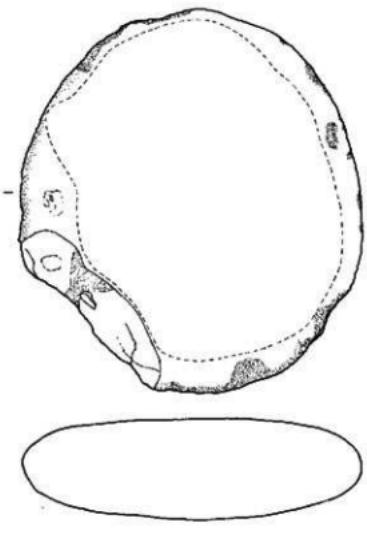
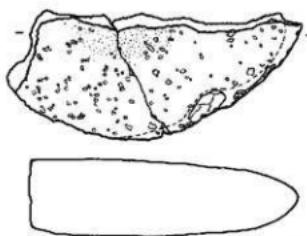
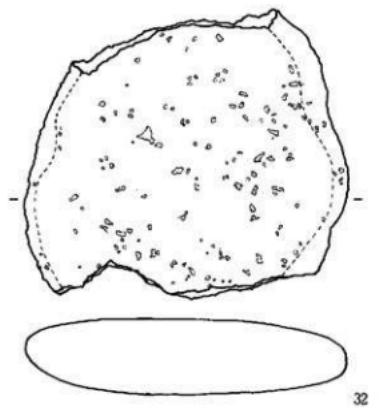


第118図 縄文時代の出土遺物（石器）(1/3)



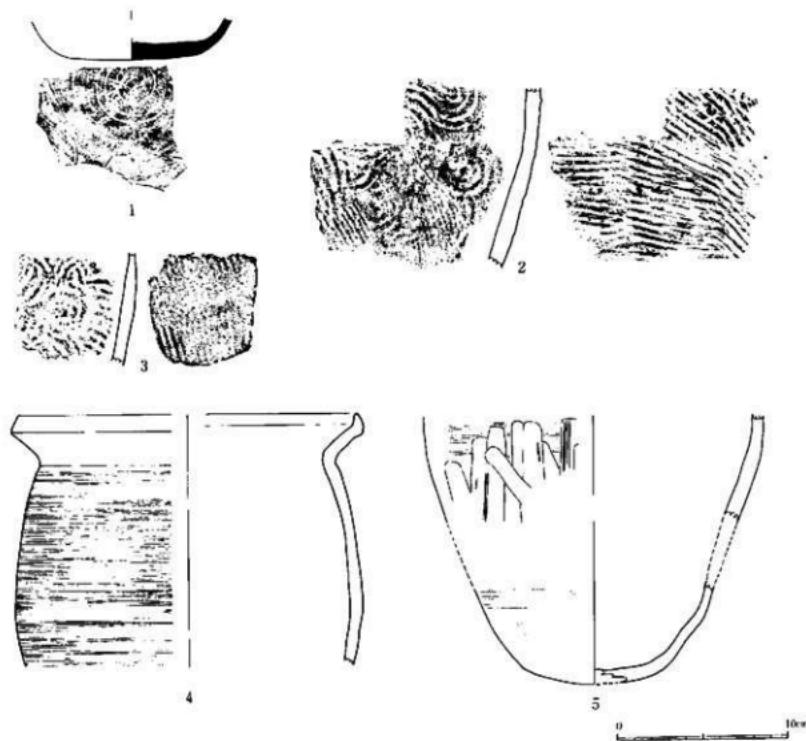
第119図 縄文時代の出土遺物（石器）(1/4)

0 10mm



0 10mm

第120図 縄文時代の出土遺物（石器）(1/4)



第121図 古代の出土遺物（土器）(1/3)



## 第7章 炭 窯 跡

### 1 屋敷谷1号炭窯（第123図）

オオハゲA遺跡の石組遺構のある尾根筋から、南に斜面をおりた標高107mの谷間にある。窯体の主軸は南西から北東にあり、窓口は北東に向いている。調査前の炭窯は、窯体部分が窪地となって明瞭に識別できる状態であった。窯体は窓口がすぼまつた隅丸方形を呈し、全長が3.6m、奥壁の幅は2.15m・窓口附近の幅は1m、燃焼室の長さ2.65m・窓口の幅は75cmを測る。窯体の底面は標高106.8mで、ほぼ水平である。窓口附近には角張った石が多く堆積しており、窓口の側壁が石組であった事を示唆している。煙突は、奥壁中央にU字形の溝を縦に掘り、窯体側を河原石で塞いで構築している。窯体内の覆土から、トラベルウォッカや歯磨き粉のびんなどが出土している。窓口の南外側には、径60cm・深さ20cmの焼上がり詰った円形土坑があり、また、北外側には径80cm・深さ20cmの炭が詰った椭円形の土坑を検出している。

### 2 屋敷谷2号炭窯（第124図）

オオハゲA遺跡から谷を挟んで東側の尾根筋の東斜面にある炭窯。この尾根筋は宮竹地内の墓地となっており、今回のサイエンスパーク造成事業で墓地移転が行なわれている。炭窯は標高89.5mにあり、窓口を東側に向けて東西方向に窯体の主軸を持っている。調査前の炭窯は、窯体部分が窪地となって明瞭に識別できる状態であった。尾根の東斜面を二段に平坦面を造成し、上段を掘り込んで窯体を構築し、下段を作業場として使用している。窯体は全長3.5mで、燃焼室は長軸が2.5m・最大幅が1.8mの椭円形を呈し、窓口は長さ1m・幅75cmの規模を持っていた。窯体の底面は標高89.66mで、ほぼ水平である。煙突は、奥壁の中央にU字形の断面を持って作られており、煙り出し部の両側には河原石が一個ずつ置かれていた。煙突の下部から、瓦質土器を一点検出している。窯体内には、石はほとんど検出しなかった。窓口の南外側には径80cm・深さ33cmの炭の詰った円形土坑を検出している。他の窯でみられた焼土の詰った円形土坑は、検出できなかった。

### 3 大口コマツワラ炭窯（第125図）

オオハゲA遺跡の西側を通って、宮竹から大口に抜ける道があるが、この道を登り切ったところの丘陵に炭窯がある。当初の分布調査で二基の炭窯の所在が想定されていたが、この内の1基は土取り跡で炭窯ではない事が確認された。

炭窯は、丘陵の北側斜面の標高113mの地点に構築されている。調査前の炭窯は、窯体部分が窪地となって明瞭に識別できる状態であった。窯体の主軸はおおよそ南北方向にあり、窓口は北東方向に向いている。

窯体は椭円形を呈し、全長3.5m・燃焼室の最大幅2m・窓口の幅が30cmを測る。窓口の周辺には角張った石が多くあり、窓口が積石で構築されていたものと思われる。煙突は奥壁中央に設けられ、煙り出しの穴が4孔あけられている。煙突はU字形の縦ミゾを掘って、下部をクリヌキ式に構築している。窓口の西外側には、径70cm・深さ20cmの焼土が詰った円形土坑が確認されている。この炭窯の前面には作業場の平坦面が広く造成されており、また、尾根下の林道から登る作業道も残っている。

この窯については、昭和初期に小松市大杉谷の人がやってきて、人口地内の人から山林を借りて炭焼をしていいたという話を調査中に聞くことができた。

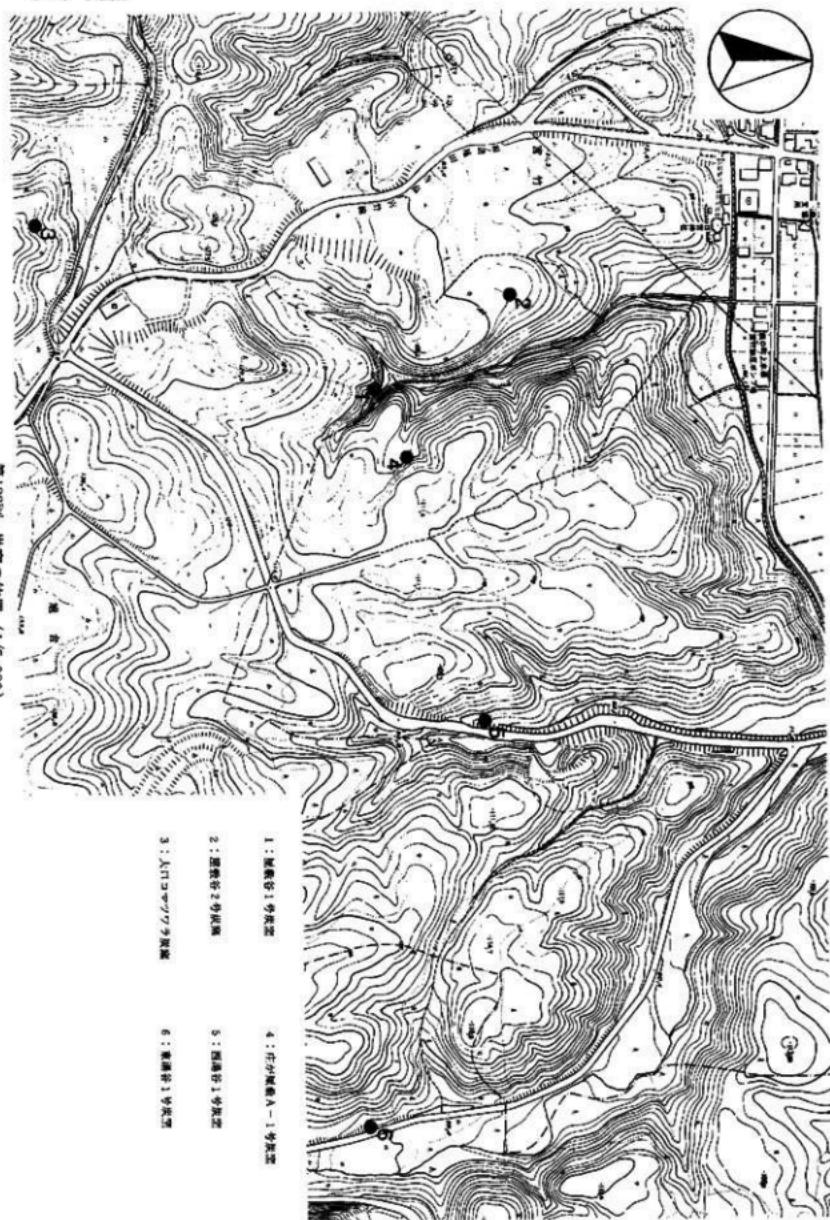
（小島）

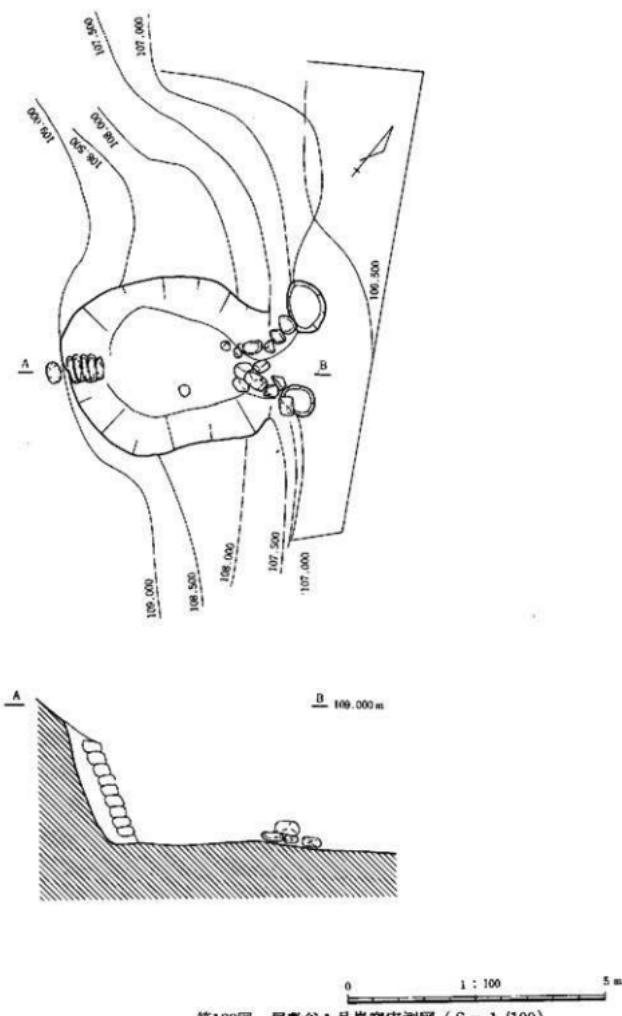
### 4 庄が屋敷A-1号炭窯（第126図）

本炭窯は宮竹地内、庄が屋敷A遺跡が展開する尾根の南側斜面に位置している。窯の主軸は等高線に直交する

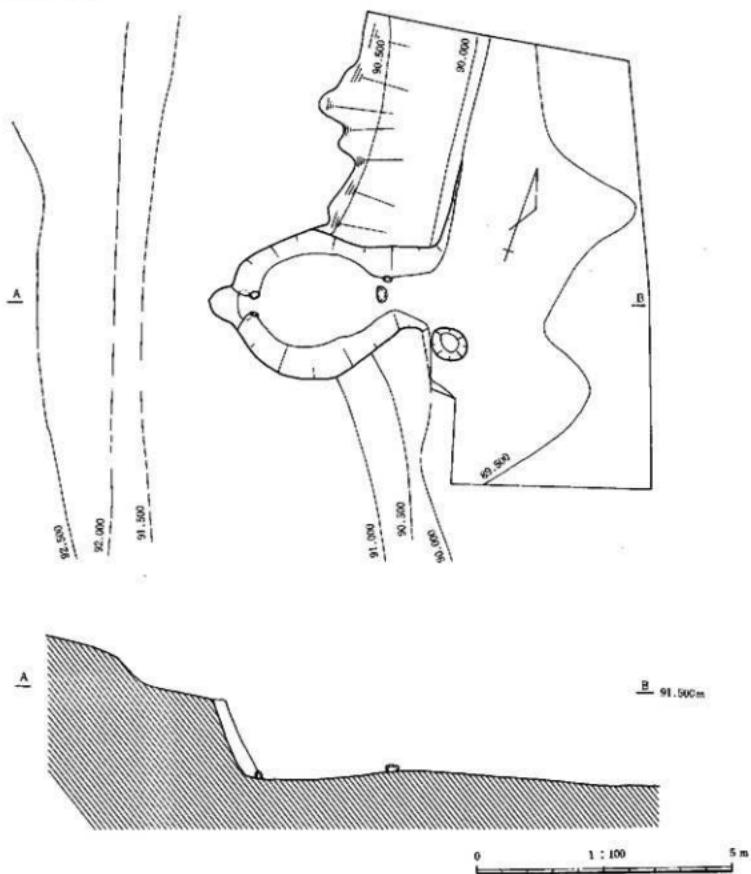
第7章 地震跡

第221図 地震の位置 (1/5,000)

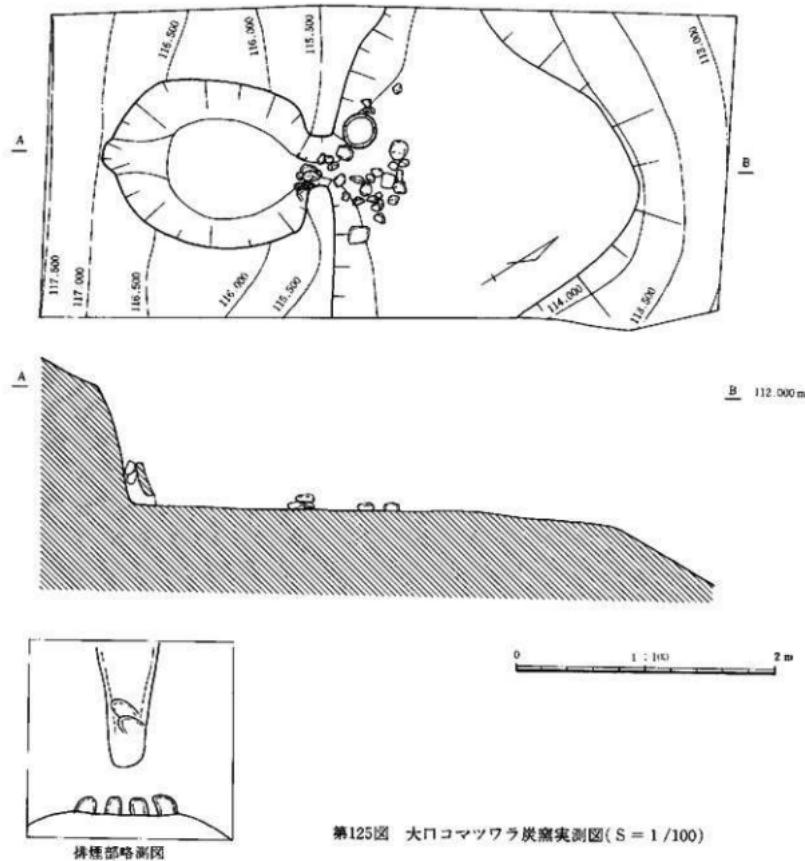




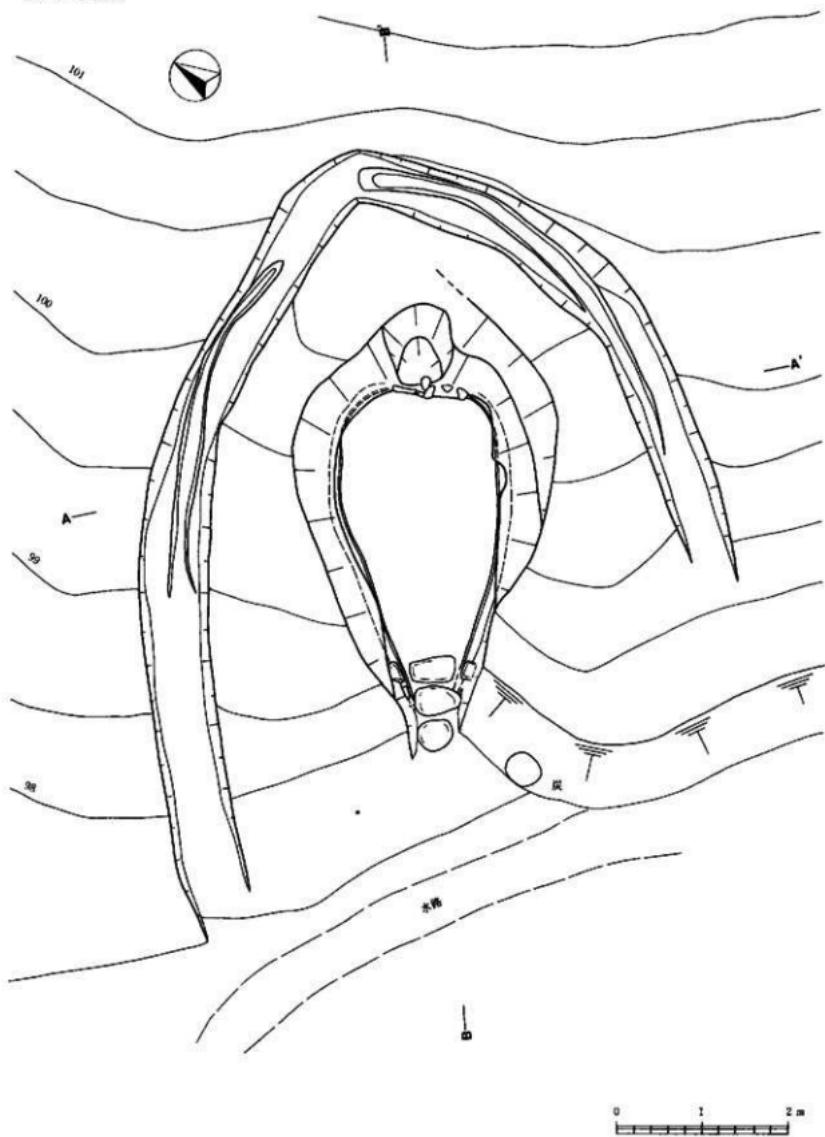
第123図 屋敷谷1号炭窯実測図 (S = 1/100)



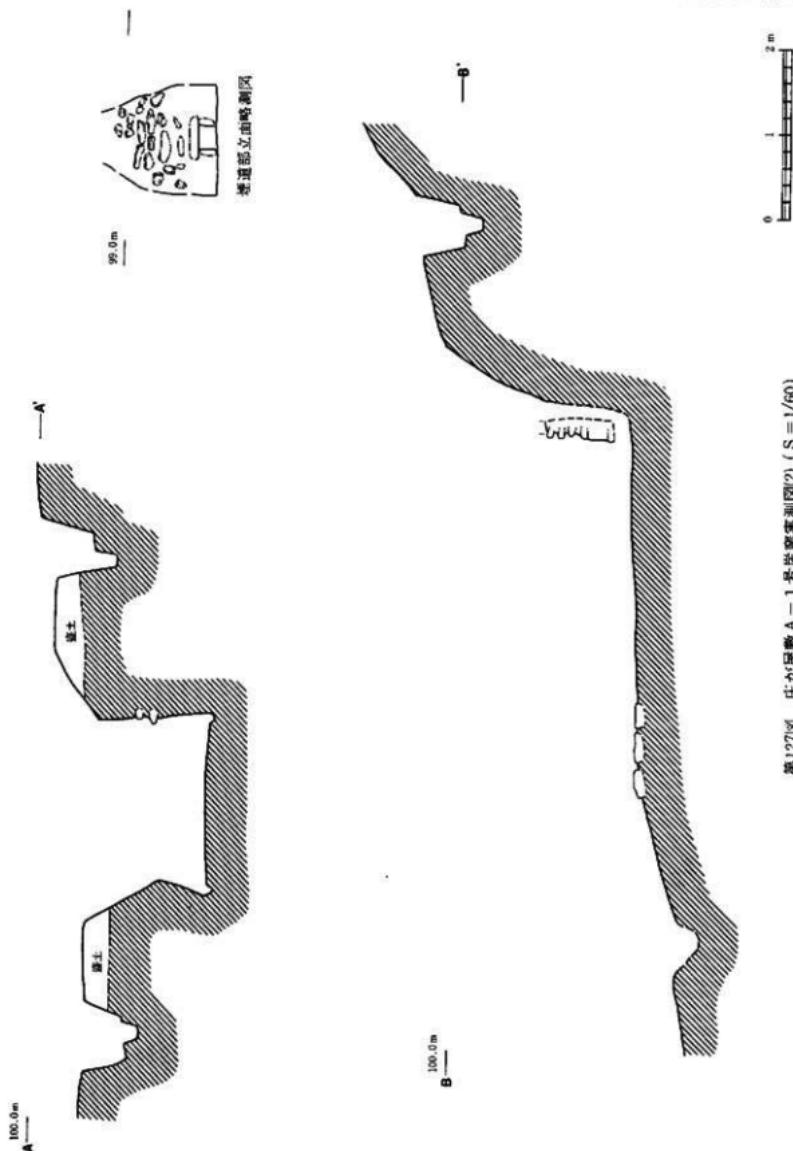
第124図 里敷谷2号炭窯実測図 ( $S = 1/100$ )

第125図 大口コマツワラ炭窯実測図 ( $S = 1/100$ )

排煙部略測図



第126図 庄が屋敷A・1号炭窓実測図(1) (S=1/60)



第127圖 庄加里村A—1号炭窑窑洞(2)(S=1/60)

もので、窯の前面には浅い谷が北に向かって開けている。窯のすぐ前を流れる水路の水面と窯底との比高差は50cm程度である。なお天井部はすでに崩落しており窯体内にブロックが遺存していた。

炭化室の形状は肩の張った羽子板状を呈する。炭化室の前面がそのままほぼまる形で焚口につらなり、この間に明瞭なくびれはみられない。焚口の前面は前庭部としての空間が認められるが、焚口東側は後世の削平を受け崖状を呈している。なお横断面に明らかなように、炭化室の壁体はオーバーハング気味に立ち上がる。炭化室～焚口の長さは約430cm、炭化室最大幅は上面約310cm、下面約210cm、焚口中央部の幅約50cmを測る。中央付近での壁体の高さは140～180cm、煙道突出部分を含めた窯の全長は約510cmである。

窯体の構築工程は概ね以下のように推定される。22～23°程度の傾斜面を掘り込んで基礎部分を策定し、傾斜を是正するよう掘り形上部に盛土による周壁を積み上げる。焚口両側の壁体もこの周壁と一緒に工程により構築された可能性がある。

煙道は奥壁中央、ほぼ窯体主軸上に位置する。窯底面で幅約130cmを測るが、上部に向かって狭くなっている。底面からの高さ80cmのところでは80cm以下となる。実行は50cm前後と思われる。排煙口は一箇所で、扁平とみられる3個の石が組み合わされ、幅30cm、高さ20cmの整美な空間を形成している。排煙口上方の煙道部壁体は底面から約80cmの高さまで残存している。扁平な石と土とを充填することにより構築されており、石に関しては横目地が通るよう意識されたと思われる箇所が認められる。

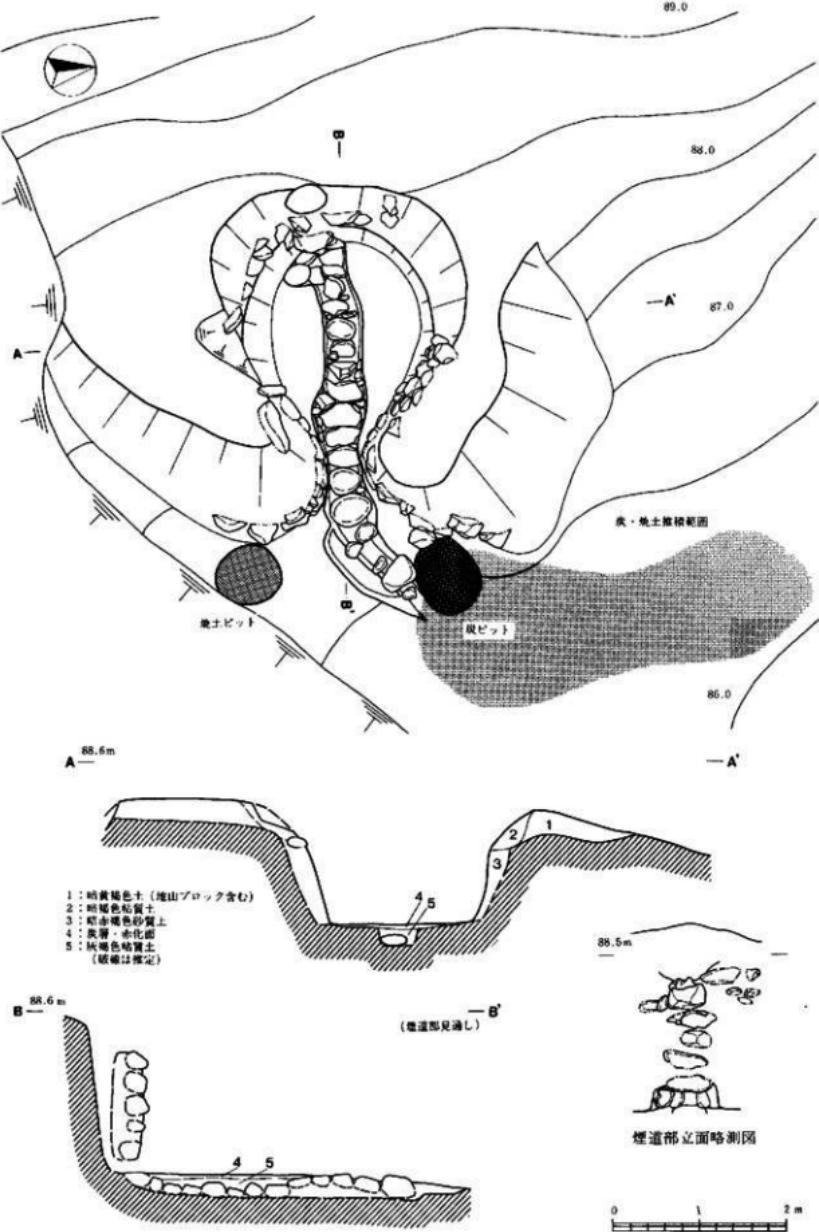
炭化室～焚口内面には壁体に沿って幅10～15cmの排水溝が巡る。煙道部壁体の両端を起点とし、焚口の前端で合流するものとみられる。焚口には50cm×20～30cm大の敷石が3枚並んでおり、この付近で排水溝が暗渠化していると思われる。敷石のうち前2枚は、この暗渠の蓋石の機能を持つ可能性がある。また窯体外にも、幅60～80cm、最深部の深さ約80cmを測り、窯の前面を除く三方を弧状に画するかなり大規模な周溝が検出されており、主たる機能は排水にあったと推測される。前庭部東側には径約40cmを測る炭窯のピットが検出されたが、西側において対になるべき焼土ピットは確認されなかった。

##### 5 西湯谷1号窯窯（第128回）

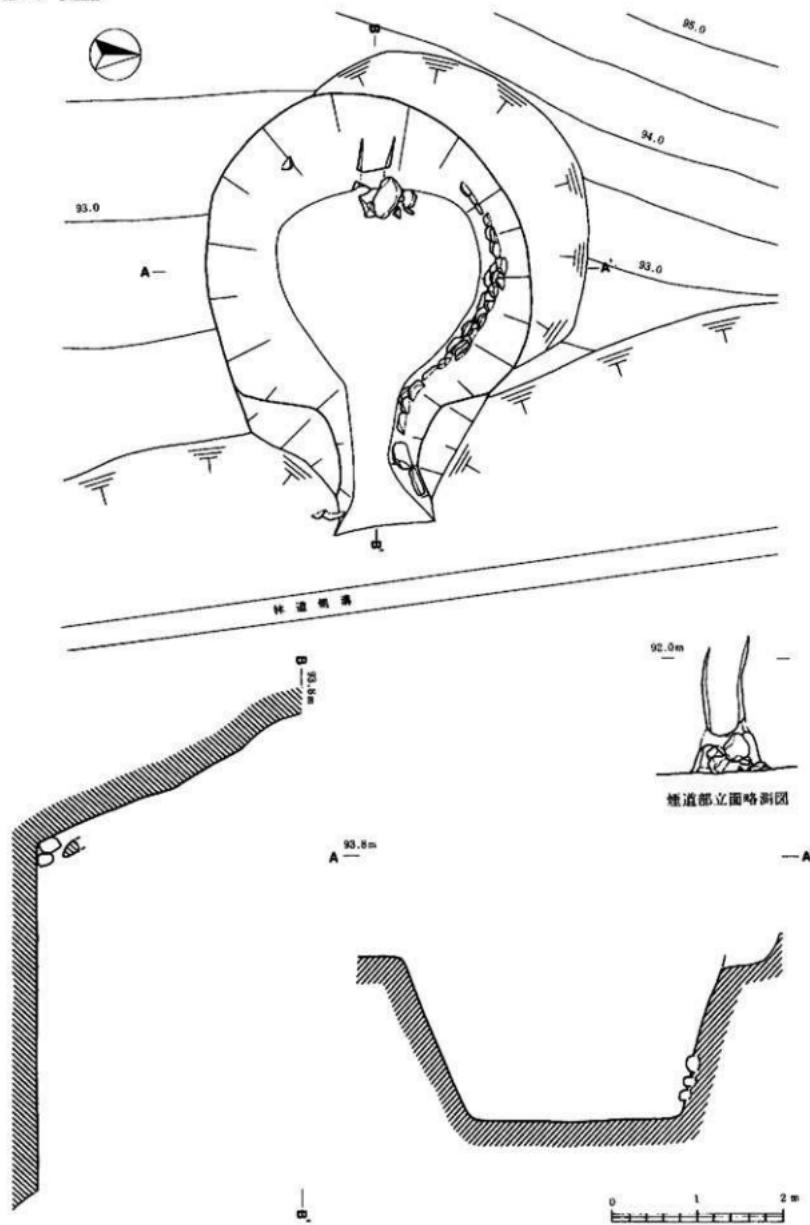
西湯谷1号炭窯は、庄が屋敷D尾根東麓、崖状を呈する斜面が西湯谷中央に向かって緩やかに変換する屈曲点に立地し、主軸が谷に直交するように構築されている。調査時にはすでに天井部は崩落しており、窯体内部には外面赤褐色の崩落ブロックが一面に認められた。窯跡の落ち込みは、東側で顯著にみられるように、現状では段（傾斜変換）を有している。この段より上方については、窯構築時に伴う傾斜面なのか、二次的な崩壊によるもののか明確ではないが、少なくともこれより下方は、窯本体の形状をほぼ保っていると考えられる。窯の中心部、すなわち炭化室の形状は長楕円形を呈し、この東側（尾根斜面側）に煙道部が取り付き、西側（谷川）に焚口が設けられている。また炭化室の側面から焚口際にかけて、土手状の周壁が顯著に巡っている。窯の規模は、炭化室全長約260cm、煙道部を含めると約340cm、炭化室上面最大幅約220cm、底面最大幅180cm、焚口全長約70cm、中央部幅約40cmを測る。

窯体は、地山掘削及び盛土によって構築されている。窯体周囲は概ね以下の構造をとる。尾根斜面側、つまり奥壁部分については地山掘削面をそのまま利用し、側面では谷川に向かって下降する地山のレベルを補うように土手状の盛土が施されている。焚口付近に到っては地山掘削の立ち上がりは認められず、窯底まですべて盛土で構築されている。ただし北側中央に設けたサブトレレンチの土層断面によれば、炭化室側面の壁は、地山掘削面そのものが露量しているわけではなく、掘削面の内側約20cm程度まで細かな砂粒で構成される土が充填され、この面が直接の壁となっていることが確認できる。これに対応するように、中央～焚口付近の内壁には20～40cm程の石が数段積まれており、この部分は石貼りの壁体となっている。一方外周には、焚口の両側、すなわち窯前面に1～2段の石積みがみられる以外、石を用いた形跡は認められない。

窯体内には、上から窯施設後の流入上・天井崩落土・炭層の順で堆積土が認められた。炭層は厚さ1～2cm程度で一層しか認められないが、窯前面には炭粉・焼土の堆積が顯著であり、窯体内は頻繁に清掃されていたよう



第128図 西湯谷1号炭窯実測図 (S = 1/60)



第129图 東湯谷1号炭窯実測図 (S=1/60)

である。炭層の下は床面で、本来黄褐色を呈する基盤層であるが、表面は高熱により赤色化している。

煙道は窓体（炭化室）の主軸に対しやや南へずれた箇所に取り付いており、遺存状態は良い。炭化室に接続する排煙口部分は高さ20cm程度の柱状の石2個を床面に据えて支えとし、この上に幅70cm、奥行20cm以上の大きな石を組むことにより構築されている。支えとなる石は煙道掘り方よりやや内側に据えられており、その結果排煙口が三分割されるようになっている。なお三分割された南側部分は径20cmの丸太が詰め込まれた状態で検出されており、排煙量の調節に関連したものと考えられる。

床面長軸方向には、幅40~50cm、深さ20~30cm程度を測る排水溝が基盤層を掘り込んで構築されている。排水溝はほぼ窓体主軸に沿って設けられているが、起点部分は排煙口から南側に向かって張り出している。末端部分では焚口を抜けると北側に屈曲し、削り放しとなっている。排水溝の窓体奥側・窓体外側では掘り方中に10~30cm程度の礫が詰めこまれ、この上に灰褐色粘質土が充填されている。一方窓体焚口寄りでは底石を欠くものの、飼石が並び、その上に扁平な大振りの石が架構され、より整備された暗渠構造をとっている。なお排水溝に架構された石の一部は、壁体を形成する石の下部に位置しており、排水溝が壁体の石積みに先立って掘削されたことは明らかである。排水溝の機能については、炭化の過程で生じる水分の処理にあるとされるが、本窓の場合、その起点部分が南寄り、すなわち谷頭方向へ張り出していること、また調査時においても溝内部に常に水気が絶えなかったことなどを考え合わせると、おそらく窓築造当初の段階、丘陵斜面掘削時において水が湧き出てしまいむしろその処理を優先して構築したものと推測できる。

窓体前面には北側に炭粉、南側に焼土の充満したピットが設置されているが、最終操業時には少なくとも炭ピットの方は窓から撒き出された炭粉・焼土によって埋もれてしまっていることが確実である。

なお出土遺物は若干の木炭・生焼けの木片の他は認められず、操業年代は不明であるが、近代以後の所産と考えておきたい。

#### 6 東湯谷1号窓窓（第129図）

本炭窓は灯台盆地内、通称東湯谷のほぼ中央東側斜面に位置している。窓の主軸は谷筋に直交し、焚口を谷底の方へ向けている。窓の背後は急斜面であるが、その構築箇所付近はテラス状の地形を呈している。なお谷筋中央西寄りには林道が通っており、焚口前面～前底部は大部分削平されている。また天井部はすでに崩落しており窓体内にはブロックが一面に確認された。

炭化室の形状は逆三角形を呈し、この東側に細長くバチ状を呈する焚口が接続する。炭化室の全長は約280cm、最大幅約380cm、中央付近での床面までの高さは約195cmを測る。焚口は全長130cm以上、幅30~55cmを測る。

本炭窓は前述の通り、テラス状の傾斜面を掘り込んで構築されているが、窓の北側は南側に比べやや斜面が急であり、炭化室～焚口の北壁には、盛土が施されている可能性がある。北壁で観察できる三段程度の石積みは、おそらく盛土部分の崩落を防止するためのものであろう。ただし焚口前面は林道法面に削平されており、盛土部分の形状は明瞭ではない。

煙道は炭化室・焚口主軸のはば西側延長上に位置し、床面より約160cm上まで確認できた。床面との角度は約6°である。排煙口は粗雑な印象を与えるもので、煙道中央北寄りに数個の石を乱雜におき、これを境に空間を二分割する構造をとっている。あるいは一度崩壊した後修築したものであろうか。

出土遺物はクリ材とみられる木炭が若干あるのみで、年代を比定できる資料はない。ただ調査の時点で焚口附近に伐採後數年を経た杉の切株が残っており、その年輪は80~90年に達するものであった。故に窓の稼動時期としては明治末年以前に遡る可能性が高い。

(滝川)





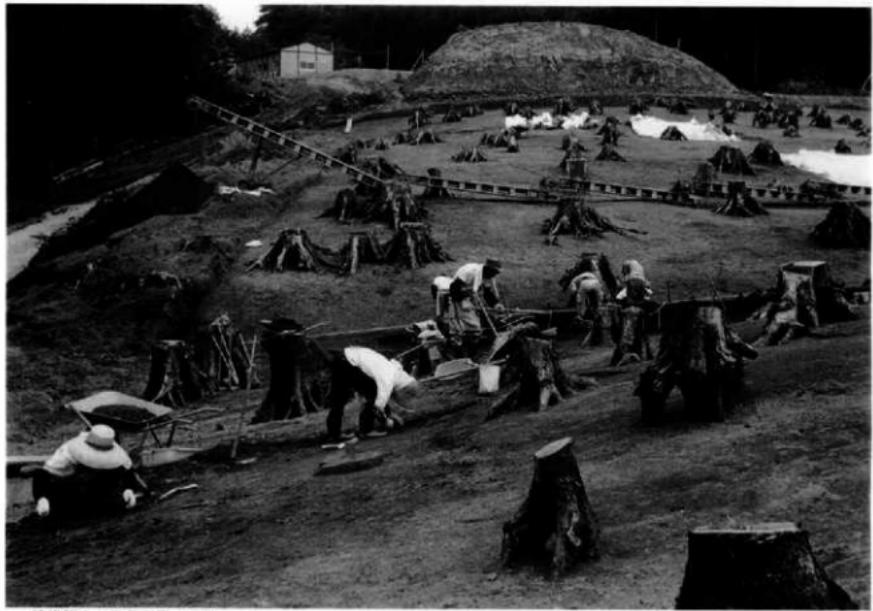
調査前の風景



表土除去作業の終了後（南から）



表土剥ぎ作業風景：北斜面



遺構検出の作業風景：南斜面



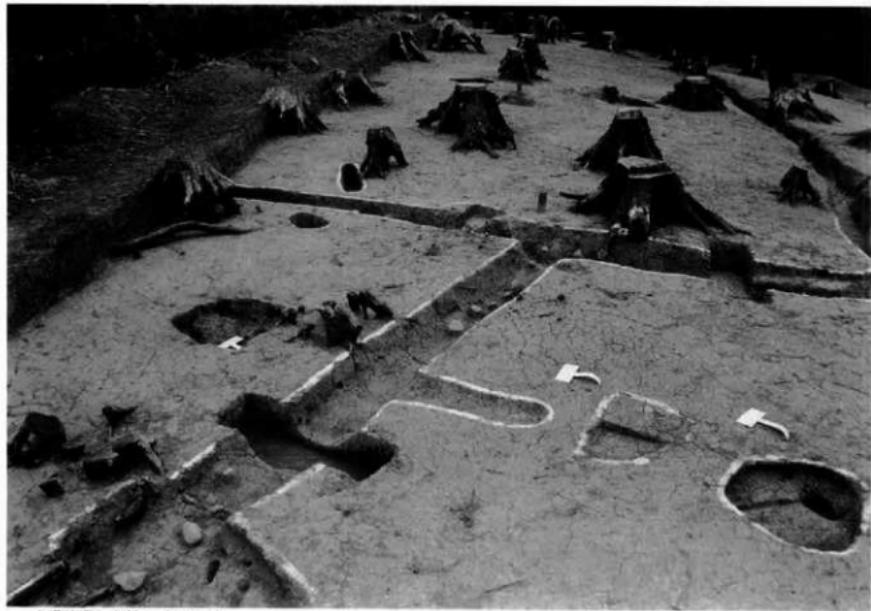
完掘状況：全景（北から）



完掘状況：全景（南から）



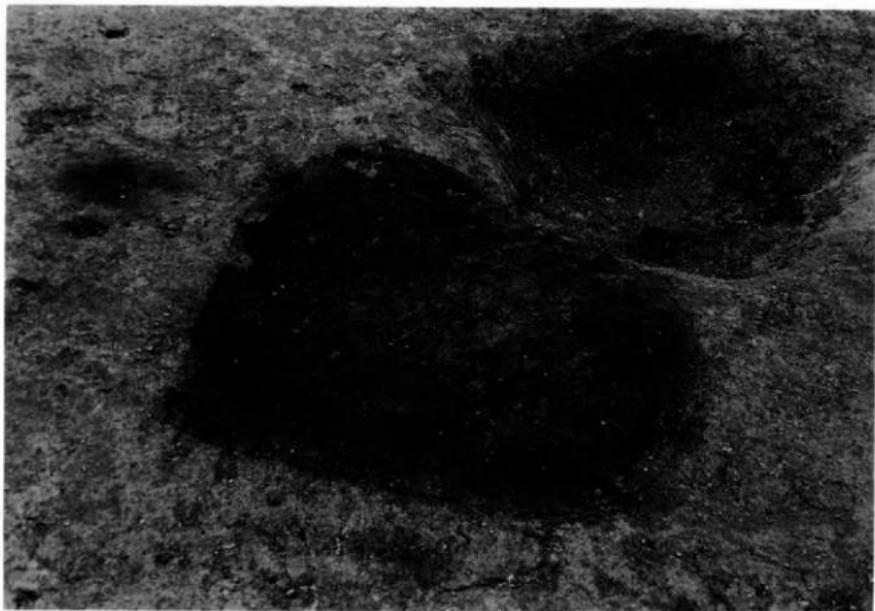
遺構検出状況：南斜面（西から）



完掘状況：南斜面（西から）



遺構検出状況：1号土坑（上）・2号土坑（下）（南から）



遺構検出状況：1号土坑（東から）

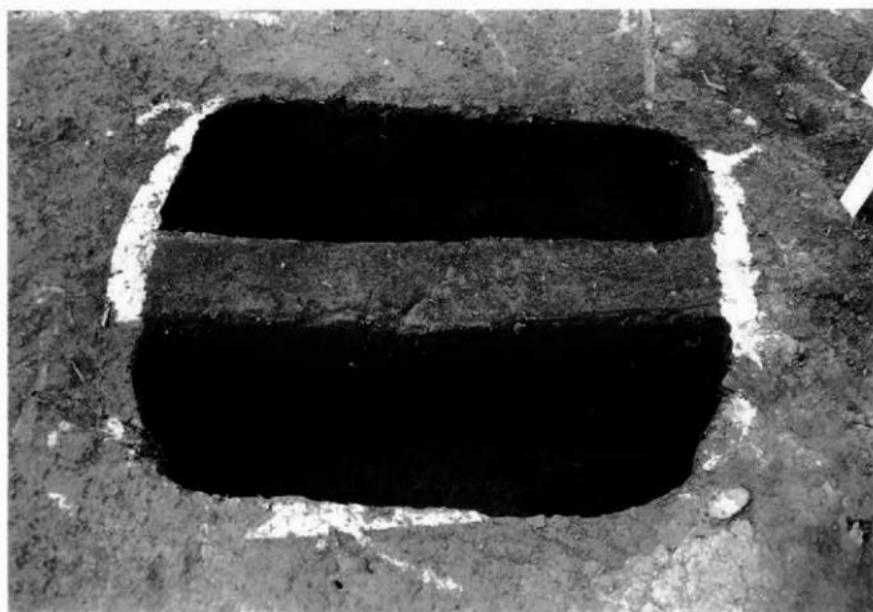


完掘状況：1号土坑（北から）



完掘状況：2号土坑（北から）

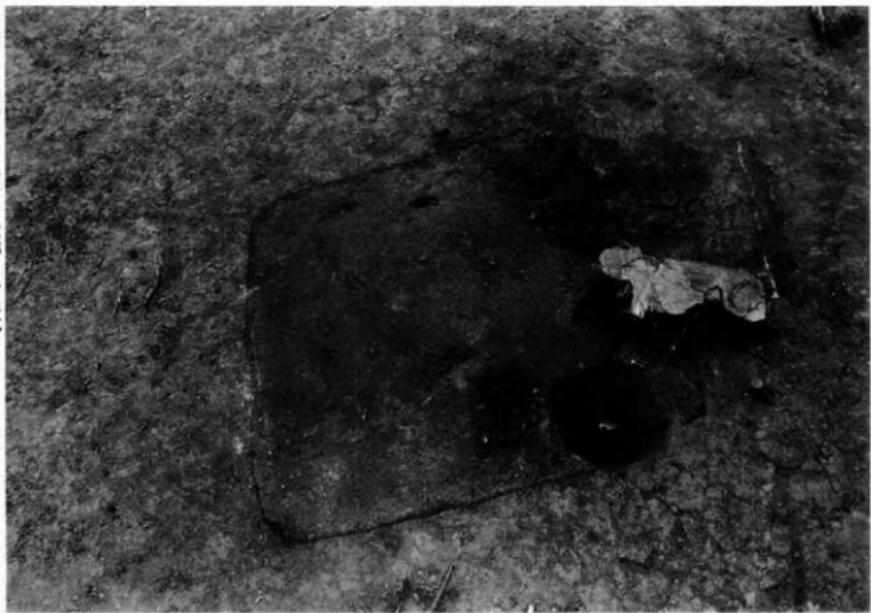
図版7 宮竹オオハゲA遺跡3号土坑



土層断面観察状況（西壁）



完掘状況（南から）



遺構検出状況（南から）

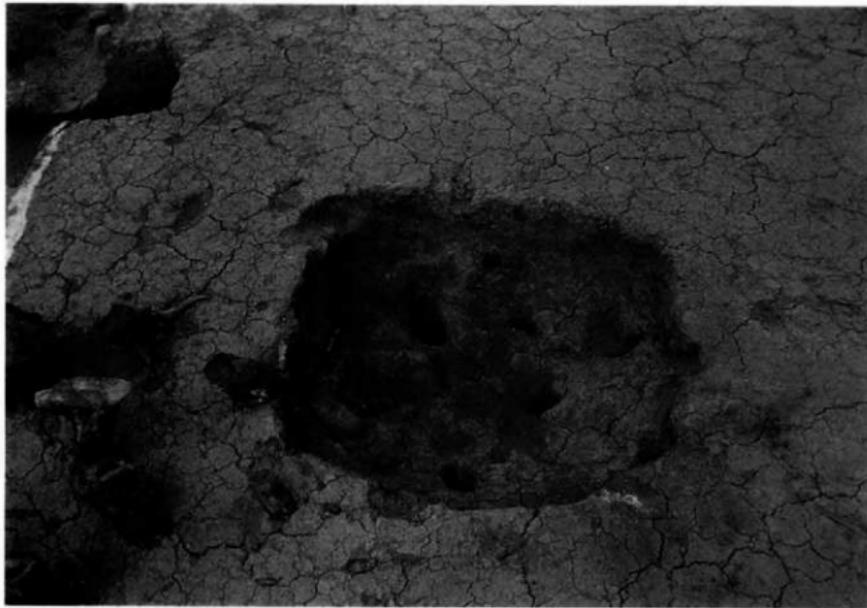


完掘状況（北から）

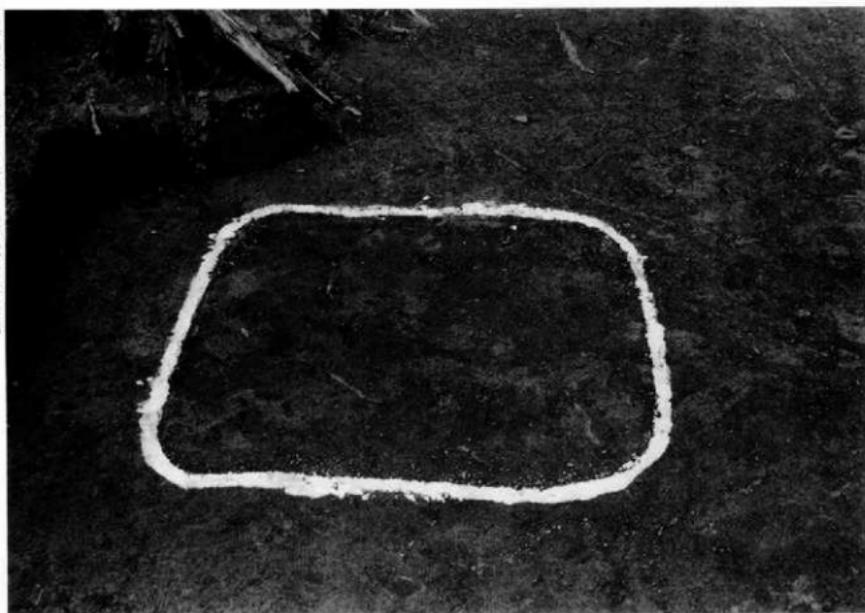
図版9 宮竹才オハゲA遺跡5号土坑



遺構検出状況 (南から)



発掘状況 (北から)



遺構検出状況（南から）



実様状況（南から）



遺構検出状況（南から）



完掘状況（南から）



遺構検出状況：8号土坑（中央）と1号溝（南から）



実掘状況（南から）



遺構検出状況：〈手前が前庭部〉（北から）



遺構検出状況：近景（北から）



土層断面観察状況（北から）



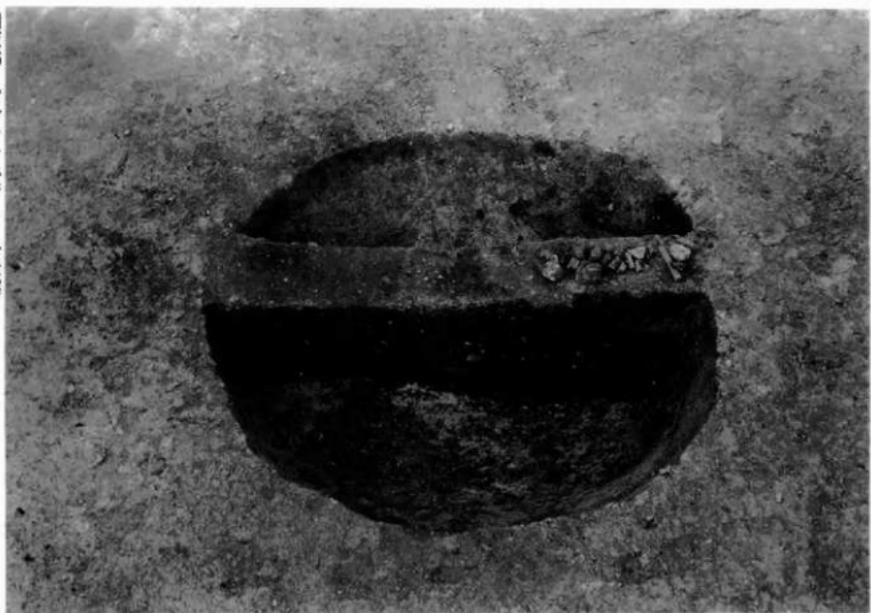
土層断面観察状況：燃焼室（A-B ライン北壁）



土層断面観察状況：燃焼室（C-D ライン東壁）



土層断面観察状況：前庭部周辺（東から）



土層断面観察状況：前庭部炭ピット（E-Fライン西壁）



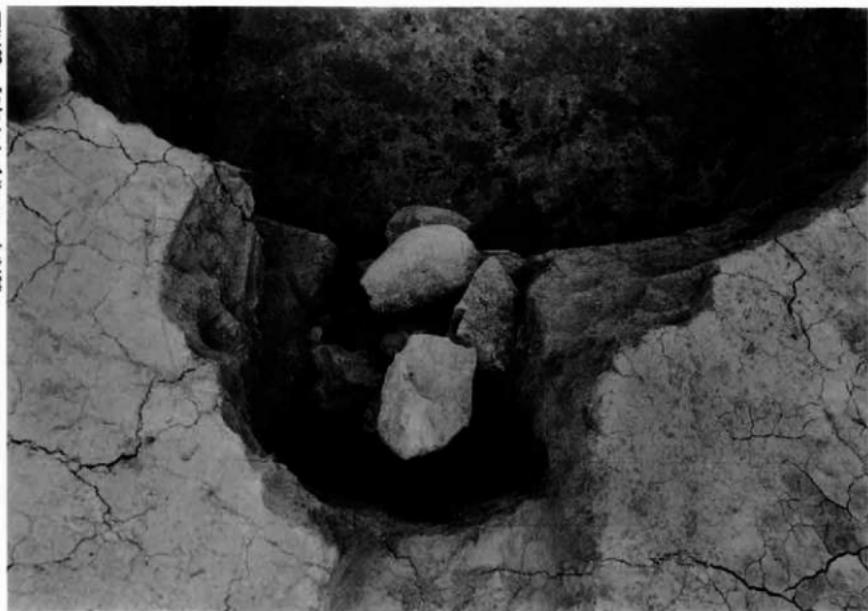
完掘状況：燃焼室（左） 焚口（中央） 前庭部（右）



完掘状況：煙道（北から）



完掘状況：煙道基部（北から）



完掘状況：煙道（上から）



完掘状況：全景（北から）



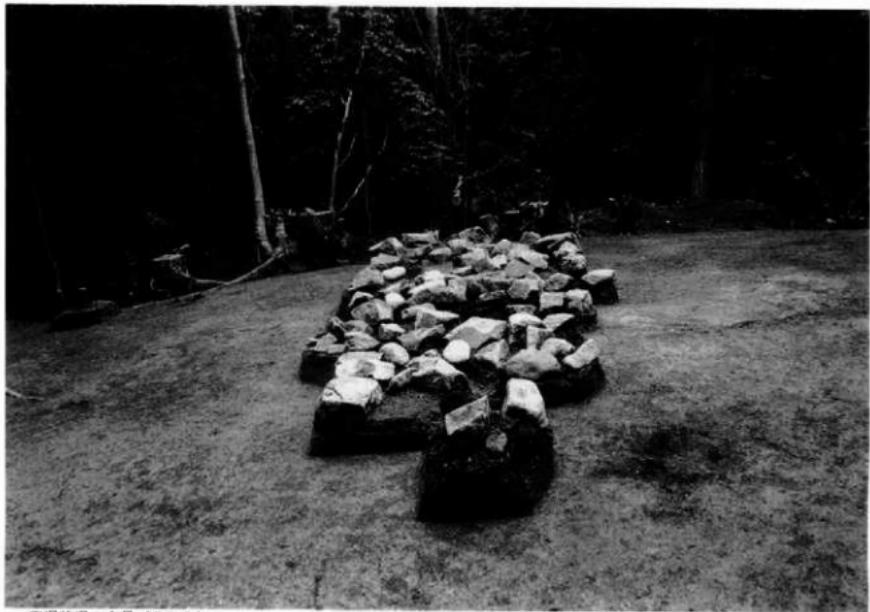
調査前：全景（東から）



遺構突出の作業風景



完掘状況：全景（東から）



完掘状況：全景（北から）



完損状況：中央部近景（東から）



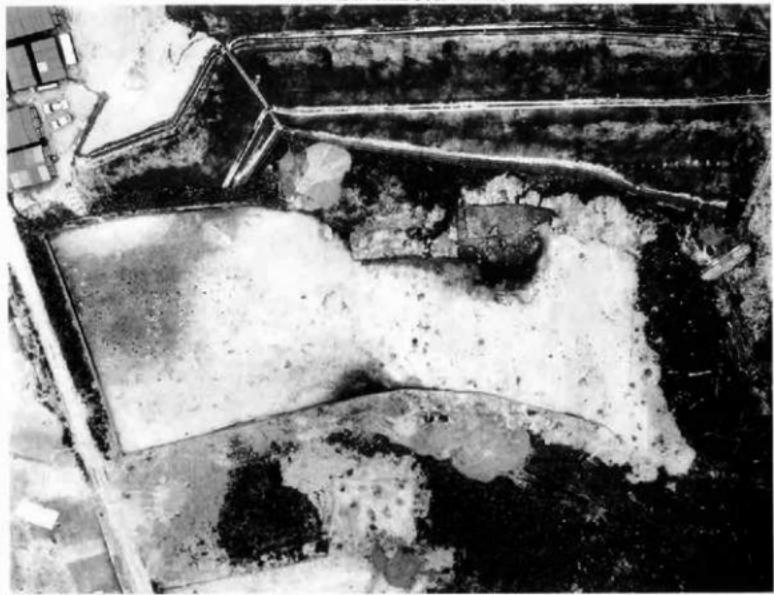
完損状況：中央部近景（東から）



陶磁器、瓦質土器



斜め全景（航空写真、西から）



垂直全景（航空写真、下が北方向）

調査区全景（北西から）



調査区全景（西から）



調査区全景（東から）



図版25 庄が屋敷日遺跡

調査前の状況  
(東から)



表土除去作業  
(東南から)



発掘開始状況  
(東南から)



西端部の発掘状況



西端部の発掘状況



西端部の発掘状況



西端部の発掘状況（北から）



西端部の発掘状況（北東から）



西端部の発掘状況（西から）



磨製石斧出土状況



図版28  
庄が屋敷日遺跡

磨製石斧2点の出土状況



西南斜面の遺物出土状況（古代）



図版29 庄が屋敷跡遺跡

第3・4号配石遺構



第3号配石遺構



第4号配石遺構



第一号配石遺構



図版30  
庄ヶ屋敷遺跡

第二号配石遺構



焼土壙と礫の出土状況



図版 31  
庄ヶ屋敷日遺跡



第一号集石炉跡  
(SK2)



第一号集石炉跡



第2号集石炉跡 (SK19)

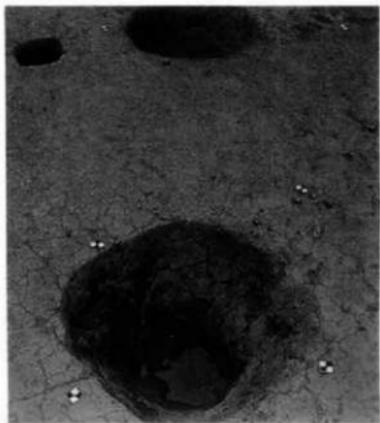


庄ヶ屋敷B遺跡  
図版32

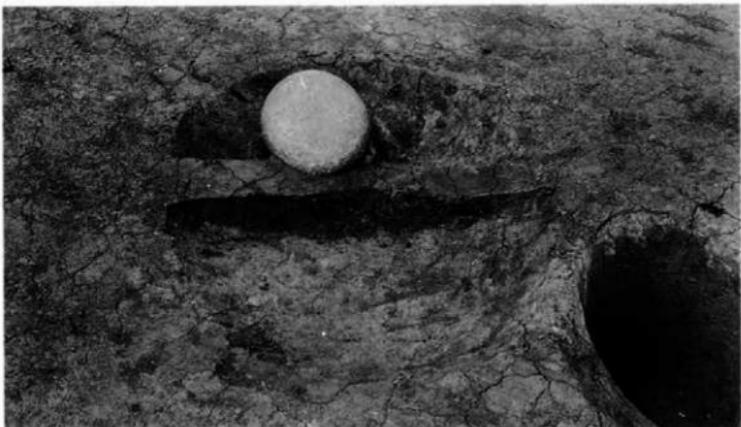
第2号集石炉跡



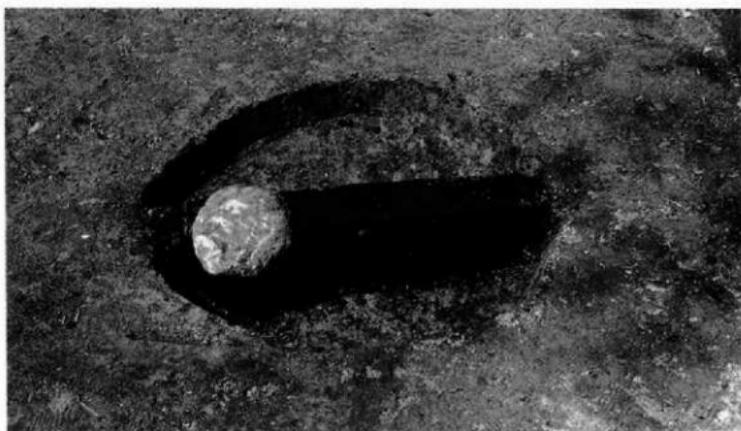
左 第1・2号集石炉跡 右 第1・2号集石炉跡の実掘状況



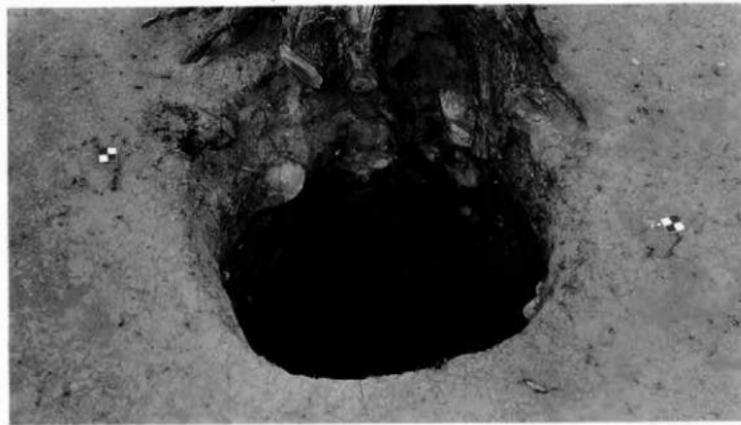
SK51



SK17



SK45  
(落し穴跡)



S K 39



因版 34  
庄が星數日遺跡

S K 39と風倒木痕



S K 39の土器出土状況



図版35  
庄が屋敷跡遺跡

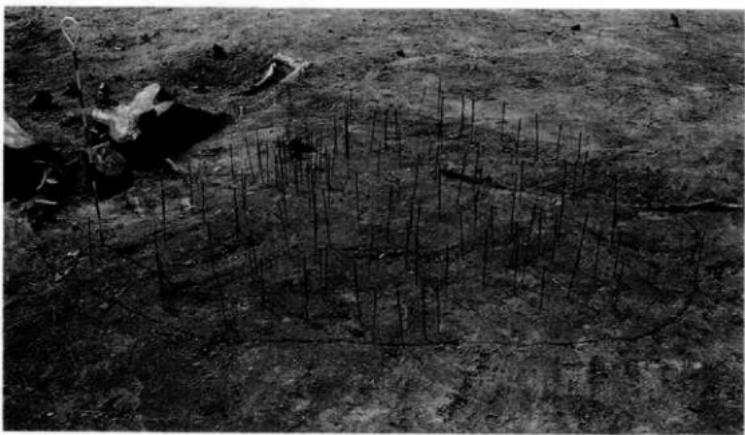


SK30の検出状況



SK31の検出状況





中央地区でのトレンチ発掘（東から）



トレンチ発掘（西から）



図版 37 庄が屋敷B遺跡

南西斜面の遺構突出状況（西から）



南西斜面の遺構突出状況（南東から）



S  
K  
25  
•  
26  
•  
34



SK36 土層断面



SK24 土層断面



SK35 土層断面



図版 38  
庄が星敷日遺跡

図版 39 庄が屋敷跡遺跡

S.K. 27  
35  
37



S.K. 35  
(東から)



S.K. 36  
(東から)



S K 25 土層断面

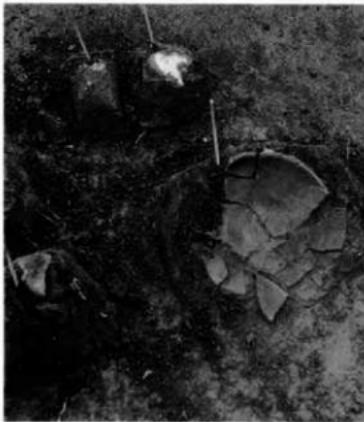


図版 40  
庄ヶ屋敷 B 遺跡

S K 35 土層断面



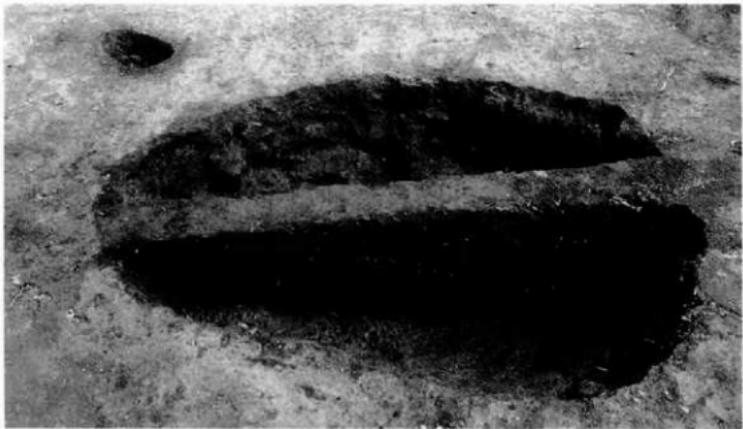
包含層での遺物出土状況



図版 41  
庄が屋敷跡遺跡

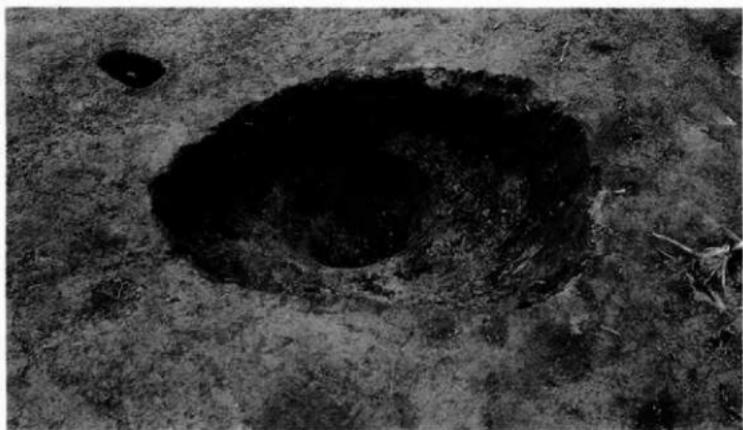


SK22 土層断面



庄が屋敷跡遺跡

SK22 完形



SK34 土層断面



図版43 庄が屋敷B遺跡

SK38土層断面



SK42



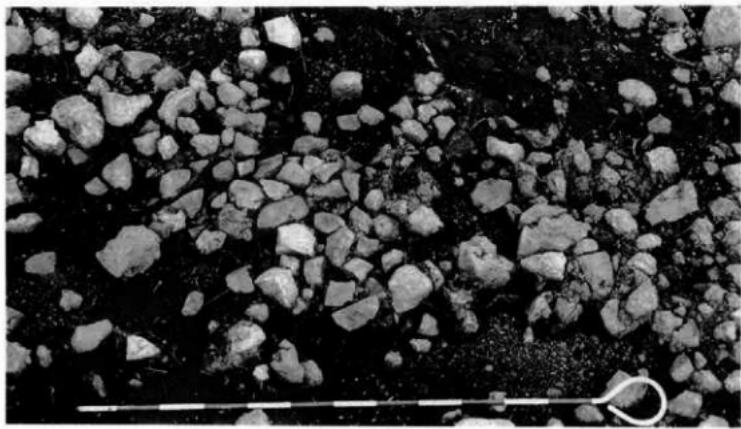
SK45  
29



南西斜面発掘出土状況（西から）



猿の巣近影



南西谷部の凌景（南から）



南西谷部の発掘風景



南西谷部の出土状況  
（西から）



南西谷部の出土状況（東から）



石皿などの出土状況



南西谷部の廃除去後の状況（東から）



擇立柱建物跡群遠景（北から）



擇立柱建物跡近景（西から）



擇立柱建物跡近景（東から）



攝立柱建物跡（南東から）



攝立柱建物跡（北東から）



左、柱穴からの土器出土状況、右、土器集積状況



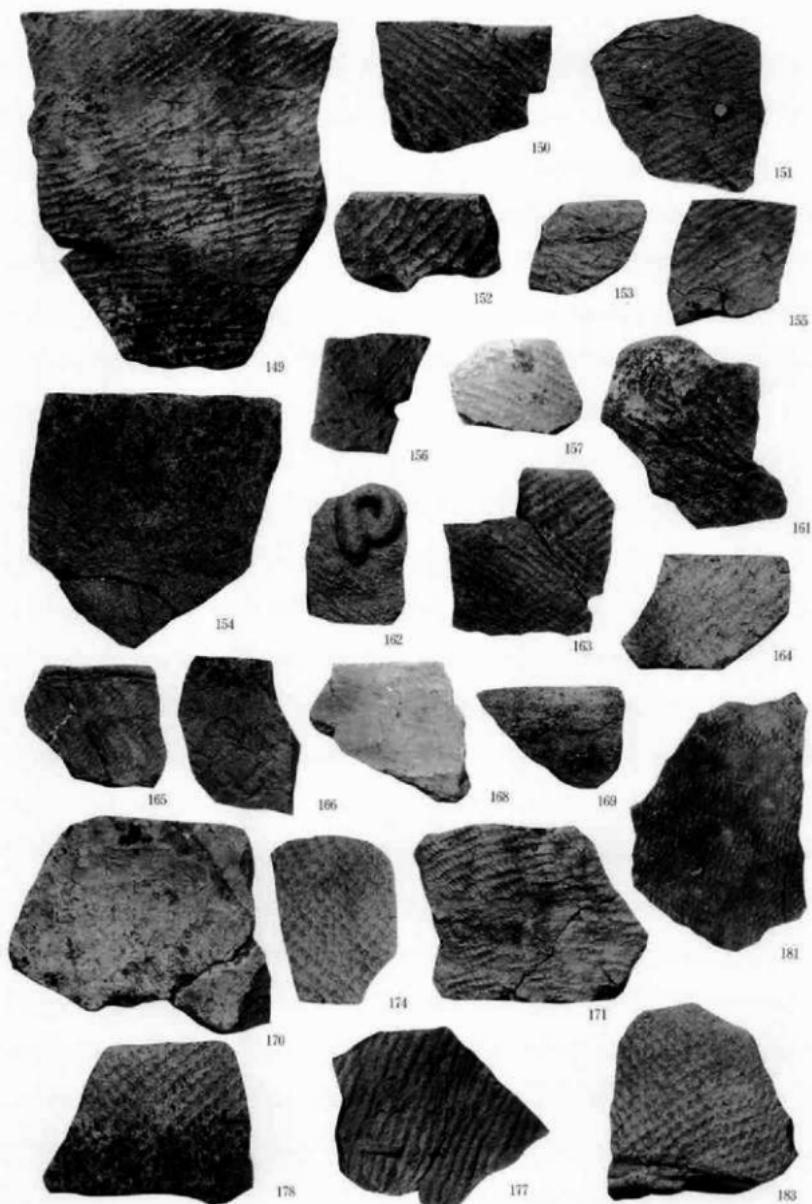




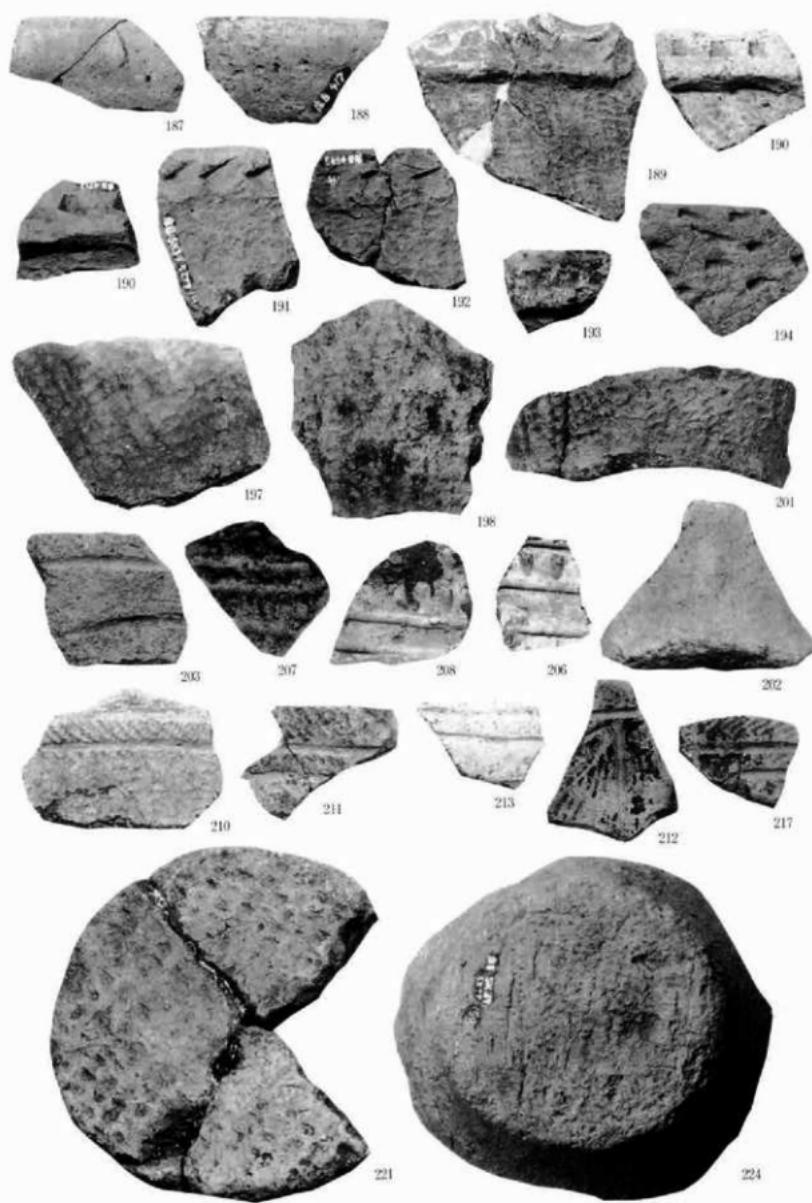
縄文土器 (43~112)



縄文土器 (107~148)



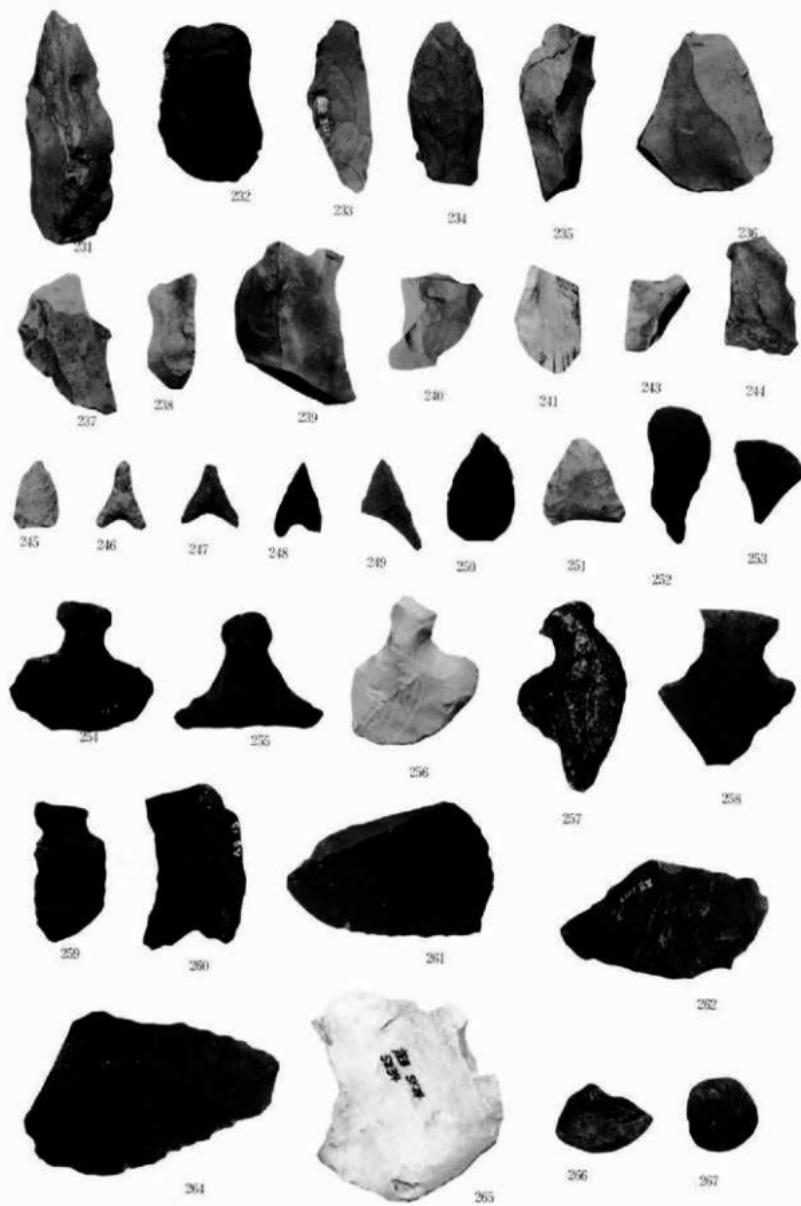
縄文土器 (149-183)



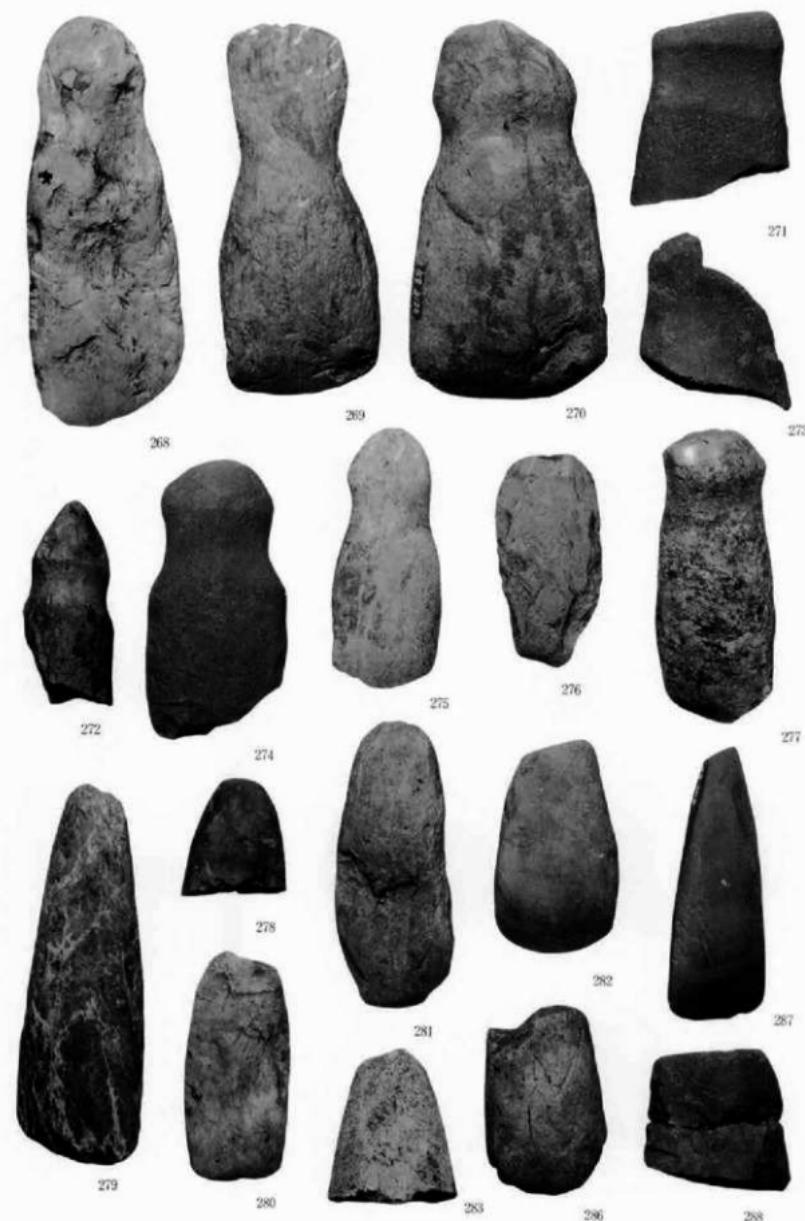
施文土器 (187-224)



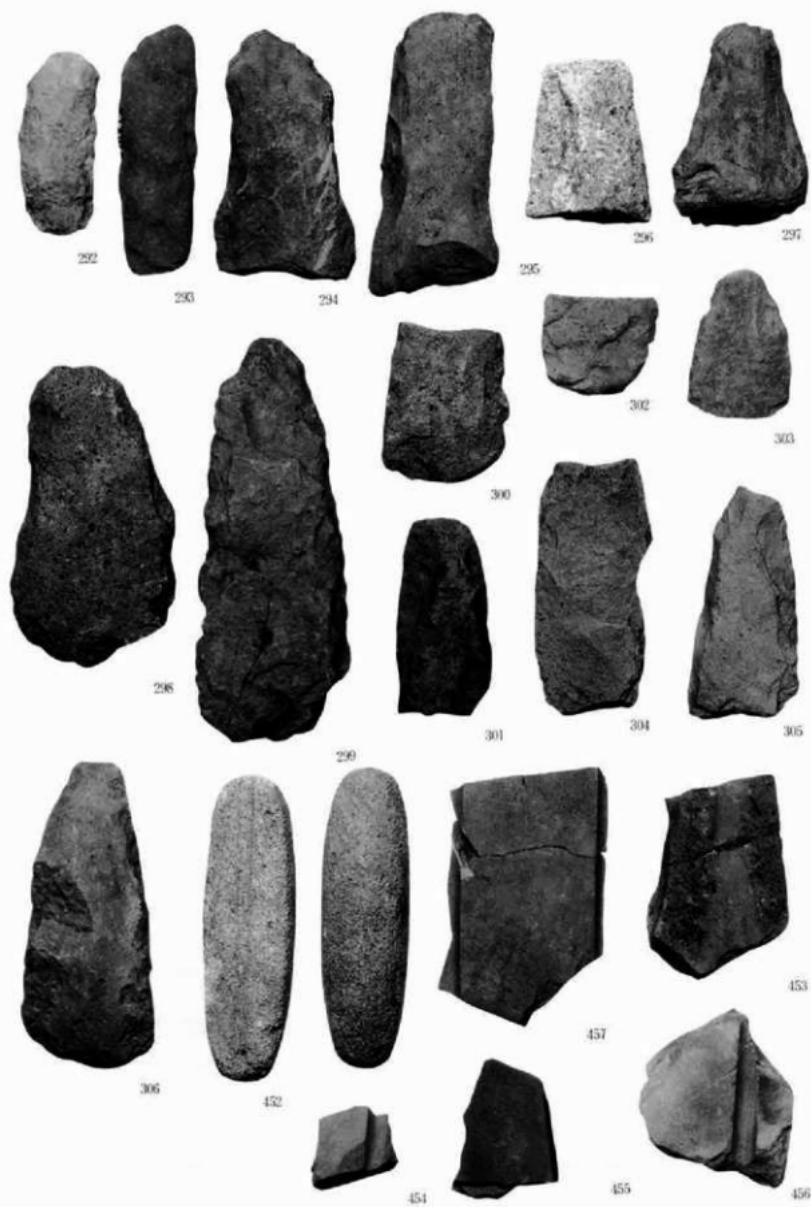
縄文・弥生土器



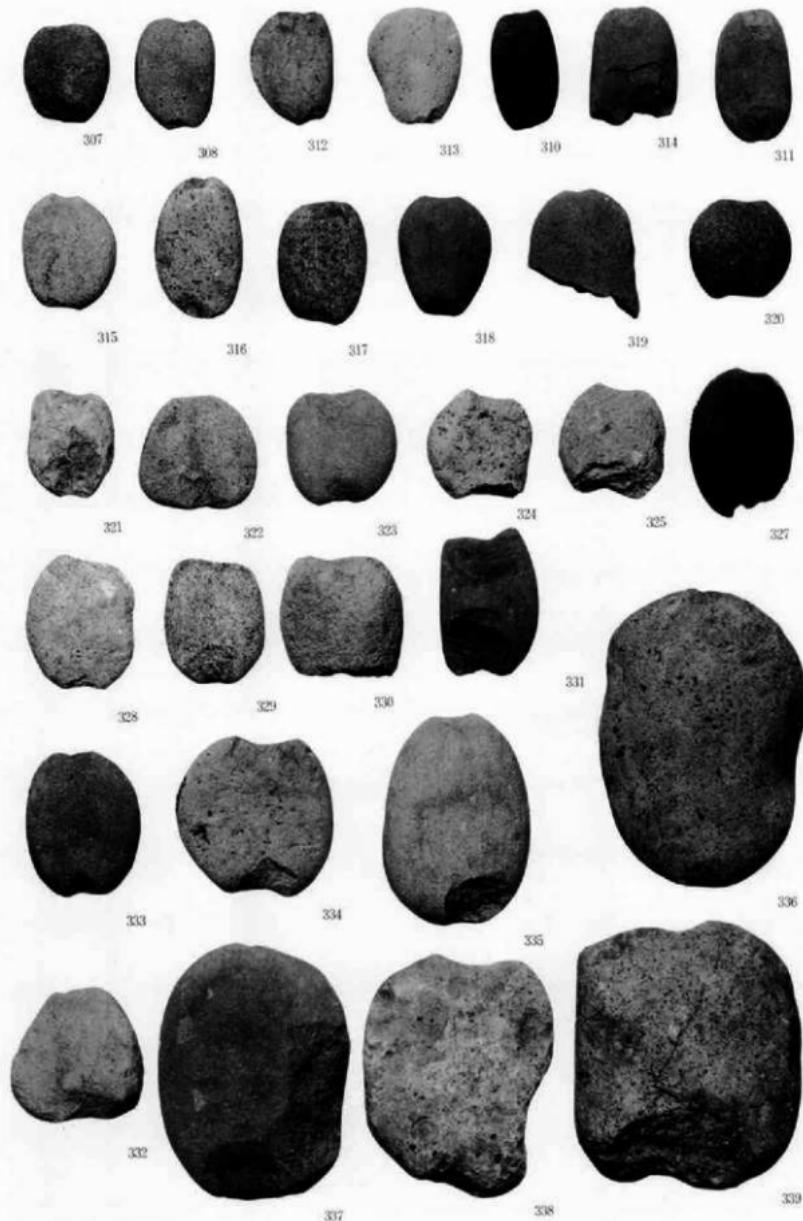
石鏨・石匙他 (231-267)



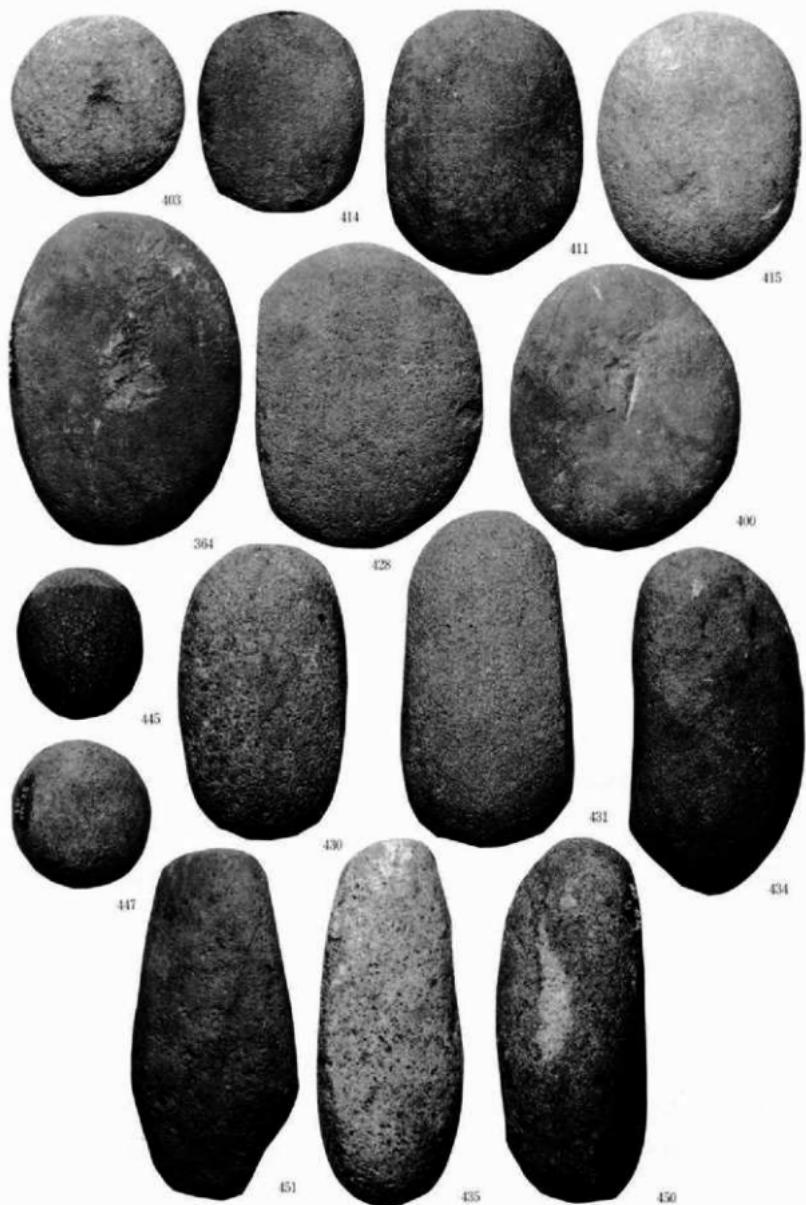
磨製石斧 (268~288)



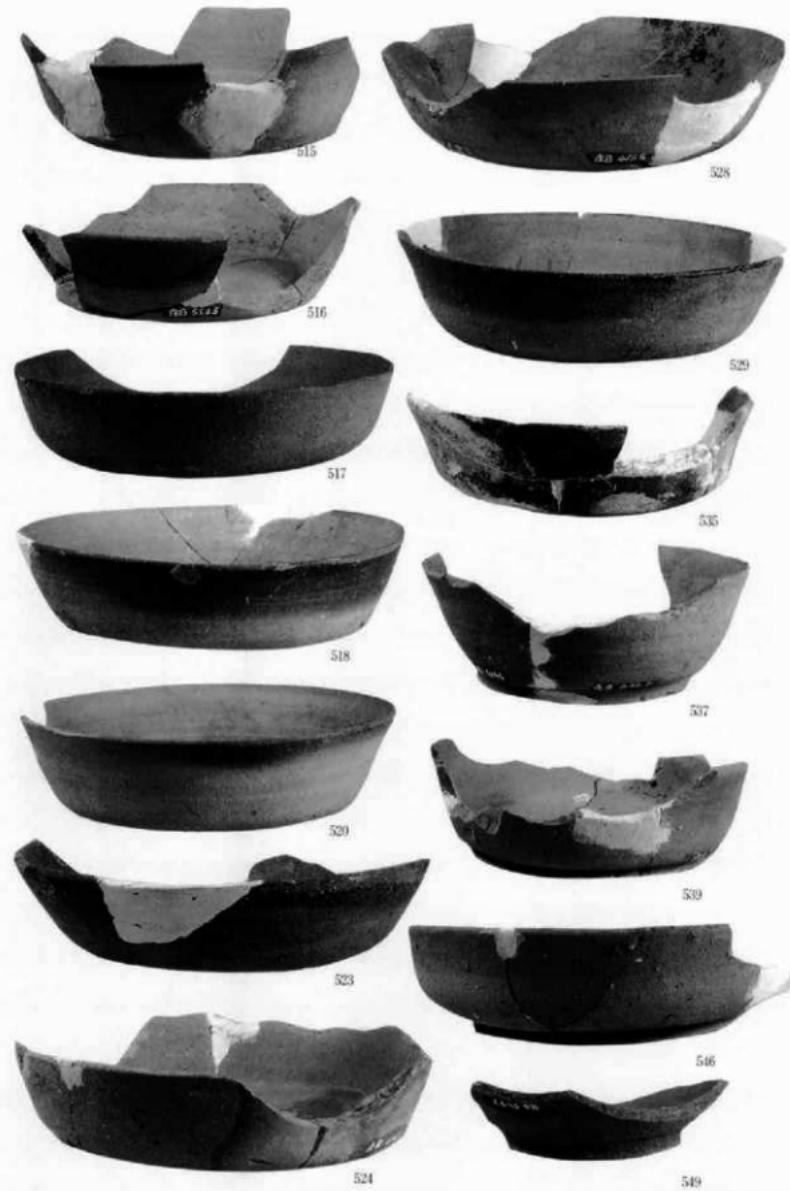
打製石斧・矢柄研磨器 (292-306, 452-457)



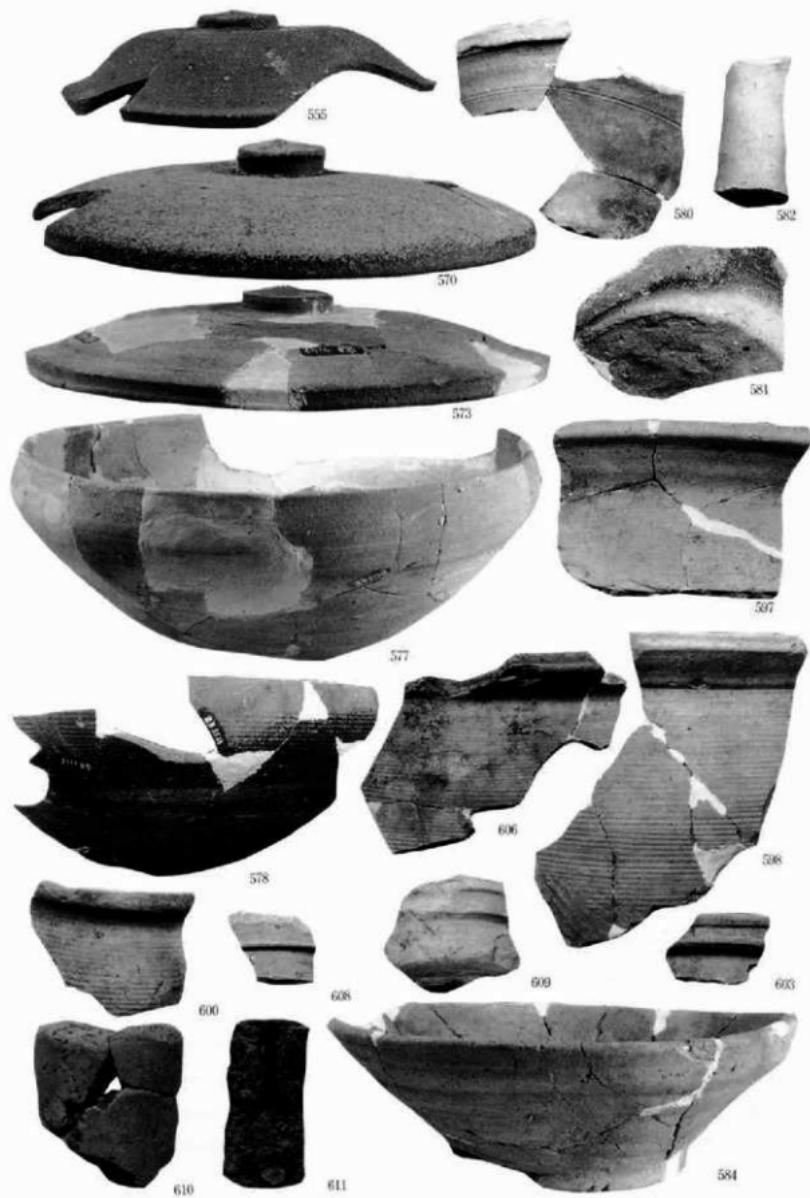
打欠石錐 (307~339)



磨石類 (364-451)



古代の遺物 (515-549)



古代の遺物 (555-611)



古代・中世の遺物 (615-667)



調査前の状況



表土除去作業



調査風景



旧石器時代遺物出土状況（全景：西から）



旧石器時代遺物出土状況（西部）



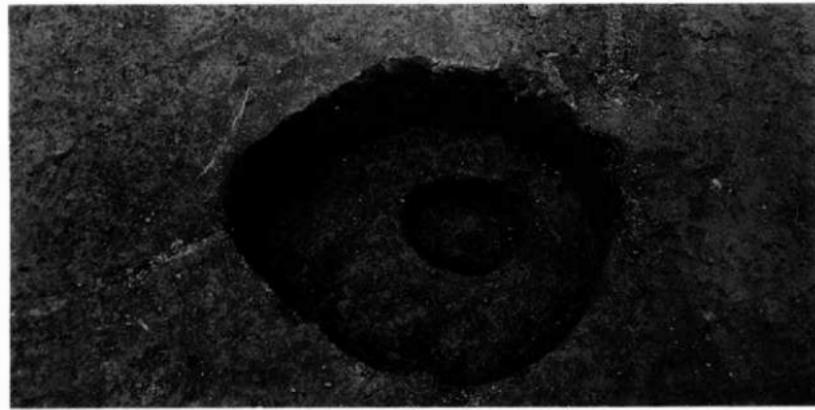
旧石器時代遺物出土状況（東部）



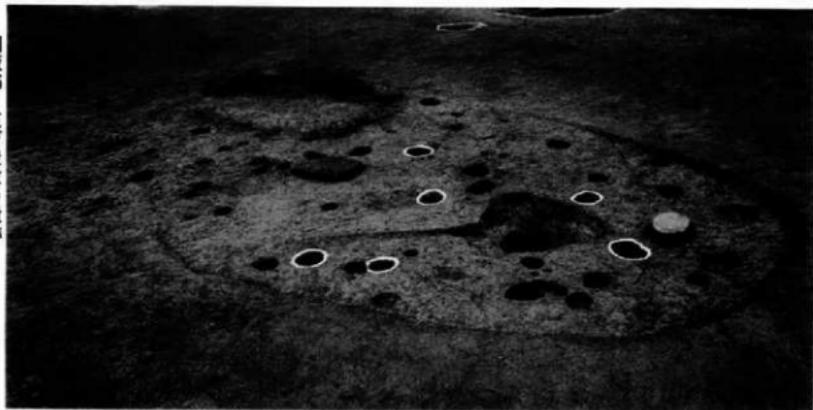
基本土層



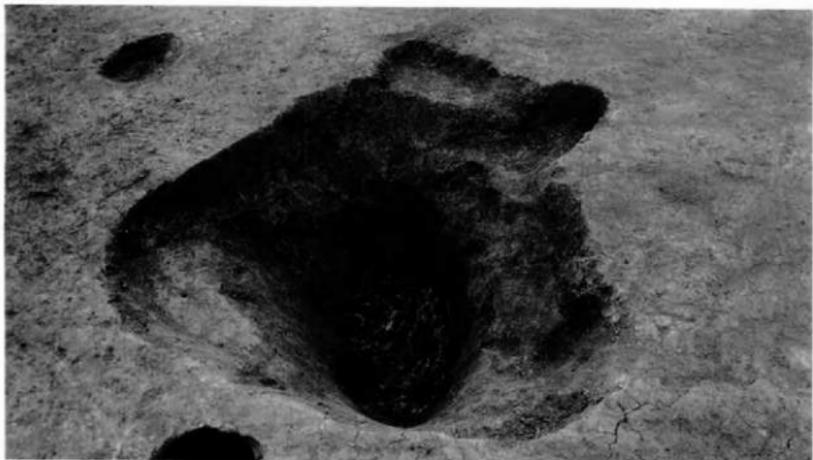
16号土坑



15号土坑



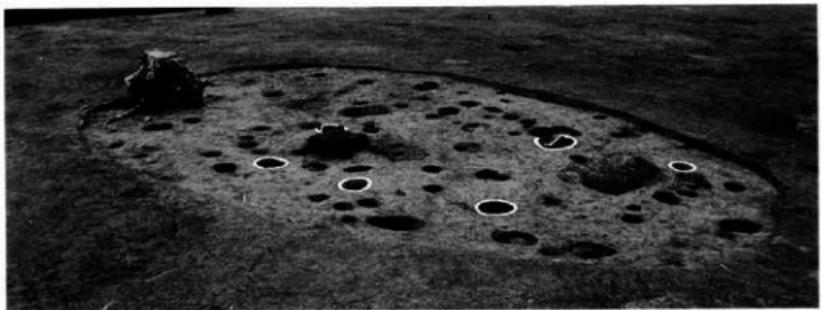
1号住居跡（西から）



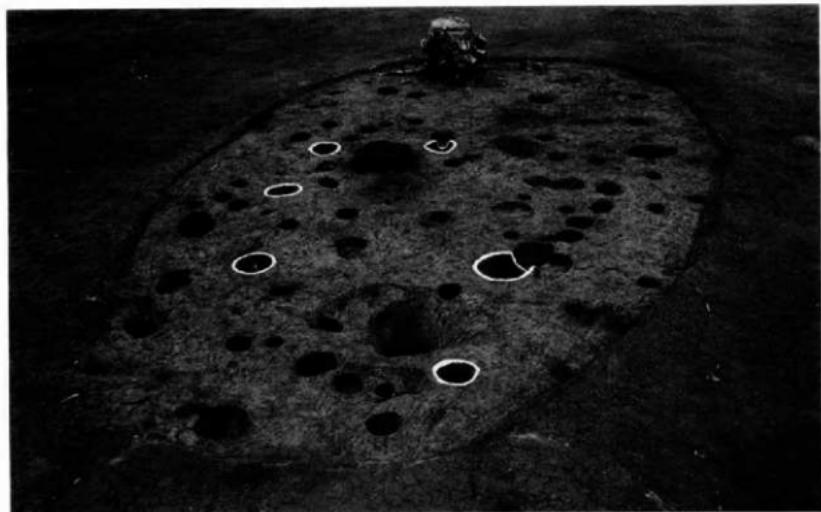
1号住居内土坑



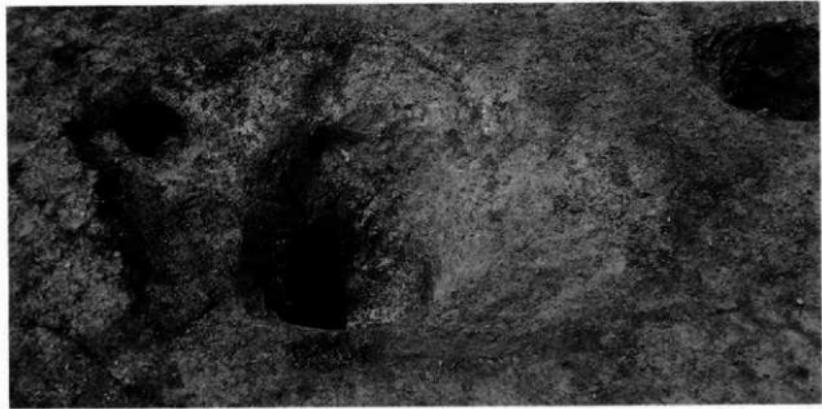
1号住居跡出土土器



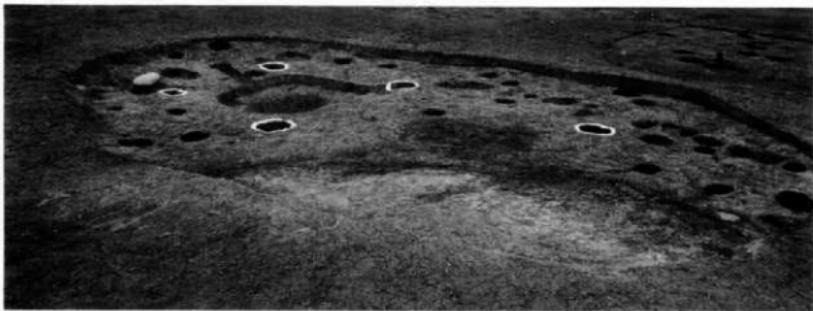
2号住居跡（南東から）



2号住居跡（東から）



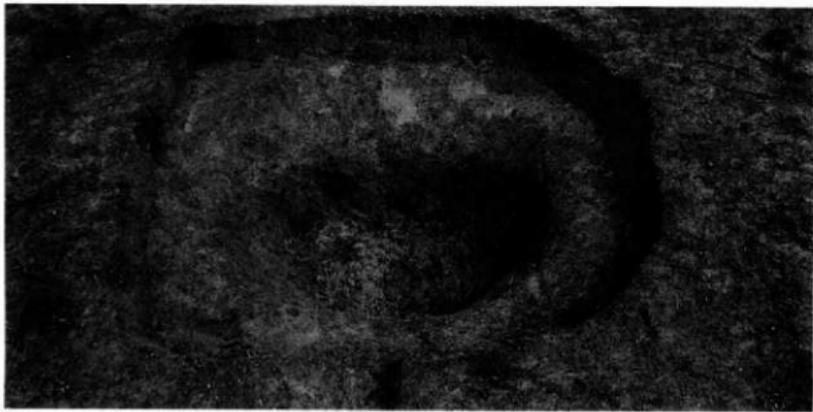
2号住居内土坑



4号住居跡（北東から）



4号住居跡（南から）



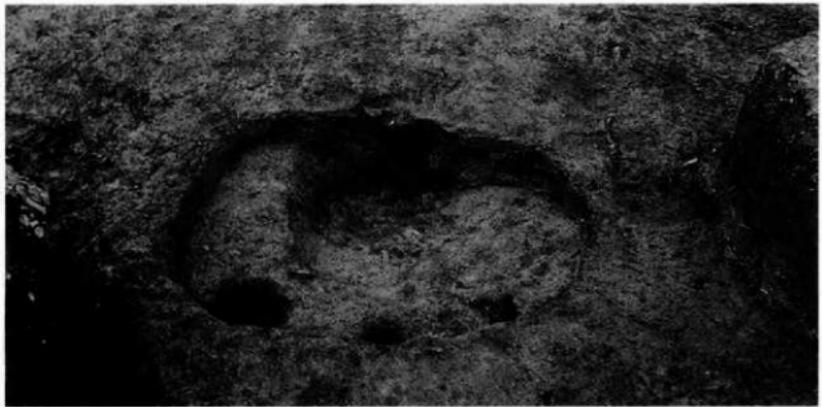
4号住居内土坑



3号住居跡（南から）



3号住居跡出土土器・焼土



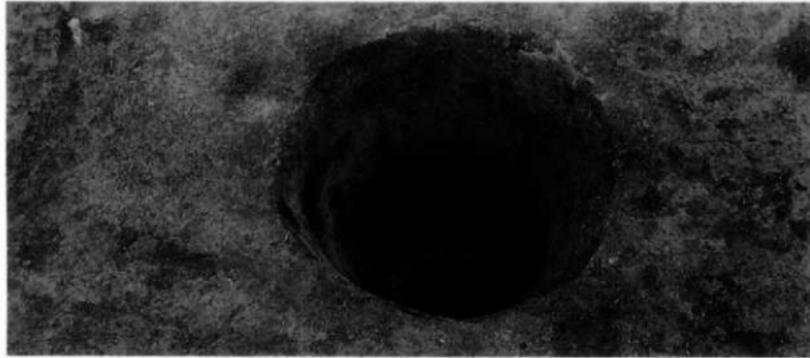
22号土坑



3号土坑（陷穴）



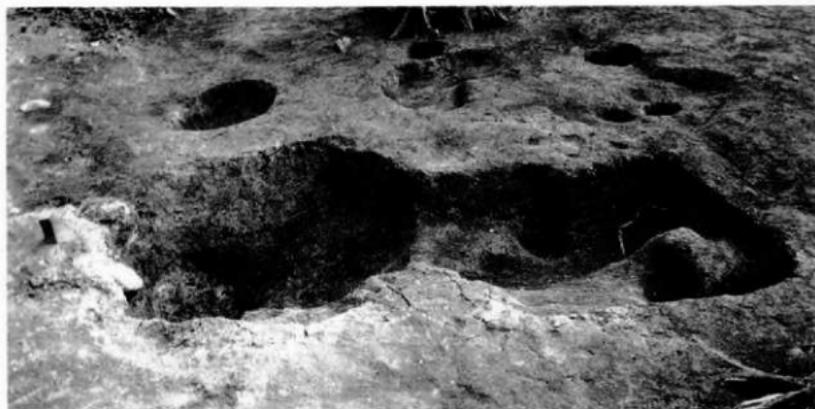
4号土坑（陷穴）



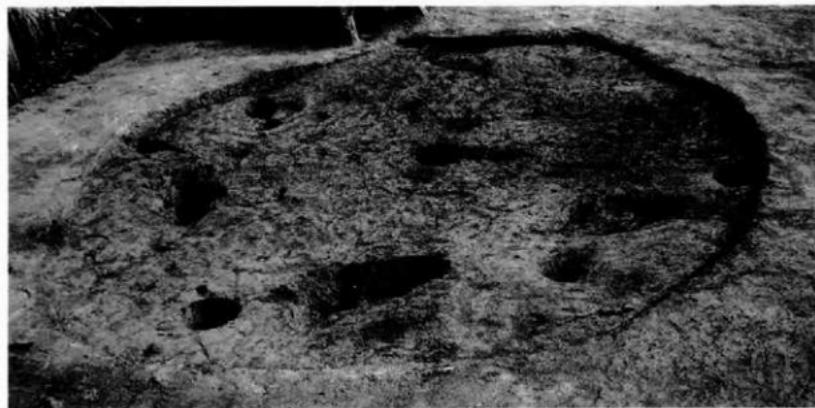
20号土坑（陷穴）



古代遺構群（北から）



11号土坑・12号土坑



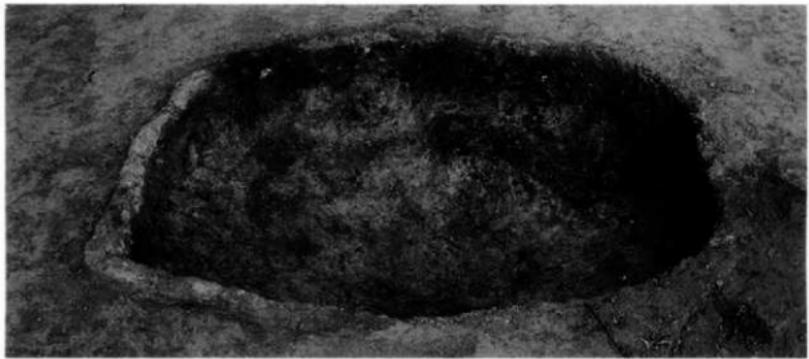
2号土坑



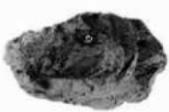
10号土坑



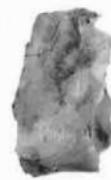
8号土坑（製炭土坑）



17号土坑（製炭土坑）



旧石器時代の遺物(I)



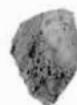
(No.14)



(No.16)



(No.12)



(No.2-1)



(No.19-a)



(No.19-b)



(No.6)



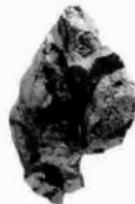
(No.20)



(No.18)



(No.3) + (No.4)



(No.5) + (No.10)  
+ (No.11) + (No.9)

図版75 庄が屋敷A遺跡

調査前の状況（西から）



調査前の状況（北から）



全景（南から、手前はB遺跡）



表土除去作業



表土除去作業



表土除去作業（南から）



全景（南西から）



遺構検出状況



住居跡検出状況



第1号住居跡検出状況



庄が屋敷A遺跡

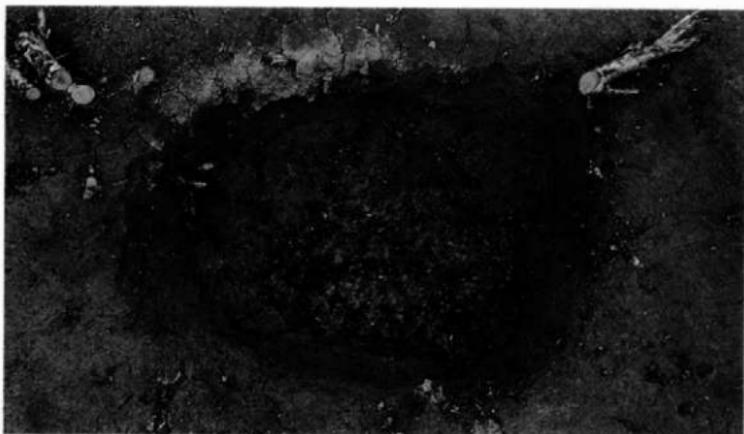
同上遺物出土状況



同上、全景



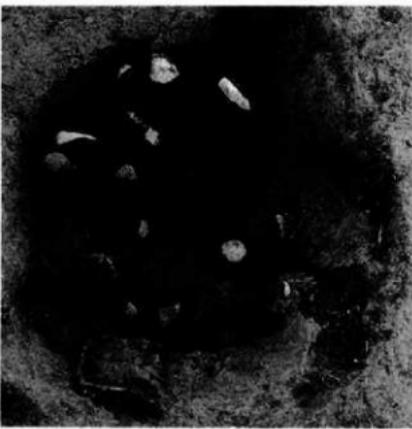
図版79 庄が屋敷A遺跡



同上1号土坑



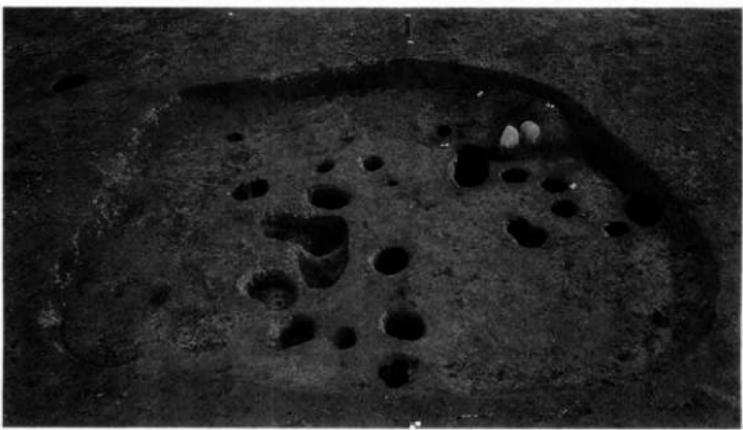
同上1号土坑遺物出土状況



第一号住居跡内  
2号土坑



図版 80  
庄が屋敷 A 住跡



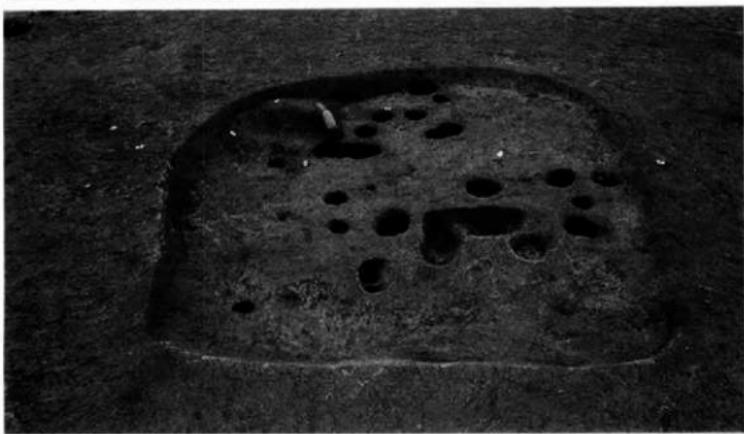
図版 81 庄が屋敷 A 遺跡



周上  
かまど跡

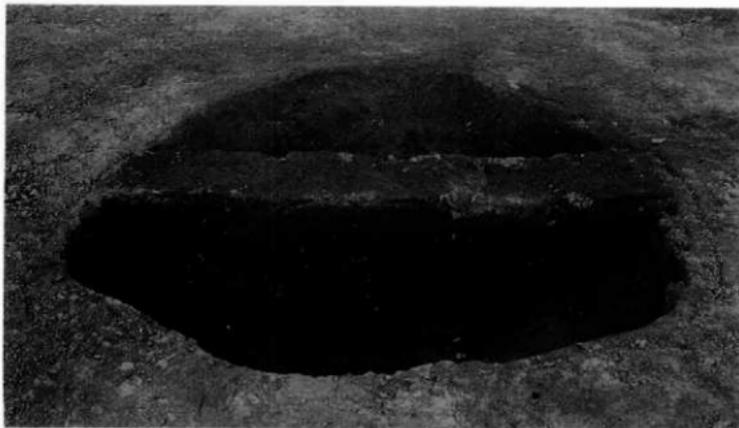


周上  
全景



図版 82  
庄が屋敷 A 遺跡

1号土坑



4号土坑



4号土坑

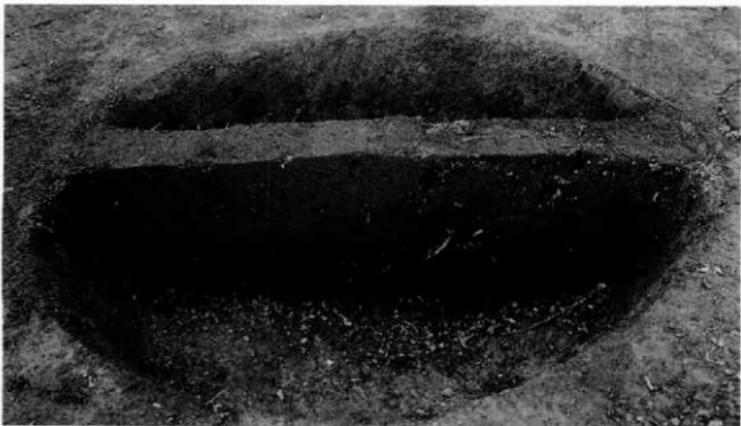




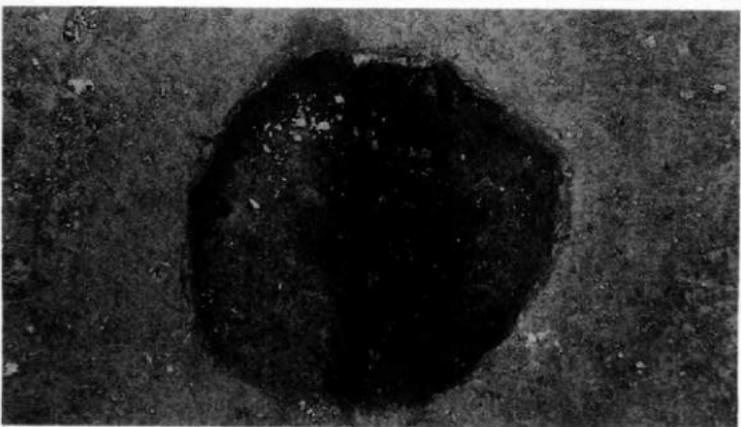
51号土坑



52号土坑



53号土坑



図版  
84

庄が星敷A遺跡

図版 85 庄が屋敷 A 遺跡

87号土坑



87号土坑



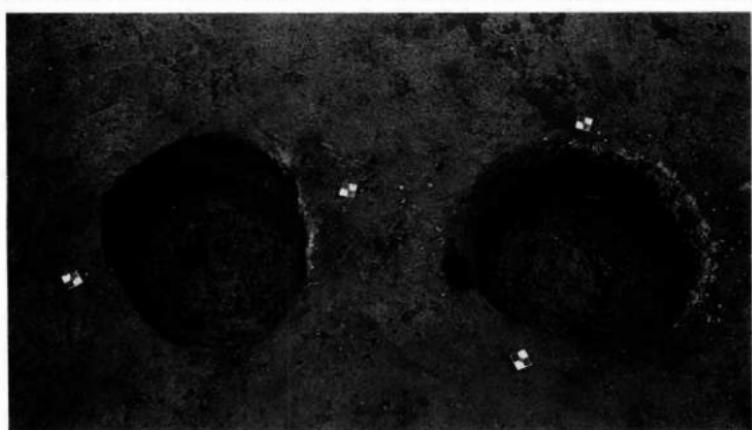
87号土坑



山号土坑



山号・山号土坑



2号溝



図版 86

庄が屋敷 A 遺跡



調査区全貌 (東地)



調査区全貌 (西地)



第一号住居跡検出状況

（国高園北）測量区域図



図版88  
庄が屋敷A遺跡

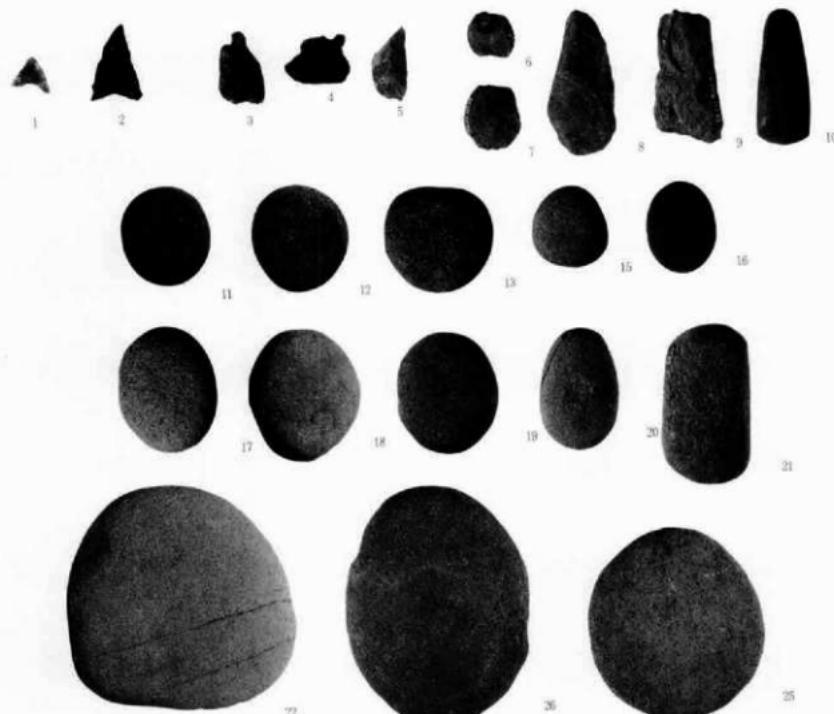
（国高園北）測量区域図



（国高園北）測量区域図







—縄文時代の遺物—



—古代の遺物—



調査前：全景（東から）



完掘状況：全景（東から）



完壊状況：全景（西側上方から）



完壊状況：炭ビット（前庭部南側・焚口近く）（東から）



完掘状況：燃焼室（東から）



完掘状況：檻道基部（東から）



調査前：全景（東から）



完掘状況：全景（東から）



完掘状況：煙道（東から）



完掘状況：焚口付近(右下方黒色円形は炭ビット)（東から）



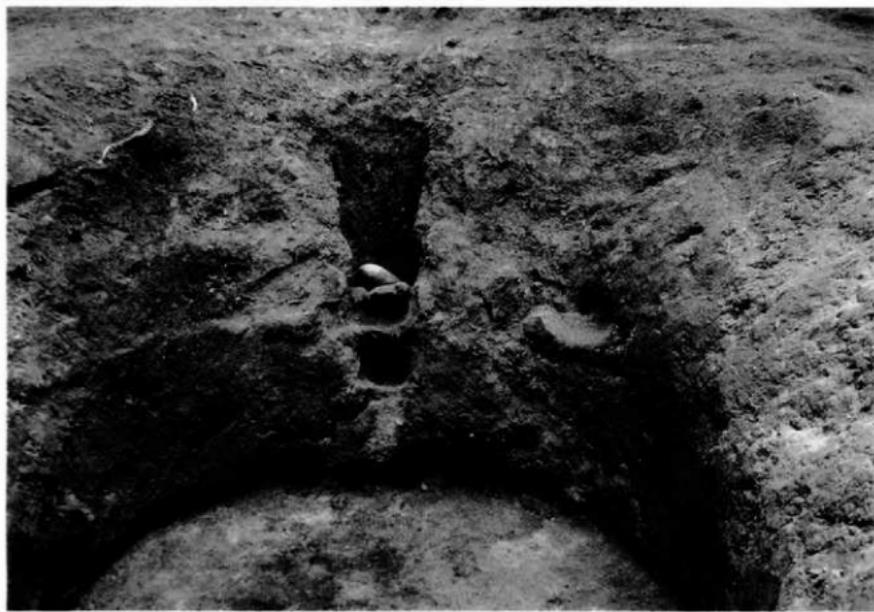
調査前：全景（北から）



完掘状況：全景（北から）



完掘状況：全景（南側上方から）



完掘状況：燃焼室と煙道（北から）



全景（南西より）



全景（北東より）



窯体（南西より）



窯体（北東より）



棧道部



火口部敷石



全景（東より）



煙道部



排水施設



西湯谷1号炭窯排水施設起点付近



東湯谷1号炭窯全景（南より）



煙道部



---

## 能美丘陵東遺跡群Ⅰ

いしかわサイエンスパーク整備事業に係る  
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行日 平成5年11月30日（1993）

編集者 石川県立埋蔵文化財センター  
発行者 〒921 金沢市米泉4-133

印刷者 北國書籍印刷株式会社

---